〔表紙〕

忠義公史料

明治四年七月

一二九　勅シテ政教一致ノ要旨ヲ宣教使ニ諭シ、諸藩宣教掛ヲ罷遣セラル

明治四年七月四日、勅シテ政教一致ノ要旨ヲ宣教使ニ諭シ、諸藩宣教掛ヲ罷遣セラル、

（記）

宣教掛トハ、本年正月東京ニ召ス者ナリ、

諸藩ヘ御達書

大教御趣意之儀ハ、兼テ被　仰出モ有之候処、猶又今般別紙之通　御沙汰相成候条、各地方官篤ク奉体シ、黽勉従事可致事、

但諸藩宣教掛之者一同帰藩被　仰付候、猶向後出京期限等ハ、追テ可被　仰出事、

御沙汰書

宣教使

大教之旨要、別紙之通被　仰出候条、篤ク　御趣意ヲ奉体シ、宣布可致事、

別紙

大教ノ旨要ハ、神明ヲ敬シ、人倫ヲ明ニシ、億兆ヲシテ其心ヲ正クシ、其職ヲ効シ、以テ　朝廷ニ奉事セシムルニアリ、教ノ以テ之ヲ導クコトナケレハ、其心ヲ正クスルコト能ハス、政ノ以テ之ヲ治ムルコトナケレハ、其職ヲ効スコト能ハス、是教ト政ト相須テ行ハル、所以ナリ、今ヤ更始ノ時ニ方リ、　神武天皇鴻業ヲ創造シ玉ヒ、　崇神天皇四方ヲ経営シ玉フ　御偉績ニ基カセラレ、時ニ因リテ宜ヲ制シ、大ニ変革更張被遊候処、大教ノ未タ浹洽ナラサルヨリ、民心一ツナラス、其方向ニ惑フ、是宣教ノ急務ナル所以ナリ、夫人ハ万物ノ霊、神明最モ恵顧シ玉フ所ノ者ナリ、　天孫皇太

神ノ勅ヲ奉シ、斯土ニ君臨シ、之ヲ撫字シ玉ヒショリ、列皇相承、亦皆　太神ノ心ヲ以テ、心ト為シ玉ハサルハナシ、然而シテ大政ノ変更スル所アル者ハ、世ニ古今アリ、時ニ汚隆アルヲ以テノコトニテ、元ヨリ斯民ヲシテ其心ヲ正クシ、其職ヲ効シ以テ昏迷ヲ解キ、終始仰テ依ル所ヲ知ラシメント期シ玉フハ、　前聖　後聖其揆一也、故ニ大教ヲ宣布スル者、誠ニ能ク斯旨ヲ体認シ、人情ヲ省テ之ヲ調摂シ、風俗ヲ察シテ之ヲ提撕シ、之ヲシテ感発奮興シ、神賦ノ智識ヲ開キ、人倫ノ大道ヲ明ニシ、神明ヲ敬シ、其恵顧ノ洪恩ニ負カス、聖朝愛撫ノ盛旨ヲ戴キ、以テ維新ノ隆治ニ帰向セシムヘク候、是政教一致ノ　御趣意ニ候事、

一三〇　島津忠義国事諮詢ノ命ヲ奉セラル

明治四年辛未七月四日、忠義公国事諮詢ノ命ヲ奉セラル、

鹿児島藩

知事島津忠義

奉

勅速ニ上京苦労ニ被

思召候、抑御維新以来綱紀更張、御施設ニ相成候処、方今内外之形勢前途之事業不容易、深ク

御配慮被為

在、今般一層御釐革被遊候　御趣意ニ候、特ニ復古之際大政ヲ賛成致候儀ニ候ヘハ、始終之成功ヲ奏候様被仰出候ニ付テハ、国事御諮詢被為　在候間、無忌憚建言宏謨ヲ可奉裨補候事、

辛未七月

口達覚

月中三ケ度参内之事、

但二ノ日ヲ以テ定日トシ、十字参仕、政府宮内省江

舎人ヲ以テ可届出、尤御用有之節ハ、此余時ニ可

被為　召候事、

辛未七月四日

右之通、去ル四日於東京被　仰出候段御到来候、此旨一統奉承知候様向々江可申渡候、

辛未七月廿八日　　知政所

〔朱〕「外ニ長州・越前・尾張ノ三知事同日同文ノ達アリ」

一三一　藩庁村ノ分置廃合ノコトヲ達ス

明治四年辛未七月五日、藩庁村ノ分置廃合ノコトヲ達セリ、

谿山郡

一宇宿村

但廣木一方限相除、

右御城下近在江隷属、一村ニ被召立候、

同村之内

一廣木方限

右近在田上村江被召付候、

右は此節御検地ニ付、御吟味之訳有之、右之通隷属替被仰付候、左候て郡之儀は、是迄之通被召置候、

一西之別府村之内大牧地面之儀、田上村疲労ニ付、村違ニは候得共、別段之訳を以、作職御免被仰付置候得とも、右通廣木方限被召付候間、本通西之別府村江被召返候、

一宇宿村大山野見掛所務、谷山郷軍役方江被振向置候得共、右通支配替相成候ニ付、引取被仰付候、

右之通被仰付候条、民事局并地頭江申渡、可承向へも可申渡候、

辛未七月五日　　知政所

一三二　藩庁僧侶輩ノ藩内出入ヲ申禁スルヲ達ス

明治四年辛未七月十三日、藩庁僧侶輩藩内出入ヲ申禁スルコトヲ達セリ、

一六部体之者又は僧尼類、間ニは御藩内江入込候も有之哉ニ相聞得、抑御当藩廃仏之儀は、朝廷江御届ニも為相成事候得は、尓后右体之輩入来候儀、屹と不相成候条、尚又取締向厳重可取計候、此旨民事局并地頭江申渡、可承向江も可申渡候、

但右式旅人之内、万一用向有之者も難計候付、入来候節は、境目郷ニ於て巨細承届、無拠情実有之候ハヽ、形行関係之向江送状相添届可申出候、

辛未七月十三日　　知政所

一三三　安井息軒黒田嘉右衛門ヘ書翰

一三三ノ一

残暑未退候得共、愈御清適御精勤大賀此事ニ御座候、然ハ外櫻田藩邸大略御引上相成候由、巷説ニテ承候、

愈実説候ハヽ、当藩邸抔モ定テ難免、老朽儀依品外宅致儀可有之候、旧幕士当時
王臣成居候者、居宅譲受候テモ、老朽輩居住不苦候哉、
於清国ハ　天子ヨリ被徴、老衰病気等ニテ相断候者、
表向徴士ト号シ、免平民列士林候、老朽儀モ已年三月
朝廷ヨリ被徴候得共、御案内通老衰ニ付、御断申上候、
若致外宅候者、準清国例、標札ノ肩書ニ徴士ト書候テ
モ不苦候ヤ、尤壱両年前ハ諸藩ヨリ被召、御奉公仕候
者ヲ徴士ト被唱候様子候得共、当時ハ右唱呼御廃相成
候由、外ニ紛候儀モ有之間敷存候、箇様申候得ハ、好
名聞之様相聞ヘ心外存候得共、著述之書等徴士某ト記
置候得ハ、明時ニ致際会候儀相分リ、子孫ノ面目トモ
相成、著書清国ヘ相渡候テモ、
聖恩及山沢之腥儒候儀分明相見、奉称揚　徳化候一端
トモ可相成ヤト存候、尤此儀奉願候筋ニハ無之、唯御
差支有無之処、貴所迄御問合申儀御座候、御次手其筋
迄御伺置被下候様奉願候、愈致外宅相決候テモ、何レ
九十日間ニモ可相成、其前御問合之書面可差出、標札
一条ハ、定テ手間取候事ト存候間、前以得貴意置候、
旧幕士居宅住居可不之儀ハ、盆後使之者可差出候間、
其節御指示被下候様致度候、頓首、

明治四年七月十三日　　安井息軒

黒田大参事侍史

一三三ノ二

秋涼可体愈御清適奉恭喜候、久面晤補養旁近日御尋申
度候、今以久留島屋敷御住居成候ヤ、何日定テ御在宅
両様共、稲津便ニテ御垂示被下度候、頓首、

明治三年九月十三日　　安井息軒

黒田雅契

不勝之天気ニ御座候処、弥御佳祥奉欣躍候、然ハ一昨
日玉井氏迎申入候、今日御来臨ヲ希候儀、雨中御苦労
ニハ御座候ヘ共、可相成ハ枉テ御来顧被下候様仕度、
奉希望候、不乙、

一三四　島津忠義参内廃藩ノ詔勅ヲ奉承ス

明治四年七月十四日、忠義公参内、廃藩ノ詔勅ヲ奉承セラル、

一汝等曩ニ大義ノ不明ヲ慨キ、名分ノ不正ヲ憂ヘ、首ニ版籍奉還ノ議ヲ建ツ、朕深ク之ヲ嘉ミシ、新ニ知事之職ヲ命シ、各其事ニ従ハシム、今ヤ更始之時ニ際シ、益々以テ大義ヲ明ニシ、名分ヲ正シ、内以テ億兆ヲ保安シ、外以テ万国ト対峙セントス、因テ今藩ヲ廃シテ県ト為シ、務テ冗ヲ去リ簡ニ就キ、有名無実之弊ヲ除キ、更ニ綱紀ヲ張リ、政令一ニ帰シ、天下ヲシテ其向フ所ヲ知ラシム、汝等其レ能ク朕カ意ヲ体シ、翼賛スル所アレ、

明治四年辛未七月十四日

(記)

廃藩置県ノ議、月初ヨリ西郷・大久保・木戸等ノ人々密議スル所ニシテ、事遂ニ決シ、此日午前十字、忠義公参内アリ、小御所ニ於テ毛利・山内・鍋島三知事ト同シク拝謁、勅語ヲ奉承セラレ、坊城中弁勅書ヲ下付セラル、午後二字更ニ参内、大広間ニ於テ五十六藩知事ト同シク、廃藩ノ詔勅ヲ奉承セラレタリ、

一三五　詔シテ列藩ヲ廃シテ県ト為ス

明治四年辛未七月十四日、詔シテ列藩ヲ廃シテ県ト為サシム、

一三五ノ一　朕惟フニ、更始ノ時ニ際シ、内以テ億兆ヲ保安シ、外以テ万国ト対峙セント欲セハ、宜シク名実相副ヒ、政令一ニ帰セシムヘシ、朕曩ニ諸藩版籍奉還ノ儀ヲ聴納シ、新ニ知藩事ヲ命シ、各其職ヲ奉セシム、然ルニ数百年因襲ノ久キ、或ハ其名アリテ其実挙ラザル者アリ、何ヲ以テ億兆ヲ保安シ、万国ト対峙スルヲ得ンヤ、朕深ク之ヲ慨ス、仍テ今更ニ藩ヲ廃シ県ト為ス、是務テ冗ヲ去リ、簡ニ就キ、有名無実ノ弊ヲ除キ、政令多岐ノ憂無ラシメントス、汝群臣、其レ朕カ意ヲ体セヨ、

明治四年辛未七月十四日

一三五ノ二　明治四年辛未七月

藩ヲ廃シ県ヲ被置候事、

辛未七月　　太政官

一三五ノ三　藩ヲ廃シ県ヲ置セラレ候ニ付テハ、県名如何相心得可申哉、奉伺候、

月番

辛未七月十四日　　元　三藩

右之通相伺候処、上野官掌ヲ以、旧藩名ヲ県ニ換称候様演達有之候段申来候事、

一三五ノ四
明治四年辛未七月

今般藩ヲ廃シ県ヲ被置候ニ付テハ、追テ　御沙汰迄ハ、大参事以下是迄通事務取扱可致事、

辛未七月　　太政官

（記）

以上ノ達ハ、権大参事ヲ呼出シ、交付セラレタリ、

（按）此等ノ達令ハ、皆午後二字廃藩ノ詔勅降リタル後ニ呼出シテ、交付セラレタルモノナラン、

一三五ノ五
今般廃藩被　仰出候付テハ、追テ県治一定之御規則被仰出候得共、差向キ是迄取扱来候庶務ハ、大参事処決可致、尤重大ノ事件ハ伺出可請　朝裁事、

辛未七月　　太政官

一三六　弁官ヲ廃ス

弁官被廃候事、

辛未七月　　太政官

今般弁官被廃候付テハ、諸願伺届等、総テ其関係ノ諸官省ヘ直ニ可差出事、

辛未七月　　太政官

（記）

本文ノ達文ハ、大属ヲ呼出シテ交付セラレタリ、

（按）此日午前参内毛利元徳・山内豊範・鍋島直大ノ三知事ト、版籍奉還ヲ首唱セシヲ賞セラレ、又徳川慶勝・細川護久・池田慶徳・蜂須賀茂韶四知事ノ建議、其当ヲ得ルヲ嘉奨セラレタリ、即チ本日在京ノ知事五十六名ヘ達セラレ、在藩ノ知事二百六名ハ、十五日其在京参事ヲ召シテ、之ニ伝宣シ、九月ヲ期シテ悉ク帰京セシメラレタリ、今徳川外三知事ニ賜フノ勅書ヲ載ス、

朕惟フニ、方今内外多事ノ秋ニ際シ、断然其措置ヲ得、天下億兆ヲシテ、其方向ヲ定メシムルニ非サレハ、安ソ能ク宇内各国ト並立シテ、以テ我国威ヲ皇張センヤ、是朕カ宵肝憂慮スル所ナリ、曩ニ汝等カ建議スル所、互ニ異同アリト雖モ、之ヲ要スルニ、深ク従前ノ弊害

ヲ鑑シ、遠ク将来ノ猷謀ヲ画ス、是汝等カ衷誠ノ所致、朕之ヲ嘉ミシ、将ニ施設スル所アラントス、汝等更ニ能ク朕カ意ヲ体シ、各其所見ヲ竭セヨ、

一三七　島津忠義知事ヲ免セラル

明治四年辛未七月十四日、忠義公知事ヲ免セラル、

鹿兒島藩

知事　島津忠義

免本官、

辛未七月　　太政官

(記)　本日午後二字廃藩ノ令ヲ布カレ、知事免官ノ辞令坊城中弁俊政ヨリ、直ニ交付セラレタリ、

(按)　廃藩ノ議是ニ発シタルハ、時勢ノ推移ニ促カサレタルモノニシテ、西郷ノ如キ、尚未タ時期ヲ俟ツノ意アリシナランハ、然レトモ大勢止ムベカラサルヲ以テ、遂ニ断決迅刻ニ茲ニ至レリト云フ、当時西郷ヨリ藩参事桂四郎ニ贈リタル書柬アリ、載セテ参考ニ資ス、

朝暮秋気相催し、弥以御壮栄可被成御座、恐悦之御義奉存候、陳ハ天下之形勢余程進歩いたし、是迄因循之藩々却て奮励いたし、尾張を始阿州・因州等之五六藩及建言、大同小異ハ有之候得共、大体郡県之趣意、日々御催促申上候位、殊ニ中国辺より以東ハ、大体郡県之体裁ニ倣候模様ニ成立、既ニ長州侯は知事職を被辞、庶人と可被為成思食ニて、御草稿迄も出来居候由御座候、封土返献天下ニ魁たる四藩其実蹟不相挙候てハ大ニ天下の嘲哢を蒙り候而已ならす、全奉欺朝廷候場合ニ成立、天下一般帰着する所を不知、有志之者ハ紛紜議論相起候上、外国人よりも天子之威権ハ不相立国柄ニて、政府と云ふもの、国々四方ニ有之抔と申触し、頓と国体不相立旨申述候由、当時は万国ニ対立し、気運開立候てハ、迚も勢ひ難防次第ニ御座候間、断然公議を以、郡県之制度ニ被復候事ニ相成、

命令を被下候時機ニて、御互ニ数百年来之御鴻恩、私情ニおひて難忍事御座候得共、天下一般如此世運と相成、如何しても十年ハ防かれ申間敷、此運転ハ人力之不及処と奉存候、此際ニ乗し封土返献之魁よりして、天下一般之着眼と相成候上ハ、色々議論相

立候てハ、是迄勤
王之為ニ、幕府を掃蕩被遊候御趣意も不相貫、殊ニ頼
朝以来、私有之権を御一洗被為在候御功蹟も難相立事
候得は、決て異議ハ有之間敷候得共、旧習一時ニ散し
候事ニ候得は、依事は異変無之共難申国々も不相知候
付、
朝廷ニおひてハ戦を以被決候付、確乎として御動揺不
被為在候間、夫丈ケハ御安心可被下候、此運ニ当り私
有すへき訳無之事候間、右体変動之模様も相見得不申
候得共、此末所置を間違候ハヽ、如何之変態ニ推移候
哉も難計事と奉存候、此旨乍大略形行如此御座候、尚
追々可申上候得共、甚急ケ敷一筆奉得御意候、恐惶謹
言、

西郷吉之助

七月廿日

桂　四郎様

〔桂久春氏所蔵本にて校訂〕

大久保利通日記明治四年七月

八日

一吉田子入来、五字ヨリ老西郷子入来、山縣ヨリ大英断
云々示談ノ趣、木戸ニ於テモ同意ノ趣、明日木戸氏ニ
於テ会議可致トノコト、小西郷氏モ入来、手順ニ付談
合イタシ候、

九日

一今日暴風雨ニテ、所々破損多シ、九字参　朝、二字退
出、大山子・小西郷子同道五字ヨリ木戸子ヘ訪、老西
郷子モ入来、井上・山縣モ入来、大御変革ノ御手順ノ
コト、且政体基則ノコト種々論談ス、凡相決ス、

十日

一七字参　朝、二字退出、木戸子政体ノ事猶又巨細ヲ談
ス、小子見込異ナリ、種々論破ス、猶勘考ノ上云々申
置ク、老西郷子モ入来、凡談合ノ上木戸氏被帰、小西
郷子ニ談シ、山縣子ヘ行テ説カシム、夜ニ入ツテ木場
子・吉井子入来、

十一日

一早朝小西郷子昨夜山縣談合ノ処、同人論スル能ハス、
因テ今日木戸ニ会シ、宜シク談シクレトノコト、十字
西郷子ニ至ル、小西郷子モ被参、二字頃山縣子入来、
大納言・参議云々ノコト、及ヒ小子参議ニ再任ノコト
ハ、是非御断申上候趣厚願置候、猶明日木戸子ニ談合

ノ約束ニ及フ、四字帰ル、訪吉井子留主、重野子同道帰ル、入夜吉井子モ入来、

十二日

一七字参　朝、木戸子・西郷子示談凡相決ス、概略見込申入候方ニ決ス、其余意存アリトイヘトモ、是ヲ論スレハ大事ノ運ニ関ス、故ニ篤ト熟考、今日ノマヽニシテ瓦解センヨリハ、寧ロ大決断ニ出テ瓦解イタシタランニ如スト、仍テ大事ノ成ルヲ目的ニシテ、小事ヲ問ハス同意イタシ候、木戸・西郷両子ヨリ條公ヘ言上、木戸子小生ヨリ岩公ヘ言上切迫陳シ置候、二字退出、西郷子入来、

十三日

一七字参朝候様就御沙汰致参朝候、條公・岩公ヨリ、既ニ今度就御改革諸省ヘ転任等被仰付候上、又々大隈等参議再任ノコト如何可有之ヤ、岩公ニハ甚御不同意ノ旨承、此論大ニ御尤ニテ、小子ニ於テモ内々木戸ヘ異論、終ニ合兼候故ヲ以テ、大ヲ取テ小ヲ去ルノ趣意ニテ差置候事ニテ、若シ内情ヲ打出シ申上候ハヽ、必動キ可申候得共、夫ニテハ大事ノ御運ヒ付兼候間、程克御答申上置候、段々御説得申上、ソレナレハ無致方ト御安心有之候、二字退出、岩公ヘ参上内情云々言上イタシ置候、今夕吉井子入来、

十四日

一七字参朝、今日藩ヲ廃シテ県トナスノ大英断御発表ノコト、参朝　天顔拝イタシ候、二字退出、章程ノコトニ付、澁澤・吉田ヘ談ス〔十五日～廿二日省略カ〕

廿三日

一九字参朝、今日井上ヨリ民・蔵合省ノ談ヲ承ル、小子心決ノ趣有之、内願イタシ置候得共、猶勘考可致ト相答置候、退出ヨリ岩公ヘ参上、今夕岩公御出、猶拙子ノコトニ付、御談有之、決答申上置キ候、是非転任ノコトヲ申上ル、副島子江訪、松方・黒田参ル、

木戸孝允日記七月

同五日

一八字参　朝、今日ヨリ制度調ノ議事相始ル、西郷ト余ト議長ノ席ニ列ス、右大臣公已ニ御退出ニ付、尚明日九字ヲ約シ今日皆退出〔以下略カ〕

同七日

一井上〔上略カ〕世外今日余ヲ訪フ、西郷断然同意ノ返答ヲ聴、大

ニ為国家ニ賀シ、且前途ノ進歩モ亦於于此一層スルヲ楽メリ、余三年前大勢ヲ察シ、七百年封建ノ体ヲ一破シ、郡県ノ名ヲ与ヘ、往々天下ノ力ヲ一ニシ、天下ノ人才ヲ養育セント欲シ、百方苦心同志中数名ニ談シ、快諾スルモノ不過一人、不得止用術施策種々説破、先旧幕ノ朱印ノ列ヲ廃シ、　朝廷ヘ封土ヲ返上シ、許不許ハ只　朝命ニ随ヒ大ニ名分ヲ可正ト、依テ漸薩大久保等応之、終ニ版籍返上ノ挙ニ至ル、然シテ世間粗余ヨリ出ルヲ察シ、議論紛紜可殺ノ説不少、同藩中モ多クハ又誹余、同志中モ亦議論不少、不図至今日先年非スルモノモ亦是トナシ、敵タルモノモ為援時勢ノ進遷不可期モノアリ、余此間ノ苦憂自ラ筆頭ニ尽ス能ハス、今日聊快然ノ思ヒヲ為ス〔以下略カ〕

同八日

一参〔上略カ〕朝、今十一字ヨリ議事席ニ出、政体論不至一定、三字過退出、于時雨、西郷ト対談、大改革ノ事件数条ヲ議定ス〔以下略カ〕

同九日

一昨日来ノ風雨至今朝東風尤烈、都下ノ破損不可数、十字参　朝制度ノ議員不参多シ、依テ今日延引、西郷亦不参ナリ、大久保等大ニ談論、彼過日来不解処モ稍似有解者、制度ノ事皆其末ヲ論シ、其本ヲ論スルモノ少シ、依テ確立スル甚難シ、二字退出、邸中破損甚多シ、今夕西郷兄弟・大久保・大山彌助・井上世外・山縣素狂等集会、此度廃藩論ノ順序ヲ論ス、知事免職ノ一条ハ、一般ノ知事東京着ノ上、発令ノ期合ナリ、余窃ニ愚考スルニ、今日迅速相発期限ヲ立、三百藩ノ知事ヲ東京登ルノ令ヲ下スニ如カスト、然ルトキハ不伏モノハ自ラ断然ノ所致アリ、天下諸藩形情ヲ見ルニ足ルト、諸氏同意談論、及十二字皆散、

同十日

一八字参　朝、西郷不参、此度改革ノ事件一決ノ上ハ、制度モ其上ニテ調フルニ如カスト、余依テ江藤中弁ニ只三五日制度ヘ出席セサル趣ヲ相告ク、尤此度ノ事件極密ナリ、二字退出、直ニ大久保ニ至リ西郷ト相会シ、大改革一条ニ付、人撰等ノ事ヲ稍相議ス、五字過帰家〔十一日略カ〕

同十二日

一八字参　朝、西郷・大久保ト弥着手之都合ヲ密談、互ニ雖有異論、如此大事件十分如意ナル事甚難シ、依テ

先其大略ヲ定メ相決ス、細目ハ尚後日ヲ待テ欲議、於于此西郷ト一同大臣公ヘ此事件ヲ言上シ、奏聞之上速ニ許可アランコトヲ願フ〔以下略カ〕

同十四日

一六字参　朝、諸官中小進退アリ、大隈・板垣参議ニ被任、大木民部卿・井上民部大輔・山縣兵部大輔・岩倉卿外務卿ニ被　任、我知事公島津・山内・鍋島等ヘ今日廃藩之令発スルニ付、

勅詔アリ、名古屋・池田・細川・蜂須賀之諸知事改正之建言有之シニ付、別ニ

勅詔アリ、皆小御所ナリ、於大広間第二字

出御、五十六藩之知事被　召出、廃藩之

勅詔被　仰出、一統当官ヲ被免、于此七百年来之旧弊漸其形ヲ改ム、始テ稍世界万国ト対峙之基定ルト云ヘシ、余御一新之際諸藩京都之戦争ヨリシテ、東北之戦引ツヽキ、漸一年ヲ経テ天下平定、然シテ藩々互ニ肩ヲ比シ、薩ハ長ヲ見、土ハ肥ヲ窺ヒ、各皆日本内之事ニ着目シ、遠ク宇内之大勢ヲ一観シ、世界万国ニ対立スル之大策ナシ、且

朝廷微力ニシテ、各藩各心或ハ攘夷ト云、或鎖国ト云、或ハ開国ト云、当日是ヲ統一スル之遠謀ナクンハ、天下之瓦解日ヲ刻シ待ツベシ、依テ余郡県之策ヲ定メ、三條公・岩倉公ニ建言ス、決テ不可行之言アリ、又僅々之同志ニ相謀、或ハ黙シテ不語、或ハ期難、故ニ余一之謀略ヲ設ケ、今日諸侯之封土皆朝敵徳川ヨリ授与スルノ姿ニシテ、

天子之璽章ヲ不見、於于此ハ益明大義、不正名分ハ如何立天下哉ト、依テ版籍奉還ノ説ヲ主張シ、説薩其ヨリ土・肥ニ及ヒ、終ニ

朝廷ヘ奉奏セリ、於于此又種々ノ議論満于天下、世間目シテ余ヲ欲殺ノ説不少、同藩同志ノ士ト雖モ、醸危疑誹謗ヲ聞ク、日トシテナキハナシ、

朝廷モ亦決之甚難シ、終ニ六七月ニ至ル、余亦必至此事ヲ尽スト雖、事不成シテ、受害トキハ必大事之不成ヲ憂ヒ、進退出没此機宜ク窺フ、尤心思ヲ労セリ、漸朝廷ノ議一決ニ至リ、又諸侯ヲシテ諸藩ノ世襲知事ニ定ルノ説ナリ、依テ又百方抗論、終ニ世襲ノ二字ヲ除ク、若世襲知事ノ名目有之トキ、決テ天下統一スル難シト、然ルニ今日此機ニ至ル、又先年余ヲ敵視セシモノ、却テ余ノ力ヲ助ケ、不知々々宿志ノ達スル期ニ至

ル、実ニ人世ノ事不可期、雖然今日於大広間
主上出御、玉座之下ニテ大臣公
勅詔ヲ敬読被成、余等又其側ニ侍座ス、五十六藩ノ知
事平伏拝聴　勅詔ス、余不覚九年前三條卿京師ヲ避ケ
ラレ、山口筑紫ノ間ニ漂歴被成シニ、今日此盛事ヲ補翼
セラレ、又顧ルニ山口知事公ニハ、五十六藩中ニ在テ
斉ク平伏拝聴、実ニ我海岳モ不及高恩ヲ蒙リシ君也、
感情塞胸、不知下涕涙、世間知事ト雖モ不知大勢不悟、
今日一藩中之有志甚苦心スルモノ不少、然ルニ　知事
公能ク　忠正公之御宿志ヲ告セラレ、補佐
朝廷、天下ヲ保安スル之御志甚厚ク、頃日モ為其上書
等モ有之、実ニ允等モ亦不可有不尽ト、今日ノ事尤務
テ微力ヲ尽セリ〔以下略カ〕

同十五日

一九字〔上略カ〕参　朝、今日二百六藩ノ大参事被
召出、十一字前大広間へ
出御、廃藩之
勅詔被　仰出、畢テ知藩事免職之達相済、各退散、十
二字退出〔以下略カ〕

一三八　藩庁開墾地処分ノコトヲ達ス

明治四年辛未七月十五日、藩庁開墾地処分ノコトヲ達セリ、

一御城下士族大浮免高之儀は、全体世禄之事にて、是迄通差付地ニ可被下被仰渡候付、今般御検地ニ付ては、自作地同様之取扱ニて、高之増減畦方之延歩ニ不拘、持主江被成下度、自然高頭ニ差支候分は、高下り被仰付度致吟味候間、向々江も御布告相成度、此段申出候、以上、

七月　民事局

右之通被仰付候条、向々江可申渡候、

辛未七月十五日　知政所

一三九　藩庁定限外余地処分ノコトヲ達ス

明治四年辛未七月十五日（未詳）、藩庁定限外余地処分ノコトヲ達セリ、

一鹿兒嶋近在諸人自作地之儀、此節御検地ニ付、定限外余地七月中売買ニ付ては、村々高居いまた治定不致候

付、御竿入畦反御検地方より持主方江相達可申候間、右畦反過上丈余人江附属いたし、御検地方江届申出置、追て高相究次第、当高を以高直願出候様、向々江致吟味、此段申出候、以上、

七月　民事局

右之通被仰付候条、向々江可申渡候、

辛未七月　知政所

一四〇　藩庁兵器方日記役ヲ廃シ、筆者ヲ置キ其職級ヲ達ス

明治四年辛未七月二十二日、藩庁兵器方日記役ヲ廃シ、更ニ筆者ヲ置キ、其職級ヲ達セリ、

一兵器方日記役

一右同助

右は是迄官等外ニ被召建置候得とも被廃候、

十一等附士長頭

一兵器方筆者

但定員六人

右之通等内被召建候条、軍務局江申渡、向々江も可申渡候、

辛未七月廿二日　知政所

一四一　島津忠義参内御苑内山里茶亭ニテ宴ヲ賜フ

明治四年七月二十三日、忠義公参内、御苑内山里御茶亭ニテ宴ヲ賜ハル、

(記)

本月二十二日、萬里小路宮内大輔ヨリ命ヲ伝ラレ、本日午後四字参内アリシニ、御苑内山里御茶亭ニテ宴ヲ賜ヒ、天酌ニテ天盃ヲ拝戴セラレ、御懇款ノ待遇ヲ辱フセラレ、同七字帰邸アリタリ、

道島日記

一従四位様御儀、去月廿二日御用之儀有之、

御参朝被成候様、萬里小路宮内大輔殿より御達ニテ、翌廿三日夕四字、

御参内被遊候処、山里御茶屋江緩々被為召

御手自　御酌ニて、

天盃　御拝戴、七字過被遊　御帰邸云々ト被仰出候、

太守様御儀ハ今藩ヲ廃シ、県トナリシカレハ、三ケ国イカ様ノ御所置ニ候ヤ、伝ヘ聞、東京表ニテハ僕壱人ニテ御歩行被遊候ヨシ、七拾万石ヲ御主宰可被成帰(マヽ)、モ不致カ、僕壱人位ノ御身柄ナラハ、　天盃ノ儀モ軽々敷ニアラスヤ、何分当形勢窺ヒ可知ニアラサレトモ、予カオモウ所ヲ以テ爰ニ記スモノ也、

但

イヨ〳〵知事公、一両人ノ従僕ニテ御遊歩被為在候トモ、万一事アル時ハ、誰人カ落度ナラン、其時ニ臨ンテ仇ヲ報スル抔ト、大挙ノ儀アル時ハ、名義不正、夫故大名ハ夫々格式ノ供廻リアリ、其時不被笑ノ(ママ)アル時ハ、天下ノ兵ヲ動ストモ、誰カ肯テ非義ナリトセン、是事前ニ定マル時ハ、不蹴トイフノ義ナラン、

一四二　権大参事伊集院兼寛出納権正ニ任セラル

明治四年辛未七月二十九日、権大参事伊集院直右衛門兼寛出納権正ニ任セラル、

鹿児島県

権大参事
伊集院直右衛門
任出納権正、
右
宣下候事、
辛未七月廿九日　　太政官

一四三　大原重徳華族触頭辞退ヲ東京府ニ願フ

華族触頭被
仰付、乍不及動仕罷在候、然ル処、元ヨリ老年ノ私忘失勝ニ有之、於御用辺自然不束之儀出来仕候テハト、恐懼之余リ先般御理申上候処、難被及
御沙汰趣ニテ、猶以今迄相勤居候得共、老衰ハ立戻リ候儀無之、忘失ハ日増ニ相成心配仕候処、近頃追々触下モ差加リ、自ラ多端ニ可相成ハ勿論ニ候ニ付、御用向等遺失仕候様之儀出来仕候テハ、実以恐縮仕候事ニ候間、再三相願候モ深以恐入存候得共、何卒老臣之心情
御垂憐被為在、願之通被

聞食届、蒙　御免候様偏ニ奉願上候、此段宜
御沙汰被成下候様相願候也、
辛未七月廿九日　従二位大原重徳
東京府
御中

一四四　藩庁役職ノ履歴ヲ申供スルコトヲ達ス

明治四年辛未七月晦日、藩庁役職ノ履歴ヲ申供スルコトヲ達セリ、

一役名　一通称　一姓実名　一俸禄
但等級之訳并出軍人数等級を以被下候面々、其件も可書加、

右之通局々総裁奉行初、官等ニ被載置候分は、席順通壱帳ニ仕立、来月七日限可申出事、
右之通未七月晦日伝事より達し、

一四五　藩庁鹿児島神社・枚聞神社社格ノ達令ヲ達ス

明治四年七月、藩庁鹿児島神社・枚聞神社社格ノ達令ヲ達セリ、
鹿児島藩
其管内鹿児島神社別紙之通被
仰出候条、為心得相達候事、
但祭式之儀ハ、従神祇官可相達事、
辛未六月　太政官

鹿児島神社大隅国桑原郡内村鎮座
国幣中社列、自今官祭被　仰出候事、
辛未六月　太政官

枚聞神社
国幣小社列、別紙之通相達候事、
但
御改正向追々
御沙汰有之候迄ハ、先従前之通相心得可申候、尤爵位有之分ハ、早々返上可致候事、
辛未六月　神祇官

枚聞神社（薩摩国頴娃郡開聞岳麓鎮座）

国幣小社列、自今官祭被　仰出候事、

辛未六月　　太政官

鹿児島神社

国幣中社列、別紙之通相達候事、

但御改正向追々

御沙汰有之候迄ハ、先従前之通相心得可申候、尤爵位有之分ハ、早々返上可致候事、

辛未六月　　神祇官

別紙之通於東京被仰渡候段申来候条、向々江可申渡候、

辛未七月　　知政所

（記）

五月十四日、神社ノ班位ヲ定メ、官・国二幣社ハ神祇官ニ属セシメ、府藩県郷社ハ地方官ニ属セシメラル、即チ

官幣大社　二十九社

官幣中社　六社

官幣小社　無

以上三十五社神祇官所祭

国幣大社　無

国幣中社　四十六社

国幣小社　十八社

以上六十四社地方官所祭

又祠官ノ世襲及ヒ其叙爵ヲ停メ、士民籍ニ編入シ、神官職制ヲ設ケ、新ニ其人ヲ撰用セラル、因テ改正規則ヲ頒タル、乃チ

神官　祭主（正三位）　大少宮司（正五位・正六位）　正権禰宜（正七位・正八位）　正権主典（従八位・正九位）　宮掌（従九位）

官幣大社　大少宮司（正従六位）　正権禰宜（正従八位）　主典（正九位）

仝　中社　正権宮司（正従七位）　正権禰宜（従八位・正九位）　主典（従九位）

仝　小社　正権宮司（従七位・正八位）　正権禰宜（正従九位）

府藩県郷社　祠官（無位）　祠掌（無位）

藩内神社ハ廃仏以来、各社ノ別当等還俗ヲ命セラレ、且時々ノ革変行ハレ、世襲ノ祠官ナカリシナリ、

一四六　藩庁学館出席者ノ稽古扶持米引取ヲ達ス

明治四年辛未七月

一学生弐拾人
　但壱人稽古扶持米年中四石之割
一諸生五拾人
　但右同断、年中三石之割
　右漢学局
一学生拾人
　但右同断、年中四石之割を以、窮士御救米之内より
　被成下候、
一諸生弐拾人
　但壱人稽古扶持米年中三石之割
　右国学局
右は先年来学館出席之者江、右之通稽古扶持米被下来候得共、追々小学校并諸方之郷校被召建候処、　御城下之士族多くハ致入学、然処右諸生は別段規則有之、右体之不被及御所置、旁不弁之事候付、以来稽古扶持米之儀は引取被仰付候、元来右扶持米被成下候訳は、御当地士族之内学館江出席進級之者も、依困窮素志不相遂、無拠外勤江相転候者も有之、右等為御救右通為被下置事候付、右米筋は総て窮士御救助方江被加置、両局并小学校・郷校出席窮士之内、学問出精之面々江、六ケ月ツヽ繰廻ニて、是迄之振合を以扶持米被成下候条、学頭并本学校江申渡、会計局其外可承向々江可申渡候、
　但当稽古扶持米被下置候面々は、期限中は是迄之通
　被下置候、
辛未七月　　知政所

一四七　附録

是月、西郷ヨリ桂ニ贈レル書柬アリ、之レ西郷出京ノ初メニ当リ、帝室ノ御実情ヲ奉窺為メニ、感戴ノ余リ桂ニ諷シタルモノニシテ、日時ヲ欠クモ、思フニ七月初旬ノ書ナラン〔本文記載なし〕
一四七ノ一　道島家記
明治四年七月廿九日
一午七月廿日頃、蒸気船入津ノ趣ニテ、湯ヲハカセノ音イタシ候ヘトモ、能ク入津ノ事不相分候処、廿四五日方ノ説ニ、筑前侯ノ船ニテ国乱差起リ、押カネ候間、西郷吉之助ヲ被頼越候ヨシニテ、直様急ニテ被遣候ヨシ、廿九日仲八噺ニ、官金札贋札出来被致候由ニテ、

夫故国中沸騰イタシ候也、弾正台迄モ被差越、糺方有之候処、当分太城直方有之候故、国中疲弊イタシ候ニ付、暫時ノ間出来イタシ候様ノ申分ケイタシ候得共、迚モ言訳不相建候故、夫故西郷ヲ被頼越候半トノ事ニ付、夫ハ些六ケ敷可有之、差立ノ言訳ハ決テ西郷モ決断六ケ敷可有之、兎角其張本人カ奸智ノ業ニテ罪ヲ不蒙ハ、落着イタシマシク候半、

七月廿九日記

一四七ノ一
明治四年辛未三月

熊本藩知事侯知事職御免願

復古之大基礎被為建候以来三年、于玆治効未顕
宸襟御憂惕被遊候内、各所ノ民心擾乱、剰ヘ　輦轂之下姦賊暴横、大臣ヲ殺害ニ及ヘリ、臣等不肖地方ノ官其職ヲ不尽、
朝威未貫徹セサルノ所致ト
宸懼戦慄ノ至ニ不堪、敢テ直ニ参
朝謹テ罪ヲ闕下ニ待ツ、伏テ聴
聖詔　天意ノ在所ヲ知ル、感激奮泣不知所謝候処、窃ニ惟、姦賊暴横スルハ、
朝憲之不立、紀綱不粛之所致ト雖、畢竟
朝官未其人ヲ不得ニ由リ、民心ノ擾乱スルハ　朝威ノ貫徹セサルニ在ト雖、是亦地方官其人ヲ不得ニ由リ候義ト奉存候、抑去ル辰三月被　仰出候　御誓文
宸翰之御趣意ハ、万古不易ノ御確誼ト奉存候処、窃ニ今日之御政体ヲ　仰観仕候得ハ、神祇・太政ノ二官ヲ被置テ、祭政二途ニ別レ、六省ヲ被建テ、
御政体区別ニ相成、官員煩冗、政事多門、是　朝官其人ヲ不得シテ紀綱不粛、
朝憲之所以不立ト奉存候、各藩ノ知事ニ至テハ、多クハ門閥ヲ被用、才其職ニ不当候故、大少参事ノ員其数ニ過テ人其責ニ任セス、府県之政事ハ藩治之標準ニモ可相成処、却テ安民之実不相立、
神武復古ノ御政体ニハ、何分違戻仕候様ニテ、天下有志ノ者ハ実ニ憂懼罷在候儀ト奉存候、恭惟　聖躬敬神ノ御誠徳ヲ以テ、
大殿ニ　臨御被為在、愛民明倫之御政教ヲ被為敷候得ハ、別ニ二官ヲ被置ニ不及、大臣・納言・参議之三職ハ玉座ノ下ニ列シ、
聖旨ヲ奉シテ万機之政ヲ施行候得ハ、別ニ六省ヲ被建

ニ不及、　御政体簡厳ニシテ綱紀凛然、初テ復古之
御実体ニ帰シ可申ト奉存候、御政体簡ナル時ハ人才ヲ
得易ク、参議之職天下之才ヲ被択、各所長ニ従テ六省
之政事ヲ管轄被　仰付、別ニ顧問之大臣ヲ被置テ官府
之間ニ出入シ、内外トナク
聖徳ヲ輔翼シ、万機ニ参与致候得ハ、賢能得位方向一
定、即チ府藩県ニ人才ヲ得候事ハ、其中ニ在テ姦賊日
ヲ期シテ捜索ヲ得ヘク、民心不令シテ安堵スヘク、
王化邦内ニ洽ク　皇威海外ニ輝ンコト不可疑儀ト奉存
候、臣等不肖猶門閥ニ依テ、妄ニ知事之職ヲ汚シ候ニ
付、速ニ当職ヲ被　免、退テ士族ニ帰シ、屹度賢才ヲ
御抜擢被為在度、仰願クハ右之御大儀　宸衷ヨリ被為
断、
朝廷粛清　皇国安定仕候様被遊度、伏シテ奉懇願候、
臣死罪誠恐頓首謹言、
明治四年辛未三月十日　　熊本藩知事細川護久

一四七ノ三
明治四年辛未三月
丸亀藩知事建言書
臣朗徹謹テ奉建言候、先年土地人民奉還仕候処、豈料
ランヤ、更ニ当職被
仰付、深感戴仕候、乍去臣資性庸劣、加之一身多病ニ
シテ重任素ヨリ難堪、速ニ辞職仕度奉存候得共、僻地
ノ人心弊習固結罷在候ニ付、此侭辞職仕候モ奉恐入候
間、乍不及兼テ被仰出候藩、一通改革仕度ト日夜勉励
仕候、然ルニ従前ノ弊習今ニ洗除シ難ク、臣ノ素志何
レノ時カ達セント歎息ニ不堪候、因玆大参事ト相謀リ、
宿弊ノ除キ難キ所由ヲ視察シ、愚陋ヲ不顧一二ノ管見
ヲ以テ別紙奉建言候、万一御採用モ被為下候得ハ、今
一層奮発尽力仕度志願ニ御座候、此段宜御執奏伏シテ
奉懇願候誠恐々々、
辛未三月廿七日　　従五位守丸亀藩知事
京極朗徹

弁官
御中

別紙
一固陋ノ士民等藩名ニ拘泥シ、封建ノ旧習ヲ脱セサルカ
為、藩改テ県ト称シ、官員並金穀会計等総テ県ノ御規
則ニ準シ申度候事、
一戸籍ヲ釐正シ、人材教育センカ為ニ、藩下ニ聚居致候

士族ノ給禄今一般節減シ、文武ノ常職ヲ止メ、戸籍ヲ管轄中村々ヘ配賦致シ、各所ニ郷校ヲ設ケ、四民同学セシメ、而後官員ヲ士族・卒・平民中ヨリ抜擢仕度候事、

但戸籍ヲ釐正スルノ上ハ、居住可為勝手、且給禄渡方ノ儀ハ追テ御伺可申事、

一武門ノ遺風ヲ脱セサル故ニ妨ケラレ候為ニ、常備ノ兵隊ヲ解キ、悉ク兵部省ヘ還納仕度候事、

但兵員御用ノ節ハ、四民中ヨリ躯幹強壮ノ者相撰差出可申事、

右当藩施政ノ上ニ於テ、管見ノ侭奉伺候、宜御沙汰被仰付度奉聊願候、以上、

辛未三月廿七日　　従五位守丸亀藩知事

京極朗徹

一四七ノ四

明治四年辛未三月

古ノ能国家ヲ治ムル者ハ、察時テ変ニ応シ必先立政治之大体、而之カ目的ヲ定メ、之ヲ以内ヲ制シ、之ヲ以テ外ニ交リ、天下一切之事ヲシテ皆之ニ従テ以テ出シム、今ヤ四海万国巨艦大兵ノ力ヲ恃テ我ニ交ル、我亦巨艦大兵ノ力ヲ恃テ以テ彼ニ可敵者無ンハ、其軽侮凌駕ヲ免レサルノミナラス、一旦事アラルニ臨ンテ徒ニ条約ニ倚リ、公法ニ従ハント雖、豈得ヘケンヤ、故ニ当今ノ時国家ヲ有チ、上下ノ安寧ナラン事ヲ欲セハ、衆ク兵ヲ養テ自ラ守リ、人ニ交ニ如カス、若シ兵ヲ以テ目的トナシ、其大体ヲ定ムル時ハ、其制度法令モ亦少ラク変革ナカルヘカラス、今日ノ制度ヲ以テ国用ヲ計リ、今ノ定額ヲ以テ兵ヲ養ント欲セハ、数千ノ兵卒モ已ニ養フ能ス、何トナレハ財ノ以テ衆兵ヲ養ヒ、其器械諸藩ヲ繕ムルニ不足也、夫財ナケレハ兵ヲ養フ不能、無兵ハ不能有国、頃日徴ス所三藩兵隊ト雖モ、其道路ノ費給養ノ資ト盍亦若干万ニ下ラス、然レトモ特ニ常備歩兵ノ一部而已、我朝四千万ノ人口ヲ之ヲ度ルニ、海陸全兵ヲ備具スルニ至テハ、其費ル所又当サニ幾巨万ナルヘキヤ、窃ニ惟フ、今日ヨリ後天下ノ歳入三分ノ一ヲ取テ兵部ノ定額トナシ、強兵ノ目的ヲ定メ、暫時ノ間陸軍ハ佛ニ倣ヒ、海軍ハ英ヲ師トシ、皇国不抜ノ制ヲ立テ、訓練教育成財ノ後ニ至テ、庶幾ハ独立抗敵始テ人ニ交ルヘシ、然ラサレハ印度教法モ其国ヲ保ツ不能、支那ノ大国モ彼カ駆役ヲ受ルニ至ラ

ン、然リ而テ天下百事ノ供億其経費ノ廩縮ニ至リテハ素ヨリ既反復考窮決シテ遺漏スル所ナシ、今其内一二ヲ挙テ之ヲ論セハ、冗官ヲツユル也、戦功賞典ヲ収ムル也、恩典ノ禄ヲ絶ツ也、公卿・知藩事ノ家禄ヲ減スル也、今　朝廷ノ上至石相襍、村者不村者ト肩ヲ比ヘテ恥ル所ナク、客歳已来　庸命ヲ蒙ル者日毎ニ一二人共、罷退スル者歳ニ僅ニ数人ノミ、如是ニシテ一二年ヲ経ル時ハ、官人

朝廷ニ充塞シ、其食ム所ノ職禄終ニ養兵ノ資ニ倍蓰スルニ至ラン、是ヲ問バ則日彼不村ト雖トモ官ニ在ノミ、数閲月未タ一事ヲ誤ラス、復之ヲ黜ルニ忍ヒスト、実ニ長大息ノ至ニ非スヤ、宜ク速ニ賢愚能否ヲ撰採シ、不肖ヲ沙汰シ、賢良ヲ勧奬シ、然ル後大権一ニ出テ、紛紜繁擾ノ弊ナク、国計ノ大本立ヘキナリ、戦賞恩典ノ事ニ至テハ、聖意ノ已ヲ得サルヨリ出ルト雖トモ、臣子タル者今日元ヲ得テ以テ栄トナス、事ニ公私ノ別アリ、時ニ緩急ノ勢ヒアレハナリ、而シテ

朝廷モ亦空匱ノ財ヲ竭シテ、不急ノ挙ヲ先ンセンヤ、異日国富兵強ク、府庫充実ノ秋ヲ待テ、而後其功ニ酬ヒ、其労ニ醻フルモ、未タ晩ト為サルナリ、公卿・知藩事ノ家禄ヲ減スル者ハ、古ノ制、功アリテ禄ヲ賜ル者ハ、一家数口需ヲ除クノ外余リアレハ、多少陪卒ヲ養フ事アルノ日ニ当リ、躬自ラ其養フ所ノ兵卒若干ヲ率ヒテ其急ニ趨ク、其衆ヲシテ勇強ナルヲ以テ栄トシ、誉レト為ス、故ニ一人ヲシテ高禄ヲ食シムルト雖トモ、国家賦兵ノ制度ニ於テ、決テ妨クル所ナシ、今ヤ華族ノ家或ハ千石或ハ万石、其甚シキニ至リテハ、一人殆ト十万石ヲ食ム者アリト雖トモ、嘗テ一人ノ兵ヲ出サス、尽ク以テ私有ノ物トナシ、奢侈玩物ノ費ニ充テ、尚饗事ヲ知ラス、政事ノ大体何ニ由テカ建テ、強兵ノ目的何ニ由テカ定ラン、抑華族士庶人ト共ニ、是

皇国ノ臣子、独空シク高禄ヲ食ミ、徒ラニ尊大ヲ養フヘカラス、而シテ　朝廷モ又能ク事変ヲ推察セハ、正ニ義ヲ以テ恩ヲ折、背ヲ以腹ニ易ヘサルハ、真ニ已ヲ得サルノ時、宜シク厚薄至当ノ制ヲ立、其賦兵多少ニ従ヒ、其禄ヲ減削シ、彼ニ育フヘキ所ノ者ヲ以テ官ニ育ハ、法令一ニ出テ、其費用半ヲ減セン、華族ノ報国尽忠之ニ至ルモノナシ、大凡此数ノ者今日ニ在テ、最速ニ施行ヘキノ急務ニシテ、其余細大ノ事件尚歳入三分ノ一ヲ以テ、専ラ兵事ニ充テ、而シテ国家困蹙ノ

懼レナク、民庶怨嗟ノ心ナク、其確乎不抜ノ籌策ニ至テハ、強兵目的ノ御政体御裁用ノ日ニ当リ、詳悉可申上候、恐惶昧死謹テ言ス、

辛未三月　　兵部省

弁官御中

一四七ノ五
明治四年辛未三月

結社ノ方法　　中山譲治調　明治三年

西洋各国社ヲ結ヒ商法ヲ立ルノ主意、何レモ同一ニテ、其法二様アリ、一ハポブリツクコンヘネート云ヒ（誰ニテモ社入ヲ許スノ意ナリ）、一ハプライウエートコンヘネート云フ（朋友カヲ合セ余人ヲ加ヘスシテ社ヲ結フナリ）、諸方ヨリ金ヲ募リ、誰彼ヲ論セス社入ヲ請フモノハ之ヲ許シ、広ク諸国ヘ開店シ、社入金ノ高ニ応シテ其利益ヲ配当スルモノハ、即チポブリツクコンヘネーニテ、今御国産物商会御開ノ儀ニ付テハ、此仕法ヲ標準トシ、其仕法ヲ取捨シ、永世不朽ノ御規則御取立相成然ルヘキ欤、依リテ其概略ヲ此ニ演フ、

一元金募リ方ハ、即チ一株ヲ何百両或何千両トナシ、一株ツヽノ手形ヲ作リ、一々番号ヲ印シ、社入金ノ請取ニ之ヲ用ヒ、最初望ミノ者ヘハ、幾口ニテモ社入ヲ許シ、元金ノ高ニ満ル後ハ、猥リニ加入ヲ許サス、予シメ記録ヲ作リヲキ、何番ハ誰レ、何番ハ彼ト巨細ニ認メ置ヘシ、此株手形ノ売買ハ勝手ニテ、若シ社中ヨリ脱セント思ハヽ、望ノモノヘ売渡スヘシ、但シ其時ニ商会ヘ届クヘシ、

一有余ノ国産ヲ売捌キ、不足ノ国用品ヲ買入ル、タメ、便利ノ地ヘハ開店シ、尤其弁用少クシテ、費ヲ補フニモ足ラサルノ地ヘハ、必シモ開店ヲ要セス、其他ノ慥ナル商人ヘ委任シ、商業ヲ営ムヘシ、

一其商会ヲ発起セシ地ヲ根拠トナシ、此ヘ本店ヲ建テ、各所枝店ヘ諸般ノ号令及ヒ人員ノ交代等、都テ此本店ヨリ出スナリ、

一社中ノ事務ハ月々幾度ノ会議ヲ立、諸般ノ事業皆ナ衆議ニ従フ、尤社中一人ノ統領ヲ設ケ、若シ衆議区々ニシテ決セサル時ハ、統領ノ決議ニ従フナリ、

一社中ノ規律ヲ保護シ、及ヒ諸枝店ノ事務ヲ総轄スルタメ、会社ノ統領ヲ撰挙シ、根拠ノ本店ヘ居テ、諸国枝店ノ人員ヲ点渉シ、及ヒ其会計等ヲ管轄ス、但シ新起ノ事業又人物ノ任選ハ、社中ノ会議ニ依リテ決スナリ、

一各処トモ、其(最カ)寄二三ノ枝店ヲ惣轄スルタメ、副頭領ヲ置キ、其枝店毎ニ一人ノ代任ヲ置キ、売買ノ権並金銀出納ノ権ヲ委ネ、元金ノ内幾分ヲ分チテ其枝店ノ元金トナシ、商業ヲ営マシム、尤副頭梁ノモノ其所物ヲ監察スルナリ、蘭五番商会ノ如キハ、印度ノ諸港及日本諸港場ニ枝店アリテ、枝店ニ一人ノ代任アリ、又日本ノ諸枝店ヲ惣轄スル一人ノ副長アリ、其商業尤盛ナル処ニ居ヲ占メ、諸店ヘ令ヲ下ス、但シ如何ナル新起ノ事ニテモ、本国ノ本店ヘ問合セルコトナク、独断ノ権アリ、尤其時ニ巨細ニ元店ヘ届ケ置クナリ、此副長ハ当時ノホートウイン即チ之ナリ、

一社中加入ノ者一同評議シテ、商法ノ目的並諸規則ヲ立、副長ノ権、枝店代任ノ権、其他人員等ノ権ヲ取極メ、権外ノ事ヲ行フ時ハ、夫々ニ之ヲ罰スルノ律ヲ立、其定則ニ従ハシム、依之各其任ニ当ラサル事ハ、一切行フコトヲナサス、

一右ノ人員副長及代任ハ、各在職ニ定限アリテ、諸枝店ノ者互ニ交代ヲナサシム、又其職ヲ免レ度者、是ヲ本店ノ統領ヘ告ケテ暇ヲ乞フ、其者勤在中勉強シ、会社ノ物ニ力ヲ尽セシ者ナレハ、褒賞ヲ与ヘテ其職ヲ免ス、又商法上自然ノ損失ハ別段ニシテ、若シ其者未熟ヨリ大ナル損乏ヲ醸シ、会社ノ名ヲ汚ス等ノ事アレハ、忽チ之ヲ黜ルナリ、其者社中ノ物供益ヲ起シ、其事業ニ熟練スル時ハ、順次ニ等級ヲ進メ、副長ハ統領ニ任シ、代任ハ副長ニ任スル等ナリ、但シ其店ノ大小、取扱フ商売ノ多少ニ依リテ、月給ノ差違アレハ、各勉強シテ技倆ヲ磨キ、遂ニ頭領迄ニ昇ランコトヲ望ムナリ、

一毎年年末ニ至リ、各店何レモ一ケ年ノ損益ヲ計リ、是ヲ管轄副長ニ出ス、副長是ヲ一ツニナシテ本国ノ本店ヘ送ル、本店ニ於テ諸国枝店ノ会計ヲ一ツニナシ、商会一体ノ損益ヲ証明シ、是ヲ新聞紙ヘ載ス、益高何トヲ会社ヘ積シ、非常損亡備ヘニナシ、其余ヲ金高ニ割附ケ、一株ニ付何程ノ益ト定ムルナリ(此非常備ヘノ金ハレシエルウフヲンドト云予備ノ元金ト云フ意ナリ)、之ニ依リ数年利益打続キ、予備ノ積金モ増加セルトキハ、手形ノ相場モ従テ高価トナルナリ、(日本ニテハ此予備ノ積金ハ別ニ立置キ、貸附ケヲナシ、尚是ニ利ヲ積ミ、数年ノ後ニ至リ此金高稍元金ニモ同等タルモノニ至ラハ、バンクヲ立ルカ或ハ是ヲ以テ礦山ヲ開クカ、一大事業ヲ起シテ因益トナラハ、豈ニ愉快ナラズヤ)

一毎年商会之利益予備ノ積金等、明細ニ新聞紙ヘ載セテ公ニ布告シ、社中ヘ示スタメ而已ナラス、世界ノ信ヲ得ルタメニス、

一年々損亡相続クカ、或ハ他ノ故障起リテ、此商会ヲ解クノ議論アリテ、衆議一決ナス時ハ、数月前新聞紙ニテ布告シ、諸枝店ノ会計ヲ立、都テ会社ニ属スル品物ハ、セリ売ニナシ、根拠ノ本店ニテ総会計ヲ纏メ、之ヲ社入金ノ高ニ応シ割戻スナリ、

一副長並代人ノ黜陟ハ、一々之ヲ新聞紙ヘ載セ、公ニ示スヘシ、但シ副長及ヒ代人ハ店ノ長トナリテ、商法ヲ取行フモノナレハ、商会ニテ取行フ商業ハ、悉ク其者ノ所為ナルコトヲ示スナリ、

一代人ハ新規商法ヲ始ルニ独断ノ権ナク、先ツ其可否ヲ副長ヘ問ヒ、免許ヲ得テ後行フコトヲ得、又副長目論見アリテモ、亦独断ノ権ナシ、其地ニアル代人ノ見込ヲ聞テ決スルヲ得ルナリ、

右ハ全ク西洋結社ノ概略ニシテ、尚其細事ハ相顔ノ節万々可申上候、

一四七ノ六
親王方非常之節ハ、家来二人・知事一人被召列候旨、今日御達、

辛未七月朔日

一四七ノ七
辛未七月二日達

一筑前福岡藩知事黒田

右免職、

一同大参事士民ニ被ㄟ切腹

右贋紙幣製造ノ事件ニ依テナリ、

一有栖川親王

右筑前福岡藩知事ニ拝ス、

一川田佐久馬

右大参事ニ拝ス、

一四七ノ八
明治　年

近日巷説

一近日英断ヲ以テ稀代ノ大変革アリテ、一々出ルコト意表ニシテ、万民驚愕ナラスト謂フコトナシ、日々都鄙ノ評説実ニ喧々タリ、此ニ先ツ意外奇特ナルハ、薩ノ動静ナリ、初メ国兵大挙ノ勢ヒ殆ント天下ヲ覆圧シテ、倒山覆海ノ勢トモ謂フヘキニ、既ニシテ事ヲ挙ルノ日ニ至ツテ、豈図ランヤ一時其勢炎分裂シテ、唯余所ノ夕立ヲ聞カ如ク、寂然トシテ能ク鎮止シ、少シモ変動ノ色ナシ、聊上下紛擾シテ、兵隊ノ内ニモ稍沸騰アリ

ト見ヘテ、竟ニ瓦解スルニ至ル、其中長官叙任ノ人ト忽チ下情離隔シテ、悉ク以テ怨怒セサルハ莫シ、瓦解シテ国ニ下ル兵士四百人ニ及フト云フ、其止ルモノハ、威権ヲ以テ圧服セシム、国ニ於テ始メノ義ニ逆ヒテ一時朝官ニ出テ、底意窃ニ同志ノ盟義ヲ意トセザルハ、大ニ悪ム所ト知ラル、近比ノ音信ニ、薩ノ説ハ彼ノ出頭ノ徒ハ、真ニ寇仇ノ思ヒヲナシ、之ヲ謗論スルコト甚シト、孰レ国人ニ於テハ、確乎ト従来ノコトヲ固守シテ、変革不服ノ体ナリ、殊ニ兵式佛ニ倣フト雖、今操練猶更メス、愈々訓練ヲ為スト云フ、是略薩ノ事状ナリ、

一薩ハ固ヨリ英式ヲ執テ、已ニ北越ノ戦争ニモ実効アリテ、大ニ事ヲ取ルコトモ一朝ノ談ニアラス、講武練兵自然其体裁ヲ為セリ、此般三藩ノ大挙徴兵ト雖、国論確乎ト英式ヲ主張スルノ決議ナリシ、然ルニ長・土ノ二藩ハ、固ヨリ佛式ヲ執リ、旧幕マタ佛式ヲ以テ、歩兵ノ編制スヘテ兵部省大村如キ此ヲ主張セリ、因テ以テ諸藩ニ於ヒテモ彼二式両立スル中ニ、英式薩ニ熾ナリトス、此時ニ方ツテ、兵制ノ更正ニ薩頻ニ英式ヲ我執スト雖、竟ニ其論不立、スヘテ佛式彼ノ二藩ノ主論ニ墮サレタリ、初ヨリ薩ハ事ヲ決シテ、臨機果断ヲ為スノ決定ニテ、主意ノ如ク更正ノ議論ヲ主トシテ出タル勢ヒニ似ス、決論変シテ一時瓦解シテ、忽チ長官叙任ニ就キ、隊兵ト離間シテ勢ヒ変ス、又脱刀ノコト始メ欲セサレトモ、竟ニ事不立、聊佛式ニ圧倒セラレ、自然脱刀ニ至ル、其叙任出頭交モ初ノ薩ニアラス、近ロ大ニ変遷セリ、是レ普ク人ノ疑ヲ容ル所ナリ、

一国人皆西郷ヲ信服セシニ、近比参議ノ叙任以来事ヲ執ルニ方ツテ、大ニ其望ヲ失シテ、名声大ニ墮タリト云、或国人ノ説ヲ聞クニ、名世ノ意アリテ一時果断ハアレトモ実着ノ事鮮シ、今要路ノ任ニハ中ラスト、此般薩ノ動静ヲ以テ、専ラ此人ノ指掌ニ洩ルコトナカルヘキニ、其為所大ニ粗陋ニ出テ、兵隊四大隊四砲座ト云精撰ノ兵忽チ瓦解シテ、国ニ下リシ人四百余人ニ及フト、長官ノ中ニモ大ニ不服ノ徒アリテ、離放セシ人アリト云フ、天下ノ有志単ニ此挙ヲ以テ、唯薩ノ自動匡正ノ日ヲ待ツコト、三秋ノ如シト、今已ニ事ヲ挙ルノ日ニ至ツテ、豈図ランヤ、為ス事一ツトシテ主望ニ中ラス、悉ク以テ因循弊害復日ニ層重セリ、甚シキハ朝官散髪戎服脱刀、コレ興武更正ノ時ト謂ヘキヤ、殆ント　皇

国ノ大体ヲ失シテ、夷狄ノ奴トナルニ等シキニ至ル、嗚呼長歎息長歎息、

一嗚呼薩ヲシテ独リ我本朝ノ柱石ト依頼セシニ、已ニ薩此ノ如キ上ハ、其軌軸ヲ転スル車ノ如ク、行旋スニ術ナキヲヤ、実ニ国家ノ不幸也、今哉夷狄ノ俗ニ化シテ、耶蘇ノ徒門ニ入リテ、神州ノ規範此ニ破ルニ至ラン、有志如何ソ、痛哭セサルヘカラス、

一此度ノ変革ノ目的不相立、先ツ諸局黜陟ヲ始ムルニハ、第一三條輔相公其任当ノ人ニアラス、次ニ参議ノ所ニ〔マ〕テ、木戸・大隈・井上・大久保或ハ山形〔県〕・後藤等ノ〔マ〕共ヲ廃除スルヲ以テ、主ト為スヘキニ、却テ彼等ヲ挙テ共ニ結ンテ事ヲナス、是主トスル処、薩ノ不覚ナリ、必竟彼カ為ニ理解〔ママ〕奸計ニ陥サレタルモノナリ、〔ママ〕官々薩人ヲ多ク撰挙シテ、大ニ其人心ヲトルヲ以テ、反テ目的執念変テ愛遇ニ過ル、実ニ怖ルヘキノ甚シキナリ、

一兼テ薩ノ主トシテ　朝廷ノ変革ヲ議ル、長・土二藩ニ委任ス、薩始テ独立シテ主論アリシニ、長・土二藩相謀テ此〔ママ〕会、反テ薩ノ兵力ヲ離折シ、人心ヲ離隔スルノ奸謀ヲ逞フス、後藤ト謀〔ママ〕トシテ、木戸・大隈・井上・大木・山形等ノ者密会計議ヲ為セシ由ナリ、是必ス薩ヲ挫クノ主旨ニテ、〔ママ〕ヲ以テ薩ノ兵勢此時ニ制圧セスンハ、必ス往年大権ヲ取リテ覇業ヲ為ヘシト、是ヲ機嫌スルコト甚シ、故ニ却テ郡県ヲ以テ、忽チ藩力ヲ抜キ、威武富饒一ニ収メテ朝ニアラシメ、再ヒ不可立ノ処スルトナリ、郡県封建ノ論ハ固ヨリ優劣アルニアラス、一時之ヲ論スレハ、理アルニ似タレトモ、必ス無名無実、其目途空論ノミ、其紀綱ノ立処迂遠ナリ、〔ママ〕今仮ニ郡県封建ノ論ヲ判スルニ、其委任ト遷立ノ〔ママ〕ニテ、於国新古ノ論固ヨリ〔ママ〕疎ノ情実旧着スル訳ナリ、〔ママ〕然ハ徳川家ノ封建ヲ維持スル間ノ〔ママ〕シ、今朝廷ニ於テ此封建ノ維持不出来訳ハ如何、其郡封ノ二ツヲ不論、唯紀綱ノ立不立ニアルノミ、至公ノ所置アラハ、藩ノ政度其宜キヲ得ル、尤至便ナル論ヲ俟タス、強テ藩ヲ廃シテ県ニ主張スルハ、所謂事ヲ好ミ、洋法ニ拘泥〔ママ〕シテ国体ヲ毀リ、人心ヲ困迫セシメ、兵制ヲ弱〔ママ〕シ用ヒ、　朝威権ヲ張ラントシテ、万人ヲ圧倒セシムルモノナリ、豈図ランヤ、唯〔ママ〕此奸謀ヲ明察シナカラ是ニ〔ママ〕シテ事ヲ謀ル薩ノ西郷等カ心術如何、此時万人ノ渇仰スル処、断然正路ノ黜陟ヲ始メ、〔ママ〕準奸

黜ノ〔ママ〕ヲ掃ヒ、正直慷慨ノ志士ヲ挙ケ〔ママ〕ヲ清メ、確乎ト紀綱ヲ立テ、
皇国維持ノ道相立所〔ママ〕改革依然タル主意ナランニ、豈不図国体ヲ〔ママ〕リ、人心ヲ動揺シ、全国ノ兵勢ヲ脱随シ、己朝〔ママ〕貴重放ニ〔ママ〕セントス、

一四七ノ九
七月　池上貞固

叙
正七位
右宣下候事、

池上貞固

任少佐
右宣下候事、
右七月廿五日被仰付、同廿八日辞職願出ノ処、直ニ御免被仰付、

池上貞固

免本官
但位記返上ノ事、
七月　太政官

一四七ノ一〇
全国歳入
一億九百万余両
皇室二十万余
海軍二十五万余
陸軍三十万余
浅草蔵へ米当八万石程入、

〔表紙〕

忠義公史料　明治四年八月

一四八　廃藩置県ノ令ヲ示シ人民ヲ訓戒ス

明治四年八月五日、廃藩置県ノ令ヲ示シ、人民ヲ訓戒セリ、

別紙七通ノ通従
朝廷被　仰渡趣、
従四位様於東京被遊　御承知候段御到来候、依之
従四位様
従三位様弥
朝意御遵奉之御事候条、一同心得違無之、尚再度何分
被　仰渡迄之間、士農工商百般之役職是迄之通勉勤可
罷在候、此段別て相達候条、不洩様向々江可申渡候、
辛未八月五日　知政所

（記）
七月十四日、廃藩置県ノ発令アリシハ、夙ニ伝聞アリシモ、本月三日ニ至リ飛脚到達シタリ、仍テ本日発布アリシナリ、

（按）別紙七通トハ、廃藩ノ詔勅、忠義公ニ賜リタル勅書、廃藩置県ノ達、廃藩後ハ参事ニテ執務スベキノ達文、県治ノ規定ヲ発スル迄、庶務ハ参事之ヲ処決シ、大事ハ申請スヘシトノ達文、藩知事免官辞令、県名伺書ノ七通ヲ指スナラン、

【参照】

寺師宗道日記七月・八月

〔七月〕同廿九日　雨天雷鳴
出席ス、冷水熊次郎来ル、免手形引替請取、此般諸藩知事被為廃、当藩も同様候由、惣て県ニ相成候説也、
〔八月〕同三日　晴　〔三十日、八月一日・二日省略カ〕
〔上略カ〕今日東京飛脚着候、此般藩被為廃県ニ相成候　勅書写
東詰同役方より相達也、

同四日　朝雨

泊り明ケ也、太政官日誌見ル、田實善之助書状相届候、諸藩此般県ニ相成候ニ付、知事九月中ニ東京ヘ着府相成候様令あり、四ツ時より大山彦助と軍務局へ出、昨日山之内・大迫より承合候形行申置也、昨日家令嶋津太右衛門下り候由なり、定て此度県ニ成候ニ就テ之御用ならん、今日有馬氏娘亡子四拾日ニナリテ家内共至ル、山下伊三次来ル〔五日省略カ〕

同六日　晴

〔上略カ〕東京之事六月廿五日ヨリ御改革相初り、十四日ニは諸藩ヲ転シテ県と相成候ニ付ては、東京ニテモ愕然衆人大ニ物議沸騰、何欤事も出来へき欤の勢、是ニ付テハ深キ情事も有之由、卒然右之令出候由也〔以下省略カ〕

一四九　藩庁知政所ヲ鹿児島県庁ト改称スルコトヲ達ス

明治四年八月五日、藩庁知政所ヲ改称シテ、鹿児島県庁ト為スコトヲ達セリ、

知政所之事

鹿児嶋県庁

右之通被相改候条向々江可申渡候、

辛未八月　　鹿児嶋県庁

一五〇　旧藩内制札ヲ撤シ標木書改ノコトヲ達ス

明治四年八月五日、旧藩内制札ヲ撤シ、標木書改ノコトヲ達セリ、

一鹿児島并諸郷江被掛置候御制札之御副札

右可取除候、

一旧藩境被建置候標木

右藩之字県字ニ可書改候、

右之通被仰付候条、可承向々江早々可申渡候、

辛未八月五日　　鹿児嶋県庁

一五一　大原重徳華族触頭ヲ辞ス

明治四年八月八日、辞華族触頭、

触頭蒙

作、乍不及畏相勤来候処、追々軒数モ相増、元ヨリ老年ニ候得共、近来殊更忘失勝ニ相成、迚モ多端ノ御用向無覚束、自然行違ノ事出来仕候テハ、深恐懼候間、甚以奉恐入候、触頭之儀御理申上度候、何卒以御憐愍被聞召届候様、偏奉希上候也、

二月廿三日　〔大原〕重徳

弁官

御中

御附紙

願之趣不被及御沙汰候事

八月八日御聞届

東京府印

願之通被聞食候条此旨相達候事

一五二　池上四郎ヲ清国ヘ派遣スルコトヲ達ス

明治四年壬申八月八日　池上四郎

右御用ノ義有之、清国ヘ被差遣候事、

八月八日　正院

池上四郎

右清・魯・鮮探偵ノ為差遣候事、

八月九日　外務省

池上四郎

十等出仕

右申付候事、

外務省

八月十日

右礼服ニテ被仰付、

一五三　皇国総人員並総高調

辛未八月ノ調

皇国総人員

三千四百七十八万五千三百一人

内

男千七百五十八万六千七百人

女千七百十九万七千八百五十九人

但

華族九十二万七千八百五十九人

士族九十四万五千百人

平民三千百九十五万四千八百二十一人

社務十六万三千四十人

僧二十四万四千八百六十九人

尼六千七百十一人

穢多四十五万六千六百九十五人

非人八万二千九百二十人

総高三千九十八万六百五十弐石余

一五四 人造硝石製造ノ儀ニ付申上候書付

明治四年辛未八月従東京贈来ス、

人造硝石製造ノ儀ニ付申上候書付

砲隊御用掛

山縣十三

天童藩

織田賢司

同

織田數馬

一五五 池上四郎・木佐貫源助へ上京スヘキヲ達ス

池上四郎

木佐貫源助

右ハ東京へ御用有之、明廿四日急ニテ可被差越候条可申渡候、

八月廿三日　　知政所

一五六 某辞令明治二年

八月十九日御目見

十一月二日軍務局学館生徒
十二月二日三番隊三等命

一五七　大山綱良等琉球ニ至ル

一四年秋、旧藩参事大山格之助君・桂右衛門君、貞馨宅ニ過ラレ談示ノ趣アリテ、琉球ノ制度変革等ノ事ヲ負担シ、奈良原幸五郎君ト倶ニ琉球ニ至ル、

一五八　伊地知正治御用ニテ上京ス

明治四年八月十六日、伊地知正治御用ニテ上京之由、

一五九　地方官ヲシテ士族ノ輩ニ告諭シ、武門ノ流弊ヲ除カシム

明治四年八月十七日、地方官ニ令シ士族ヲ戒飭シテ、郷曲ニ武断スルノ陋習ヲ除カシメラル、

〔第四百十二〕八月十七日（布）

士族ノ輩旧来武門ノ流弊ニ泥ミ、動モスレハ下民ヘ対シ瑣屑ノ不敬ヲ咎メ、甚シキハコレヲ刃殺スル等、御維新ノ今日、右様ノ所為ハ無之筈ニ候ヘ共、僻邑遠陬ニ至リ、自然心得違ノ者有之候テハ、不相済事ニ候条、右地方官ニ於テ篤ク告諭可致事、　〔法令全書にて補正〕

一六〇　桂久武ヨリ西郷隆盛ヘ書翰

尚々当県役人ハ、悉ク御引揚相成、当分ハ四人相残リ居候得共、橋口殿ハ病気、大迫ニハ少々訳有之、暫時差扣、是ハ近日中ニハ出勤可相成候得共、大山ト両人ニテ相勤居、乍毎留守番難儀ハ引請、難有奉存候、以上、

仍幸便一翰呈上仕候、未秋暑難去御座候処、弥御安清被成御奉職、奉珍重候、於爰許愚生ニモ乍漸消光致居候間、御放意可被下候、然ハ此節伊地知殿出京之趣意ハ、当人より巨細御聞取可被下候、先便申上置候通、此節ハ殊之外御安堵之御模様と奉伺居候処、何の様其後邪気侵入候半、俄ニ御気色相変、左右医師女中辺江散々之事共致出来、我々共罷出候儀も御差止ニ相成、当惑之至ニ御座候、其後御趣意と申は、当藩出頭之面

々も不少、廃藩之議論相起候ハ、、藩ニ対し其論ハ藩ニ関係之訳を以テ、逃ニ可然、左すれハ廃藩之場ニハ決て不至、又参事共ニも只うかとして、少も憂る形ニも無之、随分尽し様も可有之抔散々之御模様ニて、所謂人面獣心国を売るものと思召可有之哉、伊地知は出府之儀も悖て出る様ニてハ不相済訳と、先時機見合、都合も可有之と差扣置候処、右通之仕合ニて不得止上京ニ相決し申候間、万端被仰談被下度奉願候、当分之様子ニてハ格別動揺之形とも不相見得候得共、九月中知事公御進退ニ仍てハ、決て動立可申ハ案中ニ御察申候得共、只今之処ハ兵隊辺ニて兎も角維持いたし居候形ニ御座候、旁御推計可被下候、

一此度御変革ニ付てハ、御所置ニ仍て人心之方向も相立事欤と被存候、鹿児島を初外城ニ至ル迄、皆兵を以今日人心之方向ヲ相定メ、維持いたし居候事ニて、兵賦より兵の余ると申て解隊共相成候ハ、、とても致方ハ有之間敷、尤御当地ハ学校ニて子共輩ハ漸々競ひ立、是ニて結ひ付居候事ニて、此弐ツヲ丸て被解て是迄之県と被成候振合ニ共御召成候ハ、、凡て瓦解ニ相成、随て人気も紛乱、且気立も更ニ無之様罷成可申哉と存申候間、何卒能々御評議被下度奉願候、益兵隊辺之処ハ御繰立之勢ニ無之候てハ、兵隊之人気ヲ相損し候てハ、もふハ致様ハ無之賦ニ相考居申候、大政之役人ハ必僻土之事ハ余所ニ相成と欤、当分之人情とやら、伊地知殿江もしかと及談合居候間、能々御聞取可被下候、其外何も伊地知氏より情実ハ御聞取、能々御頼申上候、

一只今より奉願置候、甚未練之者と思召も可有之哉ニ被存候得共、御案内之通之情実能々御汲取置可被下候てハ不相叶儀と奉存候間、奉願置候、愚生儀ハ全体身弱ニて、今日之事さへ甚難渋いたし居候得共、昨年既ニ国ヲ被取候危難ニ趣候付、一先尽力可致との御沙汰致承知、乍不及御引出ニ仍て罷出居候処、最早国も被取、依然としてハ不被居情合ニ罷成、尤御案内通朝官辺之事ハ、とても不堪ハ基より君公ニもちかひ置候末ニ御座候得ハ、此一事ハ申迄も無之候得共、能々御含居可被下候、尤当職迄ハ押て相勤居候得共、大参事と欤申辺も御請出来兼、其下之卑官共ハ未年輩もはる〳〵の事御座候得ハ、県なりとも君公ニ成共随分相尽し度所存ニ御座候、尤　君公より致承知候事件も有之、退て遁世相当之身と相決し居候私ニ御座候へは、此儀ハ生

涯不忘一事ニて心中御察可被下候、尤此節之如ク、宮中之次第尚更御意恨ニ思召候ハ、第一我々共ニ限リ候半欤と存候ヘハ、一入恐入罷在候間、能々情実御汲得被下候て何卒心志安んし候様ニ奉願候、尚申上度儀ハ山々御座候得共、俄ニ出艦之模様承知庁(ママ)相認不能細事、先ハ時季御伺可申上如斯御座候、恐々敬白、

八月十七日　　桂　四郎

西郷吉之助様

閣下拝呈

一六一　親兵中解隊帰県ス

明治四年八月十八日、親兵中解隊帰県セリ、

(記)

本日以降両三度ニ帰県シタリ、兵員五百余人、夫卒千余人ナリ、抑モ従前藩兵ノ組織ハ、隊長兵士同営同食艱苦ヲ一ニシ、操式ノ時ニ指揮命令ヲ聴クノミ、平生ハ毫モ異ナルコトナシ、然ルニ親兵ニ徴セラレ、佛式ニ準ヒ隊式ヲ定メラルニ至リ、将校兵卒ノ階級、待遇供給ノ方高下アルニ及ヒ、自然隊員中志望アル者ヲ服スルヲ得ス、論議物情穏ナラス、茲ニ於テ解隊其所志ニ任スルコトトナシ、或ハ転シテ文官ニ就クアリ、或ハ諸生トナリ学ニ就クアリ、或ハ去テ帰県スルアリ、余ハ残リテ隊列ニ就キタリ、

【参照一】

寺師宗道日記四年八月

同十八日　晴

出席ス、今晩泊り番也、出張局也、本局方大山彦助泊りニて咄ニ参候、今日長崎より蒸気船入来り、当春出兵四大隊之内兵士抔百余人着相成候由、同列百六拾人計其外夫卒は惣て御暇ニて引取候よし、長崎ニて二ツニ相成、自分舟雇、長州之蒸気船之由也、東京ヲ去ル十日ニ出立、同十一日横浜より洋舟ニ乗り兵庫へ着、夫より乗替長崎へ十五日方着、十七日ニ出帆今日着之由也、東京之処隊組直ニて佛式相成候付、不平ニて故障申立御暇いたし引取候由、何分物議散々之由ニ被聞候、英之丞ニも十一日御暇ニて、十八日方乗舟下ルト云、同列百余人有之由、都合下り之人数彼是兵士・調役助・隊長之内ニも追々下り、人数三百余人ニ相及候、一時ニ瓦解笑止也、

同十九日　晴

出張局泊り明ケ也、東京兵隊三百四拾二人御暇ニて、昨日長崎より廻舟帰着相成り候得は、咄細々聞候、四時比より退出ス、市來四郎・英之丞書状相届候、東條正左衛門便也、英ニも去ル八日御暇相成り候由、未四郎所ニ壱宿、追て来月初方帰着之由、事情物論散々也、〔廿日～廿七日省略カ〕

同廿八日　晴

泊り明ケ也、四ツ過より致御暇帰ル、硫酸製法之土器陶器方へ頼置候処出来候、代銭七貫文也、夜半時分東京丸入港、市來秋彦帰ル、先度御暇候処病気ニて四郎所へ引取居、今般之役舟帰国之由也、同列解隊之人数百人計、別ニ夫卒千人計御暇引取候由也、

【参照一】

道島正亮日記四年八月十八日

一未八月十八日、東京出兵四大隊ノ内ヨリ三四百人モ罷下候、此内病人モ有之、又ハ佛式ニ相成沸騰イタシ候ヤ、又ハ不合点ニテ罷下候ヤ不相分候、

但

当四日仕出ノ書状内ニ、此節佛式六拾人一小隊ニ相成候ヘハ、浮人数モ可有候(ヲ脱カ)、病気故障又ハ諸生ニ出度者ハ、願出候様被仰出候由ニ付、申越候旨野添直八甥ナルモノヨリ申越候由、夫故ノ事ナラン、

右ニ付仲八弟清八殿ニモ被罷下候、仲八ヨリノ書状ノ内ニ、郡県江被相改候付テハ、近日四民同一ニ相成筈之由専ラ風説、御国許世禄抔ノ処ハ、如何様相成噂ニ御座候ヤ、爰許ニテハ惣テ差上切ニ相成候ト、専ラ噂ニ御座候間、為心得申越候トノ文面ニ候、

未八月廿八日

一東京詰四大隊ノ夫卒、纔カ四人被残置、惣テ着イタシ候、

但

左候ヘハ弥佛式ニ相成、大ニ土州贔負ノ所置ニ相成候半、右ニ付テハイヨ〳〵脱刀ニ相成候半、士風頓ト是切ニテ、実ニ遺憾此事ニ候、

一六二　四鎮台ヲ置キ管地ヲ定ム

今般廃藩被　仰出候ニ付テハ、従前所管ノ常備兵総テ解隊之上、全国一途之兵制御改正可相成之処、差向キ

内外警備之為、別紙之通各所ニ鎮台ヲ被置、管地ヲ被定候条、此旨相達候事、

辛未八月（二十日）　兵部省

別紙

東京鎮台　常備歩兵十大隊

直管　武蔵　上野　下野　常陸　下総　上総　安房　相摸　伊豆　甲斐　駿河

第一分営新潟　常備歩兵一大隊

管　越後　羽前　越中　佐渡

第二分営上田　常備歩兵二小隊

管　信濃

第三分営名古屋　常備歩兵一大隊

管　尾張　伊勢　伊賀　志摩　遠江　三河　美濃　飛驒

大坂鎮台　常備歩兵五大隊

直管　山城　大和　河内　和泉　摂津　紀伊　丹波　播磨　備前　美作

第一分営小浜　常備歩兵一大隊

管　若狭　近江　越前　加賀　能登　丹後　但馬　因幡　伯耆

第二分営高松　常備歩兵一大隊

管　讃岐　阿波　土佐　伊豫　淡路

鎮西鎮台小倉当分熊本　常備歩兵二大隊

直管　豊前　豊後　筑前　筑後　肥前　肥後　壹岐　對馬

第一分営広島　常備歩兵一大隊

管　安藝　備中　備後　出雲　石見　周防　長門　隠岐

第二分営鹿児島　常備歩兵四小隊

管　薩摩　日向　大隅

東北鎮台石巻当分仙台　常備歩兵一大隊

直管　磐城　岩代　陸前　陸中

第一分営青森　常備歩兵四小隊

管　陸奥　羽後

鎮台本分営之常備兵ハ、元藩下之常備兵ヲ召集シテ充之ヘキ事、

元大中藩之常備兵ハ、其県下ヘ一小隊ツヽ備置ヘキ事、

元小藩ニテモ、地方之形勢ニ依リ、県下ヘ多少之兵隊備置候儀モ可有之事、

但壱万石以下之諸県兵ハ解体被仰付候、依テ大砲・

小銃都テ兵器ハ、当分其県庁ヘ可収置、何分之儀ハ追テ可被仰出事、

未八月　　太政官

一六三　庁下附近借地地租ノ納付ノコトヲ達ス

明治四年八月十八日、庁下附近借地地租ノ納付ノコトヲ達セリ、

鹿児嶋近在五ケ村之内江、士族御免借地之儀、惣御検地ニ付ては、屋敷成御免可被仰付旨被仰渡置候得共、兎角惣御検地相済迄之間、当分形御年貢上納無異儀上納いたし候様被仰渡度、於其儀は借地人之内ニも、御日限内上納難遂向も有之候間、御日限不差掛内、夫々村長方江屹度皆納いたし候様被仰渡度、此段申出候、以上、

辛未八月十八日　　民事局

右之通被仰付候条向々江可申渡候、

八月　　鹿児嶋県庁

一六四　旧藩紙幣製造ノ器械及ヒ料紙ヲ収メラル

明治四年八月十八日、旧藩ノ紙幣製造器械及ヒ剰余ノ料紙ヲ収メラル、

第四百十四　八月十八日（布）

従来諸藩ニ於テ製造通用ノ楮幣、此度廃藩ニ付、総テ当七月十四日ノ相場ヲ以テ、追テ御引替相成候段相達シ候ニ付テハ、是迄右紙幣製造ノ器械並ニ遺地紙ノ類トモ悉皆取集、当十月中迄ニ大蔵省ヘ可差出、尤有無トモ可申出事、

但シ旧領主・地頭旧采地ヘ指出置候紙幣製造器械ノ類ハ、其地方官ニ於テ取調同様可差出事、（法令全書にて補正）

一六五　諸願伺届書式ヲ定ム

一六五ノ一　諸願伺届等自今本紙扣共界紙ヘ認メ、其事件ノ大趣意ヲ摘ミ、本文ノ前行ニ二三字引下ケ、其儀ニ付願或ハ伺、或ハ届ト相認メ可差出、尤自分一身ニ拘リ候儀ハ、美濃紙ニ相認メ可差出、且前日差出候願伺等ノ儀ニ付、後日再書面差出候節ハ、其月其日其事件ニ付云々ト相認メ可差出事、

但是迄其事件ノ右趣意ヲ、上包ヘ張紙ニテ差出来リ

候処、以来ハ直ニ書載可申事、

辛未八月十七日　　太政官

一六五ノ二　是迄諸願伺書ヘ、附紙ニテ　御沙汰相成来候処、自今本紙ヘ直ニ朱書シ、捺印之上相達候条、紙尾ヘ余白ヲ存シ、相認可差出事、

一六六　会計局壱分出銀上納方ヲ達ス

一当年壱分出銀上納方之儀ニ付、御改元を以例年之振合通被取揃、諸財掛出納奉行江引合、当十月中金蔵江致上納候様、向々江被仰渡度候事、

辛未八月廿五日　　会計局

一六七　県庁医学校ヲ本学校ニ移管シ、其職員以下ヲ廃スルコトヲ達ス

明治四年八月二十八日、県庁医学校ヲ本学校ニ移管シ、其職員以下ヲ廃スルコトヲ達セリ、

一医学校之儀、本学校管轄被仰付候付、学頭初諸官其外書生迄も都て被廃候、此旨申渡可承向江も可申渡候、

辛未八月廿八日　　鹿児島県庁

一六八　県庁元医学校職員ヲ本学校職員ニ移ス

明治四年八月二十八日、県庁元医学校職員ヲ本学校職員ニ移シ、改メテ之ヲ附属スルコトヲ達セリ、

一医学校役員之儀被廃、改て本学校諸官被仰付、病院江被掛置候処、俸禄・俸金之儀は、都て是迄之通被下置候条、可承向江も可申渡候、

辛未八月廿八日　　鹿児島県庁

一六九　諸藩ノ使者等西郷宅ヘ多クノ来訪者アリ

一西郷カ所ニテモ、毎日々々諸藩ノ使者等不引モ切、一寸ノ透モ無之程ノ由、時ニ因テハ病気ヲ作リ、不相逢候得ハ、病気ナラハ猶更格別ノ事也ト抑々ニ参リ、実ニモテアマシ程ノ事由、実ニ左モ可有之、此内ニハ廻シ者モ余多可有之ト被察候、

一七〇　海江田信義ヨリ大久保利通ヘ書翰

大取込中草々御ゆるし可被下候、

御一別以後不奉得鳳意候得共、弥御勇健御勤仕被為在候御事と奉南山候、其御地滞在中ニハ不一方御高配成し被下、御高話等も拝承仕、難有奉存候、発足之節は御書付を以御忠告御懇情之程、実以難有、為国厚く御礼申上候、道中駕中ニて色々工夫もいたし、去十六日着京、翌十七日より弾台ニ取掛申候、少子之大忠は誠ニ以大任、猶又勉励相勤可申、何卒事跡を御覧被下候様奉願候、其上亦御存付之儀は、乍御筆労御書付を以御忠告拝承仕度、偏ニ奉希候、岩下君江も即面会東京之情実篤と申上、乍不及御忠告申上候、事件左ニ東京形勢内外云々、大久保参議殿心事如何計位之事と御考被成哉、生死之境ハ兎も角無二

皇国之安危今日ニ有之、今日　朝廷之御役を相勤罷在候者、一人として何を目当ニいたし候哉、左二君之様ニ被成候ては余人之迷惑如何計かあらむ、何そ君をせむるニもあらす候得共、薩国より勤仕罷在候先生達は唯一両輩ニ有之、君大久保士之苦心を不助して誰を以談合之人と相成候哉、御留守中も不容易候得共、東京ハ又重し、左二君東下して大久保士を助け　皇国之危を引起しタマヘ抔と、色々実を以心情申述候処、左二君も全体は御誠実故、天下之事御差置被成候御考ニも無之、色々御尤之御返事も承届候間、何卒東京江御召ニ相成り、何ソヘ御召仕相成候ハヽ必ス御為之事と奉存候、何分同藩之事故御発言も如何ニ候半、思召も被為在候事と奉存候得共、添島君江御内談相成候ハヽ、尓一入御都合宜敷欤と奉存候、左二君決心被致候上は中々平常之人物ニ無之、今形ニてハ、実以無用之所江押込置候様の事ニ御座候、然処少々御病身ニ有之、今明日より近国之湯治江相進候処、其通いたそふと被申候事ニ御座候、彼是之事ニ付辞職之願書ハ被差出候賦ニ御座候間、夫ハ御含置被下度、尤未天下之事を打捨候御心中は無之候間、必ス御召相成候ハヽ、御受之処ハ、少子御請合申上置候、暫時入湯ニても被致候ハヽ必ス近々快方可相成候、税所長君とも色々内談仕候処、左二君之儀ハ御召ニ相成候方可然、極ニ追ひつめ候得は弥御用立候人物と吟味仕候、民部大輔なとの職務ハ如何御座候哉、其辺ハ先生の御見込ニ任せ奉り申候、東

京御治定之上は上京被仰付候とも、其節之御都合も可有御座候、左候て吉井君之処滞在中御相談申上候儀御座候処、其御地御用被為在候由ニて、重て承知仕候事も有之、其之上ナカラ如何之次第ニ御座候得共、左二君之跡江被仰付上京之都合ニ御運せ被下候ハヽ、別て大慶之至ニ御座候、其辺ハ何分よろしく御勘考被下度奉願候、追々い細ハ可申上、即急之事件丈如此御座候、折角御自愛御務被下度奉願候、謹白、

〔明治二年〕八月廿五日　海江田大忠

大久保参議殿

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

一七一　西郷隆盛ヨリ黒田清綱ヘ書翰

其後ハ不奉得御意候処、愈以御安康可被成御座珍重奉存候、陳ハ当所町人中島源八ト申者、追々参リ事情承候処、誠ニ能相弁居、殊更度々集議院ヘ建白モイタシ、御褒賞ニモ預リ候由、外方ヨリモ聞繕候処、弥慥成人物ニテ、決テ山子ニテハ無之趣ニ御座候、時勢之義余程相憂、申立候趣意感心之事多ク御座候付、何欤御聞取相成候欤、又ハ探索等之義御申付相成候ヘハ、能相分可申人ニテ、右等ノ辺御用ヒ可相成人物ト見受候付、罷出候ハヽ御逢取被下候テ、市中ノ形勢御聞取被下候ハヽ、一般ノ苦楽ニ関係イタシ候儀、細密取調居候付、得ト御聞取被下候ヘハ、一廉ノ者ト奉存候間、何卒御都合次第御逢取奉希候、頓首、

〔朱〕〔明治四年〕八月廿七日　西郷吉之助

黒田嘉納様

要詞

一七二　吉井友實・西郷従道兵制改革ノ為帰県ス

明治四年八月晦日、吉井友実・西郷従道兵制改革ノ用務ヲ以テ帰県セリ、

（記）

廃藩後本月（二十日カ）十八日、東京・大阪ニ鎮台ヲ置キ、四鎮台ノ所管ヲ定メラレ、本分営ノ常備兵ハ元藩下ノ常備兵ヲ徴集シテ、之ニ充ツルノ令アリ、即チ廃藩後県下ノ処分ヲ始メ、兵制改革ノ用務ヲ帯ヒテ帰来シタルナリ、左ニ鎮台所管ノ令ヲ載ス〔番号一六二の兵部省令カ〕

【参照】

大久保利通日記四年八月

廿二日

一訪吉井氏、西郷子ト鹿児島県報知ニ付、吉井子帰県ノコトヲ談ス、十一字参省、五字退出、得能同行訪上野子、大山・小西郷等ハ入来、九字帰ル、訪小西郷子、老西郷子ヨリ示談ノ趣有之、今夕小西郷子帰県ノコトヲ決ス、

廿三日

一八字訪山縣子、小西郷子帰県ノコトヲ談ス、訪西郷子参省、五字大山子・小西郷子・老西郷子・吉井子・坂元子・得能子等入来、明日吉井子・小西郷子発足ノ筈ニ弥決ス（廿四日～廿八日省略カ）

廿九日

一今朝山王西郷氏所へ参、老西郷・伊地知正治子入来ニテ九字参省、四字退出、川瀬氏入来、老西郷・伊地知子入来、鹿児島県云々ノコトヲ談ス、

一七三　三等伶人ヲ四人置クコトヲ達ス

一三等伶人四人

右は定員三人被定置候得共、吟味之訳有之、此節壱人被相重、右之通定員被定置候条申渡、可承向江も可申渡事、

辛未八月

一七四　七月十四日ノ相場ヲ以テ紙幣引換ヲ達ス

一貨幣ハ天下一定之品ニ可有之処、従来諸藩ニ於テ各種之紙幣ヲ製シ、其通用価位区々ニ相成不都合之事候、今般廃藩ニ付テハ、今七月十四日之相場ヲ以テ、追テ御引換相成候条、此旨兼テ可心得候事、

辛未八月　　太政官

別紙之通於東京被仰渡候段申来候条、向々江可申渡候、

八月　　鹿児嶋県庁

一七五　島津忠義天盃拝戴ヲ県庁ニ報ス

従四位様御儀、去月廿二日御用之儀有之、御参朝被成候様、萬里小路宮内大輔殿より御達付、翌廿三

日夕四字　御参　内被遊候処、山里御茶屋江緩々被為召、　御手自御拇ニて
天盃御拝戴、七字過被遊　御帰邸候段御到来、恐悦之
御儀候条、一同奉承知候様御布告有之度、此段申出候、
以上、
辛未八月十八日　　家令
張紙
本文奉承知、一同江も可被申渡候、以上、
辛未八月　　伝事

一七六　医学校生徒ニ学術勤勉スヘキヲ達ス

医学校之儀、今般御吟味之訳有之、本学校ニ管轄被仰付、就ては医学局并小学第五校ニ於て、生徒修行猶又可致精勤候、元来医術之儀ハ司命之要道、人身之死活ニ致関係候緊要之学ニ候処、従前之旧習医生を蔑視し、甚敷ハ是を度外ニ置て、士大夫不齒ニ至り、医家も亦或候て其謗を受、卑屈之醜態を極候類、畢竟生徒之教導不行届、普通之学問疎候故、今日に至り陋習不相革訳ニ候、右等弊風を一掃し、自今以後本学校之規則を遵守し、学術成業之者は、医官ニ不止治事諸官江も御抜擢可被仰付候条、此旨体認し、聊無怠慢学術研究一層奮起業之偉功を奏し、
皇国之御用相立候様可心掛候、此旨本学校江申渡、可承向々江も可申渡候、
辛未八月　　鹿児島県庁

一七七　礼葬式ヲ上木シ、其ノ販売方ヲ達ス

一礼葬式壱部
代銭六貫四百文
右此節上町書店白男川齋之丞上木いたし、右直段を以売弘方申付候間、入用之者は相対買入候様向々江可申渡事、
辛未八月廿八日　　鹿児嶋県庁

一七八　牛豚肉販売ニ付キ注意スヘキヲ達ス

一牛肉之儀、患者薬用は勿論、人民健康之為必用之要品にて、死肉相用候ては、意外之害毒を受候訳ニ付、兼

て於病院生牛肉相撰、申請等差出来候処、辺鄙之諸郷等右之弁無之、間ニは死牛之儀塩漬ニいたし、諸島品と名付、商人共商売いたし候聞得も有之、旁不可然事ニ候、且又豚肉之儀も、殺候節水中江溺候仕来専有之、右は別て不宜、是又意外之受害毒候趣、御雇入之英医より申出候間、右之仕来一切令停止候、就ては以来心得違無之様、支配頭等より屹と可申諭置、左候て不正之肉等致商売候儀於有之は、夫々可及沙汰候条、此旨不洩様一同江可致布告候、

但諸島より持渡候牛肉之儀も、於諸島別て念入候様可申越旨、生産奉行へ可申渡候、

辛未八月　　鹿児島県庁

一七九　穢多・非人等ノ称ヲ廃シ、身分・職業共平民同様トス

一穢多・非人等之称被廃候条、一般民籍ニ編入シ、身分・職業共都て一同ニ相成候様可取扱、尤地租其外除蠲之仕来ニ有之候ハヽ、引直シ方見込取調、大蔵省江可窺出事、

辛未八月　　太政官

一穢多・非人等之称被廃候条、自今身分・職業共平民同様たるへき事、

辛未八月　　太政官

別冊之通従東京被仰渡候段申来候条、取調申出候儀共民事局江申渡、向々江可申渡候、

未十月三日　　鹿児嶋県庁

一八〇　御使者之大略

御使者之大略

一八月三日鹿児島へ着、翌日伊地知小十郎ト申ニ立会ニテ、御品物相渡シ候、

一其後小十郎参リ、御使者之儀及披露候処、知事御達之上委細御挨拶ニ可及、此節不快罷在候ニ付、延引之義前以可申入旨申聞候趣申出候、

一同七日、小十郎参リ知事御達之義、不快ニ付今日迄見合候得共、未タ全快ニ至リ兼、余リ延引ニ及候間、乍

略義公共之内為名代御達之上及御挨拶度候間、明日殿中へ出仕致呉候様申聞候、

一八日殿中ニテ、権大参事大山格之助立会、遠方態々之御使者、且又藩士共於東京表ニ、夫々御世話ニ相成候儀モ有之、御挨拶旁寛々御噺モ致度、今日迄見合居候処、未タ全快ニモ至リ兼延遅相成候付、甚略義且遺憾之至ニ候得共、越(祝)之助儀為名代御挨拶ニ及候段、能々御申訳可致旨知事申聞候条、左様被思召被下度ト申聞候、即刻御目通リ御返書御渡シ、御意之上短刀壱腰宛、紬上布壱反宛、御金弐千疋宛被下候、

一御目通リ相済候後、大山初其外、伝事職之田畑平・上村休介・栗川少対座、暫時相噺シ候、其差(ママ)今度御返書モ被成下候上ハ、早速帰京可仕筈候得共、西郷様へ鳳堂ヨリ直書并被進候品物等持参仕候間、此上乍御手数御同氏御下藩迄滞在仕度候間、其旨宜敷被仰上被下度段申入候処、適々ニ御出万事不行届候得共、シバラク御滞在、領内等御見物被下度旨申聞候、

一種田・村田・篠原等ヲ初早速参リ呉レ、村田抔ハ着之即日ヨリ参リ、万事厚キ世話致シ呉、旅宿抔ハ都合三度相替申候、

鹿児島ニテハ、一体宿屋ト申ハ無之、町家ニテ僅ニ壱両軒、諸藩ヨリノ使者定宿ト申ハ有之迄ニ候、私共モ其処ニ宿相定居候処、本行之通村田等参リ、此処ハ風入悪敷、又間取リ不便利ナリト申テ、後ニハ誠ニ立派ナル処ニ被移段々厚キ被扱候、

一宿屋ニテ町役人其外上下小使・料理人等詰切ニテ、諸事丁寧長々ノ滞在ニモ相成候間、後ニハ毎日之酒ヲモ相断候処、其後ハ茶菓ヲ以被扱、始終手厚事ニ候、滞留中大垣其外中津ヨリモ使者参リ候得共、都テノ取次書記位ノ人ニテ相済、今日ノ処モ誠ニ一通リノ取扱ニ相見ヘ候、

一滞留中政府ヨリノ沙汰ニテ、種田・村田ヲ初軍局司官大勢之先立ニテ、海岸製鉄処其外等見物致シ、戻リニハ丁寧ノ馳走ニ相成、当所出立ノ節モ、又政府ヨリノ沙汰ニテ為別宴馳走ニ相成、長崎迄ハ当所ノ蒸気船ニテ罷帰リ候、

一着後ハ黒田之弟・川村之弟等早速見舞呉、夫々産物抔持参ニテ、野兄共儀、東京表ニ於テ御隠君奉始、御一同様ニ不一方御取抔(扱脱カ)ヲ蒙リ居候儀度々申越、家内共ニ至ル迄難有存居ト申テ、滞留中度々参リ居候、

一文武両官面会之姓名ハ、別紙ニ記シ候、滞留中朝夕ニ見舞呉レ、兎角中殿様御事ヲ奉感服、兵隊共打寄候ハ、只タ鳳堂様ノ御噂計致シ居候抔ト申テ、此地ニテ夫々御取扱、又屋敷ヘ御夜噺シ御出等ノ事、何程カ一同難有存居候モノヤ、兎角中殿様ノ御噺相始候体ニ候、右ハ滞在中厚キ取扱ニ候得共、委細之処ハ認メ兼候条何事モ御推量可被成下候、

西郷面会中ノ大略

一同氏儀、夫々噺両三人ニ可有之ト奉存候処、案外口不足ナル人ニテ、始終綴ルケ様ト申事ハ無之、誠ニ一ト口宛廉々ヲ挨拶致シ迄ニ付、其口裏ヨリ諸事推シ計候箇条モ被思召可被成下候、

一八月十三日筑前ヨリ帰リ、十五日早朝右宅ヘ参リ、一昨年ヨリ今日ニ至ル迄ノ儀、夫々一通リ礼詞述候処、誠ニ痛入候御口上、同藩コソ東京表ニヲヒテ、厚キ御取扱ヲ蒙リ居候段、私ニ於テモ難有次第ト申聞候、右終テ御直書御刀相渡候処、一切無辞退謹テ御請致シ、私式ノ者ヘ御直書等被成下、殊ニ御指之御刀拝領被仰付候段、難有仕合奉存候、当御礼可申上候得共、其内宜敷様ニト申聞、甚恭謹ナル人ニテ、実ニ難有容子ニ相見候、其日ハ政府ヘ出懸ニ付、誠ニ一通リノ噺ニテ引分レ候、

一翌日早速右之御礼旅宿マテ罷越候、

一十六日昼過ヨリ参リ、未タ親ミ無之処ヘ、トツ然御国情之噺モ及兼候間、シバラク筑前ノ札一条抔承リ候処、一同細事之義ハ不申聞候得共、弾台之御役人ニハ被叱候抔ト申聞候、其節弾台何ソ　朝廷之義ニ付、見込モ有之候ハ、十分ニ聞度ト被申聞候得共、私共兵隊ニテ廟堂之事ハ聊モ存不申ト及挨拶候処、強テノ御尋ニ付、余リ御無理ナル仰ナリ、一体兵隊抔ト申ハ、鳶ノ者モ同様ニ御座候、タトヘテ申サハ、鳶ノ者ヘ呉服ナトノ事ヲ御尋モ同様ナリト申候得共、猶又迫リ候間、夫ヨリ暴言致候ニテ、天下弾台ノ御職掌ト申スハ、ガン札様ノ小サナ事ニ御目被為付候モノハ有御座間敷、カヽル眼前ノ小事ニ御目カ付候テハ、詰リハ苛察ノ御政体ニ可立到、今日何故ニ天下之御法ヲ犯シ候者出候ト云フ根元ハ、是非可有之候、其根元ヲ御糺シ可被下候、左ナクシテ末ヲ計御穿鑿相成候テハ、天下之人類切尽サレ候モノヤ、否必廟堂ヲ害スルモノ可有之、此等ノ小事ヲ扨置、其原ヲ御糺シ可相成ハ、是弾台之御職掌

ト奉存候、先ツ鳶之者ハ、ケ様ノ暴言致候モノト可被思召ト申シマシタ抔乍笑噺候、

私ニ云ク、今日目前ノ処ハ、甚不凡ナル体ニテ、着服ナトハ一切構ヒ不申、初テ逢候節ヨリ筒袖ノ襦半ニ袴ヲ付ケ候迄、廿日程之間隔日位ニ逢ヒ居候、何トモ寒ヒノ暑ヒノト天気ヲ直事ハ一度モ無之、何ヲ噺スニモ始終続キ合之噺モ無之、元ヨリ口不足ナル性ニテ、一体之容子天下之聞人トハ難被思様ニ候得共、都テノ事能ク其大道ニ明ナル事ハ、実ニ感服ナル事ニ候、一体目ノ付処ハ格別故、何事モ本行之次第余ハ御推察、

一田川郡ヲ初一体ノ御国情始終相噺候処、夫々誠ニ御難儀ナル事ニ御座候、当春大久保・黒田帰藩之節、御国情之儀追々承知仕居候、都テ御藩ニ不限　王政御一新ニ付、地所之義総シテ新竿之被仰出ト申事ナラム、格別然ルニ一昨年御所置之藩々ニ限リ、右様ノ事ハ廟堂如何様ノ御調ニ候ヤ、私式之者ハ一向難解事ニ候ト申迄ニテ、余ハ一切不申、

私ニ云ク、本行之通リ何モ不申候得共、熟々兵語気色ヲ以按スルニ、此等ノ事ハ只今ニテハ如何様ニ願候共、今日　朝廷ニテハ可救便リ無之、追々其節到リ候ハ不被願候共、心組モ有事、然ニ只時モ勢モ不察只管被願候共、可致様無之、見合候様ニト申サヌ計之処顕然ニ候間、頼ケ間敷評タリケ間敷様運ヒ候テハ、却テ御国ノ気向キヲ被疎候憂モ有之、シバラク趣向ヲ替ヘ、万事依頼ノ間柄ヨリ無腹蔵申様之模様ニ致シ、尚又委細ノ処申述置迄ニ候、

一酒田県ノ義モ、最初船越出張中ヨリ、此度岩男監督之一条迄相噺シ候処、是ハヒトイ事ニ御座候、一体府藩県之儀ハ　朝廷之御手足ニ候、御自分之御手足ヲ御苦シメ被成候事ハ、是又私共之考之不及候事ニ御座候、段々垣之無之御隣家ヲ御持被成候様ナモノニテ、御難義ニ可有之ト笑噺ニ申聞候迄ナリ、

私ニ云ク、是又只其大体ヲ申迄ニ候得共、決テ見込モ可有之、併私ナレバ、ケ様〳〵ト申様ナ甘キ口出シ不致、又都テ自負ケ間敷事モ無之、西郷ニ不服、都テ薩州人之体ニ御座候、是則所記候頼母敷又可依之廉ト被存候、余ハ御推察、

一御国政御変革之御相談、中殿様今日御稽古御取懸リ之

御心底、又襦服等ノ事相噺候処、両手ヲ付キ篤ト聞居リ、何ノ挨拶モ不致、乍憚御藩ノ御隆興今日ヨリト奉存マスト申聞候、

私ニ云ク、本行之挨拶振前後始終ノ処ヨリ考合ニ、実ニ御家ヲ頼母敷思ヒ候ヨリノ事ニハ相違無之、又御隆興之字迚モ只管相伺トモ不被存候条、御推量可被成下候、

西郷ニ不服面会都テノ大略

一朝廷今日之御政体ヨリシテ、出府之儀色々相進候処、初之内ハ遜順之挨拶ニ候得共、強テ相迫リ候、左之通被下、

西郷ノ挨拶

一西郷曰ク、朝廷今日ノ処タトヘテ申サハ、鉄車ノ錆付モ同然ノ勢ナリ、其処ヘ只油ヲ引候共、車ノメグルベキ使無御座候、依テ先ツ金ナツ、ニテ一旦響ヲ付、其上ニ車ノメグルベキ仕方ヲ致シ不申ハ、不相成候モノト被存候、廟堂ノ初今日本マ、之事ニテモ、決テ相済不申ト云フ処ニ、一旦御目カ不被為付候テハ、如何共致方無御座候、就テハ只今出候共、畢竟議論ニ過不申、追テ其機会ノ出候節ハ、決テ傍観ハ不仕ト申聞候、

一今日廟堂之処ヲ見候ニ、参議已上大納言迄之処、却テ弁事取次役々被成方ナリ、ケ様ノ御目的ニテ御政体立候モノヤト被申聞候、

一廟堂人ヲ御遣ヒ被成候処ヲ奉伺候ニ、一切人ニ御委任ト申事ハ、御布告面計ニ御座候、少数丈夫ノ人物持候共、皆腰縄ヲ御付ケ被成候故、十分之職掌ハ上リ兼候、私ニテ御不安心ノ御心カ先ニ立チ、人ヲ被遣候モノヤト申聞候、

一今日人才ヲ御招キ被成候トモ乍申、上ニ夫レ丈ケ御信カ不相立候テ、徒ニ書文ヲ以御招キ被成候、夫ニテ人物揚リ候モノヤト申聞候、

私ニ云ク、本行ノ処モ始終出候人ニハ相違無御座候、

一静岡ノ勝抔モ願ノ通、兵部大丞御免ノ由、兵制ノ儀都テ同人ヘ御任セ相成候位ニ無之ハ、御兵備抔相立申間敷ト申聞候、

一文明開化ト申事ハ、乍憚当今ノ勢ニ無御座候、右手ニ筆ヲ取リ、左ニ剣ヲ御提被成候御気持ニテ、今一度御革政被遊候上ニ、自然文明開化之勢ニ可立至事ト申聞候、

一方今封建ノ弊風御除キ、郡県ノ御仕方ニ相成候上ハ、人才ニ応シ其職掌御授ケ相成候義勿論之事、然ニ大納言已上ハ華族ニ無之ハ不済ト申事ハ、難解事ト申聞候、

一昨年中ヨリ度々御召ニ付、同藩抔色々出府相進候間、其砌私ノ申スニハ、貴様達我ニ向ヒ　朝廷ノ御役人ニナレト申事ハ、我ヲ敬フ様ニ候得共、当今　朝廷ノ御役人ハ何ヲ致シ居候ト思ヒ候ヤ、多分月給ヲ貪リ大名屋敷ニ住居致シ、何ニ壱ツ職事揚不申、悪ク申セハドロボフナリ、同藩ヘ勤シドロボフノ仲カ間ニ成レト申事、甚我ヲ賤シメ候事ニハ無之ヤト申、後ハ一切進不申抔、或日ノ噺ニテ大笑致シ候、立派ナル体ニシテ、ケ様ノ戯言度々有之候、

一朝廷ヨリ御召ノ儀、不肖之私ニテモ実ニ御用ヒト御座候上ハ、聊モ不奉辞候得共、其実左様ニハ無之、斯ク引込候テ、何ニカ悪敷事ニテモ致候ヤト、此等ノ処ヨリ政府ニ金縄ニテ縛シ居候御趣意ニ付、御役人ニ成候気位ニテ罷出候テハ、大キナル見込違ト被存候間、シバラク見合申度ト申聞候、

一此間大久保ヨリ書状遣シ、　廟堂ノ儀歎息致シ、昨夜抔モ不図落儀(弟カ)ニ及ヒ候ト申趣候間、廟堂今日ニ被為至候儀ハ、今ニ始リ候儀ニハ無之、最前ヨリ其端相顕レ候為、兼テ尽力之事申遣候得共、一向其儀ナク、今時分終夜泣キ居候共、何モ益モ無之候間、夫ヨリハ十分尽力致シ、夫ニテモ御採用無之ハ、早々帰レト申遣候事ナリト申聞候、

一何事モ廟堂今日ノ御模様ニ候上ハ、御出府不被成候事モ無拠候得共、此侭ニテハ何レノ日ニシテ、何月可被為覚候ト申目途ハ無御座候、且又諸藩一同同心戮力ニ無之ハ、一体ノ余力ハ上リ申間敷候得共、迚モ藩ニハ心底今日ノ仕合ニテハ、是又、同心戮力ト申処ヘ可到目的ハ更ニ無御座候、乍憚徒ニ　皇国ノ御衰弱ヲ増ス而已ト被存候、此辺之処ハ如何思召被下候モノ哉、是非御目ノ被為覚候機会ヲ御拵ヒ被下度、御藩ヘ計御艱苦被成ト申事ニハ無御座候、可尽便リスラ御拵ヒ被下候上ハ、乍不及弊藩一同之力ヲ以、尽力可仕ト相述候処、西郷云ク、御尤ナル事ニ候間、何ヲカ一工風可仕ト申聞候、夫ヨリ今度兵隊引揚切ニ致度ト申事抔色々ト申聞候、

一兵隊引揚之義、乍恐廟堂今日ニ至リ、最早相極リ御模様ナリ、是非一尽力不仕候テハ不相済候間、就テハ兵

力ヲ以闕下ニ相迫リ候ト被申テハ不本意ニ付、右ヲ断然引揚、人事ヲ以一尽力ノ場ト被存候、且長兵隊サラシ置候テハ、方々ヘ奔走被為致、兵力ヲソガレ候事モ、已後ハ可有之ト邪推ニ付、旁引揚候心組ト申聞候、

私ニ云ク、人事ト申事ハ弾台ヨリ手ヲ付ケ候事モ被察候、

一岩倉卿被仰候ハ、薩・長トノ間タ隔リ候テハ、朝廷不被為立候間、其処ハ枉テ心付候様ニト被仰聞候得共、是ハ不存寄事ナリ、長州ニ不限都テ弊藩ニ於テハ、道ヲ以会シ、邪ヲ以テ離候ハ、一同之心底ニ御座候、弊藩ニ於テ何レノ藩ト雖モ、左様ノ儀ハ　主上ノ御沙汰ニテモ御請仕兼候段、及挨拶候由申聞候、

此条篤ト御推察可被成下候、

一或日伊集院ト西郷ニ参リ候処、丁ト同藩横山氏諫死之儀ニ付、東京詰伊地知ヨリ書状ニテ、如何様ノケ条誤聞ト申事ヲ　朝廷ニ伺度ト申越候、其砌西郷申ニハ、右様ノ御沙汰ニ候上ハ、極テ夫レ丈ケ之御防キ矢モ可有之、詰リハ　朝廷ト議論ニ可相成、上下ノ差別可勝目的更ニナシ、夫ヨリ御沙汰面ヲ奉拝見候ニ、　朝政ヲ誤聞シ、カヽル軽卒之儀ニ及、夫々御苦労奉懸候者ト御賞典被下置候事ハ、不得其儀ト申処ヨリ、返上致シ候方ハ却テ種々可相成ト申聞候、

私ニ云ク、是等之事私共ノ前ニテ評議致シ候ヨリ、御家トノ処ハ御推量可被成下候、弥返上

朝廷ニテ此節大キニ御困リノ由、

一私共弥出立ト相成、西郷ヘ暇乞ニ参候処、同氏云ク、一昨日伊地知正治帰藩ニテ、尚又在京之模様承候処、越後辺追々餓死之民モ有之由、然ニ一向御救助モ無之、日々ニ収斂ノ政甚敷由、是ニテハ実ニ懣意候ト憤怒無限体ニ御座候、其節申ニハ、伊地知帰候上ハ誰カ壱人出府可致ハ不相成候、同人藩内ニ居候事ナレハ、私ハ不居共ヨロシク候間、出府致候カト申聞候間、態ト相留メ申候、

私ニ云ク、同氏ハ只今出候人ニ無之候得共、最前出府相進候儀ハ、少敷趣向モ有之トノ事、弥傍観不致一体之気向相分候上ハ、万全之処ニテ出府之方ハ御家ノ御為トモ相成候間、態ト同敷伊地知ノ口上振リヨリ相留申候、心ハ事ニ争テ心ニ不争ト申趣意ナリ、西郷曰、御尤ニ候間、一評議可仕候間、明日ノ立ハ見合呉候様申聞候、

一翌日伊集院急ニ出府ニ相成候間、一趣〔緒〕ニ参ロフト申聞候、夫ヨリ此節弾台ト刑部ノ方取合之事抔申聞候、

黒田叶ト申ニ当藩ナリ、弾台之少弱ナリ、

一出立ノ節西郷参リ、今度伊集院出府ニ相成候間、東京ニ於テ万事御相談被下度、未タ御逢不仕候得共、此旨菅様ニモ宜敷ト再三申聞候、

一大山格之助ニハ両三度ナラテ逢不申候、同人事ハ至テ徳実ナル人体ニテ、按外ノ人ニ御座候、イロ〳〵噺中ニ、一昨年ノ事件有之、却テ今日ニ至リ互ニ心底相分リ、幸哉事抔モ申聞候、

一伊集院ハ長崎迄一趣夫ヨリ大坂暫時立寄リ、近日着之積ナリ、

私ニ云ク、此度西郷面会之上ツラ〳〵一体ノ模様ヲ按スルニ、一昨年東国平定後直様引込候儀ハ、其砌ヨリシテ既ニ長・土・肥ト互ニ心底合居候モノトハ不被考候ナレ共、徳川氏ト申者有之故、一時ハ私シ居候得共、其勢東国平定ニ及候上ハ、必人ニ政権ヲ争、今日ノ処ニ立到リ候儀前知致シ、其侭引込候モノニ可有之ト被考候、又今日ノ処モ万事手ユルキ様ニ候得共、是以大丈夫之処ト被考候、今長・土・肥ト同ク廟堂ニ立居候テハ、黒白不相分ヨリ天下之人望テ被便候ナシ、依テ随意ニ長・土・肥ニ為振舞、弥暴政難立ト申ス処、府藩県ノ人心ニ敷候処ニテ、是迄ノ御役人尾足ヲ取リ、趣向ヲ替テ出県候気込之モノニ可有之ト被考候、大久保辺之処目付役ニテ、態ト十分ノ力尽力不為致候、内心之栄ニ無之ヤト被存候、併是等ハ誠ニ推量ニ御座候、

右ハ面会中之大略ニ御座候、何分発輝ト不申聞候事故、其語気色ノ間ヨリ推量ニ過不申条、西郷今日ノ目的等猶推察可被成下候、同人儀諸藩之人ニハ成丈接シ不申、一切兵隊ト申テ何モ不言候由、是ニテ廉々ハ申聞候内ニモ可有之ヤ、

兵隊之大略

一兵隊ノ儀、当地ニ参リ弥盛ナル事ニ候、今日隊ヲ組立置候分ハ、壱番ヨリ四番迄ノ大隊ナリ、其別予備之大隊共都合四十八大隊之内モ、位立ル積リノ由、

一城門前ニ軍局相立置キ、司官之仁毎日朝四ツ時ヨリ出仕、八ツ時退出、右局ニハ早追々駕籠等平生揃置、

当地都テ屯田之仕法ニテ、十里モ隔リ兵隊有之候

間、右遠方ノ儀ニヨリ、一両人月交代ニテ当局ヘ出仕、　朝廷又ハ至急非常之節、右早追ニテ各隊中ニ布告致候為ナリ、

一城山ヨリ二里計隔リ製鉄処有之、右ハ蒸気仕懸ケニテ、大砲其外火管・喇叭等出来申候、其次ニハ蒸気船ヲ仕立候所有之、其外玉鋳所・紡績之器械・ヒン細工ノ処モ有之、皆以蒸気并水車之仕懸ニテ、盛ナル事ニ御座候、

一海岸台場ハ拾ケ処計有之候、

一兵器モ四拾八大隊丈ケハ不残揃居候由、誠ニ盛ナリ、勿論当地ニ参リ、ツラ〳〵兵隊今日ノ気込ヲ見候ニ、兵器トテモ揃候訳ナリ、申サハ太鼓ナリ、何ニナリ不足ニテ、隊中ヨリ其向ヘ願立候テ、会計ニ指問其義ニ及兼候ト申セハ、隊中ニテ今日兵隊ノ職掌被仰付、兵器相欠ケ居候テハ職掌相立不申、去リ迚在上会計不被為立候ハ、是又無拠次第ニ付、是ヲ以テ買上クレト申テ、着物ナリ品物ナリ指出スト申体ニ候、是等ヨリ盛ナル事、

一西洋医学校・漢学校・大和学・洋学夫々有之候得共、未タ盛ト申処ニハ至リ兼候由、

一大参事之家ヲ始メ玄関有之候家ハ一軒モ無之、至テ手狭ニ候、

一千石通リト申テ大身ノ居候処ノ由、此辺ハ大抵家作相崩シ皆小サク建直ナリ、

一士卒族共屋並之処ハ不足ナリ、大抵方々ニ散居ナリ、私ニ云ク、当地ハ其元君公壱ケ年位宛出城ト申テ、方々ヨリ廻リ居リ、居城ト申事ハ無之由、徳川氏之御代ニ至リ初テ居城相定候由、元ヨリ屯田仕法故、其節文官之仁二三年之処ヨリ日々出仕不便利ニ付、城下ノ明地ヘ勝手ニ長屋様ノ小家ヲ作リ来ル処、詰リハ其処本宅ト、手狭ニ候得共、千石通リハ此度ノ改政ニテ相改メ候由、城下並家之不足モ右之訳ナリ、

一兵隊其外等ノ家々ニモ度々参リ見候ニ、誠ニ今日ノ処ハ質素ニシテ、都テ市中ヨリ調ヘ物等不致、銘々ノ家々ニテ作リ、今日仕送リ候ハ士族一体ノ風ナリ、其故タマ〳〵市中ヨリ御用ノ品等求候者、不嗜ナル者ト忽ニ評判ニ相成候体ナリ、

一兵隊モ平生都テ戎服ナリ、文官ノ仁ハ袴計、羽織ハ大抵用不申、無官之仁ハ大抵着流シナリ、

一西郷ヲ始メ平生往来無僕ナリ、却テ下官之者ニ家来召連候モノ相見候、士族家内等ハ往来見当リ候分ハ繻服ナリ、尤家内ハ往来ノ節下女壱人位召連レ候、

一士族之子供ハ壱人立ニテ遊ヒ不申、方限有之、十三才位ノ子供ハ直ニ立各隊ヲ組立、外隊ヘハ一切交リ不申、夫故水練之処ヲ見候ニ、隊ト競テ遊ヒ居候、十五才ニ相成初テ成人ト称シテ隊抜ケ致シ候由、其外試ト唱ヘ寺又ハ死刑場ヘ扇ヲ立、シカモ暗夜八ツ時其場ヘ参リ、何ソ印ヲ付返リ候由、其節怯キ振舞致コト始終臆病者ノ汚名ヲ冠リ候習ハシノ由、

私ニ云ク、本行之通リ士族・卒族都テ質素之義ハ、当地城下迚モ今ニ屯田ノ仕法相残リ、殊ニ小知ノ者多候間、不令シテ奢侈ニ不流候ハ是一体ノ地盤、元ヨリ諸藩ヘ殊ナル勢ニ候得共、又夫丈ケ今日活計指閊候事ナリ、然ニ利ニ趣カスシテ、士ハ士タルノ意気地ニ趣キ候義、実ニ可美ノ士風ニ御座候、是モ皆西郷出ショリ教化之所為弥感服ナル事ニ御座候、

土地之大略

一地所ハ莫大ナルモノニ候、乍天地性ハ甚悪敷、畑地多田地少シ、藩内食料半通リモ生レ不申候由、琉球其外島々ノ産物ヲ以、食料ニ替候仕方ニ相見、元ヨリ富有之地ニハ無御座候体、三度ノ食ヲ致シ寒暑ヲ凌候得ハ、是ニテ十分ナルモノハ悉ク志気ノ引立候モノ故、在藩計之処モ別ニ利ヲ先ト不致候テ、自然会計モ相立候模様ニ被考候、

私ニ云ク、是等ハ最モ西郷着服(眼カ)ノ高キ処ニ御座候、会計ヲ立ント欲セハ、先ツ士気ヲ導キ候処ニ目ノ付ト申事ハ、実ニ感服ニ不堪候、

町家并寺院ノ大略

一仏寺不残取崩シ、皆神道ニ替ヘ申候、壮年ノ僧ハ当人之望ニ任セ、兵隊又ハ学校ニ入候モノモ有之由、老僧ハ是迄寺ノ格式ニ応シ、適宜ヲ以テ終身扶助米相渡シ候モノヽヨシ、当地ハ田舎ノ風ニテ、是迄モ神仏ハ悉ク流行ノ所、此度ノ義ニテ一切動揺ケ間敷事ハ無之候、

私ニ云ク、当地ハ一向宗ハ元ヨリ蒙法ニテ一切無之由、夫等ヨリ自然無事ノ勢モ可有之候得共、右等ノ禄高其軍事非常用ニ指向ケ、今日ノ処ヨリ一切用不申由、全ク人気ノ穏ナルハ此辺ヨリニモ可有之ト被存候、

一町家ハ当処ニ致シ至ル(ママ)不足ナリ、却テ物不自由ナリ、
一体前ニ認候通リ、士族等今日市中ヲ便リニ不致候為、
自然他邨ヨリ仕入物等モ不足ニテ、多クハ産物ヲ大阪
辺ヘ相廻シ、夫々利潤ヲ仰キ候モノト相見ヘ候、
一市中遊処場ト申スハ一切無之、又料亭ト申モ無之候、
鰻亭四五軒有之迄ニ候由、一体士族之処ヲ都テ市中ニ
タヨラス、又遊処モ無之為、権威下ニ不移、夫故士分
ヲ大キニ敬ヒ、兵隊等市中往来之節抔ハ、ソラ断髪様
カ御出ト申テ、子供抔路ヲ避ケ候事ハ時々見当リ申候、
右ハ今般薩州滞留中見聞ハ、大略委細之事ハ筆ニテ載
セ兼候様、万事御推察可被成下候、且又御飛脚立間ニ
逢兼候テ、一扁書之侭指出候条、麁末之認方御高免奉
願候、上々、

度々面会ノ姓名

西郷吉之助　大山格之助
伊集院直右衛門　田畑平
栗川少　上村休助
伊地知小十郎　赤塚源六
篠原冬一郎　種村健一郎
中村半次郎　村田勇右衛門
水付半平(肝カ)　河野季八郎
野崎半兵衛　高村十二
中村健彦　山口幸右衛門
有村直之進　海老原良平
篠原壮介　曽山佐七
黒田嘉右衛門　下村助次郎
石神雄弘　石神吉彦
中山定兵衛　児玉源之丞
坂元鄭介　秋岡研造
山口幸平　中山武次
上村剛造　黒木四郎右衛門
有川矢九郎　江夏十郎
江夏銀次郎

一八一　宮内省用石高外覚

八月

現石三十万石
右壱ケ年分

宮内省用
一二十八万両位
右鉄道用午八月迄、
凡成就百万両ト云見当、
一民蔵分局ノ節制度局調人ヘ新平也、
一會津救ノ義伊東不条理ト云、大久保不承引ナリ、
一徳島所置都テ知事ヘ御任セ、稲田ハ滞京兵庫官属、
一贋札作シ人ハ基ヨリ払出人モ死罪、
一ト南ヘ救料、
金拾七万両
現米壱万二千石
八月改
一罪人三千人
一救育六千人余
一東京市中戸数凡五十万軒
一太概百万ト云フ
一両京ノ間米貸六両弐部ノ定但壱石ニ付

一八二　市來四郎建言書草案

一八二ノ一
此一冊ハ昨秋頃ヨリ当春頃迄ノ実情ニテ、僕少シ耳目弘キカ故ニ、見聞スル処ヲ記シテ、伊集院・田中・内田氏等ヘ談シテ、大久保等ヘ遣シタルノ草稿ナリ、同人之ヲ要路ニモ出サレシ由、然ルニ制度寮掛江藤・山口等ノ弁官其説ヲ宜シト議シ、張札ヲ以テ要路ヘ申立ニ相成リシ由、中ニモ第一・第二・三・四・五・六・七等ハ用フヘキニ議定セシトハ承及候、其後ノ事ハ相分リ不申候、御笑覧被下後御秘メ置キ可被下、悪口ノ散々ニテ実ニ今更驚縮至極、併実情ニテ聊モ杜撰之条等ハ無之候、又愚考ハ殊ニ狭隘ノ事ノミ赤顔此事ニ御座候、決テ他人ヘハ為御見被下間鋪候、此時分ノ形勢ハ、薩ト云ヘハ悖逆人ト云ワル、外ナカリシ勢モアリ、又政ノ乱レタル言語ニ尽シ兼候次第ニ御座候、御亮察可被下、例ノ一小慷慨心ヨリ記シ申候訳ニ御座候、

辛未八月二十二日　　百拝
正名大君

秋彦帰国ニ付、為持奉入尊覧候、

一八二ノ二
即今貴賤之人情ヲ見察スルニ、怨怒愁悪之声街路ニ盈チ、或危懼ヲ懐キ、臨淵踏氷之思ヲ為シ、更ニ維新之

鴻業ヲ感戴スル者鮮ク、種々様々愁苦之説、忿恚誹謗之談紛紜聞クニ耐ヘス、見ルニ忍ヒサル程之次第ニ候、今形放擲御維持之道不相立候テハ、益人心土崩離反シ、恐多クモ

聖上御一己之御欠典ト唱フルノ外ナク、誠ニ嘆息之至ニ非ラスヤ、

御一新尓来許多

御仁恤之御施行アリト雖モ、今日ニ至リ稍消亡之姿ニ相成リタルハ、畢竟諸官々ノ欠失ナレトモ、皆

聖上之御闕典之様唱ルニ至レリ、目今之事サヘ如此、況ヤ千載青史上ニ於ハ如何ンカ議スヘキ、実ニ臣子トシテ座視傍観スルニ忍ンヤ、殊ニ当今内外多難、外国ハ日ニ月ニ暴慢横肆、稍蹂躙トモ云フヘキ所為多ク、内ニハ大義名分之弁ヘモナキ浅愚ノ輩ト狡黠多欲之族ハ、共和衆治ヲ良法ト唱フル之説モ聞ユ、如此ノ情態モアレハ、果ハ君臣之大義名分モ違却シ、愚民ヲ瀦揺シ抔品々悪説騰起シ、騒擾之一端ト可成立モ難量兆モナキニ非ス、誠ニ可謹可憂可慮ハ此時ニテ、草介ニ等シキ身モ窃ニ憂患スル処ナリ、倩其因テ起ル所以ヲ考察スルニ、

御維新尓来万人目ヲ拭テ新治之鴻業ヲ仰キ視ルノ処、豈料ランヤ、制度典章朝令暮換、或枝葉些少之事ニ走ラレ、殆ント煩雑トモ云ヘキ廉少カラス、或御施行上緩急順逆顚倒之事件モ多ク、或

御一新之二字ニノミ御着眼之様ニモ相見得、弊害之有無ニ拘ワラス旧法ヲ廃棄セラレ、新法ヲ施サレ候モアリテ、夫カ為ニ人心雑踏物議喧囂、其拠ル処ヲ知ラサルトモ云フヘキノ姿ニ立至レリ、寔ニ長大息之至ニアラスヤ、古人之云ヘル如ク、人心定テ後チ百事挙ルト云、然ルニ人心安堵之御所置ハ、先ツハ、相少キ様ニ窺レタリ、故ニ斯ク紛紜流談、浮説喧々人心恟々危疑ヲ懐ケルナラン乎、伝聞スル形態姿情ニテハ、縮眉嘆慨之外無ク、土芥ニ等シキ分トシテ、実ニ踰越之過慮トハ思ヒナカラ、此国ニ生レ命脈ヲ保存スルニ於テハ、聊カ憂国之情ナキニ非ス、願クハ維新之鴻業千載之模範ト相成リ、万民安堵シテ

應神　仁徳之聖代ト並称欣慕セン事ヲ企望スル之微衷ヨリ、僭踰之罪ヲ憚ラス、陋愚之拙考ヲ陳ル事左之如シ、

第一　即今枢要之事件

古人之云ヘル如ク、国之興廃存亡ハ君之明暗賢愚ト輔弼

宰相之賢不肖ニヨルト、是和漢古今相同シ、今我
聖上御若齢之御事ナレヘ、願クハ旦暮トナク万機臨御之
御暇隙ニハ、古之
明王聖帝之御迹ニ被為倣、益
聖徳英威ヲ宇内ニ曠充セラレ、万国欣慕スルヲ天地ニ仰
ヒテ希フ処ナリ、然ルトキハ比肩ナキ
皇国之威望益実立ト云フナルヘシ、将当今万機
御親裁トハ云ヘト、多クハ輔相其他群臣之論決ニ出ルナ
ラン、夫ヨリシテ民之信スル処ニ於テ、少シク厚薄ナキ
ニ非ス、殊ニ外国日ニ月ニ横敖暴肆トモ云フヘキ事少カ
ラスシテ、殆ント国体ニ関渉セントスル事柄モ多ク、其
他繁冗多難之時態、治乱之事務軽重共ニ、真ニ
御親断アラサレハ、万民悦服シ百事隆盛、海外並立交際
之道ハ相立マシク、仰キ願クハ、猶此上
聖躬ヲシテ、
皇祖神武　應神　仁徳　顯宗其他
列聖帝之御事蹟ヲ被為倣、
御威徳万方ニ赫耀ヲノミ渇望スル処ナリ、就テハ恐多ク
モ
龍体侍従之人ヲ精撰センコトヲ専要トス、其精撰之法ハ、
今侍従之人々多クハ旧公卿方ニテ、其内諸藩モアリト雖
モ、恐ラハ其当ヲ得タリト云ヒ難ケレハ、各藩士族之内
ヨリ、忠直篤行ニシテ下情貫通之人、或武事達道之者ヲ
択任シ、奉従セシメ度事ニ候、是実ニ即今枢要之重事ニ
シテ、一日モ遷延スヘカラサルノ事ト存候、願クハ当路
之人々ヘ聞ヘ上度事ニ候、

第二

論スルニモ及ハサル事ナカラ、政之要ハ誠信之二字ヲ以
テ柱礎トス、然ルニ
御維新尓来万機御改革、全ク　御一新之御所置ニテ、御
施行上朝令暮換トモ云フヘキ廉少カラス、故ニ万民危懼
ヲ懐キ、臨淵踏氷之思ヲ為シ、或狐疑猶予スル事ノミア
リテ、適
御仁恤之布令アリテモ之ヲ信用セス、之ヲ感戴セス、却
テ御詐術之様唱、実ニ嘆息之至トモ云フヘキナリ、因テ
窃ニ考フルニ、全誠信之二字御薄キニ起レルノ病ナラン
乎、古人之言ノ如ク、非信無以使民非民無以守国ト、又
政者旧章ニ則ルヲ良トスト、又民者旧章ヲ慕トモ云ヘリ、
然ルニ
御維新尓来諸事百端、唯御一新之二字ニノミ御着目之様

窺レタリ、爰ヲ以テ素ヨリ民之好マサル処ニシテ、人心狐疑稍離反之勢ニ立至レリ、加之怨怒愁悪之声巷ニ盈チ候トモ云フヘキノ今日ナリ、昔漢高祖秦ヲ伐テ、法ヲ三章ニ約シ、旧法ニ従ヒ因リテ、弊害ヲノミ除キシヨリ民悦服シ、四百年ノ基業ヲ建タリト、其基業之本ハ全ク三章之法煩雑ナラス、旧法ニ従ヒ因レルニ有リト、尤我国即今標準トスヘキ事ト存候、我朝ニテハ、頼朝奥州ヲ伐テ政度法令皆旧制ニ則ラレシ故、日ナラスシテ鎮定セシト、又家康甲州ヲ領シテ、武田家之政務少シモ変革セス、金銀器財田園租税之法ニ至ルマテ、悉ク信玄時代ノ如クニ差置レタリト、秀吉之北條ヲ亡サレシ後モ同様ニテ、名将智者之為ス所如此、民情貫通トモ云フヘシ、頼朝・秀吉・家康イツレモ博学曠識之聞モナク、実ニ治務之要旨ヲ得、衆ヲ馭スルノ材天品トモ云フヘシ、素ヨリ王覇之別同年ニ語ルヘカラサル事ト雖モ、当今之処其宜シキヲ撰採セラレ、民心之安ンスル処之旧章ニ則リ、弊害ヲノミ除カレ、万民安堵生業ヲ楽ミ、愚夫愚婦ニ至迄、天恩之忝ナキヲ感載(戴カ)スル之御目途、専一ニ被為建度御事ト存候、恐ナカラ今形先末転倒緩急之順序ナク、新法ヲノミ行セラル、ハ誠ニ縮眉之至ニ候、古人ノ云ヘル如ク、政令簡易人情之所安措置一ヒ差ハ、皆致弊循其旧法択其善者、而明用之洞其弊源酌其治法、然則疆内安輯里無嚣声ト、実ニ方今標的ト成サルヘキノ要語ト存候事、

第三　外務ニ関係之官員、重立チタルハ我カ国体明弁セシ者ヲ精択任用セラレ度事

窃ニ当今之御体裁ヲ窺フニ、外務之職員ト云ヘハ、悉ク洋学者ノミ御択用之様見ヘタリ、乍恐愚考スルニ、甚転倒ノ事乎ト存候、如何ントナレハ、今横濱其他ヘ在留之公使並ニ官員ヲ見ルニ、日本ノ事務情由ニ通達シタル乎、或ハ日本之学問シタル者ヲ用ルニ非ス、全ク彼ノ国体制度法律ヲ弁ヘ、事務ヲ謬ラサル者ヲ用フルト見ヘタリ、今我国外国之軽侮ヲ受ケ、殆ント国体ニ関係セントスル事少カラス、彼ハ日ニ敖狼驕慢ニシテ、動モスレハ噬咬之挙動ヲ示シ、押圧之所置忿懣ニ耐ヘサルノ今日ニ立至レリ、少シノ疵ニ乗シテ猖獗之言行ヲ発スルハ、彼ノ平素目的トスル所ナレハ、接遇応談スル官員ハ彼ヲ知リ、己ヲ知リタル者精択任用セラレ度ハ、勿論ナリト雖モ、今其人ヲ得ルハ真ニ難ルヘシ、難キニ於テハ、彼ヲノミ知レル者ヲ用ンヨリ、寧己ヲノミ知レルヲ用フルトキハ、我ヲ辱メサルナラン、殊ニ今般新ニ置レタル弁務使ノ職

ハ重大ノ官掌ニテ、彼ノミニユストルニ相当セルナラン乎、然レハ尚更己ヲ明弁シ制度民情ニ通シ、国体ヲ辱下セス、交際上不都合ヲ醸成セサル思慮老練精密軽忽ナラサル者御撰任アラマホシク、之レ交際ノ枢要国体維持ノ要目ト存候事、

第四

即今外国之敖驕軽侮ヲ受タル実ニ譬ルニ物ナク、此国ニ生活スル者豈ニ忿慨セサランヤ、畢竟我ハ国疲弊、兵力・器械彼ニ及ハサルト、国民上下憂国之情薄キトニ出タルナラン乎、方今宇内ニ跋扈横行セル英国ト云ヘトモ、本国ノ広袤周囲大抵我国ニ同シク、戸口モ稍同様ナリト、然ルニ彼ハ早ク世界ニ手ヲ延スノ志ヲ逞フシテ、富国強兵ノ策ヲ定メ、内ハ治安ノ法ヲ布キ、外ハ威力ヲ以テシ、如此宇内ニ轟鳴スル強大国トナレリ、我国モ政教ヲ整ヘ、民心ヲ和シ、富強之策ヲ固定シ、国民挙テ憂国之情信節ニシテ、海内一致協合シ、気力ヲ逞フシタラハ、後年圧倒馭制スルコト能サルニハ非ラサルヘシ、故ニ方今之急務ハ民心和同安堵スルト、教化之道ヲ布キ、国ヲ思フノ情ヲ信切ナラシメルト、富国強兵トノ外ナカルヘシ、

御維新尓来数回御布令ノ如ク、万国並立之基本ハ、先ツ此三件ノ外ナケレハ、勉メテ国ノ為貴賤共ニ心ヲ竭スヘキハ此事ナリ、又富国之本源ハ国ニ遊逸ノ民鮮ク、各生業ヲ勉強シテ、徒食ノ輩多カラサルヲ要ス、近年物価騰貴万民塗炭ノ苦ヲ受ルモ、畢竟外国ノ交際開ケテヨリノ事ナリ、右ハ彼ノ詐謀威力ノ為ニ稍圧倒セラレシニ、畏怖シテ措置ヲ謬シニ出タル疾苦ニシテ、疲弊ト兵力・器械ノ微弱ナルニ起レリ、殊ニ旧来ナクテモ済ミ来リシ無用ノ遊器・翫器夥ク舶載シ、今ニ至テハ欠乏シテサヘ不自由ノ風習トナレリ、況ンヤ之ヲ禁輸スルコト能ハサルノ勢ナレハ、如何ントモ為シ難シ、近クハ支那ノ覆轍ヲ以テ考ルニ、阿片ノ毒品サヘ輸入ヲ禁シテヨリ大乱ニ及ヒ、終ニ即今ノ国体ニ陥リタリ、故ニ我国ニ於テモ玩品ト云ヘトモ、禁輸ノ制ハ下策ニシテ、擾乱ノ媒トモナルヘケレバ放擲シ置テ、之ニ反シテ輸入品擬造模製ノ出来候者ハ、悉ク国製シ用ヲ足スノ策ヲ建ラレンニ如クハナカルベシ、因テ其教授ノ局ヲ設ケラレ、洋学者諸ノ識者ヲ置テ叮嚀反覆示教シタラハ、輸入品ノ内稍半バ、擬製スルニ至ルヘキハ必定ナリ（官ニ於テ之ヲ製スルニ非ス、示教ノ局ヲ設テ望ム者ニ其法ヲ教ヘ、且其書ヲ授ルノミノ設ヲ要ス）、然ルトキハ遊逸ノ民減シ、富国之大本強兵之礎基、外国ノ蔑如ヲ受サルノ長策ニテ、輸入ノ価ヨリ少シハ高

価ニ候トモ、国ノ損亡ニナラサルハ患フヘキ事ニアラス、国中融通ノ道相開ケ申ヘシ、其時ニ当テ西洋ニ行フ所ノ如ク、輸入品之税ヲ高クシテ、自然其品高直ナル様ニ権ヲ我ニ確持スルトキハ、従テ輸入セサルト、我国製ノ品自ラ我用ニ充ルノ策、令セスシテ行ルヽニ至ルヘシ、西洋諸国ニ於テハ輸入品ヲ買フニ税高ク、輸出品ハ税易ク、之レ国民ノ利アルヲ要スルノ法ト聞ユ、如此ノ権道モアレハ、国ニ産業ヲ開クハ、弘ク宇内ニ眼ヲ注カサルヘカラス、今開港場ヘ輸入ノ品数凡一百八十余品、輸出ノ品数凡七十余品、八拾品ニ上ラス、其一百余品ハ全ク我国之損耗ニシテ、国家之奢費ト云テモ可ナラン乎、去ル巳年五港ヘ輸入ノ諸毛布、価ニシテ凡二百七十万元ニ下ラス、皮製之諸品並ニ消皮ノ輸入価銀凡一百二十万元程、大小礮弾薬等ハ非常高価ナルノミナラス、莫大之輸入ニテ一千万元ニ下ラサリシトソ、其他細小ノ器物ハ押シテ知ルヘキナリ、願クハ当路之人々心ヲ用ヒ玉フヘキハ此事ナリ、

第五　朝廷ニ兵権御実立急務中之大急務ナル事

当今各藩ヨリ、

輦下御警衛之為メ二三大隊程被召置、右ハ薩・長・土・肥前ノ兵ニテ、先ツハ強勇整斉之藩々ヨリノミ被為徴、隊制各異器械モ所好ニ従ヒ、将校兵士輜重其他ノ員ニ至迄、藩々ノ制式ニテ屯所ヲ異ニシ、操練ヲ枢別シ、殊ニ天覧之節迚モ藩々隊ヲ分枢シ、練式ヲ異ニスル甚混雑ナルノミナラス、

朝廷ノ掌握セラルヽ兵制トハ云ヒ難シ、加之去々年薩・長・土之三藩ヨリ懇徴セラレシ、之レ実ヲ云ヘハ少シク御愛憎ニ御近キトモ云フヘシ、既往ハ論ナシト雖モ、是又御相適之所置トハ云ヒ難シ、殊ニ府藩県三治一致ト被為定、諸事細大共ニ　御統轄ノ法追々被為建ニ就テハ、

第一国家之維持警戒之兵隊ナレハ、全ク

天権御掌握之筋確乎ト不相立候テハ、乍恐真ノ兵権トハ云ヒ難カラン、因テ窃ニ愚考スルニ、先ツ此涯之処ハ、大中之各藩ヨリ石高ニ応シ、将校・兵士幾員宛ト被為徴、屯所モ同所ニ被置、寝食ヲ共ニセシメ、隊列編伍ヨリ操練ノ式、大小礮器・冠帽・衣裘・紋号・紀章ニ至迄一式一定シ、演習練講致候様御確定アラマホシク候、然ラハ則海内全国一致同和之基礎ト相成、真ニ

朝廷之御兵権確乎実立ト云フベシ、恐ナカラ当分之姿ニテハ、余事之御体裁ト齟齬シ、甚御不都合ニ候、右通諸

藩精撰之兵ヲ以、
禁闕護衛致サセ候ハ、強弱藩ノ別ナク海内同和協一、全国強盛之基本ト相成リ、或剛弱藩振不振之差別ナク、挙国勇強ニシテ、海外御並立之根元実立ト云フヘキナリ、全国合一奮起シ、財用器械充足セサレハ、並立之策ハ勿論交際ノ誼モ全カラサルヘシ、恐ナカラ能々御洞見速ニ御施行アラマホシキ事ニ候、

第六

当今各藩徴兵之御取扱振ヲ窃ニ窺ニ、甚御疎略之様見ヘタリ、兵士之職掌ハ至テ重キ者ニテ、国ヲ保護シ万民ヲ安堵セシメ、外邦之軽侮ヲ受ケサラシムル等、実ニ人身ニ比スレハ歯牙之如ク至重ノ者ニテ、国ニ法律兵之三ツ整立セサレハ、治国安民之策立難キハ論ナシ、殊ニ兵士ノ身ハ今日迄ハ安居シ、明日ハ鋒鏑弾丸ノ中ニ趨走奉仕スル職掌ニテ、実ニ人界中ノ大苦ヲ引受、尤モ憐ムヘキ者ニ非スヤ、安居ノ日ト雖モ、常ニ戎服ヲ綢ヒ、旦暮昼夜心ヲ安スルノ間ハナク、陣場ニ臨ンテハ、風櫛雨浴身ヲ泥沼山野ノ中ニ置テ、寝食モ時意ニ任セス、啻死ヲ潔クスルヲ常ニ談シ、常ニ忘レス、平素屯所トテモ見苦鋪居苦鋪様子ニ相見得候、我国ハ外国ト違ヒ、神武創始之御時ヨリ、武ヲ以テ治ヲ被為布候国体ナレハ、支那其他外国之法ハ兎モアレ、何ソ拠ルヘキ拘ルヘキ事ニアラス、一国立法アリテ兵官ハ一層尊重セラレ、愛憐ノ筋屹ト相立チ、給俸食膳ノ用モ充分ニ給与シ賜ヒ、人々兵隊ヲ渇望シ、威重アル様御建法アリ度事ニ候、之レ海外並立之第一策治安之礎基ト存候、現今街路之説ニモ、去々年頃ニハ兵隊ト云ヘハ御愛重アリシカ、少シク治安ニ趣キシニ、稍御疎外等鋪気味モアリト、外見上ニテハ軈テ其通ノ姿ナキトモ云ヒ難シ、殊ニ各藩門閥ヲ廃シテヨリ、兵士ノ中ニハ重キ門葉身柄之者モ少カラサルニ、徴兵ニ出テハ日雇人足上リニ等シキ歩兵、或ハ無頼無宿者同然之輩、烏合ノ兵ト同等之御取扱振抔ト種々怨怒スルモアリ、如何ニモ情意ニ於テ最ノ事ナレハ、各藩兵隊ハ分テ御愛重被為在度候、歩兵四五大隊之輩ハ印章・記号ヲ異ニシ、諸関門ノ警衛郭内ノ巡邏、或市街之警戒火防等ニ御仕役相成リ然ルヘキ乎ト存候、

第七

国之盛衰強弱ハ貧富ニ有リ、故ニ富国強兵ト順序ヲ立テ唱フル事ト存候、西洋ニ於テ国之強弱ヲ外察スルニハ、貨幣之価国札ノ相場高低ヲ以テ知ルトモ云ヘリ、故ニ強

兵之策ヲ建ラレンニハ、富国之道ヲ勉ムルニアリ、富国之道ヲ建ルニハ国ニ遊逸之民鮮ナク、生計之業ヲ勉メシメルニアリ、農工商之三民勉強刻苦国産ヲ増スニハ、所謂化学(セーミ)ヲ盛興スルニアリ、化学ハ治乱之事務悉ク関セサルナク、実ニ富国強兵之大本ト云ツテ可ナリ、今我国日ニ開化文明ニ赴クト雖モ、未化学ニ志ス者鮮ク、又御世話モ厚キトハ云ヒ難ケレハ、願クハ当路之諸賢心ヲ用ヒ玉ヒテ、此学術盛ニ興サレスンハ、富強之本ハ立チ難ルヘシ、尤モ民政之大基本ナレハ、一日モ速ニ手ヲ付ラレ度事ニ候、

第八　民ニ産業ノ道ヲ開教シ、国民富メハ官庫充実、同一ナルノ　御趣意永続確立セラレ、或外国並立ノ基本並民法ノ概論

民ニ産業ヲ勧ルハ民法ノ大本ニテ、一日モ忽ニスヘカラサル者ナリ、則国富ハ民富ノ金言万古不滅ノ語ニシテ、人君当路ノ官々違却スヘカラサルハ此語ナリ、西洋各国ニハ上下ノ議堂アリテ、貨財ノ権ハ必ス下議堂ニアリテ、国ニ治乱ノ費用アルトキハ、下議ニ渉罹シテ国債ヲ為スト、故ニ各国多少ノ国債アラサル所ナク、則民富ハ政府富ムノ法、実ニ良法ト云フヘシ、爰ヲ以テ政府ハ常ニ農工商士ヲ保護スルノ議ヲ怠ラス、中ニモ農工ノ業ヲ勧メ、或ハ利ヲ全フセシメルヲ勤ム、故ニ西洋諸邦ノ中ニ於テ強国ト称セラル、ハ、必ス産物多ク農耕開ケ、工芸繁昌ニシテ、商法盛栄四方ニ輸送貿易シ、生計ヲ楽、従テ兵威充実ニシテ並立交際シ、蔑視軽侮ヲ受ケルコトナク、国家安寧学術日ニ開化、宇内ニ跋扈縦横スルニ至ル、我国ニ於テモ四夫四婦モ竭力尽心シテ之ヲ見、之ヲ倣テ勉励セサルヘカラス、農耕商ハ国体ノ臓腑トモ云フヘシ、士ハ爪牙ノ如キ者ニテ、何レモ平均備具セサレハ、身体健壮トハ云ヒ難シ、然リト雖モ、食ニ餼スレハ爪牙強ト雖、咀咬噬圧ノ力ナク無用ニ属シ候得ハ、之ト同シク農工商ノ産業ヲ盛起スルハ、国家震興隆昇之根源ニテ、其本源ハ民法制度ヲ建ルニアリ、其建設ノ法ニ於テハ、当今ニ至リテハ元来我国鎖論独立一己之建法ニテ、斯ク交際通信開ケ候上ハ、宇内万国ノ法制弘ク考索シ、然テ宇内之法則トナルヘキ我ニ相適ノ法ヲ設ラレ度事ニ候、中ニ就テ開港場ノ法則ハ、我国相適ハ勿論、宇内普通ノ公則ニアラサレハ、行ワレサルノミナラス、却テ混擾ノ元ナルベシ、然シナカラ輸入出ノ税高下ノ権ハ第四章ニ記セル如ク、我ノ輸出彼ヲ圧スルノ権ヲ保タサレハ、行ヒ難

キノ道理ナレハ、勉メテ我ニ特権確持之法専一ナルヘシ、左モナク即今之況勢ニテハ、全ク外国之弁理勝手之法ニ屈従シ、果ハ制駁セラルヽニ立至ルヘクモ知レス、左候ハ弥疲労ヲ極メ、人心土崩離反シ、浅愚之輩ハ生計之困窮ヨリシテ、終ニ彼ノ正朔モ奉スルノ大事ニ至ランモ知ルヘカラス、実ニ民政ハ国政之重事ニテ、反復御洞察アラマホシキ事ニ候、

第九

民政ハ関渉至テ広キ者ニテ、和漢洋稍相同シト雖モ、少シク其趣ヲ異ニス、西洋之法ハ第一戸籍人口廃疾之調ヘ、第二教育撫恤、第三諸学校、第四農耕之勧励・工商之世話、第五訴訟、(第六脱カ)第七商会為替問屋之管轄、第八郡村ノ制度、第九土木工作堤防水利等ノ一切、第十駅逓運輸ノ制度、第十一市政並ニ警備、第十二寺院宗教ノ制度、第十三諸ノ稼業家部(パテンド)式ノ制、第十四病幼盲唖孤等ノ院管轄、第十五開港場ノ制度、輸入出ノ調度産物ノ統括、第十六鉱山開掘ノ法、第十七開墾種殖山林育伐之制度、第十八兵賦人員之調度、人民繁殖ノ法、大目凡如此、其他百端ニ関渉シ、民政ニ罹ラサルハ鮮ク、我国ニ於テモ稍同然ニテ、別ニ区論スルニ及ハス、其中指向キ旧来ト異レルハ、開港場ノ制度ト商賈ノ制度ハ、独立鎖鑰ノ時ヨリノ法トハ、体裁大ニ相違シタレハ、弘ク宇内ニ捜索折衷シ、万国普通ノ大法相建、渠ノ万国公法中ニ編入シ、循守為致候様ナクテハ不叶事ト存候、

第十

第八章ニ陳述シタル如ク、民政ヲ整理シ、農耕之二業ヲ開勧勉励スルト、兵威震張スルトハ、何レモ国家ノ盤礎ニシテ、一日モ忽ニスヘカラサルノ重件ナリ、殊ニ兵ハ国家ノ歯牙ナレハ、堅壮ナラサレハ、内ニハ流賊奸民ヲ制駁畏怖スル能ハス、外ハ交際上ニ於テ威力逞カラサレハ、咬噬圧嚼ノ汚辱ヲ防クコト能ハスシテ、終ニ疲労困難ヲ受ルニ至ル、何レノ国ト雖モ、威力ナクシテ交際ノ全ト、民人ヲ安寧ナラシムルコト能ワサル者ト見ヘタリ、交際ト云ヘハ並立比肩ノ勢力ナクシテハ、此二字ハ真ニ当テ難ク、今我国ト英・魯・亜・普等ノ各国ト交際ノ字ハ、恐クハ未タ下シ難カラン乎、多クハ彼ニ圧倒咬咀セラレシ廉鮮カラス、実ニ握腕之至、畢竟疲労之一事ヨリシテ、兵威具整セス、対当抗抵ノ玄機備ワラサルニアリ、願クハ中興ノ政蹟隆盛シテ、真ニ並立交際之道相立、万国ニ

皇威烜赫普輝シ候ハ、上ハ
神皇之霊意ニ適ハセラレ、下ハ万民其恩徳ニ浴シ、千載之模範ト欣慕敬称スルニ至ラハ、億兆幸慶之ニ如クハナカルベシ、

第十一

当今諸官択挙之内諸県令撰任之次第、巷説ニ流談スル処ハ、多ハ各省各局ニテ不都合ナリシ者、転移任用セラル故ニ、其処ノ庶政挙ラス、或整理セス、或放擲シ人民ノ疾苦ヲ救ワス、撫恤ノ道モ行届カス、唯目前足下ノ事ノミニテ、訴訟ノ聴断モ忽ニスルノミナラス、偏頗ノ所置多ク、困苦忿恚ノ余リ、遂ニ一揆蜂起ノ挙動ニ及ヒ、幾多ノ人民刑戮ニ罹ルニ至レルト、畢竟官員択挙之道如此ナルニ出ツトノ説ナリ、窃ニ窺フニ全ク拠ナキ説ニモアラサルベシ、一概ニハ云ヒ難ケレト、其一所一時ノ父母ナレハ、人民ノ為厚ク精択アラマホシキ事ニ候、右ノ如ク流談布行スルトキハ、何トナク、其土人モ耳目ニ触レ、従テ今日ノ挙動旁何カ悪シ様ニ見為シ向ヘ為シ、欠失ナキ者モ、間ニハ無辜不体裁ト負受セルモアルベシ、克ク御択用之筋相建スシテハ、即今ノ如ク諸所沸擾蜂起シテハ、遂ニ聖徳ニ関係スル重事ニ立至ルヘク候、

第十二

邪教禁絶ノ処置ハ甚重大ノ難事ニシテ、関係モ弘遠ニ渉リ候得ハ、恐ナカラ格別非常ノ
御勇断ナクンハ、禁滅之道恐クハ立兼候半、既ニ長崎浦上村ノ浅民迷教ノ輩、即今ニ至テモ改心不致モ不尠由、其他諸開港場等ニハ信教ノ徒ナキトモ云ヒ難シ、既ニ横濱ヘハ邪宗堂三四ケ所モ盛大造建シ、其守リノ人ハ国人ヲ仕役シ、其者ヘハ給料モ多分ニ与ヘ置キ、之モ宗教ノ恩恵ヲ頻ニ説キ聞セ候由、因テ右輩ハ本邦之神祇仏寺ト同様尊崇致シ、国人ニ対シテモ大切ニ申聞候由、右通ナレハ多欲迷利ノ商賈或ハ貧困浅愚之族ハ誘導誑惑セラレ、信教スル者ナキトモ云ヒ難シ、後日又何レヘ乎大崩顕レ候半モ難計、彼宗教喩導ノ次第ヲ伝聞スルニ、人倫之綱目ヲ説キ勧善懲悪之筋抔稍仏法同様ニ相聞ヘ、更ニ奇異怪談等敷キ事ハ無之由、唯於我国悪ムヘク恐ルヘクハ、彼ノ教法国風我ト甚異リテ、第一君臣之大義名分ト云フ者ナク、徳望威力アル者ハ如何ニ卑賤之者ニテモ、帝位ニ経上リ候位ニ立チ候抔支那同様ニテ、之レ我国風ト雲泥相違フノ事ニシテ、彼ノ風習国体口ニモ唱フヘカラサルノ我国ニ於テノ悪法ナリ、爰ヲ以テ当今仏国帝孛国ニ

生擒セラレシヲ、国民挙テ共和衆治ヲ企望シ、国ヲ保存スル事ヲノミ主論シ、更ニ国帝ノ汚辱艱難ヲ一洗挽回スルノ説ナク、人望不励之人ナリト既往ノ失欠ヲ挙ケ抔シテ、却テ誹譏謗罵シテ放擲致シ置候様子ニ聞ユ、之レ全ク彼ノ国風又ハ宗教ノ体裁ニシテ、君臣之情義少シモナキ処ニテ、我

皇国ニ於テ最モ悪ムヘキノ教法、国風ニアラスヤ、我国ノ美ナル、宇内万国ニ冠タルハ、

神皇之御血統万世連綿、君臣之大義確乎不抜、万代不朽之国礎堅立、実ニ比肩ナク誇ルヘク尊フヘキハ此事ナリ、然ルニ万一邪宗浸染瀰蔓シテ、浅陋之愚民等君臣之大義ヲ違却スルニ立至リ候テハ、如何程文明開化、国富兵強、亜・英・魯・孛之威力ニ百千倍ストモ何カセン、唯ニ

皇統連綿国体堅立シテ、彼ノ所長ヲ取テ我カ短拙ヲ補ノ大趣意ヲ失ワサルヲ専要トシテ、教法ノ如キハ素ヨリ悪ムヘク、退除スヘキノ一ニシテ、勧善懲悪等之事ハ仏教ニ等シク、別ニ悪ムヘク驚クヘキ訳ナク、因テ断然退滅ノ法一涯厳確不被立シテ不相済ハ、上者ハ

皇統之至尊ニ及ヒ、下者君臣之大義至重ニ関係セル一大重事件ナレハ、勉メ謹ンテ厳確之法相立度事ニ候、夫レニ就テ又邪教ニ甲乙ナキ、印度ノ仏教モ倶ニ廃滅セサレハ、欧羅巴ノ邪教禁絶之策モ法モ建マシク候、如何ントナレハ、仏教浸入シテヨリ殆ント一千三百余年、其間国害ヲ釀成シ、禍殃ヲ為シ、人民ヲ蠹害セシコト挙テ数フヘカラス、実ニ欧羅巴ノ邪教ト同日ニ語ルヘキノ悪教ニシテ、詰論スレハ印度ノ邪教、欧羅巴ノ邪教ト並称スヘキナリ、因テ欧羅巴ノ邪教ト相並テ禁絶アラマホシキ事ナレハ、此機会ヲ失ハス、仏寺・塔宇・像画・経巻廃棄ノ典、布令セラレ度事ニ候、一日モ遷延スヘカラサルハ、邪教ノ浸染ニ関係セル重大ノ訳ナレハナリ、然ルニ人ニ由テハ未タ時至ラス、或信教スル輩沸騰蜂起ノ騒擾ヲ生セン抔ト甚多論、畢竟因循姑息之論ニシテ、外ニ窺フノ患ヲノミ恐レテ、既ニ内ニ迫レル外讐ニ等シキ内仇ヲ放擲シ置テ、終ニ内外相合シ困難ニ迫リ、我ハ却テ放逐セラル、ノ譬ニ同シカルヘシ、仏教ヲ退除スルノ機会ハ即今ニアリテ失フヘカラス、再ヒ得難キノ好機会ナリ、今上下ノ人情ヲ見察スルニ、愛国ノ切情アル者ハ頻ニ患念シ、或ハ仏ノ信スルニ足ラサルト、奇特怪験曽テアラサルヲ明弁シ、奉信禱念ノ浅マシキ所為ヲ了解シ、日々仏威滅廃ノ勢ヲ顕セリ、此時ニ乗シテ廃除ノ布令ヲ布カセラレタ

ラハ、日ヲ費サス力ヲ労セスシテ速ニ滅絶スルコト疑ナカルヘシ、

又意外驚愕ニ耐ヘサルハ、伝聞ノ謬誤ナリヤ否ハ知サレトモ、

朝廷内宮ノ婦女子抔諸山ヘ御祈禱等ノ事モ、従来ノ宿弊今ニアリト、之ハ全ク愚昧ナル婦人輩所為ニ相違モアルマシク、左リ迚今日ニ至テ惑ノ甚シキ所為、イカニ婦女子トハ云ヒナカラ、万乗ノ宮中ヨリ如此ノ事ハ厳シク禁セラレ度候、若シ御祈事被為在候ハ、大小ノ神祇モ御不足ナク被為在ルニ、何ソ印度ノ胡神ニ被祈ルニ及ハンヤ、殊ニ

聖上ノ御祈事抔トハ、誠ニ浅間敷キ事ナラスヤ、冥福寿貴ヲ祈ルハ凡人下浅ノ所為ニシテ、神明御同一ナル

一天万乗之御身ハ、則神人ニテ被為在、億兆之人民旦暮尊崇奉祈スルニ、何ソ印度胡戎ノ銅鉄木石ノ偶像ニ対シテ、御幸福ヲ祈ルノ理アルヘキ哉、祈リシトテ験応アルヘキ哉、譬ヘハ今欧羅巴ノ宗像等ヘ

聖躬ノ御祈事致シタラハ、万民之ヲ如何ト云フヘキ、又霊験奇応アルヘキ哉、仏教邪教イツレモ同一外国ノ神ニシテ、舶来ノ胡像胡教ニテ区別スヘキニアラス、又寿夭ハ上　天子ヨリ下庶人ニ至ル迄、天賦自然賦与ノ数ト保摂療養ニ関係シテ長短アル者ニテ、神祇モ恐ラクハ難為知召事ハ歴々明瞭ナル事ナリ、又泉湧寺ノ陵モ速ニ神祭ニ御改正、九重ノ御塔其他寺宇・楼閣等ハ勿論、一切御除キ御祭換アルヘキ事ナリ、今形依然被召置ハ、恐ナカラ御因循ノ御事乎ト存候、其外御一変アルヘキノ事モ許多可有之哉、如此海内一般ニ先ツ寺院・塔宇掃滅、仏像・梵鐘ノ類悉ク毀壊シ、銅器ハ鋳銭ノ用ニ拱ヘ、目今現在艱苦ニ切迫セル貧民済救ノ用ニ充テラレタラハ、如何許リ乎御賑恤、歓喜ノ声路街ニ盈チ　感戴スヘキヤ、左候ハ仏ノ本意ニモ叶ヒ申スヘシ、寺院ノ廃跡ハ人家或ハ田畑山林トナシ、民生ヲ益シ候ハ、是以テ仏意ニ適ヒ申スヘシ、現今幾多ノ窮民之カ為ニ御仁恤ヲ蒙リ候ハ、海内中幾万ノ胡神ヲ金殿高楼ニ置キ、旦暮飢餓困民ヲ為祈候半ヨリ、目前ノ苦ヲ御救助アリタラハ、如何計リノ御仁政ト仰キ奉ルヘキ哉、仏ハ元来樹下石上ヲ本意トシ、美閣高殿結構スヘキ者ニアラサルハ、仏経中顕明タル事ナリ、然ルニ社稷ト等シク、何之訳モナキ胡神ヲ恭シク御尊崇、盛大ノ楼閣美堂珠玉金銀ヲ結構セラルハ、冗費ト云ワスシテ何ト乎云フヘキ哉、速ニ廃掃除絶有之度、前説ノ如

ク邪宗ト云ヒ仏教ト云ヒ、何レモ本邦ニ於テハ邪教ニ相違ナク、同一ノ者ニ候得ハ、之ヲ信シテ彼ヲ禁スルハ、道理上ニ於テアルマシク、之モ彼モ禁絶掃除シ、愚民蠹害ノ患ヲ去リ、

神皇ノ正道ヲ奉信為致候コソ、至理至当ノ事ニ可有之、亦寺宇掃除スルニ於テハ、一騒乱ニ及フヘクトノ説ヲ立ルノ人モアリト雖モ、僕カ所見ニ於テハ、前説ノ如ク邪教浸淫ノ憂ハ甚重大ニシテ、恐多クモ　御国体ノ至大ナルニ関渉シ、君臣ノ大義ヲ紊ルノ訳ニ立至リ、此上モナキ至重至大ノ事柄ニ候得ハ、仮令少々ノ沸騰騒擾ニ及ヒ候トモ、憂ヘク驚クヘキニアラス、反復教誡シ奉戴遵守セサル輩ハ、召捕処置セラレテモ当然ナリ、又蜂興セル者ハ兵力ヲ以テ取押ヘテモ可ナリ、何ソ平穏ヲノミ好ンテ、因循姑息ノ説ニ渉ラン哉、至重至大ノ事柄ニ候得ハ、少々ノ蜂起位ニ驚クヘキニ非ス、因テ邪教仏教同一ニ禁絶一掃ノ上、普ク海外ノ万国ヘモ御布告相成リ、屹然不易ノ国法堅立、若シ瀰蔓ノ道ヲ謀候ハ、公法ニ処シ候御規則相立度、西洋ニテモ宗旨騒擾ハ古ヨリ毎々有之、民ノ好マサル乎或国法ノ不許ヲ強テ弘法スルトキハ、法ニ於テ允ザヽル事ノ由、我国モ仏教サヘ禁絶致シ候得ハ、彼ヨリ窃ニ弘法スルハ国法ニ於テ違却ノ訳ニ相当リ候、彼国ニモ宗旨ハ種々有之者ニテ、先ツカトレーキ・プロデスタント・回々・希臘教抔アリテ、何レモ少シノ異同アリト見ヘタリ、我国諸宗ノ如キ者ニシテ、争論止ムコトナキ程ノ趣ニ候、人々信不信ノ宗派モアリ、又国・所ニ由リテ信不信モアリト、近世ニ及ンテハ、彼モ開化文明ヨリシテ、方便説等ノ空談ニ迷溺スルモノ鮮ク、信スルニ足ラサル者ト云モノ尠カラス、何レノ国モ同様日ニ月ニ相開ケ候得ハ、我国ニ於テハ仏教ヲ廃除シ、固有

皇国ノ大道ヲ以テ維持スルノ法普ク布令セラレ、其上窃ニ弘法ノ術ヲ計リ候モノハ、国則ニ処スヘキノ旨ヲ確立セラレ度候、今形仏教ヲ依然被召置、邪教ヲノミ禁制セラル、、公平ノ御所謂トハ云ヒ難シ、恐ナカラ要路ノ諸賢、宜シク御洞見アラマホシキ事ニ候、右ニ付テハ僧侶ノ輩御所置年齢老壮若ニ従テ、夫々御仁恵ノ御取扱有リ度候、火葬ハ多言ニ及ハサル悪弊ナレハ、速ニ禁令ヲ下サレ度事ニ候、

第十三

日本国中寺院廃除ノ上ハ、梵鐘銅仏器等ノ一切鋳滅シ、当百銭ヲ鋳造セラレ、飢餓ノ困民ヲ救助セラレ度、仏ノ

元来主論スル処ハ、衆庶済度ヲ目的トシ、仮令ヒ己ノ骨肉ヲ裂キ、筋骸ヲ粉砕シテモ、済度ノ本意ニ候由、況ンヤ愚像ヲ消滅毀砕シテ、困難ノ衆庶ヲ救ハ、素ヨリ本旨ニ適ヒ候事ナルヘシ、僧侶或信奉ノ輩モ其本意元論ヲ違却セス、迷溺ノ惑ナク、敬承遵奉シ迷惑ノ溺心ヲ醒覚致候様、或前論ノ如ク欧羅巴ノ教宗、印度ノ教法同一ノ胡神胡教ニシテ、守信益ナク、又奇異怪説取ルニ足ラス、殊ニ高殿美閣ノ壮厳ハ素ヨリ釈氏ノ本意本論ニアラサル訳、或ハ僧侶ノ輩錦衣玉食座臥、安逸ナルヘカラサルノ誡目ヲ説解シ、即今洋教ノ浸染ヲ禁絶セサレハ、至重至大ノ国害アル訳ナレハ、同一邪教ニシテ侵入セシ以来、一千有余年其蠹害少カラサル趣ヲ示諭シ、復古ノ大典ヲ説得シ、断然廃棄滅絶ノ布令ヲ下サレ、而シテ僧侶ノ所置ハ宜シク施サレ、銅器等ハ細小ノ品迄モ悉ク鋳銭御救恤ニノミ、全ク御充相成候ハヽ、幾多ノ困民目前ノ苦ミヲ御救ヒ、如何許リノ御仁意ナルヘキ哉、然ルトキハ仏ノ本旨ニモ適フヘク、斯ク物価騰貴、人民命脈ヲ保兼候折柄、邪教延蔓後害慮ルヘキノ時ニ中テ、御勇断アルヘキノ事ト存候、

第十四

当今大政一新万機革命ノ時ニ候得ハ、大小ノ事件細詳密議セラレ、疎漏疎謾之事アリテハ、即今ノ御失欠ハ勿論、万世ノ後ニ模範規矩トスル訳ニテ、不相済次第ニ候、加之朝令暮変ト云様ノ事ハ万民疑懼ノ基、或ハ弘ク宇内ニ関渉致候故ニ、議密ナラサレハ禍害ノ基ニ候、因テ遺漏ノ儀ハアルマシク候ヘトモ、愚考スルニ太政官ニ議員十四五名ヲ被置、事ノ大小トク罹議シ、其宜キヲ取テ尚ホ参議以上ノ御論ニ渉リ、而シテ、

宸裁ヲ仰カレ候様ノ法相立度、其議員ノ撰法ハ、先ツ此涯大藩士族中ヨリ撰挙任用アリテモ、然ルヘキ事ト存候、

第十五

政令簡易人情之所安、或去煩蠲苛以綏百姓ト云ヘルハ、実ニ民政ノ要語ニシテ、当路之人違忘セラルヘカラサル事ト存候、然ルニ御維新涯ハ其目途ノ様相見得、則三章ノ御制札ヲ初メ其他簡易ヲ旨トセラレシニ、即今ニ至リテハ其繁冗煩雑ニ相成リ、加之朝令暮廃トモ云フヘキ事件多ク、制令法度煩雑ニシテ、民其拠ヲ知ラサルトモ云フヘキナリ、剰布告文等前後見モセサル文字、聞キ習ハサル漢語抔用ラレ、浅愚ノ輩之ヲ解読スル能ハサル多クシテ、愚民ヲ喩告スルニハ、恐レナカラ其宜シカラサル

事ト存候、夫故新令字解抔云ヘル者ヲモ拵候ニモ至リ候、願クハ浅愚ノ民モナルヘク了解シ易ク認メラレ度、夫ニ付テハ種々要路ヲ誹譏スルノ流談モ少カラス候、

第十六

諸省各局上下ノ官員冗官甚多ルヘシ、官員数多ナルハ、庶事議論纏ラス、紛擾異議ノ媒ナルヘシ、加之給俸ニモ関渉シ、無益ノ事ナルヘシ、減員アリ度、又省局モ冗官ト名ツクヘキアリ、之モ減廃セラルヘシ、則宣教使ト云ヘル官抔ハ甚無用ナラン、藩県アル上ハ、宣教スヘキ事ハ管轄ノ官員ヨリ司リテ、何ノ足ラサルコトアルヘキ、其他各省庶局総テ減員アリテ然ルヘキ事ト存候、

右ニ論スル如ク、冗官・冗員ヲ除クニ就テハ、第一此度新ニ建ラレタル工部省ハ全ク土木司ノ相当ニテ、其管轄ニテ何ノ足ラサル事アルヘキ、別ニ一省ヲ設ケラル、ハ、如何ナル訳ナリヤ、

以下ノ条件ハ即今至急手ヲ下サレ、或ハ前件ニ就テノ要目、亦ハ方今街頭ノ諸説大略ヲ挙ル事左ノ如シ、

一東京府ノ仕向御改革至急御手ヲ下サルヘシ、

闕下ノ要局改正アラハ、其他府藩県ハ之ニ則ツテ自ラ正路ニ赴クヘキ事、

一北海道諸国開拓育民ノ法改革、並ニ諸産物開発、諸鉱山等モ速ニ開カレ度、今形ニテハ年ナラスシテ、外国ノ為ニ困難必定可有之事、

一奥州青森辺ヘ鎮守府ヲ置レ、奥羽岩陸其他北海道ノ諸国鎮撫育教ノ事ヲ司ラシムヘキ事、

一東京其他弁利ノ要所ヘ、大小礮器並弾丸硝薬製造速ニ被開度、並人造硝石ノ事、

一函館脱走榎本釜次郎其他ノ輩、速ニ寛典ニ処セラル、事、

一産業教授ノ局ヲ東京浪花ノ両所ヘ建テラレ、逸遊徒食ノ民ヲ減スル事、

一寺院ヲ敗除シ、梵鐘其外銅器ヲ以テ当百銭ヲ鋳造、貧困ノ民ヲ救助シ、其他懇望ノ輩ハ之ヲ与テ北海道諸国ヘ移住セシムル事、

一寺院ノ廃跡ハ田畠トナシ、人居ノ地ニハ容易ニ充サレサル事、

一同シク殿堂ノ毀材・樹木・器財・田園・瓦石等一切払下ニシテ、惣テ救育ニ充ラレ、外用ニハ堅ク用ヒラレサル事、

一僧侶トナル者ヲ制セラルヘシ、厳シク府藩県ニ於テ取締ルノ事、

一東京ヘ大社御建立、万民他意ナク尊崇敬信シ、百事仏意ニ陥流セサルノ勧導アリ度事、

一百事寛急軽重ヲ弁シ、質朴倹素ヲ専ニシ、花侈驕惰ノ風ヲ除キ逸遊ノ民ヲ減シ、租税ヲ薄シ、民ノ殷富ヲ歓バセラル、ノ御目的確乎相建度、

附農税ハ薄シ、商税ハ分ニ随ヒ厚スル事、

一風俗ヲ正シ、純朴倹素ニシテ、花士族ハ中ニモ無用ノ虚飾ヲ省キ候事ヲ要シ、右ハ上ニ立チタル人ヨリシテ、風靡ノ道相建度・勿論花族ノ面々至重尊大ノ宿弊一洗セラル、事、

誤聞謬説ニモ候半、左ノ件々ハ即今街路ノ流談ニテ、有志之者ハ驚愕縮眉シ、浅愚軽薄愛君ノ情ナキ輩ハ笑談誹議シ、或ハ官々私意アルニ擬話スル等ノ事件恐怖ノ至ナレトモ、憂国ノ微衷ヨリ忌諱ヲ憚ラス左ニ記ス、

一即今ノ廟議ニ、小石川門ヨリ半蔵門迄ヲ、東南諸所関門ノ如ク、堀ヲ通シ橋ヲ架シ、要害ヲ設ケラル、ト、其入費凡四五十万円ニ下ラスト、当今斯ク人心恟々怨怒愁苦ノ声街路ニ充ル時ニテ、稍人気離反ニ赴タリトハ云ヘト、未

至尊ノ龍体ヲ覬覦スル逆悖之者ハ、素ヨリナキハ明ナリ、然ルニ要害ヲ設ケラル、ノ論ハ、実ニ恐多クモ児戯ニ等シキトモ云フヘク、婦女子モ笑フヘキノ迂論トモ云フベシ、

一先日廣澤参議暗殺ニ遭ヒシ後、参議以上ノ高官方、日々参内ノ進退毎ニ歩兵ヲ附従セシメ、護衛セントノ議ヲ起セシトカ、又ハ護衛ヲ初メシトカ、之レ全ク諛媚ノ輩阿佞ノ為ニ起議セシト両説紛紜タリ、

一諸藩石高二十分一納之云々、右ハ海陸軍費ノ名ヲ以テ取立、其半ヲ現用途ニ充、其余ハ蒸気車道製造ノ入用、或ハ紙幣曳替ノ用ニ宛ラル、トカノ内議ヨリ、急務至重ノ海陸軍ノ名ヲ借リテ収斂セラル、、之レ御詐術ノ第一、万不服ノ素ナリト流説喧囂ス、

一蒸気車道ノ製造ハ、第一世態寛急ノ別ナク、幾多ノ困民飢餓目前許多ナルヲ見ナカラ、実ニ寛急先後転倒トハ此事ナラント漫リニ誹議ス、

一横濱市街之道路鉛直ニ立直シノ調アリト、之レ即今ノ時世何等ノ事ソヤ、外国人ヨリ申立タル訳ナラハ、外

国館ヨリ調ヘヲ為スヘキニ、左ハナク全ク我国人ノ市街ノミ立直スノ調アルハ、如何ナル訳ナリヤ、又何ノ益アリテ初シニヤ、寛急軽重ノ弁ナキ第一ナリト、人々嘆息誹謗ス、

一通商司ト云ツテ一局ヲ設ケラレ、商売ノ害ノミアリテ益アルコトナシト、関係ノ官吏或附属ノ奸商賈ハ、公威ヲ借リ稍横恣ノ所業モアリテ、小商ヲ苦メ一家一己ヲ肥利シ、其悪弊枚挙ニ遑アラス、加之関係ノ官吏多クハ奸商ヨリ出頭シ、帯刀横行威権ヲ振ヒ抔悪ムヘキ所行多シト、速ニ毀廃セラレ度一局ナリ、

一浪花貨幣製造局ハ、其壮大麗美五大州中ニ幾個トカアリト誇ルヘキ盛大ナリト、之レ即今我国ノ況勢ニテ、何等ノ訳ソヤ、兵革ノ費労モ未タ治セス、官庫空窓国民疲弊救助モ行キ届レサルニ、斯ク美麗ノ結構実ニ転ノ所置、如此美麗盛大ナラサレハ、製造調ワサルニ非ラサルヘシ、巷説ニ、関係ノ官々私意ヨリ出タリト其説紛紜ナリ、

一蒸気車道造建ノ入費、外国ヨリ御借用、曳当ニハ横濱ノ商税或鉄道ノ上リ高十二ケ年、或ハ五港ノ人民ヲ出シ置レタリト、虚実ハ不〔ママ〕得トモ、貴賤嘆談顰眉スルノ一ニシテ、政府ヲ怨悪スルノ第一ナリ、

一北越並ニ奥羽両陸又ハ静岡藩士等ハ、甚困苦切迫塗炭ノ苦ヲ受ケタリト、早ク救育ノ御手当有之度事、

一東京市中家税取立ノ儀、甚タ困却シ苦情紛紜譬ルニ詞ナキ次第ニ候、火防ノ用途ト相聞ヘタレト、虚実ハ知ラサレトモ、民ノ苦情ヲ以テ考フルニ、良政トハ云ヒ難シ、仮令火防ノ入費ニ当ラハ災害ヲ救フノ訳ナレトモ、今時一統疲弊煩雑ノ間ニ於テ施行セラルヽハ、寛急ノ弁ナキト云フヘシ、明智光秀地子銭ヲ許シタルサヘ、今ニ至テ美ト称ス、悖逆無道ノ者サヘ此一事ハ美称ス、時勢情能々御洞察アラマホシキ事ト存候、

但即今街頭ノ説ニ、糞所小便所迄モ税ヲ掛ケラル故、不日路傍ノ便壷街路橋階迄モ税納シテ、通歩スル調モアリ抔ト紛紜唱候、誠ニ聞ニ耐ヘサル悪言モ其中ニアリ、歎息ノ極ト云フベシ、

此他細小ノ悪説数フルニ遑アラス、夫ヨリシテ人心益紛擾シ、政蹟ヲ誹譏スルニ小音ナク、大声ヲ発シテ道路ニ罵ルトモ云フヘキノ況勢ナリ、願クハ当路ノ人々沈思深考街頭ニ耳目ヲ注ケラレ度事ナリ、

右之諸件愚蒙之拙慮忌諱ヲ憚ラサルノ過言暴論ニテ、大政ヲ誹議スルニ似タリト雖モ、土芥ニ同シキ身モ、聊憂国之寸情ヨリ潛踰之罪ヲ辞セス、井蛙ノ管見ヲ吐露シ、或ハ耳目ニ触レタル趣ヲ取捨セス記載ス、願クハ当路ノ閣下参考之一端トモナラハ、何之幸慶之ニ如クハナシ、再拝頓首、

明治四年辛未正月日　　市來四郎廣貫

此一冊辛未正月三日ヨリ起稿同十三日終ル、

〔表紙〕

忠義公史料　明治四年九月

一八三　軍務局海軍水火夫募集ヲ達ス

明治四年九月朔日、軍務局海軍水火夫募集ヲ達セリ、

一今般海軍水火卒三百人、年輩拾八歳ヨリ弐拾五歳位ノ間検査ノ上、身分ニ不拘体壮健之者、懇望ニ依テ御撰用可相成候付、願意之面々ハ当人当局ヘ罷出、以書付届可申出候、此段申達候、

九月朔日　　軍務局

一八四　県庁大山綱良参事任命ヲ達ス

明治四年九月二日、県庁大山格之助参事任命ヲ達セリ、

一　大山格之助〔綱良〕

任鹿兒島県権大参事、

右

宣下候事、

八月　　太政官

右之通

宣下有之、今日奉命候条、向々江申渡、

御裏其外様江申上、佐土原并中山王江相達候様、裏役頭・佐土原仮屋守・琉球館聞役江も可申渡候、

辛未九月二日　　鹿兒嶋県庁

一八五　県庁解隊及兵役免除ノ者、旧労ニ仍リ俸禄ヲ給与スルコトヲ達ス

明治四年九月三日、県庁解隊及兵役免除ノ者、旧労ニ仍リ俸禄ヲ給与スルコトヲ達セリ、

一今般

御親兵編制ニ付、浮人数并手負・病身又ハ学業之願意有之、御断願出帰県被仰付候面々、戊辰来屢軍功も有

之、且遠路致出兵居候付、格別之御取訳を以、此涯従前之通俸禄被下置候条申渡、向々江も可申渡候、

辛未九月三日　　鹿児嶋県庁

一八六　東京警固卒至急上京スヘキニ付懇望者願出ツヘキコトヲ達ス

一東京
警固卒千人
　但弐拾歳より四拾歳迄
右至急上京被仰付、士族并諸局附属迄之内より人撰を以可被仰付候間、懇望之者は来ル十二日限願出候様、向々江可申渡事、
　但無筆之者は不被仰付候、

辛未九月　　伝事

右九月四日伝事ヨリ相達候、

一八七　県庁変革ノ趣旨ヲ示シ、県内諸兵大操練ヲ挙行スルコトヲ達ス

明治四年九月四日、県庁変革ノ趣旨ヲ示シ、県内諸兵大操練ヲ挙行スルコトヲ達セリ、

今般
皇国一途大御変革被仰渡候儀、第一有名無実之大弊を除キ、今一層武備充実いたし、且士民各其職業を勉励せしめ、随て万国対峙之　御趣意ニ候処、元来御県内之儀は、往古より実武之設、万古不抜之良法相重居、方今莫大之出兵　御沙汰ニも相成事候間、此節現兵員取調之為、御県内中常備・予備共、近々於吉野原大調練被仰付候間、手続等之次第且日限等之儀、万事軍務局ニて調、早々申出候様申渡、地頭其外可承向江も可申渡候、

辛未九月　　鹿児嶋県庁

一八八　県庁諸士無高少高ノ輩救助米給与ノ手続ヲ達ス

明治四年九月四日、県庁諸士無高少高ノ輩、救助米給与ノ手続ヲ達セリ、

一高弐拾五石以下少高・無高之鹿児島士族、壱家部江御

救助米三拾俵宛被下候事、
一家督之者軍治之諸官相勤、六石以下之俸禄被下候者は、其禄合本行之通被下、尤部屋住之者俸禄之儀は、別段ニて不及差引、
一昼飯米被下候者并旅行勤之者、年中之旅扶持米其数合て六石以上ニ及候者は、別段不被成下候、尤臨時之旅行等は非此定、
一近来致別立、父兄同居ニて本家高弐拾五石以上之者は、弐拾五石以下たり共、同居中は御扶持米不被下候、
一台場見締人并大砲掛之御救勤は此節引取、
一三口番・御文書蔵番人并諸所煙硝蔵・大門口遠見番人は、此節より都て究士部屋住之者江被仰付、限月并扶持米等は是迄之通、
一学校出席之上繰廻を以御救米被下候儀は、家督は勿論部屋住迄も此節都て引取、
一比志島転住士仕付飯料被下置候面々は此節引取、
一家部ニ付、六石ツ、被成下候上は、是迄四ケ月目御救米被下候家部も、一同十分之御宛行相成候付、以来は臨時之御救米等は一切不被成下候、
一廃官之面々六石以下之御養料被下置候者は、右は不被成下候、以来御救助米六石被成下候、
一六石以下之御切米等被下置候者は、右石数合て六石被成下候、
一当時弐拾五石以上之者、以後高相下候共右同様取扱ニは不被仰付候、
一諸郷中宿之者は、土着同様之訳故、中宿之内は御救助米不被成下候、
一此節諸郷掛持之自作地其郷江売払、且差上候者は追て返高被成下候付、当分弐拾五石以下ニても右取扱ニは不被及候、
右は鹿児島士族之儀、多は俸禄を以経営弁来候処、少高・無高之者及数多、先年来為御救助別段高被差分置、夫々御救之道相立候得共、至当分弥難渋之士多、依之別段之御吟味を以右之通被仰付候条、弐拾五石以下之面々は別紙雛形之通明細書相認、来ル十日限徇達江相付可差出候、此旨向々江可申渡候、
但当分御救勤被仰付置候面々は、御救米被相渡迄之間当分通可相心得候、

辛未九月四日　　鹿児嶋県庁

【参照】

寺師宗道日記　四年九月

同四日　晴

〔上略カ〕今日諸士二十六石以下ヘ永代米六石ツヽ被下候旨命達アリ、

一八九　県庁作硝土採取ノ事ヲ達ス

明治四年九月八日、県庁作硝土採取ノ事ヲ達セリ、

一御当地人家床下土取得方、近日より上方限取付相成、作硝局人足差廻度旨、火薬局より申出候付、向々江被仰渡度、此段申出候、以上、

辛未九月八日　軍務局

右之通被仰付候条、向々江可申渡候、

辛未九月八日　鹿児嶋県庁

一九〇　島津久光分家賞典五万石分賜ノ命ヲ拝ス

明治四年九月十日、久光公分家賞典五万石ヲ分賜ノ命ヲ拝セラル、

（記）

九月十日御用之儀有之候間、即刻礼服着用参　朝可有之候也、

九月十日　式部寮

嶋津従四位殿

追テ所労候ハヽ、親族之内ニテ名代可被差出候也、

右之通御達ニ付、御請書左之通、

即刻礼服着用参

朝可仕旨、御達之趣承知仕候、以上、

九月十日　嶋津従四位

式部寮

御中

右ニ付、壱字過御供揃ニテ、

御直垂被為　召、御駕籠台ヨリ御本門御出、和田倉御門御通門、坂之下御門ヨリ御参　内、麝香之間ヘ御扣被遊候処、於大広間御別紙弐通　御頂戴、五辻式部助殿ヨリ御渡相成、無御滞二字過御退　朝、御出口之通被遊　御帰邸候事、

従三位嶋津久光

積年功労不少、格別之　思召ヲ以テ分家被　仰付、御

賞典十万石之内五万石為家禄分賜候事、

辛未九月十日　　太政官

御朱印

従四位嶋津忠義

同姓従三位儀、積年功労不少候ニ付、格別之思召ヲ以テ分家被仰付、御賞典十万石之内五万石為家禄分賜候条、此旨相達候事、

辛未九月十日　　太政官

御朱印

一九一　大山格之助贈三好慎蔵書

昨朝ハ御見廻被下、始テ得拝顔候得共、草卒ニテ遺憾不少候、扨近頃恐入候得共、此者宰府迄急要ニ付、差返申候間、何卒新御領内御遁シ方可然奉願候、左候テ重畳御面倒願上兼候得共、不日肥後此古閑富次ト申仁ヨリ尊兄迄相願、小生へ一封可差出候間、速ニ此方へ相届候様御取計被下度、此段モ分テ奉希候、拝顔草々可奉謝候、頓首、

九月十一日　　薩州　大山格之助

京町廣島屋
三好新蔵（時治）殿

一九二　県庁来十五日吉野原大操練ノ心得ヲ達ス

明治四年九月十二日、県庁来十五日吉野原大操練ノ心得ヲ達セリ、

一九二ノ一　来ル十五日於吉野原大調練被仰付候付、当朝早鐘之令を以、諸隊軍務局并練兵場江相揃繰出之筈候間、左之通、

一当日県庁初治事之諸局占切被仰付候、

一任職無職共兼て御定之場所江罷出ニ不及候、

一吉野江治事屯集場被定置候付、出張勝手被仰付候、

一火用心別て可入念候、

右之通向々江可申渡候、

辛未九月十二日　　鹿児島県庁

一九二ノ二 寺師宗道日記四年九月

同十四日　晴

石神彦兵衛入来候、出席ス、明日吉野原調練ニ付、同席中出張有之、今日より集成館火薬局占切ニて、局製作方製法掛都て人足四斤砲之前車預りニて、今朝より為引登候、吾等壱人跡ニ残り本局へ泊り候、八ツ時早鐘合図有之候、暁三番鳥ニ起キ飯食、人足壱人召列打立、吉野追籠(笠)原(旧牧場ノ駒寄セスル窪ノ処ナリ)ニ至ル時夜明ル、

一九三　島津久光・忠義叙位宣下ノ命ヲ拝ス

明治四年九月十三日、久光公・忠義公叙位宣下ノ命ヲ拝セラル、

一九三ノ一

従三位嶋津久光

先般従二位　宣下再三固辞、無余儀被

聞食候処、今般更ニ

思食ヲ以テ、従二位　宣下被　仰出候事、

辛未九月十三日　　太政官

一九三ノ二

従四位嶋津忠義

先般従三位　宣下再三固辞、無余儀被

聞食候処、今般更ニ

思食ヲ以テ、従三位宣下被　仰出候事、

辛未九月十三日　　太政官

一九三ノ三

御朱印

従三位源朝臣久光

叙従二位

太政大臣従一位藤原朝臣實美宣

大内史従五位源朝臣不二麿奉

明治四年辛未九月十三日

一九三ノ四

御朱印

従四位源朝臣忠義

叙従三位

太政大臣従一位藤原朝臣實美宣

大内史従五位源朝臣不二麿奉

明治四年辛未九月十三日

一九三ノ五(記)

九月十三日、御用之儀有之候間、即刻礼服着用参　朝可有之候也、

九月十三日　　式部寮

嶋津従四位殿

追テ所労ニ候ハヽ、親族之内ニテ名代可被差出候也、

右之通御達ニ付、御請書左之通、

即刻礼服着用参　朝可仕旨御達之趣承知仕候、以上、

辛未九月十三日　　嶋津従四位

式部寮

御中

右ニ付、十一字過御供揃ニテ　御直垂被為召、御駕籠台ヨリ御本門　御出、和田倉御門御通行、坂之下御門ヨリ御参　内、麝香之間ヘ御扣被遊候処、於大広間ニ御別紙四通　御頂戴、式部寮七等出仕四辻殿ヨリ御渡相成候付、御退　朝掛三條様ヘ為御礼御廻勤、無御滞夕七字比被遊　御帰邸候事、

一九四　県内常備後備兵吉野原ニ大操練ヲ挙行ス

明治四年九月十五日、県内常備後備兵吉野原ニ大操練ヲ挙行セリ、

（記）

明治二年藩政改革ニ伴ヒ兵制ノ改革ヲ行ヒ、藩内壮丁ヲ徴募シテ、常備・後備ノ二隊ヲ編成シタリ、尓来各地所在ニ於テ、操練実習ヲ挙行シタリシモ、未タ管内庁下附近十里以内各郷ノ兵員ヲ徴集シテ、吉野村ニ操（本年四月十五日）練ヲ挙行シタルコトアリシノミ、今般廃藩置県ニ及ヒ、七月二十八日陸軍条例ヲ定メラレ、漸次兵制改革ヲ行ハル、ニ由リ、茲ニ旧藩兵ヲ解隊スルヲ以テ、特ニ管内ノ兵員ヲ総集シテ、本日ノ操練ヲ了ヘタルナリ、

（按）管内ノ兵制藩力ヲ傾テ整頓ニ着手シタリ、然ルニ廃藩置県ニ仍リ解兵更ニ徴兵ノ制ヲ布カル、ニ当リテハ、先名残ノ召集ヲナシ、多少人気ヲ慰メ、尚後日ノ奨舞ヲナシタルモノナリト云フ、

【参照】

寺師宗道日記四年九月

同十五日　晴

陣屋（上略カ）ヘ皆々出張居候、早鐘合図ニて軍務局ヘ集り、五時比繰出相成候由、六ツ半時比吉野原ヘ繰込相成候、第一ニ御城下一大隊ニ番兵斥候隊、夫より地頭銘々管

内郷々常備一大隊ツヽ、人数之員ハ不同也、都合拾八大隊原之左向岡へ本営旗相立、此処ニ繰込也、夫より又諸郷予備隊拾大隊銘々地頭卒ひて、追籠右手之馬堀端江繰込、両所之屯集也、大砲隊は六座第一番ニ繰立、追籠原真向之岡ニ引上ケ、未た歩隊繰込半ニ調練打砲発ヲ始メタリ、続テ御城下兵隊調練ヲ始ム、夫より次第ニ五大隊ツヽなり、常備隊畢テ予備隊五隊ツヽ二度也、八ツ前相済、火薬局砲車は早々繰立相成候ニ付、未打方半ニ局々屯集布幄ヲ畳引取候、都合今日之兵員は碇と不相弁ナレトモ、大隊(マヽ)ニ及候、大概兵員も壱万より上なるべし、今日は時しも昔關ケ原戦之日ニテ、心之内昔之さまも想像して、心之内ニ、

大隅の牟礼の大野にいめたてゝ
　吾か皇軍のならしたゞすも
ますらほのいにしたけるも国つみ
　むかしなからのいさほならなむ
大のらにならすてふりをミてあれは
　むかしのきよふもおもほゆるかも

見物之男女夥敷道も去りあへす、此度藩ヲ廃して郡県と相成候付ては、兵式兵制改革之筈ニて、藩内惣兵ノ寄りニて、今日之大調練之上兵隊も解隊相成候由ニ付、国上之御功績実ニ厳然たるものにて、其兵勢之隆盛恐らく、吾か右ニ出る藩はなかりけんニ、かく廃藩県と為して、此兵制も実ニ是ヲ限りとおもへは、只覚へす涙も落ち、殊ニ時しもあれ祖公之關ケ原御難戦之日柄ニテ、さなからむかしの事も取あつめ、そゝろニ慷慨之心も一入也、中之別府之立宿へ到り、茶抔のミ緩々して帰りニ火薬局へ出、風呂ニ入飯為炊食、休八ツ前後也、夫より七ツ時分帰ル、惣兵隊も此時軍務局へ着放暇相成候時也、冷水熊次郎来ル、

一九五　県庁東京就学諸生三十名ヲ命ス

明治四年九月十七日、県庁東京就学諸生三十名ヲ命セリ、

(記)

本年五月、東京諸生一時帰県ヲ命シタリシカ、今般更ニ三十名ヲ撰抜シテ、東京就学ヲ命シテ其資用ヲ給シ、伍人組合ヲ結ハシメ、其組合ヲ脱スル者ハ之ヲ停メ、従前出京諸生ノ如ク乱雑不取締ノ事ナカシムルヲ期シタリ、

【参照】

寺師宗道日記四年九月

同十七日　雨晴

今日東京諸生被仰付候、右ニ付此節ハ伍法ヲ以テ五人組合ニて被差出候由なり、右ニ付組合之儀色々六ケ敷形行之書付いたし遣候、

一九六　島津忠義天長節ニ付参内天機ヲ伺フ

一九六ノ一　九月廿二日天長節付七時御供揃ニテ、御駕籠台ヨリ御本門　御出、坂之下御門ヨリ　御参　内、麝香之間へ御扣被遊候処、於小御所天顔御畢（脱字カ）テ於麝香之間御酒御肴御頂戴被遊候、左候テ御退　朝神祇省　神殿へ　御参詣、御出口之通、十字過被遊　御帰邸候事、

右ニ付賀表左之通、

謹奉賀

天長節

九月廿二日　　従三位源朝臣島津忠義

右御参　内之節宮内省へ御直御差出相成候事、

一九六ノ二　九月廿四日今日濱　離宮へ被為召候付、十一字比御供揃ニテ御駕籠台ヨリ御本門御出、神田橋下ヨリ御舟ニテ　離宮脇ヨリ御上陸ニテ参　宮被遊候処、於御前御酒肴御頂戴、　御出口之通七字比被遊　御帰邸候事、

一九七　県庁招魂祭相撲馬寄セ挙行ノ事ヲ達ス

明治四年九月二十五日、県庁招魂祭相撲馬寄セ挙行ノ事ヲ達セリ、

【参照】

寺師宗道日記四年九月

同廿一日　晴

今日招魂祭ニ付、弔の角力洲崎小銃射場ニおひて興行、今日より明廿三日迄有之、諸局拝見相成候由ニて、本局よりも桟敷打一同、又今日大休日ニて出張之掛合相達候、（下略カ）

同廿四日　晴

（上略）一昨日より洲崎射場ニて招魂祭之角力興行、今日迄

三日有之相済候由也、又明日旧南禅院下〔泉〕　照國社之前
ニて馬寄せ有之候由、布告相達候也、〔下略カ〕

一九八　県庁庁下士族所有地売却返高払下代減価
上納ノ期ヲ達ス

明治四年九月二十五日、県庁庁下士族所有地売却返高払下代減価上納ノ期ヲ達セリ、

鹿児嶋士族諸郷抱地自作地之儀、其郷々士族江売渡、
右返高壱石ニ付弐百貫文ツヽニて申請可被仰付旨、申
渡置候処、当時米価も下落、此節猶又吟味之訳有之、
壱石ニ付百五拾貫文直成ニて、返高申請被仰付候条、
代銭之儀、米穀掛出納奉行引付ヲ以テ、当十一月限金
蔵へ可致上納候、左候て当秋迄は夫々応石数所務米御
蔵米之内より追て被相渡候条、面々江申渡、向々江可
申渡候、
但高代銭金蔵上納之上は、右名目ヲ以テ別段可差分
置候、
九月　鹿児嶋県庁

【参照】

寺師宗道日記四年八月
同廿四日　曇
〔上略カ〕米価下落、三杯入(三斗六升入ナリ)一俵代四拾弐貫文ナリ、
〔九月〕同三十日　雨天
〔上略カ〕一麦三斗九升八合
但大麦也
代銭拾五貫九百拾九文
壱升ニ付四百文ツヽ、

一九九　県庁散髪・廃刀ヲ許スノ令ヲ達ス

明治四年九月二十五日、県庁散髪廃刀ヲ許スノ令ヲ達セリ、

一九九ノ一　御布告
散髪・制服・略服・脱刀共、自今可為勝手事、
但礼服之節ハ帯刀可致事、
辛未八月(九日)　太政官

右之通於東京被仰出候段申来候条、向々へ可申渡候、
辛未九月　鹿児島県庁

(記)

此ヨリ先世往々散髪・廃刀ノ風行ハレ、特ニ兵員ニ至テハ概ネ皆散髪ナラサルハナシ、是ニ至リテ本令ヲ布カル、朝官ノ如キ往々之ニ倣ヘリ、然ルニ鹿児島（県庁ノ達九月二十五日参看）ニ於テハ、内務局内ノ役職ハ尚従前ノ式法ニ準拠スベキヲ達セラレタリ、即同月十一日ノ達文ヲ載ス、

（按）久光公時勢ノ推移ヲ察セラレ、人心ノ矯激ニ馳スルヲ憂ラル、所アリ、特ニ廃藩置県ノ大命ノ如キ、西郷・大久保等ノ所言ニ違フ所アリ、意甚タ平ナラス、是ニ於テ散髪廃刀随意ノ令布カル、公又国家ノ法令宜シク適従ノ典則ナカルベカラス、然ルニ適従勝手次第ノ制法世ニ出ツルノ理ナシ、何ソ軽浮世ニ阿リ俗ニ諂フコトヲセンヤトテ、即チ侍従ノ役職ニ向テハ厳ニ之ヲ訓戒セラレタルナリト云フ、

本令ヲ発セラレタル以降、一般ノ風ハ蕩々勢ヲ添ヘ、上下老幼交互誘ヒ強テ之ヲ促カスノ風ヲナセリ、又役衙ノ如キモ二三ノ主唱者アリ、煽動強請数十人一席ニ髪ヲ断チ、之ヲ肯ンセサル者ハ頑迷固陋ノ徒ト蔑如シ、彼此頗ル是非ノ論評喧カリシナリ、

一九九ノ二
八月十一日

伊藤彦介

御前被為　召、

今般散髪・制服・脱刀共可為勝手旨、御布告有之候得共、内務局ノ面々ハ容貌衣服等先是迄ノ通、右心得居候様銘々へ可申渡旨、

御沙汰奉承知候事、

右局々へ申渡候事、

二〇〇　県庁着服ノ令ヲ示シ其心得ヲ達ス

明治四年九月二十五日、県庁着服ノ令ヲ示シ其心得ヲ達セリ、

着服之儀別紙之通（太政官布告ヲ云フ）被仰出候処、当県之儀是迄略服被仰付置候事ニテ、別段相替儀無之候得共、已来ハ治事局出仕ノ面々ヲ始、筒袖・袴・バツチ（穿袴ヲ云フ）着用可為勝手候、此旨向々江可申渡候、

九月　　鹿児島県庁

二〇一　県庁島津忠義ノ叙位ヲ達ス

明治四年九月二十八日、県庁忠義公ノ叙位ヲ達セリ、
二〇一ノ一　従四位島津忠義

先般従三位
宣下、再三固辞無余儀被
聞食候処、今般更ニ
思食ヲ以従三位　宣下被仰出候事、
辛未九月十三日　太政官
従四位様御事、
御別紙之通於東京被為蒙仰候段御到来候、依之島津珍
彦殿一列且御当地士族之面々并附士、明後晦日家令へ
相付御祝儀可申上候、
右外略ス、
右之通面々へ可致通達事、
辛未九月廿八日　鹿児島県庁

二〇一ノ二　道嶋日記

一従四位様　従三位ニ御昇進、九月晦日御祝儀為有之由、
一二丸公従二位中納言ニ御昇進、イマタ御受不被為在御
発シ無之、参政抔ヨリ当分不穏時節ニ付、早々御受被
為在御発シ相成、一統承知イタシ、平和可相成段申上
候処、我等病身何ノ功労モ無之候付、ケ様之官位被叙
候儀モ無之、諸侯一統当分格別之事候付、何分御受難
致儀ト被仰候由、西郷抔昇進自侭之事ニ付、余程嫌立
被居候ヨシ、

二〇二　東京ノ諸県支庁ヲ廃シ県吏ヲ築地ニ寄寓セシム

明治四年九月二十九日、東京ノ諸県(旧藩)支庁ヲ廃シ、県吏ヲシテ、築地(新富町)ニ寄寓セシメラル、
(第四百九十五)九月二十八日(布)
諸県庁上邸被　仰付候事、
但出張官員旅宿ノ儀ハ、築地新富町ヘ被設置候条、
巨細ノ儀ハ東京府ヘ可承合事、〔法令全書にて補正〕

二〇三　文部省旧藩遊学生徒ノ現員ヲ録上セシメ其資費ヲ給ス

明治四年九月晦日、文部省令シテ旧藩遊学生徒ノ現員ヲ録上セシメ、其資費ヲ給セリ〔本文記載なし〕

二〇四　道島日記

八月廿九日

一当分米下落イタシ候得共、諸色不相下候付、諸色方吟味故カ、少ク高直ニ売出候者ハ、直ニ召捕極ノ内ヘ打込候ヨシ、納屋ハ七八人被召捕候由、大磯小左衛門トイフモノハ、焼酎ノ桝壱盃七合五夕ニテ十四五年売出、此節露顕イタシ、被召捕厳敷折檻ニ逢ヒ候ヨシ、又三穂崎ノクラ作モ近比所帯方モ宜、是モ千切ノ目踏候ヨシニテ、一昨日被捕候ヨシ、

但会所ヨリ手ヲ替品ヲ替諸品ヲ取入高直ニ売者ハ、直ニ召捕候ヨシ、夫ヨリ店先ニテモ主キ口々イタシ売買方イタシ候由、馬ニテ売出候薪抔モ手相付候ヨシニテ、持出者モ多クハ有之マシクトノ評判也、此所置ヨキ事カ悪シキ事カ、ヨキ御所置ナランカ一向不相分候事、

但被召捕候町人共上ノ会所ヨリ下ノ会所ヘ遣シ、又下ノ会所ヨリ上ノ会所ヘ遣候カ、殊之外難儀之由、殊ニ子供跡ヨリ四五拾人モ付候テ、込入候由、左モ可有之候、

二〇五　舊邦秘録

二〇五ノ一

新聞雑誌ノ内ニ静妙子ト云フ者カ建白アリ、其略文ニ曰、四藩ノ版籍ヲ奉還セシハ、深ク天下ノ大勢ニ観ルコト有ルカ如シ、吾其天下ニ率先シテ数百年ノ弊習ヲ洗ヒ、大ニ　朝廷ヲ輔翼シ以テ国威ヲ更張センコトヲ望ム、而二三年ノ間未タ之ニ継クノ偉挙アルヲ見ス、去年山縣・南部二藩断然知事ヲ辞シ、其藩ヲ廃セント請ヒ、和歌山ハ大ニ其国ヲ変シ、知事其城ヲ出テ私第ニ退キ、祖先ノ廟ヲ毀テ木主ヲ宗廟ニ移シ、士農工賈ヲ編伍シテ其力役ヲ同フシ、人才ヲ商賈医トニ抜テ之ヲ廟堂ノ上ニ列ス、苗木ハ其士族悉ク世禄ヲ辞シテ農籍ニ帰シ、長岡亦其藩ヲ廃シ、鞠山・小濱ハ其藩ヲ并ス、此数藩ノ如キ其為ス所深浅ノ別アリト雖トモ、要スルニ皆能時勢ヲ量リ公私ヲ弁シ、　朝廷ノ必立サルコトヲ得ス、政府ノ必ス援ケサルコトヲ得サル所以ニ注目スルモノニシテ、其公道ヲ振挙スル、実ニ天下ノ聳動スルニ足レリト云々、又

朝廷ノ意、其郡県ニ在ルカヲ問ハス、只封建ノ害タル所ト郡県ノ利タル所トヲ熟知シ、天下ノ力ヲ一ニシ、

天下ノ財ヲ一ニシ、其自家ノ私ヲ去リ其偏固ノ心ヲ破リ、日本政府ノ能樹立シテ、以テ自主自治ノ成ヲ全フスルヲ謀リ、天下ノ人々ニ、其力ニ食シ遊食ノ徒ナク、無用ノ事ナク、兵精ク財足リ、物産日ニ多ク、機工日ニ新ニ学術日ニ進ミ、知識日ニ開ケ以テ　皇化ヲ助ケテ之ヲ万世ニ流シ、之ヲ海外ニ輝サンコト是固ヨリ

朝廷ノ至意ナリト云リ、　静妙子云、版籍ヲ奉還シ、或ハ山縣・南部断然知事ヲ辞シ、和歌山ハ大ニ其国ヲ変シ、知事城ヲ出私第ニ退キ、祖先ノ廟ヲ毀チ木主ヲ我宗廟ニ移シ、士農工賈ヲ編伍シテ其力ヲ同フシ、人才ヲ商賈医トニ抜テ、是ヲ廟堂ノ上ニ列シ、苗木ハ其士族悉ク世禄ヲ辞シ農籍ニ帰シ、長岡其藩ヲ廃シ鞠山・小濱ハ其藩ヲ并ス、皆能時勢ヲ量リ公私ヲ弁シ、　朝廷ノ必立サル事ヲ憂フ、今是　朝廷王政復古ニ相成タル故、封建ヲ解テ郡県トシ、其偉功ヲ創立セン事是　朝廷天下ノ力ヲ一ニシ、天下ノ財ヲ一ニシ、自家ノ偏固ヲ破リ、日本政府ノ能樹立シテ自主自治ノ威ヲ全フスルヲ謀リ、天下ノ人々ニ其力ニ食シ遊食ノ徒ナク、無用ノ事ナク兵精ク財足リ、物産日々ニ多ク、機工日ニ新ニ学術日ニ進ミ、知識日ニ開ケ以テ　皇化ヲ助ケ、之ヲ万世ニ流シ之ヲ海外ニ輝サンコト、是固リ　朝廷ノ主意ナリト云ヘリ、

予云、静妙子ハイカ成者ソ、定メテ君モナク父モナク、市井ニ雑居シテ雑学ヲ好ミ、人倫ノ大体ヲ紊ル、実ニ人倫ノ逆賊タルヘシ、夫人倫ノ大道明ニナリト雖トモ、一二是ヲ弁セン、人倫ノ道他ナシ、忠孝ノ二ツニ出ヘカラス、臣トナリテハ忠ヲ尽シ、子トナリテハ孝ヲ尽ス、是天地自然ノ理ニシテ、忠孝ノ道ヲ失フ者之ヲ禽獣トシ、天地ノ際ニ容レラレサルナリ、人各天地ノ際ニ生ヲ稟ケレハ、何ノ為ソヤ父母妻子ヲ養フテ宗祖ノ基業ヲ全フスル、之ヲ孝ノ道ト云フ、然レハ無故土地社稷ヲ捨テ版籍ヲ献スル、是忠孝ノ道ト云フヘケンヤ、苟モ人ノ臣下ト生レ出タルモ不背ナリ、是又上下貴賤ノ分定リシ故ナレハ、今更上ヲ羨ミ下ヲ怨ン、然レハ祖先ノ基業ヲ受継テ己カ職掌ヲ不失、身ヲ立家ヲ興ス、之則人倫ノ道ニ非スヤ、今

朝廷是ヲ一ニシ之ヲ万世ニ流シ、之ヲ海外ニ輝サントシテ、諸侯牧伯祖先軍労忠義ノ偉功ヲ以テ賞賜シ玉ヒシ土地版籍ヲ無故廃シ玉フコト、所謂秦ノ始皇カ六国ヲ攻滅シテ郡県トセシニ髣髴タリ、其時淳于越ト云者

始皇ヲ諫メテ曰、臣聞ク、殷周ノ王タル事千余歳、子弟功臣ヲ封シテ自ラ支輔トス、今陛下海内ヲ有ツテ子弟匹夫タリ、卒カニ田常六郷ノ患ヘ有ツテ、臣補弼ナクンハ何ヲ以テカ相救ンヤ、事古ヘヲ師トセス、而シテ能ク長久ナル者ハ聞ク所ニ非スト諫メケレトモ、始皇之ヲ不用、果テ二世ニシテ亡ヒタリ、然レハ今有名無実ノ説ヲ立、封建ノ害アリテ郡県ノ利アルト非ヲ理ニ言ヒナス、今封建ヲ解テ何ノ利カアラン、諸侯牧伯ヲ廃シ辱メ、宗廟ヲ毀チ士族ヲ解テ農兵トシ、人才器量ヲ農工商医トヨリ抜擢シテ、之ヲ廟堂ニ挙用ル共、士族喜ンテ、農ニ帰シ、野人トナルヘケンヤ、怨情ヲ懐クコト不論シテ明カナリ、押テ農ニ帰セシムルトキハ、終ニ人心一変シテ礼義廉恥ノ風モ廃シ、義理ヲ失ヒ、頭ヲハラレ腰子ヲ打レテモ恥ルコトナカルマシ、而シテ此内ヨリ人才ヲ引揚ケ勉励シ玉フトモ、迂遠ニシテ臨機ノ用ニ立ツヘカラス、又兵威ノ振フ所アラサルヘシ、故ニ士族ヲ農ニ帰シ玉フコト大ナル失策ナラン、畢竟此事ハ奸吏ノ輩徳川ノ権ヲ解キ、王政ニ復シタレトモ、徳川ノ八百万石ニテハ、官吏ノ月給不足、飽事ヲ不知ル醜夷ニ等シキ静妙子カ輩ハ勿論、今朝家ニ奔走セシ者共、己レ土地ヲ得ンコトヲ欲スト云トモ、今六拾余州寸分ノ地ナキ故、封建ヲ廃シ郡県トナシ、虎ノ威ヲカリ、人ノ国ニ踏入テ国家ノ政事ヲ恣ニセントノ奸謀ナラン、ケ様ニ日本国体ヲクヤシ人心ヲ紊シ、紛紜ノ時ニ乗シ、西洋各国東ヲ襲ヒ、西ヲ討或ハ南ヲ責メ、北ヲ侵サハイカヽシテ防キ玉ハン、其時朝廷節刀使ヲ差下玉ハヽ、万邦共ニ主宰ノ者任重カラサル時ハ人心一致セス、人心一致セサル時ハ防禦ノ術ナカラン、故ニ日本ヲ大事ニ思フ時ハ益々封建ヲ厳ニシ、士農工商其職掌ヲ守ラシメ、質素節倹ヲ行ヒ玉ハヽ、四民其職ヲ安ンシ、

朝廷ノ恩徳ヲ感シ、忽チ富国強兵ナル事疑ヒナシ、其上諸侯牧伯軍務ニ怠リアル時ハ、其国主力ヲ不用カ故ナレハ、其怠リヲ責メ玉ハヽ、万邦一時ニ興起スヘシ、

未九月始メ　　草稿

二〇五ノ一

又雑誌ノ内ニ、山口藩士士卒合併スルコトノ告諭書略ニ云、国家富強ノ術他ナシ、天下曠土浮民ナク、各天分ノ才力ヲ伸長シ、其力ニ食スルニアリ、抑日本全国ノ歳入実数凡千三百万石ニシテ、府県ノ所管二百万石

ニ過キス、其千余万石ハ各藩ノ管タリ、而テ各藩百分有余ノ士其七百万石ヲ世襲シ、座食スル者半ニ過ク、癸丑外国ノ事起リシヨリ殆ト二十年、天下未タ兵制ノ実備ヲ見ス、因テ　朝廷別ニ四民ニ募リ節制ノ兵ヲ編セントス、然ルニ之ヲ養フノ資ケ何レニ求メンヤ、朝廷天下ノ富ミヲ興シ、天下ノ用ヲ養ント欲ス、而テ諸藩皆世禄ナリ、　朝廷天下ノ兵ヲ強フセント欲、而シテ諸藩ノ士名ハ全州保護ノ常備兵ニシテ其実ナシ、故ニ士ノ外ニ兵ヲ募レハ其用費ハ又民税ニ関リ、民ハ益々労シ、士ハ益々逸ス、何レノ時ソ四民労逸ヲ均シクシ、各其所ヲ安スルニ至ランヤ、内国力ヲ扶ケ定メ外万国ニ対峙スルハ、彼ノ無用廃シテ此有用ノ充ツルノ外ナカルヘシ、今般士卒合併兵制一般ノ法ヲ設クルハ、其力役ヲ尽サシムルニアリ、人々天下ノ大勢ヲ推シ、今日ノ食禄ハ則世襲不易ノモノニ非ラサル所以ヲ領地ニ預メ前途ノ目的ヲ定メ、自己ノ才力ヲ磨キ励ムヘキ云々、云ク山口藩士士卒合一合併ノ事ヲ論ス、予其可否ヲ不知、故ニ今合併スルト合併セサルトヲ試ニ論セン、理何レニ帰セン、士農工商ハ国ノ基、此四民ヲ以テ綴リ立スンハ天下ノ大道行ハルヘカラス、本立テ道生スト、兎角今　朝廷ノ御政道第一此四民ヲ安カラシメ玉ハンカ為ナリ、天地陰陽上下貴賤ノ対立アルトキハ、人倫ニ於テモ、此士農工商ノ四民ナクンハアラス、是天地自然ノ理実ニ ユヘカラス、国家富強ノ術他ナシ、国主心ヲ用ルト用ヒサルトニアリ、天下曠土浮民ノ多キ是以国主ノ心ヲ用ヒサルカ故ナリ、国富トキハ争テカ浮民アラン、国主心ヲ用ヒサル時ハ国家疲弊シ、其力稼穡スルコト不能、自然ト浮民多ク土地空クナルナリ、国主仁政ヲ行フ時ハ、斧鍬ヲ荷フテ我カ国ニ稼穡スヘシ、其時浮民曠土争テカアラン、辱モ士ト云フ一字ニヨリ、心ヲ不動忠臣義士礼義廉恥ノ道モ相立、弾丸ニ向ヒ剣鎗ノ中ニ駈込、死ヲ不懼ハ是士ノ一字ニ非スヤ、山口藩士カ此説反テ国主ヲ辱メ己カ拙キヲ示スニ非スヤ、去ル亥年無名ノ干戈ヲ動シ、帝都ヲ閙カシ、其上夷舟ヲ討国家ニ死スル事モ不能、剰ヘ償ヒ金ヲ出シ、台場ヲ築ク事モ不相成、笑ヒヲ外国迄モ受ケ、殊ニ朝敵ノ名ヲ蒙リ諸侯ニ詔ヒ、解兵ヲ乞ヒ恩ヲ以テ仇トシ、禽獣ニ等シキ所業可悪ノ甚シキニ非スヤ、戊辰ノ度伏攝奥羽等ノ一戦ニ少ク功アリ、今朝家ニ立テ勢ヒヲ得ルト云トモケ様ノ失アリ、是農市

ノ兵ヲ用ヒ義気ノ心ナキニヨリ、国家ヲ辱メ、余多ノ人非命ノ死ヲナシタリシ実効ニ非スヤ、然レハ山口藩士カ説ヲ以テ士族ヲ解テ農民ニナシ、兵威ノ振フト振ハサルトハ何レニ帰セン、方今文明開化自負スル時ニサヘ、礼義廉恥ノ道ヲ失ヒ、君恩ヲ報スルノ薄キヲ視ルヘシ、今士族民家ニ陥ラハ五年ナラスシテ義理ヲ失ヒ、幼年ノ子供民家ノ生立ニナラハ悪シキ道ニ傾クハ是人情ノ常ナリ、其証拠ニハ貧窮ニ迫リ塗炭ニ陥リ、今日ノ礼譲モナク、終ニ人家ニ立寄物貰ヒ体ニナリ、果テハ盗ヲイタシ押込狼藉スルトモ恥トモヲモハス成立事、現ニ見及ヒ聞及ヒシコト度々アリ、夫ヲ表立テ士族ヲ引下ケ農民ト混合スル時ハ、忽チ士風ヲ失ヒ、民間ニ立入礼義廉恥モ一変シテ所以禽獣ト同シカルヘシ、最ト遺憾ノ事ニ非スヤ、又長士カ云、癸丑外国ノ事起リシヨリ殆ト廿年、天下未タ兵制ノ実備ヲ見ス、因テ　朝廷別ニ四民ニ募リ節制ノ兵ヲ編セントス、之ヲ養フノ資本ヲ得ントシ、天下ノ富ヲ興シ、天下ニ用ント欲シ、今藩ヲ廃シ県トシ、士族ヲ解テ農民トシ、是ヲ合一シ、天下曠土浮民ナカラントシテ、日本全州ノ貨物ヲ　朝廷ニ引揚、兵機(械カ)ヲ盛大ニシ玉フ事ヲ論ス、己カ国ノ乱レタルヲモ慮ラス、又人ノ臣下トシテ此論ヲ建ルコト、君ヲ刺殺スルヨリモ甚シキ不忠ノ賊臣タルヘシ、三略ニ曰、国大ナリト云トモ戦ヲ好メハ必ス其国亡フト、今

朝廷官吏ノ輩驕奢逸遊ニ耽リ、殊ニ兵士ノ戎服其外日用ノ事ニ至リ、皆以テ美ヲ尽セリ、往古頼義・義家前後十二ケ年奥羽ノ在陣、雨ニ髪洗ヒ、風ニ櫛ケツリ、甲冑ニ虱ヲ生スト云ヘリ、其質朴ナルヲ知ルヘシ、何レ此驕奢逸遊ノ弊ヲ一洗セスンハ、イカ程巨万ノ財ヲ貯ヘ玉フトモ、兵威ヲ盛大ニ成ス事ヲ得ヘケンヤ、是奸吏ノ輩陽ニ兵制ヲ備ントシテ、陰ニ貨財ヲ恣ニセンコト顕然タリ、官吏ノ輩カ驕奢ト言行トヲ以テ之ヲ知ルヘシ、然レハ今諸侯ヲ廃シ藩知事トナシ、又封建ヲ解テ郡県トナシ、士族ヲ賤ンシテ農民トセハ、日本ノ人心喜ンテ之ヲ奉還シ、此内ヨリ兵士ヲ募ルトモ兵威ノ振フコトヲ得ヘケンヤ、今洋夷交際ノ折柄故、

朝廷ノ憲法古ニ復シ、小人猥リニ昇殿スルヲ禁シ、真ノ王政ニ復シ、是非合一セントナラハ、士ハ一等引揚ケ農工商ニ帯刀ヲ免シ、節倹ヲ大ニ行ヒ、此内ヨリ兵士ヲ募リ武備ヲ厳ニセハ、農工商其帯刀スルヲ喜ンテ、

己レカ職掌ヲ可励、今風ヲ移シ俗ヲ易ユルハ、天理ニ背クヘシ、爰ヲ以テ兵威ノ振フト振ハサルトヲ見レハ、合併スルト合併セサルハ、論ヲ待タスシテ明カナルヘシ、

未九月中旬誌ス

二〇六　阿部政一謹白書

臣政一誠惶誠恐頓首々々謹テ白ス、富国強兵ハ治安ノ基トイヘトモ、専ラ兵ヲ強フセントスレハ、必ズ弊害ヲ生ス、夫国ヲ富スハ億兆ノ為ニシテ、一人ノ為ニ非ス、故民富ハ国安シ、必シモ兵ノ多キト精キトニ因ラス、民ヲ富サントセハ、租税ヲ薄フスヘシ、租税ヲ薄セントセハ冗費ヲ省クヘシ、然ル時ニ歳入ヲ以テ国用ヲ足サントス、其弊重斂セサルヲ得ス、当今天下尽ク県トナル、旧税ヲ一新スヘキ期也、従来天領ト唱フルノ地民皆其税ノ重キニ苦ム、藩税ニ於ルヤ猶軽カラス、此ヲ以テ準則トセハ民極メテ堪ヘカラス、宜シク実税ノ法ヲ創立シテ、民ヲシテ其業ヲ楽シマシムヘシ、或ハ云フ、税ヲ重クセスンハ、民ヲシテ遊惰ニ陥イラシムト、何其言ノ謬レルヤ、民余蓄アル者必ス其業ヲ務ム、終身労苦シテ贏ス所ナクハ、何ヲ楽ンテ隴畝ニ就ンヤ、然リト雖税ヲ減セントスレハ国用足ラス、此冗費ヲ省カスンハアル可ラス、之ヲ省カントセハ兵部ヲ廃シ神祇ヲ宮内ニ合併スルニ如ス、如何トナレハ、今府県ニ鎮台ヲ建テ、常備兵ヲ置レントス、是ニ於テ屯兵ニ非サル者一切銃器ヲ持スルヲ禁シ、武庫ニ収メシハ亦奸心ヲ消熄スルノ一術也、或ハ盗賊アルモ鎮定スル甚易シ、豈別ニ兵備ヲ設ケンヤ、仄ニ聞、九州ノ諸藩銃砲ヲ鬻キ懇田ノ費ニ充ルト、此銃器ヲ収ムヘキ機也、静岡ノ藩ニ就ク初ヨリ銃器ヲ収メ兵ヲ置ス、シカルニ七十万石ノ管内今ニ至ルマテ騒擾ナシ、乃チ知ル、国ヲ治ムルハ兵備ノミニ非ス、此其一証也、今日ノ勢内患ニ於テハ憂ルコトナシ、但外国ト干戈ヲ交ユルニ至ツテハ、仮令宇内ヲ挙テ兵トナストモ能之ニ当ルヤ否ヲ審ニセス、然ルニ兵力ヲ以テ外国ヲ圧服セントス、是孛国ヲ欽慕スルニ似タリ、彼ノ孛国ノ若キ強キ盛ニ乗シ、兵威ヲ逞フシ欧洲ヲ併呑セントス、故全国ノ費ニ傾ケ以テ兵備ニ供ス、此其償ヲ他国ヲ取ントスル也、顧フニ　皇国コノ勢アルヤ、亦之ヲ審ニセス若徒ラニ

兵ヲ強セントス、其費ヲ計ラサレハ、重ク民ニ取ルニ非サレハ何ヲ以テ之ニ給セン、其弊害終ニ如何ヲ知ラス、仮令今日幾千万ノ兵ヲ募リ、幾百艘ノ艦ヲ備フルトモ、恐ラクハ之ヲ指麾スルノ士ナシ、然レハ空シク兵数ヲ増スノミニテ、何ノ用ヲカナサン、宜シク兵学寮ヲ鎮台ニ設ケ教育ノ道ヲ専ニシ、十年ノ久ヲ経ハ必ス之ヲ指麾スル士生出シ、且国用ニ於テモ充実スルニ至ラン、而後兵部省ヲ建、威ヲ海外ニ震ハン、於是兵部ノ功始メテ見ルヘシ、　神ヲ崇フハ皇国ノ重典ナルニ因テ　神祇省ヲ置セラル、然レトモ既ニ祭政一致ノ体ニ基ツカセラレ、大臣ヲシテ伯ヲ兼シム、則参議以下亦其職掌ヲ摂テ可也、祭祀ニ当ツテハ　主上之ヲ親カラシ、大臣以下之ヲ助ク、何ソ別ニ官員ヲ置カン、宜シク宮内ニオイテ局ヲ設クル便也、兵部ヲ除クノ外、宮内ノ冗費計ルヘカラス、又宜シク女官并不急ノ職員ヲ沙汰シ、用度ヲ節スヘシ、如此ナレハ租税ヲ薄フシテ国用足リ、民富化洽ネク万国ト光輝ヲ争ソフテ期セン、方今ノ急務恐ラクハ此ニ出ス、伏請フ、裁制センコトヲ、懇悃ノ至ニ不堪、謹テ愚衷ヲ陳上ス、

辛未九月　　阿部政一

二〇七　市來四郎農耕并産業学校御建設有之度云々建言ニ付同志中内議之趣

先達テ市來四郎建言致候農耕并産業学校御建設有之度云々ニ付、尚又同志中内議之趣左ノ如シ、

一此学校ハ農耕諸産業商法ノ三事業ヲ、浅民愚夫々勧導ノ趣意ニシテ、先ツ此涯三課合設シ、大蔵省ノ統轄ニシテ、勧業校又ハ勧業寮或民政学校ト名称シテ可ナラン乎、其課目ハ農耕学百工製造並ニ諸生産ノ製成、或ハ商法学等人生必用ノ事業ハ、悉ク此局ニ於テ実験シ、損益得失ヲ明ニシ勧導教授スルヲ専務トス、

一凡百ノ事業和漢洋ノ良法ヲ取捨斟酌シ、或ハ従来ノ方法ヲ改革シ、粗ヲ精トシ、寡ヲ多トシ、或ハ未発ノ産ヲ開キ、或ハ宇内各国商業ノ体裁等ノ教誘シ、各生活ノ途ヲ得セシメ、迭惰徒食ノ人民ヲ減センコトヲ要シ、而シテ凡百ノ物産充足シ、国用ヲ足スハ基ヨリ、遂ニハ輸入ヲ減シ、輸出ヲ増シ、国ノ損耗ヲ防クヲ大目的トス、

一此局ヲ設クルノ要ハ、右三四課ノ事業、何レモ従来ノ如ク蒙昧ノ施術或ハ秘事等ノ陋習アリテハ、百事開ケ

ス、或ハ誤謬費耗モ多キカ故ニ、理化重ノ三学課或ハ百工製造学、或ハ物産学等ニ則リ大成シ、現施試験シ、普ク知ラシムヘシ、素ヨリ浅民愚夫々、理化学等ノ本源ヨリ教授スルハ甚難キコトナレハ、一事一業望ノ事柄ヲ懇教活路ニ就カシムルヲ専トス、

一授教ヲ乞者ハ、日数又ハ月数ニ応シテ授業料ヲ出サシムヘシ、出スコト能ハサル者ハ力役セシメ、間隙ヲ以授教スヘシ、

一此局ヲ開テ、授業或ハ試験ノ入費凡一月一千両ヲ充置レテ可ナラン乎、

但官員ノ給料或建局ノ用途、或初ニ書籍器械買入等ノ代ハ此外ナリ、

一官員ハ成ヘク多員ナルヘカラス、中ニモ俗務ハ少キヲ要ス、

一建局ノ発表アラハ、先五六名ヲ置テ大体ヲ議シ一定シ、且ツ三四課ノ書ト其当ノ人択、或器械等ヲ聚ルヲ以順序トナスヘシ、

一農学ト産業学ノ二課ハ、現術ニ渉リテ教授勧喩セサレハ、浅愚ノ輩或ハ生来剛習セサル人、或ハ新ニ帰農商ノ人ハ了解セサルハ勿論、地味培養或ハ器械ノ用法等ニモ関係スルカ故ニ、園地ヲ設ケテ其施法ヲ実験シ教勧スヘシ、

一此局ヲ開ルヽニ当テハ、家作等成ヘク新ニスルコトナク、寺院ノ廃跡或旧県邸等弁利ノ地ヲ択ヒ、決シテ無益ノ費用ナクシテ、速ニ授業ヲ開クヲ要スヘシ、

一輸入品ノ模造傚製ハ、洋籍上ヨリ撰出スルモアリ、或ハ現事伝習セサレハ能ハサルモアルヘシ、其能ハサル者ハ、其事業ニ達シタル洋人ヲ雇テ伝習スヘシ、然リト雖先ツ書籍上ニテ傚製スヘキヲ先ニシテ可ナラン乎、

一元来農ト生産・器械・商業ノ四課ハ、相離ルヘカラサル者ナレハ、今此局合設ノ議ヲ起セシ者ナリ、仮令テ之ヲ云ハン、漆ト生糸ノ如シ、初メ農ニ出而シテ器械ニ罹リ生産ト渉リ、而シテ後商ニ還ル、此理宇内一般同シキカ故ニ、先ツ此涯合設シ教導シテ可ナラン乎、

一従来ノ農耕或ハ生産モ甲ノ県ニハ開ケ、乙ノ県ニハ開ケサルアリ、勿論地味風土ニモ関係スト雖、勧導ノ届サルニ出ル者多カラン乎、因テ此校ヲ設ケテ後ハ年ナラスシテ産物蕃殖スルハ疑ヲ容レス、将タ仮令ハ若松県ハ漆ノ名産、阿州ハ藍、大和・河内ハ綿等ノ如キナリ、各国所ノ名産或ハ製成ニ精粗善悪アリ、故ニ其達

業ノ者ヲモ択集シテ普ク教授スヘシ、

一水利・堤防ノ二課学ハ民政ノ至要ナレハ、之ヲ農耕学専業トシテ、和漢洋ノ法ヲ斟酌シ、各県ヨリ二三名ツヽモ来就セシメ学ハシムルノ道モ開カレ度候、

一本邦各地未発ノ物品果テ多カラン、建校ノ上ハ何ニ依ラス此局ニ出サシムルノ法ヲ設ケ、或ハ其品ヲ携ヘ出テ用不用ヲ明弁スヘシ、

一即今貴賤ノ情態ハ、要路ニ於テモ御詳知モアルヘシ、人々各競テ活路ノ業ヲ得ンコトヲ企望ス、此時ヲ失ハス勧導ノ道速ニ開カルヘキノ機会ト存候、

一西洋経済学家ノ説ニ、国民ニ産業ヲ勧ルニハ、政府其場ヲ設ケテ試験シ、其損益得失ヲ論シ、之ヲ布告スルヲ専トス、爰ヲ以テ反復論述セシ如ク、方今我国ノ況勢一日モ忽ニスヘカラサルハ此事ナラン、

一此校ハ民政ノ本源饒民国ノ至要ニテ、何ヨリ先ンシテ建設有之度トノ趣ハ、市來ヨリ反復陳述ノ通、殊ニ廃藩置県大御変革ノ際ニ中テ、全国貴賤方向ヲ一変シ、生計ノ途ヲ定ムルノ時ニ候得ハ、政府ハ其勧導ノ道開カレスンハ、恐ナカラ欠典ナラン、尤モ農ト産業・商法トハ相離ルヘカラサル者ナレハ、今合設シテ不可アルヘカラス、而シテ後年別設スルハ容易ノ事ト存候、

一此校ハ、文部或ハ工部省ノ管轄ニシテ可ナラン乎ト議スルモアリト雖モ、彼ノ掌ル処ト其趣ヲ異ニス、此校ハ、貴賤トモニ一己一家生活ノ途ヲ得セシムルノ目的ニシテ、民政ノ本源饒民富国ノ基本ナルハ、市來建言ノ通ニ候間、大蔵省ノ管轄ニシテ、速ニ建校有御座度奉存候、以上、

辛未九月　日

阿部　潛
桑原清蔵
宇都宮三郎
赤松大三郎
辻　新次

〔表紙〕

忠義公史料　明治四年十月

二〇八　県庁庁衙及伝事方移転ノ事ヲ達ス

明治四年十月二日、県庁庁衙及伝事方移転ノ事ヲ達セリ、

二〇八ノ一　地方城郭之儀、兵部省管轄被仰付候段、今般従朝廷被仰出候付、県庁并伝事方之儀、明後四日より客屋江被引移候、此旨向々江可申渡候、

辛未十月二日　鹿児嶋県庁

(記)

八月十八日、地方城郭兵部省管轄トスルノ令アリ、此際吉井・西郷ノ帰県アリ、県治ノ処置議スル所アリ、遂ニ県庁ヲ城外客屋ニ移シ、以テ旧体ヲ一変スルニ及ベリ、

尚同日客屋狭隘ニシテ、諸局ノ吏員ヲ容ルベカラサルヲ以テ、当分ノ内ハ一局毎一人、客屋ノ役衙ニ出仕スベシト達セリ、

二〇八ノ二　県庁転局ニ付ては、諸局は先当分通ニて、局々より日々壱人ツヽ、県庁之内より相詰、御用相弁候様向々江可申渡事、

右之通明治四辛未十月二日被仰渡候、

【参照】

寺師宗道日記四年十月

同四日　晴

一〔上略カ〕昨三日より県庁知政所也は、御殿引払客屋江転し相成候由、左候て諸藩城郭之儀ハ兵部省管轄相成候由、尤当藩外城之儀も、兵部省之支配被仰渡候由、右ニ付諸局之儀ハ先ツ是迄之通ニて、諸局より一役ツヽ、客屋江相詰候て、御用承候様被仰渡候由、〔下略カ〕

二〇九　県庁旧城郭図面調査ノ令ヲ達ス

明治四年十月三日、県庁旧城郭図面調査ノ令ヲ達セリ、

別冊之通従東京被
仰渡候段申来候条、取調申出候儀共民事局江申渡、向
々江可申渡候、
未十月三日　　鹿児嶋県庁

（記）

別冊トハ、八月十八日太政官地方城郭管轄ニ付スルノ
達ナリ、
地方城郭之儀ハ兵部省管轄被仰出候事、
但於県明細之図面取調、早々兵部省へ可差出事、

二一〇　県庁国学・漢学両校ヲ廃スルコトヲ達ス

明治四年十月三日、県庁国学・漢学両校ヲ廃スルコトヲ達セリ、

二一〇ノ一
一国学局
一漢学局
右は本学校之儀、三学兼修之学課ニて、追々進歩いたし、殊更和漢専門修学之規則も相立、殊ニ此節廃藩付ては、多端之学館被相立置候訳無之候付、右両局諸官共被廃候条申渡、可承向江も可申渡候、
但両局之儀は、本学校諸官より可相受取候、
辛未十月三日　　鹿児嶋県庁

（記）

両学校ノ別立ヲ廃シ、学務ハ皆本学校ニ主管セシムル
ニ至レリ、尚廃校ト倶ニ学事ヲ廃スルコトナカラシム
ル為メ、更ニ左ノ訓示ヲ発セリ、

二一〇ノ二
一今般和漢両校被廃候ニ付テハ、生徒之儀ヲノツカラ郷
校又ハ小学校等へ入学、夫々勉強可有之筈候得共、万
一心得違及廃学候テハ、屹ト不相成事候条、右趣意父
兄郷老等厚汲受、早ク致入学候様可申渡候事、
取次　　田畑　平

【参照】

寺師宗道日記四年十月
同四日　晴
〔上略カ〕
一是迄之漢学校・国学校ハ被廃候、本学校のミニ相成候

由也、郷校之儀は是迄之通候、〔下略カ〕

二一一　県庁元旦・天長節賀表上呈ノ令ヲ達ス

明治四年十月五日、県庁元旦・天長節賀表上呈ノ令ヲ達セリ、

一元旦

天長節両賀表自今式部寮江可差出事、

但知事闕員ノ節、奏任ハ直ニ同寮江可差出、判任并士族之拜賀ハ参事ニテ相受、諸事従前之通可相心得事、

辛未八月　　太政官

別紙之通、於東京被仰渡候段申来候条、向々江可申渡候、

辛未十月五日　　鹿児嶋県庁

二一二　旧藩知事ノ解任ヲ口実トシ、結党暴行スル者ヲ申戒ス

明治四年十月七日、旧藩知事ノ解任ヲ口実トシ、結党暴行スル者ヲ申戒セラル、

未十月七日

今般廃藩ニ付、各地方ニ於テ、奸民共徒党ヲ結ヒ、陽ニ旧知事惜別ヲ名トシ、恣ニ人家ヲ毀焚シ、或ハ財物ヲ掠奪候等ノ暴動ニ及ヒ候者、往々可有之趣相聞ヘ、朝旨ヲ蔑視シ、国憲ヲ違犯シ候次第、其罪不軽候条、管内厳粛ニ取締、即決処置、懲誡ヲ可加候、万一手ニ余リ候節ハ、所在鎮台ヘ申出、臨機之措置ニ可及候事、

辛未十月　　太政官

(記)

八月十二日、津山県参事鞍懸寅二郎吉直ヲ砲殺スル者アリ、其他各地不平ノ徒アリ、物情騒然ノ聞アリ、仍テ本令ヲ発シ、厳ニ之ヲ申戒セラル、

(按)本県ニ於テ旧藩士中要路ニ立ツ者、或ハ之ニ因縁アル者、多ク時局ノ変遷ニ就テハ、別ニ不平ノ情状ヲ訴ヘサリシモ、旧老ノ者ニ至テハ、変革ノ是非ヲ評シ、当路者ノ適否ヲ論スルニ止マレリ、

二一三　県庁監察局ノ転局ヲ達ス

明治四年十月七日、県庁監察局ノ転局ヲ達セリ、

一監察局之儀、今日より巡察出張所江転局被仰付候条、向々江可申渡候、

辛未十月七日　　鹿兒嶋県庁

二一四　県庁祖霊自祭又ハ産土神社司ニ託祭スルコトヲ達ス

明治四年十月七日、県庁祖霊自祭又ハ産土神社司ニ託祭スルコトヲ達セリ、

一諸人氏神并祖先之祀等は致自祭候様申渡置候処、間ニは不案内之者も有之、伶人或旧修験等之者相頼、致祭祀来候者も有之由、尓来自祭不相調候者は、其方限産土神社司相頼、致祭祀相当之事候付、心得違無之様御県内中江不洩様可申渡候、

辛未十月七日　　鹿兒嶋県庁

(記)

管内廃仏以来神祭式ヲ行ハシムルモ、一般ノ俗情未タ安ンセサル処アリ、往々伶人又ハ旧修験者等ニ嘱シ、名ヲ神祭ニ仮リテ仏式ヲ行フアリ、是ニ於テ旧僧侶・修験ノ徒、亦乗シテ衣食ノ計ヲ為スモノアリ、是ニ於テ申戒ヲ加ヘタルナリ、

二一五　華族ニ輦轂ノ下ニ在テ勉励知見ヲ開キ衆表トナルヘキコトヲ令ス

明治四年十月八日、華族ニ輦轂ノ下ニ在テ、勉励知見ヲ開キ、衆表トナルヘキコトヲ令セラル、

方今宇内開化之時、実用ノ材ヲ養ヒ候事、最急務ニ候、殊ニ華族ハ四民ノ上ニ立、衆人ノ標的トモ可相成儀ニ付、今般一同　輦轂ノ下ヘ被　召寄、親ク中外開化ノ進歩ヲ察シ、聞見ヲ広メ、知識ヲ研キ、国家ノ御用ニ被為充候御趣意ニ候条、各奮発勉励可致事、

辛未十月八日　　太政官

(記)

廃藩置県ノ令ト同時ニ、九月ヲ期シ、都下ニ召集セラレ、旧各藩知事漸次来到セリ、是ニ於テ後来ノ注意ヲ与ヘラル、左ニ当日奉命ノ次第ヲ載ス、

十月八日、今日一字御供揃ニテ、　御直垂被為　召、御

駕籠台ヨリ御本門　御出、和田倉御門、坂之下御門ヨリ　御参　内、麝香之間へ被遊御扣候処、大広間へ被為　召、三條右大臣御席詰ニテ、五辻式部助殿ヨリ別紙御奉書御弘メ之上、於同所東京府黒田大参事殿ヨリ御渡相成候付、無御滞御退
朝、御出口之通三字前被遊御帰邸候事、

二一六　県庁奏任以上氏名上申ノ令ヲ達ス

明治四年十月、県庁奏任以上氏名上申ノ令ヲ達セリ、

一奏任以上、苗字・通称・実名・年齢等早々取調可指出事、

辛未十月　　太政官

右之通被仰渡候条、向々へ可申渡候、

鹿児嶋県庁

二一七　県庁民事局ノ転局ヲ達ス

明治四年十月十七日、県庁民事局ノ転局ヲ達セリ、

一民事局之儀、今日より築地御茶屋江転局被仰付候条、向々江可申渡候、

辛未十月十七日　　鹿児嶋県庁

二一八　県庁鹿児島神社神幸道筋指定ノコトヲ達ス

明治四年十月、県庁鹿児島神社神幸道筋ヲ指定スルコトヲ達セリ、

一来ル十八日

鹿児島神社濱殿

御幸御神事御道筋左之通

御本社より草牟田本道、学校前より川筋、高城六右衛門角より竹下喜左衛門前通、千石馬場二階堂部角より伊勢建彦角、中福良石燈爐通呉服町、松原神社前より蚕織方角より、大門口台場後塩濱筋濱殿、

但還行之節も同断、

右之通例年御道筋被定置候条、向々江可申渡候、

辛未十月

【参照】

道島正亮日記　　鹿児嶋県庁

四年十月十八日

一草牟田氏瀬ノ神社、当年ヨリ初テ浜下リ有之、其行粧振々敷、一番ニ御鉾弐ツ、木剣ノ槍拾本計、甲冑ノ騎馬五騎、布衣ノ騎馬拾人位、女子共緋ノ袴着イタシ四五拾人、夫ヨリ御輿、楽器・笙・ヒツリキ、跡ヨリ大傘四本、御供ハ上下ニテ、市中其外草牟田居住ノ売人共ニテ、東石馬場（千カ）ヨリ、伊勢角ヨリ大門口、夫ヨリ高土手ニテ洲崎鉄砲場ニ仮殿トイフカ出来、ソコニテ神舞抔モ有之、市中ヨリ踊興ニテ、寔ニ振々敷事ニ候、

二一九　詔シテ華族ノ奮励勉学スヘキヲ諭サル

明治四年十月二十二日、華族（旧藩知事）ヲ御前ニ召シ、詔シテ其重貴ノ地ニ居リ、衆庶ノ望ヲ負フヲ以テ、率先奮励シ或ハ海外ニ留学シテ、務テ開明ノ域ニ進ムベキヲ諭サル、

（記）

本月二十二日ヨリ順次大広間ニ召見シ、　主上出御、三條太政大臣宸翰ヲ奉読拝聞セシメラレ、了テ舞楽饗宴ヲ賜フ、此ノ如クスルコト二十四日ニ至レリ、左ニ当日参内ノ順序ヲ載ス、

朕惟フニ、宇内列国、開化富強ノ称アル者、皆其国民勤勉ノ力ニ由ラサルナシ、而シテ国民ノ能ク智ヲ開キ才ヲ研キ、勤勉ノ力ヲ致ス者ハ、固リ其国民タルノ本分ヲ尽スモノナリ、今我国旧制ヲ更革シテ、列国ト並馳セント欲ス、国民一致、勤勉ノ力ヲ尽スニ非レハ、何ヲ以テ之ヲ致スコトヲ得ンヤ、特ニ華族ハ国民中貴重ノ地位ニ居リ、衆庶ノ属目スル所ナレハ、其履行固リ標準トナリ、一層勤勉ノ力ヲ致シ、率先シテ之ヲ鼓舞セザルベケンヤ、其責タルヤ亦重シ、是今日朕カ汝等ヲ召シ、親シク朕カ期望スル所ノ意ヲ告クル所以ナリ、夫レ勤勉ノ力ヲ致スハ、智ヲ開キ、才ヲ研ヨリ外ナルハナシ、智ヲ開キ、才ヲ研ハ、眼ヲ宇内開化ノ形勢ニ着ケ、有用ノ業ヲ修メ、或ハ外国ヘ留学シ、実地ノ学ヲ講スルヨリ要ナルハナシ、而年壮ヲ過キ、留学ヲ為シ難キ者モ、一タヒ海外ニ周遊シ、聞見ヲ広ムル、亦以テ智識ヲ増益スルニ足ラン、且我邦女学ノ制未タ立タサルヲ以テ、婦女多クハ事理ヲ解セス、殊ニ幼童

ノ成立ハ、母氏ノ教導ニ関シ、実ニ切緊ノ事ナレハ、今海外ニ赴ク者、妻女或ハ姉妹ヲ挈テ同行スル、固ヨリ可ナルコトニテ、外国所在女教ノ素アルヲ暁リ、育児ノ法ヲモ知ルニ足ル可シ、誠ニ能ク人々此ニ注意シ、勤勉ノ力ヲ致サハ、開化ノ域ニ進ミ、富強ノ基随テ立、列国ニ並馳スルモ難カラサルヘシ、汝等能ク斯意ヲ体シ、各其本分ヲ尽シ、以テ朕カ期望スル所ヲ副ヘヨ、

十月廿三日、今日御用　召ニ付、一字御供揃ニテ、御直垂被為　召、御駕籠台ヨリ御本門御出、和田倉御門御通行、坂下御門ヨリ　御参　内、麝香之間ヘ御扣被遊候処、華族方一同大広間ヘ被為　召、主上出御、　宸翰三條様御広メニテ御拝聞、右　御宸翰之儀ハ、後日御上梓之上御渡相成候旨被遊御承知、左候テ一旦　入御、華族方左右ヘ御分席出御、舞楽御饗応畢テ天盃御流御頂戴、御酒肴等御拝戴ニテ、五字過無御滞御退　朝、御出口之通被遊　御帰邸候事、

但華族方ハ惣方御日割ニテ、御同様被為　召候由、右ニ付、御上梓之上左之通御渡相成候事、

二三〇　県庁奈良原繁・伊地知貞馨ニ伝事出仕ヲ命スルコトヲ達ス

明治四年十月二十二日、県庁奈良原繁・伊地知貞馨伝事出仕ヲ命スルコトヲ達セリ、

奈良原幸五郎
伊地知壮之丞

右は伝事出仕被仰付、俸禄之儀は本職同様被成下候条、向々江可申渡候、

辛未十月廿二日

鹿兒嶋県庁

(記)

奈良原・伊地知両人ハ、二年二月役職ヲ免シタリシカ、此際再登庸シテ、奈良原ハ旧藩知事ノ役職ヲ兼ネシメ、其処弁ニ当ラシメ、伊地知ハ専ラ琉球ノ処弁ニ当ラシムルコトヽセリ、

二三一　県庁時鐘ヲ定メ正午鐘ヲ報スルヲ達ス

明治四年十月二十二日、県庁時鐘ヲ定メ、正午鐘ヲ報スルコトヲ達セリ、

一時計ニ依り時刻之異同有之、各所学校時限一定無之ニ付、来月朔日より時鐘之外、昼十二字ニ当り正午鐘三ツ撞候様被仰付候条、向々江可申渡候、

辛未十月廿二日　　鹿児嶋県庁

二二二　県庁重出米納付ヲ免除スルコトヲ達ス

明治四年十月二十二日、県庁重出米納付ヲ廃スルコトヲ達セリ、

一軍備充実之為、去ル巳年士族高壱石ニ付、三升宛重出米上納被仰付候得共、当秋より御免被仰付候条、一同可奉承知候、此旨向々江可申渡候、

辛未十月廿二日　　鹿児嶋県庁

二二三　県庁糺明局ノ転局ヲ達ス

明治四年十月二十五日、県庁糺明局ノ転局ヲ達セリ、

一本局下町会所江転局之事、

一右ニ付、会所広間其外惣間席当局江引渡候様、民事局江御達之事、

一夜廻検事、宵之間右広間江相詰候由ニ付、外場所ニて致御用候様、監察局江御達之事、

一鞫問所を廃し、水問場大門口出張所江引直し、罪囚事柄ニ仍ては、同所ニて可致鞫問事、

右之通被仰付度致吟味候、以上、

辛未十月十日　　糺明局

右之通被仰付候条、向々江可申渡候、

辛未十月廿五日　　鹿児嶋県庁

二二四　県庁皇軍神社祭事執行ニ付通行止ヲ達ス

明治四年十月二十五日、県庁皇軍神社祭事執行ニ付、通行止ノ事ヲ達セリ、

一来月十日

皇軍神社御神事ニ付、前日夕七ツ後より相済迄之間、

軍馬方下通融差止候条、向々江可申渡候、

辛未十月廿五日　　鹿児島県庁

二二五　県庁救助米給与ノ手続ヲ達ス

明治四年十月、県庁救助米給与ノ手続ヲ達セリ、

一此節高弐拾五石以下之士族江、御救助米被成下候段は、先達て致布告置候通ニて、右は全体今日経営難渋之者江別段之御取訳を以被下置訳合ニ付、其旨一同厚相心得、御救助之詮屹と相立候様心掛、時勢ニ応し夫々御奉公相勤候儀、肝要之事候条、聊心得違偷安懶惰ニ相流候儀共有之間敷、左候て取扱向左之通、

一戦死跡等ニて、其家ニ三拾俵以上之御扶持米又は御切米等被下置候面々、年限中ハ別段御救助米不被成下候、

一右同断御扶持米等被下置候家督廃官之俸禄は、是迄通被成下候、任職之節は官俸等級之通被成下候、

一旧定府之内養俸並堪忍料米六石以上被下置候者は、当分通ニて、尓後養俸不被下節、堪忍料米迄六石被成下候、

一分地別立之者、父兄同居は勿論、他家相続等ニて実家江致同居、実家之高弐拾五石以上は、当人高弐拾五石以下ニても、同居中は御救助米不被成下候、

但是迄御救勤被仰付置候者は別段、

一家督之者県外旅行等ニて、跡ニ家族無之者は、同断不被成下候、

一罪科有之者、刑律を以御救助米被召揚候儀は勿論、御咎目中又は嶋方居住之者は、同断不被成下候、

一御救助米引当を以金銭致他借候者は、即可被召揚候、

一家督継目又は任職・免職・病死等之節、御救助米被成下候面々は、明細書を以伝事江可届出候、

一俸禄米等手形帳面之儀は、いろは順を以米蔵より米穀掛出納方江取揚差引相究候上、本之通米蔵江可差廻候、左候て此節新ニ御救助米被成下候人数は、十一月十日方より手形帳面可相渡候間、米穀掛出納方より可相請取候、

一御救助米被下候次第別表之通、

右之通被定置、当分家督無役又は六石以下之俸禄被下候人数江、別表之定ニ基き、十一月朔日より御救助米被成下候条、向々江可申渡候、

辛未十月廿五日　　鹿児嶋県庁

（記）

九月二十五日、高二拾五石以下ノ者、救助米六石ヲ給与スルコトヲ達シタリ、仍テ其給与方法ヲ規定シタルナリ、

二三六　県庁蔵版方ヲ本学校ニ管轄スルコトヲ達ス

明治四年十月、県庁蔵版方ヲ本学校ニ管轄スルコトヲ達セリ、

一蔵版方之儀、本学校管轄被仰付候条申渡、可承向江可申渡候、

辛未十月　　鹿児嶋県庁

向々江可申渡候、

辛未十月　　鹿児島県庁

二三八　県庁各官衙番所挑灯菊章ニ改ムヘキヲ達ス

明治四年十月、県庁各官衙番所挑灯菊章ニ改ムベキコトヲ達セリ、

一御楼門　一北御門
一東高役番所　一中辻番所
一西辻番所　一平之口番所
一桝形番所　一吉野橋番所
一新橋番所　一靭韃冬々番所
一西田橋番所　一軍馬方
一米蔵　一金蔵
一県庁　一軍務局
一民事局　一監察局
一糧餉方　一営繕方但番所
一本学校　一生産方

二三七　県庁外城方転局ノコトヲ達ス

明治四年十月、県庁外城方転局ノコトヲ達セリ、

一外城方之儀、軍務局内出軍取調方跡江転局被仰付候条、

一集成館　一火薬局
右各所門内外江相掛候大丸挑灯丈ケは此節菊御紋相改張替方いたし候様可申渡候、
辛未十月　鹿児嶋県庁

二二九　県庁尾畔山江立入ルコトヲ禁ス

明治四年十月、県庁尾畔山江猥ニ立入リ禁制ノコトヲ達セリ、
一尾畔山内江猥ニ踏入、竹木江相障候者共有之段相聞得、不可然事候条方限中より致取締、見当候者は無用捨名前申出候様可申渡事、
辛未十月　鹿児嶋県庁

二三〇　道島日記

二三〇ノ一
一米良ノ藩主モ被廃、尾畔ヲ拝領ニテ四拾石カノ御アテカヒノ由、又佐土原侯モ東京住居被成候ヨシ、大方九州ハ上国イタシ、肥後ノ丈之丞殿モ東京致候ヤニテ嘶也、
二三〇ノ二
一浄光明寺ノ客殿ハ、未九月方取毀方有之候、萩原〔ママ〕トヤライフモノ申請候ヨシ、

二三一　寺師宗道日記

十月十五日　同十五日　晴
〔上略カ〕東京書状相達ス、彼表之事情物議喧々、当分諸省大混雑中ニも、文部省大木民平文部卿ニ相成り人望無之、兵部省同断烏合之人数ニて、山形と云者少々は出来候由候得共、田舎人物ニて僻論多キ由、民部・大蔵合併混雑也、外務省ハ未手相付、重キ談判は差迫有之事之由、殊ニ来年は約定変更之賦ニて、如何之所置ニ可相成哉、東京府ニは越前之三岡出ル人物之由、府政は能調可申哉、黒田嘉納は大参事也、桑原清蔵と申人物之由、阿部潜ハ大蔵出仕之由、榎本對馬は北海道開拓御用掛被仰付候由、此度御雇入之ケブロンと申農学家、米国一等之教官にて、余程之人物ニて候由外ニ六人参候、

用途来年八拾万両、来々年百五拾万両、其後二年二百五拾万両ツヽ、五ケ年ニて、後は彼地ニて産物等ヲ以テ繰立候目途也、ガラフトは迚も取止不叶向也、未此方より手は引不申候へ共、竟ニ引取不相成候ては不叶向也、魯の勢ひ甚敷、何分入用等不足故、彼ニ不及事之由、八田知紀詠歌被仰付、権中博士被仰付、後醍院真柱ニは日本書紀しらへ方文部省へ日勤、○県兵沸騰于今不止、我侭却て隊長官共ヲ圧倒スル事甚敷向也、迚も帰服之人物ハ無之候、又隊長之人望一人も無之、甚た因循気之毒と申事也、○神田邸此節大蔵省御用相成り、諸県集会所ニ被仰付候、九月廿四日見分相成候付早々引取候様達有之候由、当分知事公御住所尋方、御休息所抔は早解崩し相成候由、三田通旧嶋原邸当分福澤諭吉居所相成候由、是ヲ相渡候賦ニ候由、左候て県邸詰之人々は築地嶋原邸廃跡へ旅籠屋様之設ケヲ、東京府へ達、是ニ諸県一同居住之賦也、人気甚敷沸騰也、○諸県金穀之出納、二ケ月ツヽ、繰致し御届申出候様布告相成候、如何迚も其通可参哉、一笑也、

○火薬局等も取建之賦候得共、未そこ所ニては無之、水戸邸小石河ヲ御用地ニ相成候由噂也、○伊地知正治今日迄も何分不相分、至急被召出候、不審也、多分議員ならん欤、○西郷毎勤、木戸・大熊専権之由、○後藤象次郎は副隊長被仰付候、工部は長州之伊藤真平大輔ニ任ス、○内田仲之介は加州之大参事被仰付候、

○水戸は沸騰不少、多分兵力ヲ用ニ可至と云々、此節攘夷家憤起シ、中ニも百姓・町人共有志多ク、洋服抔用ルもの無之由、脱刀抔一円不服之由、○赤松大三郎辞職也、○紀州之津田又三郎も大蔵出仕被仰付候得共辞シ、又因州之大参事ヲ任ス、是も辞シテ不出由也、一体此節之任官ヲ甘シテ出ルものは大体の人物ニて、大識慮之人物は一人も不出と聞ゆ、未十分之見居付兼候ヲ以テ也、巷説非論実ニ聞ニ不堪もの也、西郷之人評地ニ墜たり、笑止也、実ニ忍ひさる形勢は知事公也、諸藩之有志当今唯静り返りて動静ヲ窺ふ体也、今大変革ニ相成と雖も、弥以累卵の危候旦夕ニあり、一度外国之交際ヲ誤ツトキハ兵端目前ニあり、又廃藩之有志徒・変革開化不服之徒紛擾も不少、実ニ可怖之秋也云々、○殊之外行ハれたるハ脱刀・乱髪・洋装也、○又殊之外抜跨驕漫なるハ洋人なり、志気ある者是ヲ見聞して不忍も尤也、○勝は駿州ニ引取、今用度人物は榎

本和泉・大嶋〔ママ〕豊助・松平太郎・荒井郁之助徒也、今殊之外勢ひのものハ海軍所也、○今不都合之ものハ兵隊之長官也、○時ヲ得たるものは洋学者也、○勢ひと似ざるもの小諸藩之知事・参事也、○込たものハ大職之町人・吉原之郭也、○悪るものハ参議也、大形筆跡之侭、此情事、市成隊長柴良之進参局、去五月売上之硝石手形出納方ニて紛失ニ付、再差越願出候、本局へ掛合何分可取計申置也、本局より火薬局・当局諸用物品立年分諸職人賃銭及ひ火薬硝石出来高其外諸入用等、惣て相総申出候様会計局より承候由掛合也、此節東京へ申立代払相成候賦之由也、当局総り取払へ申達候也、〔下略カ〕

十一月七日　同七日　時気日和

〔上略カ〕魯英戦端ヲ開キ、魯三十万の兵ヲ印度ニ出し、英ハ軍艦ヲ亜細亜海岸ニ出シタル由、桑名藩水野太郎と申人ヨリの便音ニ所見と云々、

門司為衛より書状到来ス、西村卯八郎帰、硫黄山一条取究之事也、

主上諸国巡幸被仰出候由、嶋津圖書・嶋津うつ彦御用召之由、〔下略カ〕

二三三　姫路県管下平民動揺ニ付届書

二三三ノ一　新聞抄書

姫路県管下平民動揺ニ付、十月十四日届書ノ写

当県管下平民共、先般穢多ノ称ヲ廃候儀ニ付、兼々隠然不平ヲ抱キ候ヨリ、掛リ官員ヲ以テ懇々説諭ニ及候得共、本来頑固ノ民猶不服ノ者モ有之哉ニ付、別紙ノ通リ告諭書猶又洽ク差示候儀ニ御座候、然処庶民中巨魁ノ徒御座候テ、俄頃ニ村里ヲ煽動シ、暫時ニ党与シ、不同意ノ村々ハ一挙ニ焼焚ナト、激烈申触候ヨリ追々連属仕、昨十三日夜中ヨリ鳥銃・竹槍抔ヲ携ヘ、益々蜂起及暴挙候、右ニ付止ム事ヲ不得、陸軍兵隊六小隊漸次ニ繰出シ候儀ニ御座候、右概略顚末ハ、大阪表出張兵部御省ニ、別紙ノ通リ今二字差出申候、猶追々鎮撫ノ兵詳細取糺、御届可仕儀ニ御座候得共、先ツ此段不取敢至急御届申上候、以上、

辛未十月　姫路県

吏官御中

二三二ノ二

姫路県管下平民動揺ニ付再度御届

一昨十四日御届申上候後、乱民ノ一挙追々相募リ、町村組ヨリ南シテ手野組・蒲田組ニ至リ、大庄屋・庄屋等居宅ヲ放火、又城郭ノ後背ヲ巡リ、中島組ニ蔓延シ、各所ヲ放火発砲シ、是ヨリ先キ官員並ニ兵隊各所ニ出張シ、種々説諭ヲ加ヘシカトモ、更ニ鎮静ノ体無之、遂ニ此処業ニ及候ニ付、止ム事ヲ不得、乱民屯集ノ処ニシテ、初発空砲ヲ用ヒ候処、毫モ退散ノ体無之、益放火発砲ニ付、最早猶予スヘカラザルニ至リ、無余儀各処兵隊ニ指揮シ、一時砲撃ニ及ヒ候、然ル処死傷ノ徒各所ニ相斃レ候ヨリ、衆庶始メテ恐怖ノ体ニテ、悉ク近傍山岡ニ散乱ス、依テ捕亡ノ手ヲ各処ニ出シ之ヲ捕縛セシム、

一昨十五日蜂起ノ村々ヘ為見分、役員ノ者差出候処、追々鎮静ノ模様ヲ報ス、依テ出張ノ兵員引揚申候、

一今十六日早朝ヨリ、権大参事・権少参事兼正権大属以下ノ官員数名、鎮撫ノ為メ出張致シ候得共、未タ報知無之付、右暴動ニ及候村数凡百七十ケ村、人数大略一万余ニ候得共、捕縛ノ徒精誠勘問糾弾ニ及候処、何レモ魯鈍、何等ノ申口モ無之、只管他人ニ煽動蠱誘セラレ候モノ多分ニ有之、右徒党ノ巨魁未タ分明ナラス候得共、全ク管下ノ士民ノミナラス、他ノ轄下ノ徒モ多分党与致シ居候哉ノ形蹟モ相見申候、右ノ事件故散乱逃去候徒、必ス近県管下転移、埋伏ノ程モ難計御座候ニ付、不取敢近傍諸県ヘモ、別紙ノ通リ頼談ニ及ヒ置申候、且ツ死傷捕縛等ノ員数詳細取調ノ上、追テ御届可仕候得共、一昨十四日十一字頃ヨリ、今十六日四字迄ノ概略御届申上候、以上、

辛未十月　　姫路県

二三二ノ三

新聞報告

去ル十月中旬比、播州ニ於テ騒動起リ、怪我人三百人、死人双方ニテ五百人計リニシテ、十四日間ノ戦ヒナリシカ、就中十月十三日・十四日両日最モ盛ンニ戦フ、又十五日ニ但馬国領分ニヲヒテ、浪人等或ル村ヘ火ヲ仕掛ケ全村ヲ焼荒ラシ、夫ヨリ兵庫南方十五里英国(ママ)一隔タル山ヘ駈ケ走リタリシカ、此辺ニテ再ヒ騒動発起スルノ勢ヒニシテ、百姓等此危難ヲ避ケン為ニ、処々ヘ奔走スル由ナリ、

一去ル十月十三日・十四日、播州姫路在郷民蜂起イタシ、

一揆ヲ結ヒタル趣、奥在市川谷橋関河アノ間谷辺百姓共多人数、十四日辰ノ刻青山川辺ヘ屯集致シ、大庄屋・小庄屋ヲ始メ、放火ヲ以テ焼払ヒ、夫ヨリ浜西口辺ニテ二手ニ別レ、姫路西辺ヘ巡廻致シ候ニ付、鎮圧ノ為メ兵備ノ役員多人数出張、大砲連発ニ及ヒ、一揆ヨリモ小銃ヲ以テ応戦イタシ、怪我人二三百、即死五百人程モ有之由、城下ヲ距離シテ遙ニ増井山森ヘ陣ヲ分配シ、野村ヨリ姫路辺ノ通路、屍ハ積テ山ヲ為シ、血ハ流レテ川ヲ成スト、稗史軍談ノ飾文ニ髣髴タル趣、濱堅阿賀村鎌田ノ村落二三軒焼払ヒ、鹿間津ヨリ兵粮焚出シナシテ、村百七十軒程焼払ヒ、後少シク鎮静スト雖トモ、惣人数一万人余ノ事ニテ、急速ニハ潰散致間敷トノ説、

同時但馬国ニモ十五日、生野在ヘ押入、一揆共多人数屯集、生野村ヲ乱妨焼払ヒ、此辺外国人共多人数入込、不残金山ヘモ相及ヒ、騒擾跋扈筆紙ニ尽シカタク、兵庫ヨリ七里計リ北手ノ山ニ廻リ候由、不日兵庫神戸辺ヘ乱入致スヘキモ難計ニ付、同処ノ住民遁逃ノ支度ヲ為シ、混雑大方ナラスト云々大坂来状中、

一姫路県一揆ノ始末ハ衆説アル中ニ、専ラ此度廃藩ニ付、士民取扱知事ノ仁愛不貫徹ノ事有テ、参事等ノ処置不得止ヨリ旧知事出立、登府ヲ追慕スルノ下情ヨリ起ルト云、其起挙ノ萌ナレトモ、鎮圧ノ事ニ及ヒ兼、カク迄大事ニ及候趣、尤藩士多ク与徒シ、且ツ浪人共モ相語ヒ、諸処ノ義徒連合ヨク調略ノ手行届故、官員方時ニ大敗ニ及ヒ、退散ノ趣相聞ヘ候、兵隊モ解兵ノ後ニテ、俄ニ募ルモ出来候事ナリ、依テ同士軍戦ニテ死傷モ多分ニ及ヒ、一揆方勢ヒ盛ンニ有之、近県救応頼越ストイヘトモ、同様兵隊不調故存分跋扈セシトソ、中々急ニ鎮静ハ成ル間敷トノ説ナリ、

但馬ノ一揆モ大形播州ノニ雷同シ、乗虚ノ様子、生野村焼ハラヒ入込ノ洋人共、辛々兵庫ノ様逃出候由也、

但馬生野県下民蜂起、官吏二人ヲ殺害シ、鉱山器械場ヲ砲火シ、官吏ノ邸宅ヲ壊チ、其夜九字迄退散ス、

二三三　新聞雑抄

去ル十月、浪士三千人程ニテ佐渡ノ島ヲ襲撃シ、此ノ島ヲ乗リ取リシカ、之レカ為メニ島ニ居住セル外国人共、悉ク逃レテ新潟ノ様渡来セリ、故ニ此ノ県ノ指図

ヲ以テ取扱ヒ、而シ此騒動ヲ鎮静スル為ニ県ヲ堅メ、且ツ救兵ヲ越後領ヨリ呼ヒヨセ、大砲等ヲ同地ヨリ輸送セシ由、此ノ騒動鎮静相成ルヤ紛々ノ説ニテ、近領ノ救兵急ニ不調趣ナリ、多ク旧會津藩士及ヒ北越奥州ノ激徒ナリト云々、

一十月下旬鹿児島留学生ヨリ報知ノ由、

英・魯争端ノ一条、已ニ確説モ御聞キ込ハ勿論ニ存候得共、一旬申上候、英館印度地方ノ内、英ノ酷政ニ苦ミ、叛事ヲ欲セリ、魯国ヨリ窃ニ手ヲ入レシニヤ、魯ノ支配タランコトヲ欲セリ、依テ去月比魯国ヨリ蒸気車ヲ以テ、三十万ノ兵ヲ二十四時間ニ繰込ミ、印度地方ノモノ大ニ勢ヒヲ得テ、皆ナ英ノ支配ヲ脱セントス、依テ英ヨリモ出兵シ、目今既ニ兵端ヲ開クルニ至ルヘシトナリ、此ノ戦ヒ始メハ日本モ、此度ハ局外中立ハ必ス成ルマシク、不計難事生セリト参事ノ噺ナリ、

一支那廣東府ニハ激徒七千人程英人ノ諸館ニ迫リ、在留ノ英人ヲ鏖殺シ、ミニストル纔ニ万死ヲ免レ本国ニ帰レリ、依テ英国モ印度事件危急ノ中ナカラ、問罪ノ師ヲ支那ヘ出ス、此軍艦四艘方今既ニ崎陽ニ碇泊ス、不日支那海ヘ乗出スベシト云、

一魯人従来奥蝦夷ノ地方ニ雑居セシカ、已ニ当年中ニハ不残開拓スヘシ、

又カラフト境界ノ議論、魯人ノ説理アルニ似タリト云フ、日本ノ説ハ五十五度ヲ直線ニシテ、境界ヲ定ムト云、魯人ハ度々直線トナシ、故ニ湾曲丈ケハ我カ地ナリト云、彼是紛紜未タ不定云々、

一当時東京府兵隊

御親兵第一大隊　第二同　第三同　第四同

右元鹿児島藩兵隊ナリ、市ケ谷元名古屋藩邸屯所、

第五元山口藩兵隊紅帽ナリ、坂下御門外元閣老役邸屯所、

第六同断、愛宕下元松山藩邸屯所、

第七同断、山下御門内元佐賀藩邸屯所、但シ此分隊同処丸亀藩邸屯所、

第八高知藩兵隊、一ツ橋御門内元一ツ橋藩邸屯所、

第九同、大名小路元古河藩邸屯所、但シ此ノ分隊同所元高島藩邸屯所、

右之外大手御門外屯所ニ、連隊ト称シ二大隊アリ、第一番大砲隊　第二番同、

右元鹿児島藩大砲隊ナリ、市ケ谷元名古屋藩邸屯所、

第三番同　第四番同、
右同断、一ツ橋御門内元一ツ橋藩邸屯所、但シ同所屯所ノ兵隊山口・高知両県也、
右ノ外御本丸内ニ高知県騎兵隊屯集、
岡山県兵隊二百人築地門跡内ニ屯集、
鳥取県兵隊二百人、鍛冶橋御門内元津山藩邸屯所、
廣島県兵隊一大隊、愛宕下青松寺屯所、
当時金澤・佐賀両県兵隊ハ出兵断ノ由、
和田倉御門内元會津藩邸ニヲヒテ、大砲隊日々調練アリ、大隊砲長教授方ハ、佐藤兵部権少輔、仏教師ハラーワルト申者ナル由也、
霞ケ關元廣島藩邸ヨリ元杵築藩邸一円取払ヒ、大砲調練場ニナル由、
日比谷御門外陸軍操練場続キ元上杉藩邸、戸田・阿部ノ邸一円囲込ニ相成リ、陸軍大操練場ニ相成候、従来諸藩ニ於テ楮幣製造ノ器械・地紙ノ類、御布告ニ依テ大蔵省ヘ差出シ候分、近々深川洲崎明神前原ニ於テ焼捨ニ相成候事、
　但以後嵩高ニ相成リ次第焼捨候事、
右ノ趣洲崎近傍区々ヘ為心得相達候事、

比日京中ノ俗習衣服ノ制度ヲ解緩シ、且ツ脱刀ノ事迄勝手ニ処セラレ候処、朝ニヲヒテ文武諸官員達ヲ始メ、皆脱刀異服単ニ洋風ヲ擬スルヲ以テ、賢トスルノ習ナリ、殊ニ兵隊ノ如キハ、常ニ路歩ニモ我日本刀ヲ佩ク事ヲ禁ス、皆銃剣或ハサーベルト云剣鉄葉巻ノ洋剣ヲ帯スル事トナル、又多クハ日本刀ヲ洋剣ノ拵ヘニ為シテ、長短之ヲ帯スル人モ多シ、故ニ日本刀ヲ帯スルモノハ目ニ障リテ、不開化ノ謗リアリト見ヘテ、剣ヲ帯スルモノハ開化ノ徒ト称スルニ至ル、所謂雨ト水トノ仮令ニテ、兎ニ角時ノヨノ習俗ハ不思議ノモノナリケリ、

長崎来信

此頃市中豚ノ売買発行、肥後・豊後地方再島原辺ヨリ買手多人数参集、孕胎豚一疋百両ヨリ百五十両、乳離レ豚一疋四十両位、最モ日本種ヲ上直段トシ、廣東・英吉利種ハ少々下落、婦人ニテモ千両ノ利分ヲ得タルモノ有之、誠ニ利勘慾情ハ恐ロシキモノニテ、日々市中豚ノセリ逢ヒ合戦ニヒトシク、各上発気致シ、牛ノ如クニテハ、人ニ先陣ヲ越レル故、何レモ獅子奮迅ノ勢ヒヲナスコト、肉汁ノ沸騰ヨリ膏ラノ乗気ニ相成リ、

気弱ノモノハ気勝レ者ニフタレル位、殆ント殺風景ノ事ニ御座候云々、

欧米各国ヘ被遣候旨被仰渡、十月十二日太平海飛脚舟ヘ乗込人員左ノ通、

特命全権大使　岩倉右大臣
木戸参議
大久保大蔵卿
伊藤工部大輔
山口外務少輔

一等書記官相当四等官　田邊外務少丞
塩田外務大記

何々正七位　福地萬世

二等同　渡邊外務少記

同五等　小松清次
林董三郎
川路簡カ管堂

同三等同　山内六三郎

同六等　安藤外務大禄

同四等同　池田文部大助教

同七等

右使節一行

理事官　佐々木司法大輔
東久世侍従長
山田陸軍少将（十一月五日任命）
高崎少議官

会計兼務　田中戸籍頭
田中文部大丞
肥田造船頭

大使随行　中山兵庫県権知事
野村外務大記
五辻式部助
久米権少外史
内海金河県大参事

佐々木理事官随行　平賀少判事
中野少判事
岡内少判事
長野文炳

東久世理事官随行　村田宮内大丞

山田理事官随行　原田兵学大教授

高崎少議官随行　　少議生
田中大蔵理事官同断　　安場租税権頭
若山同助
阿部潜
杉山検査大属
富田租税権大属
吉尾辰太郎
田中文部理事官同断　　長與文部中教授
中島正七位
近藤中助教
今村中助教
内村良蔵
肥田理事官同断　　大島鑛山助
瓜生鉄道中属

現石一万石以下ノ諸県解兵ニ付、軍資金当省ヘ相納候様相達置候処、今般軍資金定額被仰出候ニ付テハ、右諸県軍資金ノ儀ハ大蔵省ヘ可相納事、

辛未十一月

今般穢多非人ノ称被廃候ニ付、御持区中非人物貰ヒ居候欤、又ハモラヒ歩行候者ハ追払可申、若シ其頭等ノ札等処持イタシ、彼是申候ハヽ、其処ヘ参リ候様可申諭、夫ニテモ不立退候ハヽ、第五ノ区御本営ヘ召連レ、其段御届可申事、

右ノ通昨十二日ヨリ三ケ日ノ間可追払、尤御本営ヨリ繁々見廻リ有之候ヘ共、其間町掛リノモノ無油断見廻追払可申旨御達ニ付、此段御達申候、

但シ説諭方成ル丈出処ノ方ヘ参リ候様可申諭候、是ハ弥以不立退候上ノ事ニ可相心得事、

今般東京ヨリ陸奥国青森駅迄鉄道御開キ相成候ニ付、差向伝信機御取建相成候条、此旨沿道諸県ヘ相達候事、

右ノ通リ被仰渡候間、為心得相達候也、

今般府下取締トシテ、邏卒三千人被備置候旨被仰出候間、区々不洩様可触示モノ也、

八月北海道開拓ニ付、御雇入相成リ候米国農学教師ホラシカプロン参朝セリ、此開拓盛大ヲ極メ、五ケ年ヲ

期シテ成功ノ積リ也、第一年入費二百万両、第二三百万両、第三同、第四百五十万両、第五百万両、夫ヨリ地産物ヲ以テ入費ニ宛ルノ目途ナリシ由、

或ル商人士人ニ問フニ、此頃諸庁ヲ見ルニ皆椅子ニカヽリ官事ヲ弁セラル、不知何等ノ故ソト、士人答テアレハ、皆官員コシカケヲ居ル故ナリト云々、

頃日欧州兵制ヲ一改革スル由、此般普・法戦争ヨリ即今ノ形勢一変シテ、尚易簡良便ヲ目的トシテ、都テ諸器械ニ至ルマテ、方今ノ処悉ク従来ノ器械トモ改正ヲ要スルノ期也、依テ兵制ノ如キハ殊ニ然ル所以ナリト云フ、最モ兵制ノ更張大軍ヲ以テ主目トスルノ処、此般更テ小軍軽易ヲ以テ主トシ、銃砲如キモスヘテ弾量輸送ノ便方ヲ勉メテ、一兵三兵ノ用ヲ為スニアリト云フ、最モ農兵募乏ノ法ヲ革テ、兵ハ世々ニ任シ文学節義ノ士風ヲ以テ、鞠勉セシムト云々、各国不日変政アラントス云々実ニ勢也、

欧州ニヲヒテ新発明ノ砲器、世ニ行ハレシヨリ、騎兵ハ無用ノ廃物トスルノ論各国盛ナリシカ、普国ニハ今一度実験ヲ為シ、取捨スヘシトノ国論ニテ、此度佛朗西トノ戦争ニ騎兵ヲ用ヒ、其効実ニ著シキヨシ、是ニヲヒテ各国ノ兵法又一面目ヲ改ムヘシト云々、

比日欧州ノ戦法劇烈ニシテ、接戦刀剣ノ用ヲ作用ストイヘリ、

此般普・法戦争ノ事実ヲ評論米人云フ、始ノ勢ヒ普ハ法ニ及ハサルノ評ナリシカ、普都督老練兵学熟達ナルヲ以テ、却テ法ノ精銃練兵ニ対シテ、古制今法ヲ集メテ、折衷シテ之ヲ圧スルニ至ル、是他ナク法ノ意表ニ出ルアリテ、其戦防ノ術設ヲ変セシムルアリ、委敷評論書アリテ近々云々抄出ス、

去年普・法戦争中普兵ノ手ニ分捕タル小銃弾薬共ニ大砲迄モ、其他ノ軍器都テ東洋ノ国ニ買入ントス、既ニシヤスポー銃及ヒ其他ノ本込銃八万挺、日本政府ヘ売渡ノ義ヲ約ス、当時ペルリン府ニテモ、シヤスポー銃五十六万挺余アリ、是皆戦争中ニ分捕セシ処ナリ、普国ノ総軍ハ砲兵・歩兵共ニ新式ヲ一定セリ、故ニ分捕ノ軍器ハスベテ無用ノモノ也、

今秋中東京府下寄留ノ人員、官ヨリ御調アリシニ、通計十万九千六百七十四名ナリ、今春出着ノ人員ハ六十七万二千七百四十七名アリ、

海陸軍御興張ニ付入格定、陸軍ニ八十万両、海軍ニ五十万両トス、先ツ陸軍ヲ張テ后海軍ニ及スノ議トイフ、

弾薬製造局ノ事小石川旧水戸邸ヘ砲器製造所、飛鳥山瀧ノ川辺モ弾薬製造所御造立ノ筈ナレトモ、地方ノ治定ナラスシテ猶予ト云フ、但シ地面ノ設成ニ入費多キヲ以テ也、先般城州宇治ニヲヒテ、既ニ造建ノ命アレトモ、是モ先ツ地方ノ入用水利ノ障リアルヲ以テ、転シテ攝州ノ内ニテアラントノ説也、

大坂天保山及ヒ兵庫州崎砲台廃シ、砲器スヘテ引上ケ相成リ候由、長崎モ同断布令アリシトソ、

箱館港ニ新ニ警備ノ大兵ヲ設ルニハ、大マ、屯田ノ法ニ如クハナシ、此目途ヲ以テ、中村少将東京府ニ至リテ建論スト云、蓋シ此儀兵部省等ニ在テハ異儀アリテ、一時ニ施行難シトノ趣ナリ、何レ域外北地ノ如キハ、非常ノ制度ニアラサレハ実効ナシト云々、

去秋伊達宗春始メ、支那国ヘ使節トシテ被遣、此般事畢テ帰向ス、然ルニ彼国ヨリ乃チ其酬礼ノ使節ナカルヘカラス、未タ其事ナシ、奈何無礼ノ端アルニ似タリ、

フルベッキ曰、日本ハ素一島国ニシテ、亜細亜州中ニヲヒテモ古来風俗人気ヲ異ニシテ、固有ノ国体アレハ、今外国ノ政治風俗ニ拠ル時ハ、其体質変シテ国不立ニ至ルヘシ、イカントナレハ、政治風俗ハ固ト其水土ニ依テ成ルモノナリ、妄リニ動スヘカラス、由テ固有独立ノ気性ハ天ノ享ル処ナレハ、強テ事ニ欲シテ馬ヲシテ鹿ニ為スノ喩ヘナリ、竟ニ用ユヘキニアリト云々、

米人某曰、開化ハ、百事整リシラス〳〵成ルヘキモノナリ、勉メテ為スモノニアラス、喩ヘハ草木ノ萌芽ノ如シ、開化ノ弊開物ノ難キ哉、吾カ米国ノコトキモ、唯開化ノ事ニ竭人ナシ、漸々ニシテ為スニヨレリ、国ハ質朴ヲ尚フ、華美ヲ害トス、必ス開化ノ弊災ヲ免ルヘカラス、此竟ニ用ルニアリト云々、

米国ノ規則ハ自主自権ヲ以テ本トス、共和政治ノ体裁也、依テ彼ノ国ノ小学ノ発端児蒙ヲ教ルニハ、天地ハ吾天地トヲモヘ、此ノ米国ハ吾米国トヲモヘ、此身ハ米国ノモノトヲモヘ、此ノ家ハ吾家トヲモヘ、此ノ産

此ノ職ハ吾モノト思ヘ、此数ケ条ニ過ス、月日モ百端皆吾モノトシテ、即自主自権ノ道ヲ主トシテ、貴賤ノ別ナク、政令悉ク互ノ約定ニ外ナラス、此度佛国ノ敗債ヲ評シテ曰ク、開化風華ノ弊ハ本ト以前ヨリ佛国ノ変革ツヽキテ、殆ントナポレヲンニ至リ、自ラ帝位ヲ践ニ及ンテ、欧羅巴ニ仰戚セシメン事ヲ欲シテ、大ニ開化進歩ノ事ヲ勉メテ、海軍ヲ盛大ニシ、内意英ヲ圧倒スルノ気先已ニ対峙ノ勢ニ至リテ、自然又怠惰驕奢ニ流レテ、風薄弛怠ノ弊又甚シ、又上人和ヲ得ルヲ立トシテ、其法令如キモ弛ル処アリテ異戚薄シ、コレ等ヲ本原トシテ却テ人和ヲ得ス、挙軍敗ヲトルノ基ナリト云々、

佛国此般国内紛乱ノコトナポレヲン敗債後、共和政治トナリテ、稍ヤ其涯人心定ルカトヲモヘハ、却テ比日擾乱ノ基トナレリ、其故ハ万民共和政治トナリテハ、自立自旋ノ体裁ニシテ、自由ヲ得テ国内令ニ徒付スル事モ多ク、自欲スル処ヲ以テ経営ノ道ヲ量ラント、政府ノ令ヲ不聞、政府ハ又此ヲ度セントシテ聊カ威厳ヲ加ヘザルヲ得サルノ処、忽チ民激発シテ共和ノ真誠ヲ得ル能ハス、華麗ノ市街政府ヲ焼亡焦ルトナシテ、政府ノ悪政ニ酬ント企テ、俄然数万人蜂起シテ、放火乱妨至ラサルナシ、殆ト死傷ノ者此ニ十万人ニ及ヒ、婦女子ニ至ル迄、此ノ難ニ関スル者幾人カヲシラスト云々、不慮ノ国乱巴府ノ街道戦争ノ街道トナル、官軍敗レテ此ニ全治ノ日ヲシラスト云々、

米国チカゴ府ノ大火災未聞ノ難ナリ、戸数ノ数ハ二十五六万、死傷ノ者十万人ニ及フ、為ニ家産ヲ失フタルモノハ枚挙ナシト云々、

旧和歌山藩大参事津田又三郎建言ノ略ニ云、築地新島原郭引払跡地ヘ客舎ヲ営、都テ旧藩知事附属ノ者ノ借宅タラシムノ余アリテ、此御処置名義事情ニヲヒテ、忍ヒザルヲ以テ、彼汚穢ノ地ヲ措テ外ニ其良地ヲ撰ハン事ヲ乞フノ議アリ、難論ナリ云々、

箱館擒ノ内榎本和泉・永井玄蕃・澤宇右衛門・松岡健吉・荒井郁之助・松平太郎・大鳥慶助此人々未タ許サレス、先般薩藩ヨリ助命許罪ノ事ヲ建論ス、榎本對馬・阿部邦之介是ヲ許罪ノコトヲ乞フトイヘトモ、又可許ナシ云々、

水戸兵士ヨリ百姓・町人ニ至ル迄モ、洋服・洋器ヲ不用、只止ムヲ不得ハ砲器ノ類ニシテ、単ニ皇朝威有ノ風ヲ主張シテ、領内ニ散髪洋服ノ者来レハ、銃殺セシモ少カラス、太タ暴ナルコトニ及ヘリ、所謂攘夷説ノ徒ニ煽惑セラレテ、国内カクノ如クナラント、比日大参事ノ命アリテ、山岡鐵太郎ヘ任ストイヘトモ辞職セリ、又近比攘夷説起リテ、稍激徒モ諸処ニ潜伏スルモ少カラス、今ニモ洋人ニ変アラハ忽チ皇国ノ患目前ニアリテ、実ニ危篤ノ秋ト云フ、吉野十ツ川ノ郷士モシキリニ攘夷徒多ク、東京ヨリ帰サレタルモ少カラス云々、

西本願寺光尊上人航海ノ志願アリシニ、事故アリテ果サス、依テ今般其類族大坂廣教寺澤融・周防妙誓寺ノ黙雷両名ヲ欧米各国巡視ノ為ニ差遣シ、外ニ京都専修寺教阿・周防徳應寺蓮城・同光妙寺為然ノ三人ヲ、留学生トシテ差遣ス、此ノ五名正月廿六日出帆ノ佛舟ヨリ、華族蜂須賀茂韶・秋月種樹其他一同横濱発港ノ由、僧家ノ航海此ヲ魁首トシ、追々諸宗ヨリモ巡航、留学踵ヲ継クニ至ルヘシ、

此般赦宥ノ箱館徒ノ内、永井玄蕃ハ年六十有余ニシテ、気力尤モ盛ニシ、獄中ニテ始メテ洋書ヲ読ミ、遂ニ和蘭窮理書其他文法書ノ類ヲ暗誦スルニ至ルト云、

正月六日、松平容保・林忠崇ヲ始メ、秋月悌次郎・手代木直右衛門其他連座十二名ノモノ、特命ヲ以テ御預ケ御免アリ、同日徳川慶喜従四位ニ叙セラル、松平容保・大久保忠禮・内藤信思・水野勝知・伊達慶邦・南部利剛・丹羽長國・阿部正静・酒井忠篤・牧野忠訓・酒井忠惇従五位ニ叙セラレタリ、

○維新以来太政官并ニ民部省発行ノ金札製造ノ粗ナルニヨリ、贋造ヲ謀ル者間々有之、且ツ又従来旧藩々ニヲヒテ発行ノ金札・銭札ハ、管轄限リ通用ノ儀ニ付、一般流通ノ便ヲ失ヒ、其弊害不少、依テ今般御多端ノ折柄莫大ノ入費不為厭、精工ノ新紙幣百円・五十円・二十円・十円・五円・二円・一円・五十銭・二十銭・十銭・五銭ノ各種ヲ製造、壬申年二月十五日ヨリ右各種ノ内差向キ一円・五十銭・二十銭・拾銭ノ四種ヲ発行セシメ、追々製造成功ノ都合ニヨリ、従来官・藩両

様ノ金札ト引換候条、厚キ
御旨意ヲ体認シ、無疑念通用可致、尤モ一般引換ノ都
合ハ猶追テ相達シ候儀モ可有之、此段相達候旨旧臘布
令アリタリ、
或人建論云、古今紙札ノ弊害少々ナラス、先ツ国所ノ
疲弊、物価ノ沸騰、民ノ困苦ニ至ル勿論ニシテ、惟止
ヲ得サルノ期ニアリテ、一時救応ノ姑息ニ出ツル事云
ニ及ハス、尤モ現金銀ハ紙札ノ品位、尊卑ノ差別云フ
迄モナシ、不可察、仍テ仰願フ、疾ク廟議アリテ、此
ノ害ヲ除キテ以テ済生ノ道立スンハ、何時ノ国富民ノ
賑恤ノ法立ンヤ、当時太タシク売買ノ偏勝日々ノ損益
ヲ論スルニ至テハ、何時カ其平均ヲ得ルノ日アランヤ、
コヽニ至テハ官亦ソノ実〔ママ〕ノ日アルコトヲシラス、此
重弊アルヲ以テハ、人心ヲ安ンシ教化ノ行ハルヽ又遠
シトス、故ニ断然紙札ヲ革メテ、一文ハ一文ノ鉄鋳銭
ヲ造ルハ、却テ紙札ニ十倍ノ益アラン、之ヲ製スルニ
易シ、然シ又官紙札ノ基礎現金ノ本ナキヲ以テ、看々
其弊疾ハ知ルトイヘトモ、止ヲ得ザルカ、今ヤ紙札ヲ
以テ紙札ニ換ル、名ハ異ナレトモ事相同シキトキハ、
益々以テ其弊ヲ重ルニアラスヤ、竟ニソノ疾ヲ治スル
ノ道ナク、却テソノ病害ヲ重ルト云フモノナラン、人
心帰向ノ一則又重カラスヤ、古今惟国ヲ憂フノ一云々、
要ヲ揚略載、
本朝史記一名本朝戦国策　八十巻
日本一統志　百五十五巻
柳営史記　百巻
三部通計三百三十五巻、水戸義公ノ編集、

近頃舶来砂糖ニ灰炭・石炭等取交ヘ、御国産黒砂糖ニ
偽造売買スルモノアリ、奸商ノ処業不及是非、此般厳
重ノ御取締アリタリ、

横濱新聞云、宇内ノ人物集合シ、一夕盛ニ饗筵ヲ設ケ、
酒酣ニシテ各興ニ乗シ、其性質ヲ顕ス、左ノ如シ、
仏朗西人ハ躍ヲ舞フ　嬌軽技芸ニ長ス
日耳曼人ハ唱歌シ　質朴剛胆穏順也
伊斯巴尼亜人ハ博奕ヲ催ス　貪欲無類
英吉利人ハ只管飲食ス　剛欲粗暴
伊太利亜人ハ慢気ヲ起ス　花奢驕慢也
愛蘭土人ハ争闘ヲ始ム　粗暴也

亜米利加人ハ座中ノ紀事ヲ編ム　稀密穏順也
和蘭人ハ算ヲ為ス　小気利欲ヲ主トス
独逸人ハ黙止ス　平和温気也
支那人ハ謗言妬怒ス　粗陋暴戻也
日本人ハ国語ヲ以テ凱歌ヲ詠シ、外国人ノ身振ヲ為ス、

今般旧高松県知事松平頼聰伝来ノ名器千鳥ノ香炉ヲ献上セリ、又徳島県知事蜂須賀茂韶処蔵ノ古金銅銭及ヒ料紙・硯箱等ヲ献上セリ、

外国人ノ説ニ云フ、方今日本人ノ西洋書ヲ読ムモノ、多クハ会話・文典・究理書・地理書・歴史・政治書ノ類ニ止リテ、人生切要ナル修身学ヲ講究スルモノナシ、恐クハ本ヲ捨テ、末ニ赴クノ弊習ヲ生シ、遂ニ風偏頗ニ流ルヘシ、各注意スヘキ事ナリト云々、

今般東海道駅々伝馬所被廃、諸官員通行ノ節休泊等総テ相対ヲ以テ、相当ノ旅籠料相払ヒ、駅方ノ厄介ニ不相成様ニ心付ヘキ旨御布令アリタリ、

播州姫路ノ頑民但馬国ヲ煽動シ、生野県官員両人ヲ殺害シ、剰ヘ鉱山寮出張所ヲ放火セシ者共追々捕縛シ、糾弾伏罪ノ者斬首七人、縊首三人、正月廿日刑典ニ処セラルト云、

○元柳川藩城中出火、城郭天守ニ至ル迄不残焼失セリト、

○或ル人戯レニ、当府下人民ノ等ヲ分テ真開化ノ者一分、半開化ノ者二分、開化ヲ真似ルモノ五分、開化ヲ不知者二分ナリト、左モアルヘシ、

○今府下ニ於テ開化ヲ称呼シテ、放蕩暴戻ナル多シ、即其身士官身柄ノ者モ粗暴ノ為体、或ハ大酒放言丸坊主、或ハ上ハ戎服袴ヲ着シ、或ハ脱刀或ハ長刀或ハ異様ノ衣服、或ハサーベル剣ヲ帯シ、湯カタ大羽織ヲ着シ、種々放埒ノ様子身振ヲ為シ、謡声笑歌店先ニ起臥、路上ニ散歩シテ少モ恥辱身ノ嗜ミモナク、人ヲ誹嘲シ、無礼ヲ極メテ恥ヲ顧ミサル者ヲ開化ト心得ル類太タ世ニ多シ、シカナキ者モ比日ノ風習ト看テ過ルノ族モ多キハ、実ニ皇朝ノ風俗ノ乱レニシテ、外国人ニ対シテモ恥ヘキノ甚シキナリ、異風ニ同準スルスラ、制度ノ乱吾国ノ恥ナルヲヤ、イツレ先ツ衣服ノ制度乱俗ノ風ヲ更メムニハ、教化ノ妨ケ言ニ及ハス、歎息々々、

昨未年冬オーストリヤ、ウイン府ニ於テ、欧羅巴各国ノ兵数多少ヲ記シタル新書ヲ刊行セリ、其略ヲ左ニ表ス、各国ニ於テ事ニノゾミ出スヘキ兵数也、

俄羅斯

歩軍四十七ブリカーテ
騎兵十ブリカーテ
雷銃隊及ヒ予備隊八ブリカーテ
コスサツクス百九十九連隊
砲軍二百十九座
ミトライレウシス百五十座
通計人員八十六万二千人
馬十八万一千匹
砲二千〇八十四門

日耳曼

歩軍三十七ヂウキシユン
騎兵十ヂウキシユン
砲軍三百三十七座
通計人員八十二万四千九百九十人
馬九万五千七百二十六匹
砲二千〇二十二門

ヲーストリヤ

歩軍四十ヂウキシユン
騎軍五ヂウキシユン
砲軍二百〇五座
通計人員七十三万三千九百二十六人
馬五万八千百二十五匹
砲一千七百門
ミトレールレウス百九十門

英吉利

陸軍改革中

都児格

本兵　六軍
予備兵十二軍
砲軍百三十二座
通計人員二十五万三千二百八十九人
馬三万四千八百三十五匹
砲七百三十二門

佛蘭西

歩軍三十二ヂウキシユン
騎軍十二……
砲軍百四十座
通計人員四十五万六千七百四十人
馬四万六千九百九十五匹
砲九百八十四門
但佛朗西戦争後兵備其半ヲ減ス、

白耳義
兵員十四万五千人
馬七千匹
砲百五十二門

和蘭
本兵三万五千三百八十三人
農兵八万七千人
馬二万五千二百疋
砲百〇八門

スウイス
兵員十六万人
馬二千七百疋
砲二百七十八門

羅瑪尼亜都児格ノ一部
兵員十万〇六千人
馬一万五千六百七十五匹
砲九十六門

スウイーテン及ヒ諸威
兵員六万一千六百四人
馬八千五百疋
砲二百三十二門

ギリシヤ
兵員十二万五千人
馬千匹
砲四十八門

スペイン
兵員十四万四千九百三十八人
馬三万〇二百五十二疋
砲四百五十六門

デンマルク
兵員三万一千九百十六人
馬二千百二十匹
砲九十六門

ホルトカル

兵員六万四千三百九十三人

馬六千三百三十匹

砲九十六門

右諸国ノ兵備ヲ惣計シ、英吉利ノ兵員ヲ四十七万〇七百七十九人トシ、砲数ヲ三百三十六門トスレハ、欧羅巴諸国ノ常備兵ヲ合シテ五百十六万四千三百人、馬数五十一万三百九十四匹、大砲一万〇二百二十四門ナリ、

〇太政官札四千五百万両出来、右ノ内太政官紙幣局ニテ二千五百万両、商社又ハ横濱・長崎・浪花ノ三ケ所ニテ二千万両ナリシ、蒸気鉄道ノ入用料英ノ商人レイト云者ヨリ五百万ドル借用ノ約定ナリシカ、種々悪計奸商ニテ、利高キ故ニ御謝絶相成リタリト、

青茶摘手間一貫目ニ付、四百五十文

但青葉ニテ一貫目ヲ以テ、本茶百六十六匁ヲ得ル、

一日一人ニ付、本茶六貫目ヨリ七貫目迄ヲ作ル、

製造手間代四百二十四文

薪炭製焙紙糊等ノ雑料二百五十文

但製茶手間代食料共ニ一歩也、

本茶一貫目ノ元価凡二両ト二十目位

当今横濱相場三両二朱位、ドルノ相場一両一朱位

右製茶家ノ為ニ当時ノ価費ヲ誌ス、

地球ノ太陽ヲ周ル速勢ノ説ニ、英ノロントンヨリヒユルト云ヘル地マテ、蒸気車ニテ二百里ノ行程ヲ行キシカ、日本里法八十一里、其間ニ此地球ノ行度ハ空天ヲ四十一万里、日本ノ里数十七万八百里程モ転過シタリ、此割合ニテ算計スレハ、一時間ニ六万八千里、日本ノ里数二万八千三百里ナリ、一ミニュート間ニ一千里余、日本里法四百十里、一セコント間ニ十九里余、日本ノ七里許リナリ、

二月六日震災ニ付、濱田県ヨリ届書

過日不取敢御届申上候、当県内稀代ノ震災ニテ、濱田町家屋過半破壊焼失、死者百五人程、傷者二百四十七人許リ、猶在々ノ儀モ軽重ハ有之候ヘ共、粗一般ノ儀ニテ、人民ノ死傷且ツ山崩レ地裂ケ、堤防・井手・道橋等ノ破損夥シク、甚シキニ至テハ一村過半沈没、或ハ田方用水ノ源ヲ塞キ、差向キ耕作不相成場所モ数ケ

所有之、此節官員差出取調中ニ御座候、右ノ次第ニ付、死者ニハ埋葬料差遣シ、傷者ハ仮リニ病院ヲ取建治療ヲ施シ、其他凶災ニ罹リ候窮民共ニハ、焚出救米等相与ヘ申候、尚今以昼夜数拾回震動イタシ候ヘトモ、先ツ漸々平穏ノ方ニ御座候云々、

向キニ記載セル元生野県管下騒擾ノ兇徒、此節豊岡県ニ於テ厳ニ取調ニ相成リ、正月二十五日斬罪七人、絞罪三人裁断アリ、猶残徒人数多拘引ノ内、死刑ノ者モ之レアルヨシ、右騒擾ハ元姫路県管下ニ起リ、同管下各所放火数十家ヲ焼キ、其惨毒目モ当テラレヌ有様ナルニ、未タ何ノ処置アルヲ聞カス、然ルニ今般飾磨県ヲ置カレ、令・参事入県ニ相成リ、元県ノ処置汗漫ナルニ起レリ、追々厳シキ処分アルヘキ由云々、

二月廿六日、当府下大火アリ、此ノ日三字比和田倉御門内元會津邸ヨリ出火、折節風烈シク諸処ヘ飛火イタシ、大名街兵部省長・岡山県・高知県ノ邸ヲ焼払ヒ、夫レヨリ京橋西紺屋町并ニ銀座二丁目、火道ハ銀座一丁目ヨリ尾張町二丁目迄、御堀端道數寄屋町河岸迄、三十間堀ハ三丁目迄、新島原南側不残、木挽町一丁目ヨリ五丁目迄、西本願寺中不残、築地南飯田町ヨリホテル迄焼失ス、因テ府庁ヨリ救助トシテ、一人金一分ツヽ、死傷ノ者同二両二分ツヽ下サレタルヨシ、焼失町数戸数并ニ死傷員数左ノ如シ、

町数四十一町　戸数四千八百七十四戸　人員一万九千八百七十二人　死者八人　傷者六十人

救助金惣計三千八百三十五両一分

此火災遭厄ノ徒救助トシテ、第一等官ヨリ十五等官ニ至ル迄、俸禄給金ノ内ヨリ之ヲ出サシメ、之ヲ給与セリト云、其涯小火災ハ処々数々アレトモ、別ニ救助ノ御手当ナシト、之ヲ観過ス事ハ大小ニ従テ情実モ格別変リアル事、古今マタ珍シカラス、

一夢物語　府庁ニ投無名氏

憂国之情、所凝結夢中如此、人材得寤而至筆之、似議太政、或恐或慨決而不示之人篋中秘耳、近頃益友中邑君得、共語国事与余同病、因開篋中以示之云尓、

一人材登用未知当否、勤

王起大志及有戦功者、為己逢擯斥失所依頼、伏惟薩・

長・土三州ハ天下諸侯伯ニ先テ、勤
王ヲ唱、楠公・新田公ノ事蹟ヲ起立シテ、終今日復古
ノ再興ニ至ル、其功可謂偉矣、抑草莽ノ士
王室ノ衰微ヲ哀、慷慨自憤老親妻孥ヲ棄、自無力ヲ知
リ、公卿及薩・長・土ニ依頼或慨然趣死、或ハ幽囚或
ハ奇禍ニ逢ヒ、或ハ兵ニ死ス、或立軍功者アリ、然方
今棄レテ不得其所者不少、国是不定一也、
一上令シテ下不信之、古商鞅刑名ヲ以テ治天下、先首ニ
下民ノ信否ヲ善聞善見テ、而後設法施令、是以刻薄ノ
政トイヘトモ、下民善ク信従ス、蓋方今世道ヲ観察ス
ルニ、下民疑上者多、国是不定二也、
一執政大臣ノ大権傾テ在史局、史局人材登用職務進退ヲ
司ル、執政大臣曰、誰氏有戦功、且人材可用ヲ達ス、
史局己レノ意ニ不協ハ拒テ不挙之、国是不定三也、
一大蔵量入制出常法也、蓋聞、今也多冗費・冗役・冗官、
入不能制出、抑官不得廉吏、国是不定四也、
一兵部未聞有立兵制已雇洋人授練兵、省中兵学者一朝纔
不過半小隊、洋人大怒曰、兵気不振、烏ソ伝習乎、終
不出、乃軍務官員失節制、国是不定五也、
一蔵省・刑法・兵部ハ如鼎之三足、一足顛スルトキハ、
不能維持国家、刑法已有人、蔵省・兵部大省不振他ノ
省局、国是不定、可以類推也、

史局

薩・長・土三州ヨリ撰任シテ、人材登用職務進退スヘ
シ、今土州(長)専任之梶(楫)取素彦ヲ補任スヘシ、或挙人可無
偏頗也、

議官

前原彦太部・松平権十郎・大久保一翁等ヲ補任ス可シ、

大蔵

内田サツ・松平山口之ヲ大輔・少輔ニ補任ス可シ、

兵部

勝房州ヲ挙用、榎本・大鳥以下其罪ヲ免サレ、兵事ヲ
主サトラシメ、最モ本ノマヽ、

二三四　天野御民ノ学問議略

十一月司法権大録天野御民学問議ノ略ニ云、日本ノ詞
ハノ国タル云ヲ待タス、五州万国皆詞ヲ以テ宗トセサ
ルハナシ、文字ノ如キハ只僅カニ仮リテ之ヲ伝ルノミ、
独リ支那専ラ文字ヲ尊ヒ、其字数ノ多キコト幾千万、

其活用ノ博キ若干訓、其国人ノ如キハ然ラス、何ソ学ノ迂遠ナルヤ、欧洲諸国ノ如キハ然ラス、原字纔カニ廿六、以テ種々ノ語ヲ通シ、二三字合シテ一音トスル、至便ト謂フヘシ、然レトモ我邦五十韻ノ厳正ニシテ、文字語音相契ヒ、有余不足ノ偏ナキ者ニ比スレハ、支那ハ固ヨリ多キニ過キ、欧洲ハ猶少キニ誤リ、独リ中正ノ至便ヲ伝ル我邦文字ニ如ク者アラス、漢学盛ナリショリ以来、人国字ノ至便ヲ忘レ、徒ニ他邦至難ノ文ニ拘泥シ、終身刻苦唯字句ニ是レ争フ、可不悲哉、方今欧洲各国、英ニハ自ラ英語アリ、佛ニハ自ラ佛学アリ、幼ヨリシテ学ニ入ル、皆其詞ヲ以テ其学ヲナス記シ易シ、大概三年ニシテ一科ノ学ヲ究メ、十有七八ニシテ、一人ノ力ヲ食ニサルハナシ、独リ日本己カ至便ノ文字ヲ閣キテ、漢土至難ノ文字ヲ学ヒ、力ヲ無用ノ地ニ費ス多クシテ、実際ノ上ニ達スル甚タ稀ナリ、是レ人ノ力メサルニハ非ス、学ノ方立サルニ由レハナリ、方今百度一変文化日ニ開ク、学制モ亦更殆センハアラス、其語ハ現今普通ノ語ヲ以テシ、其学ハ通用五十ノ仮名ヲ以テシ、而シテ、万国ノ経史読書訳出残ス所ナクンハ、女児童蒙ト雖トモ、亦読ミ易ク、知リ易カランモ又甚ク難カラサラン、其各国ノ原書原語ヲ学フハ、マタ各其好ム所ニ従フテ可ナリト云々、

右ノ評

学文ハ他ナシ、五洲万国皆詞ヲ以テ宗トス、文字ノ如キハ只僅カニ仮リテ之ヲ伝ルノミ、独リ支那専ラ文字ヲ学ヒ、其字数ノ多キ幾千万、其活用ノ博キ若干訓、欧洲諸国ノ如キ原字纔カニ廿六字、独リ我カ邦五十韻文字語意相契ヒ、有余不足ナシト、又英夷ニハ英語アリ、佛ニハ仏語アリト云ヘリ、我邦一国ノ内ニテサヘ東西南北言語ノ替リアリ、今新タニ不謂トモ万人克ク之ヲ知ル、又支那ノ多字ヲ迂遠ナリトシ、僻郷ノ野人教導スルニ不足トシ、我カ邦ノ五十韻弁ナルヲ以テ、漢字ヲ廃シ、万巻ノ経史残ス所ナク、五十韻ノ仮名ヲ以テ之ヲ訳出セハ、其雑費幾万課ニ及ヘキカ、又五十韻ノ仮名ヲ以テセハ、義理ヲ不貫視ルニ弁ナリト云ヘトモ、実義ヲ取失ヒ、タヽ万巻ノ書ヲ闇誦シテ何ノ詮カアラン、今文化日ニ開ケシト云フ、君臣上下ノ義理ヲ紊シ、礼義廉恥ノ道ヲ失ヒ、万巻ノ書ヲ闇誦シタリトテ、文化開ケタリトセンカ、今僻郷ノ野人、学文ハ全ク、露文ハ全ク、露知ラスト云トモ、人倫ノ道ヲ不

紊者余多アリ、又万巻ノ書ヲ見憐、学ト聞ヘシ者モ人倫ノ道ヲ失ヒ、世俗ニ不通者モ又余多アレハ、人ヲ善道ニ導クハ、天性ノ生質ニヨリ備リタル得手アリ、又主宰スル人ノ心ニアルベシ、畢竟此事ハ全体紅毛ノ道ニ迷乱シ、売学ヲ主トシ、偏ニ漢学ヲ廃シ、洋学ニセントスルノ賤心ヨリ起シ論、最ト浅猿シキ事ニ非スヤ、

二三五　女子学校興設ナト云々

一人々生命ヲ保護シ、人間交際之道ヲ知ル之教化ヲ以テ、蒙昧之愚ヲ開外他ナシ、当春以来学校一新、遍ク子弟之教導方被仰付候段ハ、何レモ自規之通ニ候、就テハ女子学校ヲモ及興設賦ニ候得共、急速ニハ其運ニモ至兼候間、一統其心得ヲ以尓来男女共教育行、以下ナシ

二三六　勅諭ニ対スル某意見書

臣恐ナカラ真勅ニ非ス偽勅ナルヲ以テ天下ノ為ニ示ス

朝廷新華族ヲ小御所ニ召レ親ク勅諭アリテ、国民智ヲ開キ材ヲ研キ、勤勉ノ力ヲ以テ外国ト并馳ント欲ス、夫故男女洋行スル事ヲ命シ玉フ、是　天子ノ詔言ニ非ラサルヘシ、畢竟　天皇ノ傍ニ奸曲ノ徒アリテ、上ヲ欺妄シ、猥リニ勅意ト云フテ下ヲ欺キ、天下ヲ紊スノ賊心ナラン、華族ハ天下ノ柱石、唯傍観シテ、一人モ慷慨スル者ナキハイカン、縦令版籍与奪ノ命アリ、憤怒ノ情モアルトモ、黙シテ言ハサルハ実ニ遺憾ニアラスヤ、方今ニ於テ西洋膝下ニ迫リ、日本ノ危キ累卵ヨリモ甚シ、寔ニ危急ノ時ナリ、然レハ華族ヲ召レ候ハヽ、第一博覧ノ士ト聖賢ノ蹤ヲ尋ネサセ玉ヒ、佞奸ノ臣其身ノ権勢ニ募リ、上聞ヲ掠メ政道邪路ニ入リ、世ヲ惑ハシ民ヲ〔誣カ〕殘シ、刑罰其罪ニ当ラス、国体ヲ失ハサルカ否ヲ左右ノ大臣ト之ヲ議論シ、朝家ノ規則ヲ準縄シ、而シテ天下ノ政事ヲ掌ル者ノ邪正ヲ被相糺、大義ヲ立居玉フ事　天子ノ倫言トモ云フヘキニ、啼哀哉、ケ様成小器ノ事ヲ命シ玉フ事、畢竟君側ヘ佞奸邪智ノ者アリテ、欺妄スルニ無疑、日本ハ万国ニ秀テ、君子国ト呼レシ日本ニシアレハ、何ソケカラハシキ醜夷カ輩ト肩ヲ並ヘ玉フノ理アラス、勿論何様機械ニ智弁ナリト云トモ、日本ニ於テ何ノ用ヲカナサン、洋夷入侵

殆ト廿年、彼カ長スルハ砲術ノミ、日本ニ於テモ又熟セリ、外ニ何ヲ以テ日本ノ用ニ当ランヤ、一ツトシテ用ユヘキノ品ナシ、是洋人ニ恢惑沈酔シテ其是非ヲ不弁者共ナリ、殊ニ男女洋行シテ外国ヘ留学シ、実地ノ学ヲ講スルヨリ要ナルハナシトノ玉フ、洋学ニ於テ、何ヲ目的トシ何ヲ実学トスヘケンヤ、然レハ今日ノ学ミナ虚学ニシテ、人倫ノ道ニ非ストスヘケンヤ、是ニテ　天子ノ御心ヨリ出タル勅命ニ非ス、偏ニ洋学ニ泥ミシ者共カ、押テ偽勅ヲ出ス者ナリト知ルヘシ、

二三七　明治四年辛未十月雑誌

黒羽県権大参事大沼泰秀・同梁瀬昌幸、少参事大塚延接等願書ノ略ニ云ク、今般廃藩為県、有名無実ノ弊ヲ蠲キ、政令帰一ノ境ヒニ至ラシム、臣等積年ノ期望スル所、豈可不傾躍哉、大綱已ニ立ツ、細目ハ随テ挙ルヘシト雖トモ、臣等此盛世ニ向テ一日モ偷安ニ忍ヒス、早ク士族・卒ノ世禄ヲ廃シ、尊大ノ弊習ヲ忘ント欲ス、然レトモ目前ノ生計ヲ顧ス、人民ヲシテ遽ニ其名ヲ失ハシメハ、却テ盛世ノ鴻業ヲ妨クルニ似タリ、故ニ臣等熟議ヲ遂ケ、請フ所ノ件々ヲ蒙リ、漸ヲ以テ農ニ帰スルノ方策ヲ立ントス、人材ハ政教ノ基ヒナリ、国家ノ元気ナリ、今ノ時ニ方リテ尤モ欠クヘカラス、然ルニ僻郷(イナカ)ノ人民従来未タ教ナシ、故ニ名分ヲ知リ、時勢ニ通スル者幾ト稀ナリ、然レハ則今日ノ急務ハ、教化ヲ布キ人材ヲ育クスルニアリ、縦令人民生産ヲ遂クルト雖トモ、教ナキ時ハ何ノ用ヲカ為ン、然ルニ前知事大關増勤勉戊辰ノ戦功ヲ賞セラレ、高壱万五千石ヲ拝賜ス、抑成功ハ固ヨリ　朝廷ノ赫威ニシテ諸藩ノ尽忠ニ因ル、増勤ニ於テ尺寸ノ力アルニ非ス、長ク　皇恩ヲ叨(ミタリ)ニスルコトヲ怖ル、因テ今之ヲ固辞センコトヲ欲ス、只其少分ヲ乞テ前ニ陳直スルカ如ク、前年来創立ノ教校ヲ葺輔シ、益々諸芸ヲ講究シ、智ヲ研キ道ヲ修メ、懋テ人材ヲ用ヘキ者ヲ出シ、長ク此法ヲ以テ皇恩ヲ万世無窮ニ逮サンコトヲ欲ス、其余一旦帰田開墾ノ基ヒヲ補ヒ、且ツ戦場死膓ノ狐猖ヲ撫恤シテ、統永世之ヲ海陸軍費ニ奉献納度ノ旨、増勤至切之志願ナリ云々、

黒羽県大参事大沼泰秀抔カ論議、洋夷ノ道ニ採リテハ不論、日本ニ於テハ天地ニ不容奸賊ノ論ナリ、今之ヲ

論ルニ不足ト云ヘトモ、此雑誌ニ出シテ世ノ人ヲ蠱惑サスルカ面醜キ故、之ヲ論ス、第一国主大關カ社稷ヲ廃シ、花族ト云フ名ヲ附ケ、公卿ヘ引付ケ、己レ国家ノ政事ヲ奪ヒ、政導ヲ恣ニシ、月給ト云フ賃銀ヲ極メ、慾心ヲ以人ノ心ヲ結フ、是人倫ノ道ヲ紊ル、実ニ天下国家ヲ乱ス奸賊ナリ、今藩ヲ廃シ県トナシ、有名無実ノ弊ヲ蠲キ、政令一ニ帰ス、之積年ノ期望、大綱已ニ立ツ、此盛ナル世ニ向テ一日モ偷安ニ忍ヒス、早ク士族・卒ノ世禄ヲ廃シ、尊大ノ弊習ヲ忘レント云フ、之何ト云フコトソヤ、西洋ノ供化政ト云悪道ヲ聞伝ヘ、之ヲ善キ事ナリト思ヒ、此毒ヲ日本ニ流サントスルカ、甚タ悪ムヘシ、今王政ニ復セハ益々封建ヲ厳ニシ、人倫ノ大道ヲ糺正シ、士農工商ヲ節倹シ、富強兵ノ令ヲ以テ、犯スヘカラス、紊スヘカラサルノ道ヲ正サハ、有名無実ノ習弊ト云フ言ヲ出ストモ、誰カ之ヲ間然セン、封建ニ於テ何ヲ以有名無実ト云フヤ、徳川ノ権ヲ解キ、王政ニ復スルヤ否ヤ醜夷ニ金銀ハ奪ハレ、致方ナキ所ヨリ楮幣ヲ製造シ、剰ヘ風ヲ移シ俗ヲ易テモ其事ハ恥ス、是コソ有名無実ト云ヘキ、己レ不臣ノ心ヲ懐キ、主人ヲ廃シ、不似合高官ニ昇リ県ヲ主宰シ、其上ニモ飽コトヲ不知、士族・卒ノ禄迄モ廃シ、農民ニ混合シ人心ヲ紊ス、是ニテモ名アリテ実有ト云ヘキヤ、可醜ノ至リ、己レ庶人トナリ、而テ主人ヲ尊敬シ、君臣ノ義ヲ全フシ、人心ヲ不紊ノ所置ヲナサハ、少シハ人心ノ志モアルヘシ、今王政ニ復シ政令帰一ノ場ニ至リ、大綱立トハ最トヲカシ、日本綱紀ヲ紊リ、西洋ノ風ヲ慕フテ大綱已ニ立ツトハ、実ニ狂人ノ心ナルヘシ、又人材ハ政教ノ基ヒ、国家ノ元気、今ノ時ニ方リ尤モ欠クヘカラス、然ルニ僻郷ノ人民従来教ナシ、故ニ名分ヲ知リ時勢ニ通スル者幾ト稀ナリ、今日ノ急務ハ教化ヲ布キ人材ヲ育スルニアリ、縦令人民生産ヲ遂クルト云ヘトモ、教ナキ時ハ何ノ用ヲカ為ント云フ、今初テ今日ノ急務ナルコトヲ存致候ヤ、之愚昧ノ至リ、人倫ノ道忠孝ヨリ外ニ出ツヘカラス、日本ハ外国ヨリ君子国ト云ハレシ程ノ目出度国ナルヲ忘レ、主人ヲ廃シ、其上ニモ又士族・卒ノ世禄迄ヲモ廃シ、日本ニ毒ヲ流サントスルノ心ヲ以テ、此日本人ノ心ヲ紊サント教化スルハ、甚タ醜ムヘキノ至ナリ、人材ニ取リテハ今更ニ云フニ不及ト云ヘトモ、大沼カ如キ者アレハ一二是ヲイハン、人材ハ人各天姓受得タル才智アリ、其性ニ

不合道ヲ日ニ月ニ練磨スルトモ、何ノ益カアラン、其証拠ニハ、僻郷ノ野人学文ハ全ク露知ラスト云ヘトモ、父母ニ孝ニ兄弟ニ親ミ、朋友ニ睦シク、天性ノ美質アルモノアリ、又士族ニ於テ博学多才ナレトモ、世上ニ不通、忠孝ヲ道ニ疏リ、人倫ノ道ヲ紊ル、汝カ如キ者モ多クアリ、然レハ教アレトモ天性受得タル精心ノ清濁ニヨリテハ、聖人ニモ劣ルニアラスヤ、故ニ聖賢君子道ヲ摂督シ、不可犯ノ法ヲ制度セラレシニ非スヤ、今大沼抔西洋ノ意ヲ含ミ、是非西洋ノ道ヲ主張スルハ、天理ニ背クノ罪人ナリ、日本ニ於テモ又国ノ風土ニヨリ、言語人品異同アリ、夫故風ヲ移シ俗ヲ易ルハ、実ニ日本ノ奸賊ナリ、

二三八　勅諭ニ基キ女子留学生ヲ派遣ス

明治四年未十月廿二日・二十三日・二十四日ノ間華族一同小御所ニ召サセラレ　上親シク酒饌ヲ賜ヒ、舞楽ヲ奏セシメラル、其節ノ　勅諭ニ曰、

朕惟フニ、宇内列国、開化富強ノ称アル者、皆其国民勤勉ノ力ニ由ラサルナシ、而シテ国民ノ能ク智ヲ開キ、才ヲ研キ、勤勉ノ力ヲ致ス者ハ、固リ其国民タルノ本分ヲ尽スモノナリ、今我国旧制ヲ更革シテ、列国ト並馳セント欲ス、国民一致、勤勉ノ力ヲ尽スニ非レハ、何ヲ以テ之ヲ致スコトヲ得ンヤ、特ニ華族ハ、国民中貴重ノ地位ニ居リ、衆庶ノ属目スル所ナレハ、其履行固リ標準トナリ、一層勤勉ノ力ヲ致シ、率先シテ之ヲ鼓舞セサルヘケンヤ、其責タルヤ亦重シ、是今日朕カ汝等ヲ召シ、親シク朕カ期望スル所ノ意ヲ告ル所以ナリ、夫レ勤勉ノ力ヲ致スハ、知ヲ開キ、才ヲ研ヨリ外ナルハナシ、智ヲ開キ、才ヲ研ハ、眼ヲ宇内開化ノ形勢ニ着ケ、有用ノ業ヲ修メ、或ハ外国ヘ留学シ、実地ノ学ヲ講スルヨリ要ナルハナシ、而年壮ヲ過キ、留学ヲ為シ難キ者モ、一タヒ海外ニ周遊シ、聞見ヲ広ムル、亦以テ智識ヲ増益スルニ足ラン、且我邦女学ノ制、未タ立タサルヲ以テ、婦女多クハ事理ヲ解セス、殊ニ幼童ノ成リ立ハ、母氏ノ教導ニ関シ、実ニ切緊ノ事ナレハ、今海外ニ赴ク者、妻女或ハ姉妹ヲ挈リテ同行スル、固ヨリ可ナルコトニテ、外国所在、女教ノ素アルヲ暁リ、育児ノ法ヲモ知ルニ足ルヘシ、誠ニ能ク人々、此ニ注意シ、勤勉ノ力ヲ致サハ、開化ノ域ニ進ミ、富強

ノ基随テ立、列国ニ並馳スルモ難カラサルヘシ、汝等能ク斯意ヲ体シ、各其本分ヲ尽シ、以テ朕カ期望スル所ヲ副ヘヨ、

此故ニヤ、黒田開拓次官周旋ニテ、女学生五名亜墨利加国留学トシテ、同国全権公使テコンクノ妻ニ托シ、十一月十二日横濱港出帆、紐育府（ニューヨルク）へ差送レリ、其人員

東京府貫属士族同府出仕　吉益正雄娘亮子　十六歳

静岡県士族　永井久太郎養女繁子　十一歳

東京府貫属士族　津田仙彌娘梅子　九歳

青森県士族　山川與七郎妹捨松　十二歳

東京府貫属士族　上田畯娘悌子　十六歳

右ノ者同月九日宮内省ヘ召サセラレ、皇后宮ヨリ茶菓并紅縮緬一匹宛下シ賜リ、左ノ御書付御渡アリタリ、

其方女子ニシテ、洋学修行ノ志誠ニ神妙ノ事ニ候、追々女学御取建ノ儀ニ候ヘハ、成業帰朝ノ上ハ、婦女ノ模範トモ相成候様心掛、日夜勉励可致事、

二三九　勅書ニ対シ某建白書

藩ヲ廃シ県ヲ置レ候事、弁官被廃候ニ付テハ、諸願伺届等総テ其関係ノ諸官省ヘ直ニ可差出候事、

右之通被仰出候ニ付、勅書ニ異説ヲ立ルハ其懼レアリトイヘトモ、先勅書ニ不顧忌諱建白スル様ニ令アリ、何貴賤ニ不拘由ト存スレハ、存慮ノ概略左ノ如シ、

今藩ヲ廃シ県トナシ、有名無実ノ弊ヲ捨テ、政令一ニ帰セシメテ万国ト対峙シ玉トハ、今県トナシ玉フ時ハ、富国強兵ノ道確乎トシテ行ハレ、日本万古不易ノ御基礎相立、万国并立テ対応シ玉フノ道アルヘキヤ、然レハ俗ヲ易ヘ風ヲ移シ、倭魂ヲ変シ初洋（ママ）ノ魂トナシ玉フテ、之ヲ有名無実トイフヘキヤ、徳川ノ権ヲ解キ王政ニ復シ玉フ時ハ、徳川ノ政令ト校計シ、日全盛シ玉フヘキコトナルニ、今諸品ノ高騰ナルト万民ノ困窮、紙幣ヲ用ヒ玉フヲ以テ、余ハ押テシルヘシ、是只皆有名

無実トイフヘシ、後醍醐天皇ノ御時、暫時王政ニ復シ、藤房・正成抔ノ如キ人傑多キ時ニ方テ不被行郡県、今夷国交際ノ時ニ当リテ、郡県ノ御制度イカヽアルヘキ、兎角威権上ニ立テ、下万民不可犯程ノ御威光不相立ハ、日本ヲ治メ玉フコト難ク、徳川ノ政柄タル時ハ、万民王朝ヲ敬畏シ、政令一ニ帰シ、下位ノ公卿往来スル時ニ当テモ、下愚ノ万民恐懼スルヲ以テ、今ノ人心朝廷ヲ軽蔑スルヲ知ルヘシ、況ンヤ当時ノ人物ニ於テヲヤ、徳川ノ権ヲ解キ王政ニ復セハ、第一日本ノ人心ヲ治メ、機ニ臨ミ変ニ応シ、政令ヲ改メ玉フヘキコトナルニ、一ツトシテ徳行ノ道不行、麁暴ノ洋道相行レ候テハ、終ニ蛮夷ノ風俗ト一変スヘシ、畢竟此事ハ、朝廷ノ命ハ、日本ノ風俗ヲ不紊様ノ御意タリトイヘトモ、奸賊ノ輩　玉座ニ咫尺シ、上ヲ欺妄シ押テ勅書ヲ出タサシメシモノトシルヘシ、却テ是則徳川ノ権ヲ解キ、王政ニ復スル有名無実ノ行ヒト知ルヘシ、往古神功皇后ノ女帝ナレトモ、新羅・百済ヲ討テ、新羅ハ日本ノ土ナリトマテイヤシメ玉フ程ノ御偉功、千載ノ今ニ至テ、日月ト并ヒ賞スルニ非スヤ、古ヨリ権下ニアル時ハ国家危ク、建武・永禄之比北條・足利カ時代ヲ視ルヘシ、権下ニアリテ天下殆ト危シ、シカレトモ君ヲ軽蔑スル程ノコトハナシ、頼朝天下ヲ預リ、封建ノ制度アリシハ、日本ノ外国ヨリ不被犯、藩屏ノ任ヲ突居ヘ玉フモノナラン、頼朝ノ愛子忠久ヲシテ、細国ノハテ薩州ヘ任シ玉フヲ以テ、頼朝天下ヲ以テ私ニセス、日本無異ノ化ヲ先キトシ玉フヲ以テ知ルヘシ、夫故外国人万々日本ヲ窺フトイヘトモ、一寸ノ地ヲ奪レ玉フコトナシ、今政令一ツニ帰シ、郡県ノ制度アリテ国体ヲ解キ、万国ト対峙シ玉フノ廟算イカヽアルヘキ、予其可否ヲ不知トイヘトモ、今郡県ヲ行フ時節ニアラス、益々封建ノ道厳重ニ行ハルコソ、真ノ王政トイフモノナランカ、

未十月中旬

〔表紙〕

忠義公史料　明治四年十一月

二四〇　県庁旧藩内農商ノ佩刀及給俸免役ノ類ヲ停ム

明治四年十一月三日、県庁旧藩内農商ノ佩刀及給俸免役ノ類一切之ヲ停メ、又分与賞禄ヲ検査録上ノ令ヲ達セリ、

未九月晦日

元各藩ニ於て管下之百姓・町人共江帯刀差許、或ハ扶持米遣シ、諸役免除等申付置候分一切禁止候事、

但御一新後軍功有之欤、又は従前之分タリトモ、一時廃止難相成見込之分ハ、巨細取調大蔵省江可伺出事、

辛未九月（晦日）　太政官

別紙之通被　仰渡候段申来候条、向々江可申渡事、

但書之通廃止難相成分ハ、民事局ニおゐて取調、早々可申出事、

辛未十一月三日　鹿児嶋県庁

二四一　県庁刑死人屍体下付ノ令ヲ達ス

明治四年十一月五日、県庁刑死人屍体下付ノ令ヲ達セリ、

一絞・斬・梟示等之刑ヲ加へ候遺屍、親族之内請受度望之者有之候ハヽ、下付被差許候ニ付ては、願出候輩ハ行刑当日東京府囚獄掛江可申出、若当日願無之分ハ、東校解剖場江引渡置候間、同所江可申出者也、

但府県ニ於テモ、刑屍取計之儀右ニ準シ不苦候事、

右各府県ニ於テ、部内末々迄一般ニ告諭可有之候也、

辛未十月　司法省

別紙之通被仰渡候間、向々江可申渡候、

辛未十一月五日

鹿児嶋県庁

二四二　県庁六十六部ヲ禁ス

明治四年十一月五日、県庁六十六部ト称シ巡歴米銭ヲ乞フ者ヲ禁シ、逃籍者ハ其本貫ニ復セシメラル、

一平民廻国修行ノ名義ヲ以テ六十六部ト称シ、仲間ヲ立寄宿所ヲ設ケ置、米銭等ノ施物ヲ乞候儀、自今一切禁止候事、

但従前寄宿六部共ノ内脱籍之者ハ、復籍規則ニ照準シ、其本貫ヘ帰籍可為致事、

辛未十月（十四日）

太政官

別紙之通被　仰渡候条、向々ヘ可申渡候、

辛未十一月五日

鹿児嶋県庁

二四三　県庁城内取締向ノ心得ヲ達ス

明治四年十一月五日、県庁城内取締向ノ心得ヲ達セリ、

一御城内之儀、追々諸局転局ニ付ては、取締向一涯不行届候ては不相済事候付、詰前之検事・徇達より時々致見締、不締之場所は形行可申出候、左候て御門番之儀も厳重相勤、是以聊不締之儀共無之様可取計候、此旨監察局并可承向々江も可申渡候、

辛未十一月五日

鹿児嶋県庁

二四四　県庁各郷校設置管轄ヲ達ス

明治四年十一月七日、県庁各郷校設置管轄ヲ達セリ、

一第十二郷校

右吉野・帯迫・中別府合併

一第十三郷校

右下町

一第十四郷校

右上町

一第十五郷校

右西田町

右之通追々郷校取建方ニ付、右之名目ニて本学校管轄

申付候事、

辛未十一月七日

鹿児嶋県庁

二四五 県庁会計局ノ転局ヲ達ス

明治四年十一月七日、県庁会計局ノ転局ヲ達セリ、

一会計局之儀、今日より県庁郭内江転局相成候条向々江可申渡候、

辛未十一月七日

鹿児嶋県庁

二四六 県庁諸役所貸付金上納ノコトヲ達ス

明治四年十一月八日、県庁各衙貸付金十分一切捨テ上納ノコトヲ達セリ、

一旧寺社方
一旧宗門方
一旧御製薬方
一旧御廐
一旧屋久嶋方
一藍玉方
一木之実油方
一蚕織方

右は、諸所御在合銭之内、持高名寄引当を以利付拝借申付置候株々、本金十分之二上納ニて、残金は都て被下切申付候、左候て上納方ニ付ては向々引付を以、来月十五日限都て金蔵上納ニて納済之上は、蚕織方会社入付申付候条可申渡候、

但当年中利銀之儀は不及上納候、

辛未十一月八日

鹿児嶋県庁

(按)従前士族中、持高証文抵当ヲ以テ貸付ノ例アリ、各産物取扱ノ役衙ハ、融通金ノ有余アルモノハ、随意貸付シテ相当ノ利金ヲ収メ来リシナリ、然ルニ廃藩トナリ、漸次会計ノ整理ヲ調弁スルヲ以テ、十分一切捨即時返納ヲ命スルニ至レルナリ、

二四七 県庁旧藩士民情義報恩ノ為年初祝儀ヲ表スヘキコトヲ達ス

明治四年十一月十日、県庁旧藩士民情義報恩ノ為メ、年初祝儀ヲ表スベキコトヲ達セリ、

一今般廃藩被仰渡候付ては、七百年来臣子之情義実ニ難忍次第ニて、末世ニ至り御旧恩不可奉忘儀は勿論之事候付、旧御藩内之人民上下一統より惣代両名を以、東京表

従三位様江、一歳一次年始之御祝儀申上筈候、右ニ付ては進上物等為手当用、応人戸来申年頭より銭弐百文ツヽ、出銭いたし、正月中於向々取揃、諸財方江可相納候、此旨御県内中道之嶋迄も不洩様可申渡候、

但諸嶋之儀、出銭之代ニ砂糖其外産物を以相納、且上納比合等之儀、生産奉行致吟味可申出候、

辛未十一月　　鹿児嶋県庁

右之通布告書モカキタリ、出モ出シタリ、人倫ノ道何ヲ以教立候ヤ、忠孝ヨリ外ニ出ツヘカラス、シカレハ七百年来臣士ノ情義実ニ忍ヒカタキトハ、何等(マヽ)ヲ有名無実トハ当時ノ過言、西洋各国相通候ハヽ、皆々日本ヲ廃シテ、洋夷ノ膝下ニ服随スヘキ事ハ顕然タルヘシ、イト遺憾ノ事ニアラスヤ、

二四八　県庁商漁船飯料米外積込ノ制限ヲ解キ拾石内積込ヲ許ス

明治四年十一月十三日、県庁商漁船飯料米外積込ノ制限ヲ解キ、拾石内積込ヲ許スコトヲ達セリ、

一御県内津々浦々より、瀬戸内商売舟且漁方ニ付出舟之節は、往来滞船中飯料米乗セ付出帆改方相成候得共、当年は米穀出来前も宜敷、右之通往来飯料米外ニ用心米積入度向は、毎船拾石限積出差免候条、津々浦々尚又無手抜厳重相改可差通候、尤右員数以上積入候向は、先規之通取揚ニ可及候、此旨可承向々江可申渡候、

辛未十一月十三日　　鹿児嶋県庁

二四九　県庁始羅郡名ヲ姶良ニ改称スルヲ達ス

明治四年十一月十四日、県庁始羅郡名ヲ姶良ニ改称スルコトヲ達セリ、

一姶良(アヒラ)郡

右は隅州始羅郡之儀、古之姶良郡ニて、後年ニ至り姶

ノ字始ノ字ニ誤テル証拠有之候付、右之通旧名ニ被復候条地頭江申渡、向々江も可申渡候、

辛未十一月十四日　　鹿児嶋県庁

二五〇　県庁銃砲片付用トシテ諸局へ反古紙差出方ヲ達ス

明治四年十一月十四日、県庁銃砲片付用トシテ、諸局へ反古紙差出方ヲ達セリ、

一大砲・小銃取始末方入用ニ付、諸局不用之帳面類、出張兵器方江相渡候様被仰渡度、此段申出候、以上、

十一月十四日　　軍務局

右之通向々江可申渡候、

辛未十一月十四日　　鹿児嶋県庁

二五一　県庁権大参事橋口彦次ノ辞任ヲ達ス

明治四年十一月十四日、県庁権大参事橋口彦次ノ辞任ヲ達セリ、

鹿児島県
権大参事　　橋口兼柱

依願免本官、

辛未十月廿四日　　太政官

橋口彦次病気ニ付辞職之願申出候処、右之通於東京被仰渡候付、今日名代江相達候、此旨向々江可申渡候、

辛未十一月十四日　　鹿児嶋県庁

二五二　西海道ノ諸県ヲ廃シ十一県ヲ置カル

明治四年十一月十四日、西海道ノ諸県ヲ廃シ十一県ヲ置カル、

(記)

本日西海道ノ諸県ヲ廃シ、小倉豊前・大分豊後・福岡筑前・三潴筑後・伊萬里肥前・長崎肥前・熊本肥後・八代肥後・美々津日向・都城日向・鹿児島薩摩ノ十一県ヲ置キ、大山綱良権大参事

ヲ鹿児島県参事トシ、橋口兼三郎ヲ美々津県参事トシ、桂久武右衛門ヲ都城県参事トセリ、

二五三 島津忠義悠紀・主基両国献物ヲ拝受ス

明治四年十一月二十一日、忠義公悠紀・主基両国献物ヲ拝受セラル、

(記)

本月十八日豊明節会ヲ行ハル、同日悠紀・主基二国方物ヲ献セリ、仍テ此日其献物ヲ分賜セラル、左ニ其次第ヲ載ス、

二五三ノ一

明治四年十一月廿二日

当積年鞅掌

王事之功、以特旨賜邸地于東京本所横網町、邸臨墨水面富岳、公常愛富岳、故有此命、蓋亦為御用之儀有之候間、明廿二日第十字、礼服着用参朝可有之候也、

未十一月廿日　　式部寮

大原従二位殿

二五三ノ二

従二位大原重徳

積年国事ニ勤労、殊ニ及老年励精有之候段神妙之事ニ付、格別恩食ヲ以テ邸宅下賜候事、

但大川端元菊間藩邸上地所下賜候条、従東京府可請取事、

辛未十一月廿二日　　太政官

二五三ノ三

悠紀・主基両国献物御分賜相成候間、御廻申入候也、

辛未十一月廿一日　　宮内省

栗・柿・あわひ御文庫御入付、

右之通被遊　御頂戴候事、

二五四 県庁紡績所ノ方法ヲ商社ニ改メ其取扱方ヲ達ス

明治四年十一月二十二日、県庁紡績所ノ方法ヲ商社ニ改メ、其取扱方ヲ達セリ、

一紡績機械御取建之儀、専諸人之弁利且御国産相増候様

との　御趣意ニて、是迄官商之向を以、生産奉行以下掛被仰付置、諸事致取扱来候得共、以来諸役々引取、商社之振合を以、取扱之者掛改て支配人申付、宛行銭之儀は、是迄員数通別段被差分置候条、従前之趣法に不戻、尚失費相省産品致増殖候様可取計候、左候て尓来利益相備候上は、諸学校之費用等ニ可被差向候、此旨会計局江申渡、向々江も可申渡候、

但取扱向等相替候儀は致吟味可申出候、

辛未十一月廿二日

鹿兒嶋県庁

二五五　旧藩内上下士民総代ヲ町田・山内ニ命ス

明治四年十一月二十二日、旧藩内上下士民総代トシテ、町田・山内ニ命セリ、

一〔朱〕「本文両人儀は旧従三位様御側役相勤居候」　町田正蔵〔朱〕「但旧名内磨」　山内作次郎

右は東京表

従三位様江、来申年頭御祝儀為惣代上京申付候条、向々江可申渡事、

右之通辛未十一月廿二日伝事方より承知候事、

（記）

本月十日、旧藩内上下士民ヨリ総代ヲ以テ、年初ノ賀詞ヲ申述フルコトヲ達シタルヲ以テ、此日町田・山内ヲ撰択シテ総代ヲ命シタルコトヲ、伝事ヨリ伝ヘシメタリ、尚贈進ノ品目左ノ通相定メタルコトヲ達セリ、

一御太刀馬代金　壱万疋

内之浦

一塩くつな　拾献

七嶋

一鰹節五百本入　壱箱

一猪肉　壱丸分

但味噌漬・粕漬之間

一泡盛　三壷

白糖方

一砂糖漬　五樽

一國府煙草　拾斤

但五ケ所弐斤ツ、

一赤貝塩辛　一壷

一出水海老　三百連

櫻嶋

一みかん数三百　　一箱

右は

従三位様江年頭御祝儀、惣代を以申上候儀は申渡置候通ニて、右品々進上之筈候条、向々ニおゐて致手当候様会計局江申渡、一同江も可申渡事、

取次

田畑　平

右ハ一戸へ弐百文ツヽノ上納ニテ手当相成候半、御領国中戸数幾万家部有之候ヤ、過分銭高之事ナラン、夫ニ百部一ノ進上物ハ、余銭ハイカヽ可相成候ヤト存候事、

辛未十一月

取次

田畑　平

右之通未十一月廿五日布告相成候、左候得ハ鹿児島士族迄抱地不相成事ナラン、言語同断ニテ候、

(記)

本年九月　日、諸郷自作地ニシテ四丁余外ノモノハ、平等分配ノ趣旨ニ由リ、定価ヲ以テ他ニ沽却スルコトヲ命シタリシモ、所在之ヲ購フ者ナキニ於テ、自然廃蕪ニ属スルノ患アリ、仍テ此日其処分ニ付訓示シタルナリ、

二五六　県庁諸郷自作高四町以上沽却ヲ了ヘサル分ハ旧所有ヲ許スコトヲ訓示ス

明治四年十一月二十五日、県庁諸郷自作高四町以上沽却ヲ了ヘサル分ハ、仍旧所有ヲ許スコトヲ訓示セリ、

一諸郷自作地四町以上之余地未相片付分は、望手有之迄之間、持主是迄之通支配申付候条、向々江可申渡事、

二五七　県庁和蘭人シケープル雇入ニ付県内ニ注意ヲ訓達ス

明治四年十一月二十五日、県庁和蘭人シケープル雇入ニ付県内ニ注意ヲ訓達セリ、

一此節蘭人シケープル事、本学校教師江頼入相成候処、全体外国人交際ニ付ては、朝廷より被

仰渡置候趣有之、厚待遇之事候付、聊無作法之儀共無之様一統可用心候、此旨県内江不洩様可申渡候、

辛未十一月廿五日

鹿児嶋県庁

二五八　島津忠義奉勅ノ賀詞ヲ申フルコトヲ達ス

明治四年十一月二十八日、忠義公奉勅ノ賀詞ヲ申ブルコトヲ達セリ、

従三位様御事、御別紙之通被為蒙
仰候、依之島津珍彦殿一列初御当地士族之面々并附士、
来月二日於二丸家令江相付、
御当人様東京表
従三位様江御祝儀可申上候、
右之通向々江可致通達事、
但改服、

辛未十一月廿八日

（記）

本年十月二十二日、華族一同ヲ召シテ、率先奮励開明ノ域ニ進ムベキコトヲ諭サル、其上諭書ヲ下付アリシニヨリ、之ヲ一般ニ訓示シ、以テ賀詞ヲ申ベシメシナリ、

二五九　県庁本学校調役助ノ役職ヲ置キ其職級ヲ達ス

明治四年十一月二十九日、県庁本学校調役助ノ役職ヲ置キ其職級ヲ達セリ、

九等官
一本学校調役助
但三等副教官頭

右之通被相定候条本学校江申渡、向々江可申渡候、

辛未十一月廿九日

鹿児嶋県庁

二六〇　県庁製茶販売方法ヲ改メ其手続ヲ達ス

明治四年十一月二十九日、県庁製茶販売方法ヲ改メ其手続ヲ達セリ、

一御県内出産茶之儀、是迄官計を以御買入被仰付来候へとも来春より諸人勝手売買被仰付、就ては県内用分外

ハ是迄横濱・長崎等江被差出、異人商法相成来候付、右通勝手売買被仰付候ても、いつれ異人引合商法品ニ付、望手を幸ひ不拘高下売捌候様相成候ては、御産物之詮無之事候付、商人又は郷計を以他国江致積出度向は、国産会社江相付、売捌先キ巨細相記願出候様、左候て荷為替趣法取扱候儀、藤安喜左衛門江被仰付置候間、都て積出候茶荷為替取組を以、積出御免被仰付度、左候は直成御取締相成可申、自然無手形之茶、前之濱は勿論、津々浦々より積出候ハヽ、則御取揚被仰付、万一脇々より抜茶見当形行申出候者江ハ、糺方之上御取揚之儀は是迄之通ニて、尤東京・横濱・大坂・神戸・長崎表敏ニ国産会社出張所被召建賦ニ付、於場所荷為替方無手形之茶持越商法取組之向は、是以現品無用捨取揚候様被仰付置度、茶之儀は是迄精々御手被召付、於郷々も御趣意汲受植殖、近年斤高相嵩、前文官商被為解候ても、末々迄厚く心を用ひ手入拵等行届候様、第一出産相増候へハ、各郷ハ勿論御県内一統潤ひ相成事候間、此末植殖方地頭江分て被仰渡、依郷是迄茶方在銭之内より前拝借を以手入拵等取計候郷々不少、右所之郷は形行国産会社江申出候様、左候ハヽ、御繰合を以五朱利足ニて御貸渡被仰付、返上方ニ付ては、現銭又は出産之茶ニても弁利ニ引結被仰付置候ハヽ、現茶は三嶋以下等ニ被振向度、左候て拝借願出候郷々は、願書ニ返上向区別を以願出候様被仰渡置度致吟味、此段申出候、以上、

未十一月

会計局

右之通申付候条向々江可申渡候、

辛未十一月廿九日

鹿児嶋県庁

二六一　県庁伊地知正治ノ任官ヲ達ス

明治四年十一月、県庁伊地知正治ノ任官ヲ達セリ、

鹿児島県

権大参事

伊地知正治

任中議官、

右

宣下候事、

辛未十月五日　　太政官

右之通

宣下有之候条、向々江可申渡事、

辛未十一月　　鹿児島県庁

二六二　県庁鹿児島・枚聞両神社祭式参向ヲ達ス

明治四年十一月、県庁鹿児島・枚聞両神社祭式参向ノコトヲ達セリ、

一来十七日大嘗会班幣、鹿児島神社・枚聞神社江別紙御目録之通被相渡、知事・参事之内社頭江参向致奉納、地方官拝礼、奏任以上は玉串を可捧旨被仰出候付、同日右両社江権大参事参向、御神事有之筈候条、当日両郷地頭も相勤候様可申渡候、此旨向々江可申渡候、

辛未十一月　　鹿児嶋県庁

一大嘗祭班幣

五色帛各五尺

布　一端

綿　二屯

祭奠料金千疋

右鹿児嶋神社

五色帛各五尺

布　壱端

祭奠料金五百疋

右枚聞神社

二六三　県庁吉野地方郷校校舎建設ノコトヲ達ス

明治四年十一月県庁吉野地方郷校校舎建設ノコトヲ達セリ、

一吉野方限両郷校此節合併ニて、本学校管轄第十二郷校ニ被相定候付、吉野御仮屋并村長役所江被召建、左候て右役所之儀、帯迫郷校跡江被召移、中之別府郷校家作郷力を以引直方申付候条、民事局・本学校江申渡、可承向江も可申渡候、

但村長役所引直之上郷校被召建候、

辛未十一月　　鹿児嶋県庁

(記)

十一月七日、吉野・帯迫・中別府村郷校建設ノ事ヲ達セリ、仍テ村長役所ト交換建設ノ事ヲ達セシナリ、

二六四　県庁管内抜荷取締ノ緩慢ヲ申戒注意ス

明治四年十一月県庁管内抜荷取締ノ緩慢ヲ申戒シ、其注意ヲ達セリ、

一米穀其他抜売之儀は、従前より追々取締被仰付置候事ニて、当世態殊更不行届候て不叶訳候処、比日ニ至稍等閑之向相聞得、追々大坂表へ無手形之抜物いたし取揚相成候も不少、不可然事候条、一涯厳重取締いたし、諸郷津口之儀、地頭并詰検事所役々、最厳密行届候様可致候、左候て抜物見当申出候者ニは、御定之御褒賞弥被下候条、一統右趣意致貫徹候様向々江可申渡候、

辛未十一月　　鹿児嶋県庁

二六五　外国商民ヨリ私ニ器械買入・金銀借用等ノ厳禁ヲ達ス

一各地方官ニおゐて外国商民より私ニ器械・船艦等買入或ハ金銀借用之儀決て不相成旨、己巳二月以来再三御布告有之候処、旧藩々之内ニは右御趣旨ニ悖戻し、終ニ御国内之大負債を醸出候次第ニ至候、若実ニ恐惶ニ不堪事と存候、就ては若今後猶右様之負債を生し候ては不相済事ニ付、前々御布令之趣確守候儀ハ勿論、各開港場府県(ママ)於ても厳重取締方有之度候事、

辛未

二六六　当時米相場

当分琉球へ米七千石下方被仰付候ヨシ、夫故日々米相場アカリ候ヨシ、

当分弐盃入壱石　　百五拾貫文位

三盃入　壱俵　　四拾貫文位

右ハ十一月十一日トヽク、是ハ異国へ遣ス手段ナラントオモハレ候、

寺師宗道日記

十一月

十三日

二盃入壱石代百四拾弐貫文ナリ、

二六七　道島日記

一大久保カイフ二丸ハ骨カ強ク候付、容易ニ取扱ヒカタシ、骨ヲ不抜ハイカントイヘリ、言語同断ニアラスヤ、コノ故ニヤ重富ト宮之城モ御用免シ有之哉ニ承候、

十一月五日承候、

二六八　寺師宗道日記

十二月十二日

同十二日　晴

東京説、〔上略カ〕砲隊組先日より段々下り相成り、始二十人余、次ニ四拾人余、又近々長崎迄七拾余人着相成居候由、皆瓦解混雑之説也、追々下り相成候噂、加久藤詰木脇次郎右衛門より彼郷奇事書付被贈候、

明治四年辛未十一月六日の奇事

郷宗社加久藤神社社司上野坦介・平盛武謹テ仰ヲ蒙リ、初メテ今年十一月六日辰ノ日新嘗ノ祭仕、祝詞之式ニ及シ頃ヲヒ、郷内西郷村道本井手下口ノ深淵ヨリ、砂石水或ハ霧霞カトモ不分、ドウト鳴動シテ川上ノ方ヘ吹上ケ行クモノアリ、嗚呼ト云内、四番井手ノ上ヨリ、右ノ雲霞ノヤウナルモノ一ツニ混シ薄雲トナル、其色川霞ヨリモ少シ赤ミアリト見ル計ナリ、其中ニ少シ黒ミアリト覚シクテ、右之井手上ヨリ中天ヲ志シ、東南ノ方ニ（辰巳ノ方ハ加久藤神社也）向ツテナ、メニ頭ヲナシテ、大空ニ一里計リモ登テ、加久藤神社ノ真上ト思迄巻登リ、東北ヲ指テ上天遙ニ見ヘテ登行ス、後ハ大空ノ雲ト一ツニナリ、見得ヘスナリニケル、然ル処其村ノ名主堂園門ノ五郎家内七人、当所士族橋口豊記抔其雲六十間位ノ所ニ見ル、後ハ其モノ百間計真上ニ見ル、其雲ノ登天スル姿ノ長サハ一町計リト見ル、外ニ同村湯田門助右衛門、中宿ノ善四郎ハ、二町計リヨリ右鳴動ニ驚キ隣家火事カト思ヒ走出見ケレハ、日影サシタル故ニ白旗一流ヲ飜スカ如クシテ、登ル容チナリ、鱗ノ形モ

見ヘ頭ハ雲ニ包マレ見分タス、サレト頭ニテ雲ヲ右廻リニ巻キ登ル、尾ハ左リ廻リ、右廻リハ衣廻リテ登行ナリ、其日晴天未ノ剋頃(八ツ過キナリ)ナリ、外ニモ右同村中多人数見ト云々、其時人皆云所ハ、今日始メテ廃レタル新嘗ノ神事日故、諸神集リテ天津大神ニ申上ラル龍舞リノ御使ト、諸人嬉美豊年ヲ願ヒ奉ル、

但シ御神事相済夕ヘ浄メノ小雨フル、是モ吉事ト諸人云、最モ其日時ノ鐘ヲモ禁止、貝ヲ以テ用弁ス、〔下略カ〕

二六九　舊邦秘録

二六九ノ一
明治四年辛未十一月

兵部省ヨリ各藩ノ武器差出スヘキ旨ヲ令セラレタリ、

二六九ノ二
明治四年十一月

上海ト長崎トノ電信ハ既ニ着手シ、又長崎・横濱ノ電信ハ不日着手アルヘシ云々、

二六九ノ三
明治四年十一月

横濱ニテ洋銀相場(ドルラル)日本銀二歩内外ニ下レリ云々、

二六九ノ四
岩倉具視右大臣ニ昇進セラレシハ、明治四年十月ナリキ、

二六九ノ五
郵便信書ハ、明治四年初テ駅逓寮ニ於テ東西京ニ開カレ、翌五年全国ニ開カル、

二六九ノ六
維新後支那ヘ使節ヲ出サレタルハ、明治四年大蔵卿伊達宗城ヲ以テシ、柳原前光・津田真道ノ二人ヲ副タラシム、

二六九ノ七
廃藩ノ時讃州高松ニテ藩主ノ上京ヲ拒ム、遂ニ大小参事ヲシテ兵ヲ以テ討タシメラレタリ、辛未九月八日旧藩主ハ開帆上京セラレタリ云々、

二六九ノ八
維新戦争後洋風頻リニ流行シ、以前攘夷説ノ止ンテ舌モ乾カサルニ、人心直ニ変化セリ、明治三四年ノ頃ヨリ洋服シ、或ハ脱刀スル者増加セリ、是レ戊辰ノ戦ヨリ洋服ノ弁且洋医ノ効、洋式ノ軍法銃砲ノ有益アリシ

ニ根シ、人気何トナク洋ヲ好ムニ変シタリ、其前丁卯ノ年迄ハ、御所ノ九門内ニハ皮鞘ヲ用ルコトモ禁シ玉ヘリ、世ノ変化実ニ迅速ナルモノナリキ、

二六九ノ九 明治四年参議廣澤兵介暗殺セラル、此際柳川藩士捕縛スヘキノ命ヲ下サル、其夜害セラルヽト云、夜中宿所ニ押入リ殺シタリ（長州ノ人ナリ、宿所ハ東京九段坂上招魂社ノ近傍ナリ、所害者分明ナラス）

二六九ノ一〇 日本ニテ散髪ノ流行スルハ明治四年ノ夏頃ノ事ナリ、大久保利通・木戸孝允ナト総髪束髪ナリシカ、断然散髪トナリ、随ツテ諸官吏之レニ倣テ続々タリ、　主上モ五年ノ春散髪トナラレ玉ヘリ、兵隊ハ明治元年二月戦争中ニ散髪トナレリ、鬚ヲハヤスモ同時頃ヨリス、ナポレオン鬚トテ彼ノ写真ニ擬シタルナリ、〇三四年頃迄ハ士族ナルモノ多クハ総髪ノ束髪又ハワケ結ナリシ、又袴ノ古風ノク、リ袴ヲ普ク用ヒタリ、是風俗ノ沿革ナリ、〇華族モ日ヲ追フテ散髪トナリタレトモ、島津久光公・同忠義公ノ一族ノミハ論旨アリ、依然タル容貌ナリ、随テ付従ノ人々モ悉クワケ髪ナリ、明治十三年（ママ）月、忠義公ノ邸ニ臨御ノ時、岩倉右大臣ヲ以テ、内勅ヲ蒙ラレシカトモ、論旨ヲ内奏シテ止タリト云々、

二六九ノ一一 第十二月二十日即チ我十一月九日ジヤパンヘラルト新聞紙中ヨリ抄訳ス、

多年政府ノ取立テ来レル東京府下ノ税目、今積ンテ殆ト金八百万両ノ大員数ニ及ヘル由、畢竟此積金ハ道路・橋梁等ノ修繕及海湾運漕ノ便ヲ起シ、惣シテ府下人民ニ有益ナル経営残費用ニ供スル目的ナラン、然ハコレヲ費スノ方法得失如何ヲ熟考セサルヘカラス、偖東京府下ハ大火災屢々起リ、年々府下十五分ノ一ヲ焼損スヘシ、且家屋ハ常々木製ノモノ故ヘ、随テ再建スレハシタカツテ焼亡シ、其損亡挙テ云ヘカラス、依テ今按スルニ姑ク煉化石ノ塀壁ヲ築造シ、府下ヲ数多ノ区々分割シ、以テ此大火災ヲ鎮防スルノ一策ヲ為サン事、是切ニ冀望スル所ナリト云々、

平民廻国修行ノ名義ヲ以テ、六十六部ト称シ、仲カ間ヲ立テ寄留所ヲ設ケ置キ、米銭等ノ施物ヲ乞候儀自今一切禁止之事、

西暦第十二月廿三日我カ十一月十二日、横濱ヲ出帆スル亜国蒸気船ニテ、日本貴(ママ)ノ若キ女子六人勧学ノ為メ、右飛脚舟ハ亜国ソシナリース学校ニ入学トシテ乗船ナリ、

嗚呼天ナル哉命ナル哉、油断ノナラヌ時世ノ変歴、智恵ノ大小苦労有之、而シテ後十三ケ年限リノ重宝札ヲ沢山得給ヘトノ風聞、

二六九ノ一二

西洋新聞抄書

合衆国ト斯巴尼国ノ間ニ擾乱起リテ、ニウヨルクヨリ大海軍ヲ発シ、斯巴尼国ノ属地ナル西印度ノキウバ島ニ至リ、米人ノ侮護ニ逢ノ事ヲ窮問シ、若(ママ)ノ意ニ協ハサル時ハ、即時ニハワナーニ向テ砲撃セントスルナリ、

亜米利加チカゴー府ノ火災ハ、開闢以来未曽有ノ大火災ニテ、三十余日ノ間焦烟天ニ漲リ、火焔地ニ蔓延シ、殆ト消防ノ術ヲ失ヒ、之カ為ニ災ニ罹リテ家ヲ失フ者一億有余人、焼死挙テ数ヘ難クト雖トモ凡十五万人程モ有之由、過日報告ヲ即決シテ新聞紙ニ記載ス、依テ之ヲ一読スルニ、更ニ胸(ママ)セサルハナシ、然ニ比日或翁ノ話スルヲ聞クニ、亜国ハ我カ国ヲ東方ニ当リ、陸海ヲ隔ツル五千里外ニシテ、五大洲中ニモ殊ニ大国ノ聞ヘアリテ、人員モ三千一百万人程モ有之、周囲五千里程モアリ、故ニ三十日余ノ大火災ニテ、十五万人余ノ焼死ニテハ、消防モ行届キ焼死少シ、是全ク文明開化ノ国ナル、如何トナレハ、吾国ハ六拾余州ナリ、今ヲ去ル事二百十五ケ年(昔カ)智明暦度ノ火災、江戸目黒行人坂ヨリ出火シテ、纔ニ三日三夜ニ十万八千人ノ焼死セハ、実ニ驚歎ノ至リニシテ、現在本所回向院ニ標石アリ、然ラハ其頃ハ吾国ノ人々西洋未開ノ頃ニテ、ズボン・ダン袋ノ便利モ知ラス、ホンフ抔ノ(ママ)ニモ見サリ時世故、人気ノ開化モ疎キカ、斯ル大死ヲ醸シタルナルヘシ、自他較フル時ハ亜国ノ焼死百万人モ可有之ニ、左ナキハ誠ニ称スヘキ事ナリ云々、

二六九ノ一三

比日ノ街説ニ、本願寺門跡官員方ト倶ニ洋行シテ、切支丹宗門ニ入リ、能ク邪正ノ(ママ)ヲ見窮シ、全ク国家ノ稗益、人道ノ教誨トナラハ、後来我国ニ弘道セン事ヲ企望セル由、

二六九ノ一四
去ル十月八日我カ八月廿四日、チカコー府ノ火災ニテ、難渋シタル人民ヲ救助センカ為メニ、ロンドン・ブリングハム・ブランクホルト及ヒビンナー地名ニ於テ、莫大ノ金高ヲ集ル事ヲ勉励ス、此時ブリングハム地名商社六〔ママ〕ヨリ洋銀三千弗ノ救助金ヲ出シタリ、其外又大金ヲ集ント欲シテ、惣代人等今ニ至リテ互ニ尽力ニ及ヒシト云々、英国政府ヨリカナタ地名ニヲヒテノ軍用天幕及ヒフランケツトヲ、チカゴー府ノ人民ニ与フヘキ旨至急ニクウエベツク地名ヘ命令ヲ下セリ、此フランケツトノ惣数五十万枚ナリ、又非常請社中ヨリ、此度ノ出火ニテ、焼失シタリ家財等ノ諸雑具費ヲ全ク償ヒ出シタリ、此時ソベルプール社中ヨリ償金トシテ、洋銀六百万弗出銀セシナリ、又チカゴー府火ヲ避ケテ百五十人程仮小舎ヘ逃レシ処、不幸ニシテ火薬ノ為ニ此人悉ク焼死シタル由、密々ヲ憐事ナリ、其外九月十四日〔ママ〕月一日ニ死亡八千人計ナリ、イルリノイス地名ノクウエンシーヨリ、救助ノ為メニ洋銀七万弗ヲ出ス馳走ヲ為セシカ、既ニ十二万弗ハ請取タル由、佛蘭西在留米ノ領事官モ四万弗ヲ裁定シ、日耳曼国女后ヨリ千セーレンノ金ヲ与ヘタリ、其外〔ママ〕邦ヨリ救助ヲ当タシ、

二六九ノ一五
慶應義塾　福澤諭吉　生徒八百
共立学舎　尺振八・吉田賢輔・藤時一　生徒二百五十人
同新学舎　福地源一郎　生徒八十人
河津孫四郎　四十人程
周平　生徒百二拾人程
山本一郎　五拾人程
海軍学小笠原蔵　三拾人程
沼津兵学校　教官四拾人程　生徒三百人程
同小学校　教官三拾人　生徒二百人程
静岡　教官二拾人　生徒二百五十人

二六九ノ一六
種子島之柳田建言ニテ、東京中家根税雪隠迄モ敷間ニ掛テ取立被成候由、
欧州ニ於テ英勢ヒヲ運ニシテ横行スル故ヘ、此勢ヒヲ抽カサレテ、竟ニ欧州ノ不気ナリト、各国目的ヲ立、此度別テ魯西亜ニハセバストホルノ恥ヲ雪ントテ、〔ママ〕
龍江ヘ早四拾余艘ノ大小軍艦ヲ廻ラシ、三月三日八拾艘ノ兵船ヲ廻スノ賦ナルヨシ、魯ノ考ニハ、佛此度大

敗ヲ取ル上ハ、自然英ノ勢ヒモ弱リタルユヘ、此気ニ乗シテ勢ヲ十分抽クヘシトノ密義ナルヨシ、米ヨリモ是非勢ヲ抽クノ手段ナルヨシ、故ニ申春ヨリハ欧州大乱起ルノ萌ナルヨシ、

米ノテロン説ニ、魯ハ蝦夷ノカラフト嶋ヲ全領シテ、日本ノ北部ニ大商館ヲ建ルノ国論ニテ、シキリ手ヲ付ル由、今日本ノ縮ルハ必ス魯ト英トニアルナラント云々、此度孛国ト魯ト結ヒタルハ、果シテ支那朝鮮ニ手ヲ掛可申、英ノ支那ニ手ヲ延シ居ルハ、世界ノ不気ナレハ、両国ノ持(ママ)ニ為ルノ策ニ出ルヘシト云々、

旧政府ノ役員事ヲ取ル者ハ至テ少人数ナルショシ、今町奉行所ニモ口事訴訟ヲ取計ヒシ(ママ)ラブルニハ、纔ニ十二三人ニテ、昼夜其御用計ニ掛リ、世上ノ事ハ何モ不知ト云程ノ事ナリ、イツレモ競テ事ヲ初ルニ何々事ハ誰某備ルニテ為済抔、名挙ニ云ヒシモノナリ、故ニ勉強ハ究メテアリシナリ、因テ俸禄季禄ハ十分ニ宛行被成居候モノナル由、当分ノ市政府多人数役員不被馴ノ人多クシテ、紛々ニテ元ノ四五日ニテ弁スル事、十五日廿日モカヽリテ不弁ノ事多シ、表裏ノ違ナリシ、

二六九ノ一七
当分東京辺名望ノ人物

箕作秋坪　西周介
加藤弘蔵　阿部潜
津田真一郎　榎本亨造
山岡鐵太郎　中村敬宇
江原素六　勝安房
大久保一翁　古賀謹一郎
妻木民(ママ)彌　永井玄蕃
大鳥圭介　榎本和泉
松平太郎　齊藤辰吉(ママ)
荒井郁之介　右衛門
中山循介　須藤時一郎
丹生又三郎　濱口儀兵衛
松本良順　渉野次郎八
向村黄村　柏木綱蔵
望月大蔵　陸奥陽之介
長澤房之介　安井清之介
山之内六三郎　倉橋長門
杉田玄瑞　藤澤長太郎
春日讃岐　辻新十郎

竹中丹後　市川逸吾
田中芳男　伊藤圭介
宇都宮三郎　桂川甫策
山縣十三　織田賢榮
辻平太郎　杉亭二
小林雄蔵　友平榮

二六九ノ一八
米人フルヘツキ云、五大洲中ニテ亜細亜州ヲ以テ殊ニ尊重ス、其訳ハ気良和人〔ママ〕伶俐物産蓄術天附ノ国也、聖賢数出テ火薬器械究理ノ学皆亜細亜洲中ニ出、漸西洋ニ伝習今日ニ至ル故ニ、今ヨリ勉強シ文学ヲ開キ、人ハ国々竭スノ情実ヲスル時ハ、不年シテ欧州ニ肩并スルニ至ルヘシト云々、

二六九ノ一九
海外留学生三宮義胤ヨリ兵部省官員ヘ贈ル書

前略ス、開化日ニ盛ナル時ハ人心極メテ咆哮ニ流ル、是天下ノ通情、彼ノ魯ノ強大ニシテ、欧州ヲ猛口ニ向ケ、一呑セントスル、実ニ盛ナリト云ヘシ、佛ノ強モフロイスニ握ラレ、其面体恰モ死者ニ等シ、他英ノ如キモ更ニ今ヨリ張出ノ顔色ナシ、　皇国人心頗ル開化ニ趣キ、廟議亦之ヲ慫慂セリ、千歳ノ後百事ノ降起可知ナリ、而シテ亦人心ノ変遷今日ノ質素ヲ孝ス、甚タ難カルベシ、下開化ニ進ム時ハ、上亦威権ヲ以テ処シ難シ、死ヲ以テ　皇基ヲ護スルハ、臣子ノ分固ヨリ論ナシト雖トモ、在上ノ人能宇内ノ形勢ヲ洞察シ、事ヲ未萌ニ備ヘ、我ニ彼ヲ待ツノ実力無キ時ハ、外寇ノ患実ニ累卵ニ等シ、然ルニ我邦内ノ人心更ニ一定ノ基無覚束、何卒仰冀クハ、早々外寇如此ノ猛虎ノ有ヲ知ラシメ、国ヲ挙テ欧州各国ト対敵スルノ憤心ヲ備ヘ度奉存候、是微臣ノ懇希スル所ノ、伏シテ卓越罪ヲ犯シ、敢テ苦衷ヲ吐露シ、老〔ママ〕ニ白ス云々、

奈良県ニテハ、今ニ撃剣盛ニ行ハレ、管内脱剣ノ〔ママ〕ハ勿論、洋服着用ノ者一人モ無ク、時計ヲ携持スル者モ僅ニ官吏二人ノミナリト云々、

此度廃県ノ事ニ就テ、紀・尾・因・備・藝・熊ノ六藩同意協力尽力スヘキノ旨御受セシ由、是深ク　朝廷ノ御説得ノ旨アリシナラン、

開化論云、文明開化ト勧業開化ト二様アリ、事同シキニ出テ同シカラス、今吾開化ハ即勧業開化ニシテ、勉メテ為シ、強テ求ムルニアリ、故ニソノ弊害亦〔ママ〕ナラ

スト知ヘシ、文明開化ハ求メス勧メス、不知シラスシテ、漸人心化度ノ域ヲ進歩スルニ至ルヘシ、是則別区アル所以ナリ、概シテ之ヲ謂トキハ、未熟開化ト成熟開化トイフヘシ、果実ノ熟不熟ニアルノミ、而シテ於国開化ト呼事固ヨリ理ナシ、最モ国ニ事ノ挙ルハ、文明ニアルハ論ナシト雖トモ、ソノ開化ニ至テハ、上ニ天〔ママ〕ノ人アラテ、事ヲ統ベ禦スルニアラサレハ、下真路ニ導掌スル事難シ、此ニ至テ上ニ信義ナク、権勢圧倒ヲ以テ、唯ソノ名聞ヲ主トスル如キハ、カノ勧業開化ニシテ、却テ〔ママ〕云、開化ノ跡戻リト謂ニテ、竟ニ政権弛怠度ナク、下ニ威権アリテ国事整フヘカラス、ソノ至ル処果シテ乱〔ママ〕ニ処ルノ憂アリ、是国体ヲ失シテ俗ニ変スルノ誤過アレハナリ、由テ只漸ク以テ為ルニ如カスト、知識輩出ニアリ云々、

一〔ママ〕政事〔ママ〕ノ改革アリシ上ハ、学問ノ改革ナキ時ハ、軽重ノ弁ナシト謂ベシ、是非此ニ至テハ改革ナカルヘカラス云々、

三学ハ公校ヲ少クシ、私校ヲ盛ニスヘシ、福澤ノ塾ハ一ケ月ノ入用三千両ニシテ、一ケ年三万六千両、生徒凡一千人ヲ育スヘシ、今南校ノ定格十三万両ナリ、此割ヲ福澤ノ法ニ由レハ四千人ヲ育スヘシ、由テ公・私校ノ損益シルヘシ、

福澤云、後日日本ノ国乱ハ宗門ヨリ起ルヘシト、アヘンノ厳禁アルヘシ、

英ノミニストールハークス云、日本ノ為件今欧州ノ真域ノ開化ヲ目途シテ、強テ開導ヲ為ス、却テ知識ヲ弊シ国害又大シ、譬ヘハ鉄道抔ノ如シ、開キテ更ニ益スル事寡シトス、漸ク以テ為スハ其弊識ルヘシ云々、

未五月十三日夜日光山本〔ママ〕焼失、火ノ出所不思議也、御座〔ママ〕候間、小座敷、秀吉公ノ〔ママ〕山御殿モ不残焼亡ス云々、

宮社ハ異儀ナシ、当分神職ノ支配五祈ニテ祭〔ママ〕ス、寺家ハ全ク関係ナシ、県ヨリ百石ノ養類ヲ出家〔ママ〕被下、八十計本場ヘ居住ス、尓前ハ高壱万八千石被召上、支場八十場於〔ママ〕ノ宿場三十六院大名ノ宿場、

右ノ場合今ハ廃絶ニテ本場ノ焼亡甚シク、暫時ノ内ニ焼〔ママ〕スト云々、

明治三年ノ現石調、諸藩高雑税ヲ合九万石ナリ、民部省ノ人別調帳ニ花族三千一百八十六名、〇士族九十四万五千百名、

全国総高三千百九十八万六千六百五十二石余、之ヲ三ツ物成ニスレハ、現石一千〇六十六万二千二百十七石三斗余、〇三民正丁七百九十万口、士族・卒正丁百十万人、〇闔国人体凡三千万口トシ、男子一千五百万口ナリ、

皇国一〔ママ〕ノ歳入一石六円ト為ストキハ、金六千三百九十七万三千三百四円ナリ、

大坂舟〔ママ〕番所税取立ノ事〔ママ〕アリ、又同所川蒸気一艘百人ヲ限リ為乗ノ規則ヲ立ル、或人此不〔ママ〕ヲ論破シテ其事止ミタリト、大参事ノ木場傳内所置ナリ云々、

二六九ノ二〇

比日日本橋　詩一首

祖宗大典〔ママ〕如土　文明開化説日新　耶蘇乗時振各国
鄂羅察機服蝦民　英使砕盞恕貸債　公卿垂頭謝弱貧
借問参与成何事　笑酌剣菱倚美人

二六九ノ二一

幕府ニ於ヒテ万石以下知行、布衣以上以下

役金、隠居料等一ケ年大凡積ル、

万石以下知行

高合三百六万五千五百八十石余

内百三十万六千四百五十石余上方・中国・北国・西国知行ノ分

内百七十五万九千百三十石余関東知行ノ分

切米渡高一ケ年凡積リ

米百十八万六千三十六俵

此石四十一万五千百十二石六升余

此

米四十七万四千二百八十四俵余　勤仕百俵以上

此石十六万五千九百九十九石四斗余

内三十八万四千七百五十六俵余　本高

八万九千五百二十八俵余　足高

四十七万四千九百六十俵余　対仕百俵以下

此石十六万六千二百三十六石余

内三十六万四千二百九十六俵余　本高

八万六百六十四俵余　足高

六万五千四百六十四俵余　不勤百俵以下

此石二万二千五百十石余

六万五千三百八十四俵　本高

内八千俵　足高

一万六千六百五十九俵余　御役料

此石五千八百三十石余

布衣以上御役金一ケ年凡積
金三十一万三千八百両余
布衣以下　当凡積
金三万千六十両余
内金三千両余　御役金
定弐年当
金三万二千両余
御目見以下御役金
金七千八百両余
隠居料
金一万五千両余
右之通調出、　朝廷へ差出(マ)　成　写(こ)

〔表紙〕

忠義公史料　明治四年十二月

二七〇　県庁分県配置ノ郡名高頭ノ令ヲ達ス

明治四年十二月二日、県庁分県配置ノ郡名高頭ノ令ヲ達セリ、

一今般西海道従来ノ諸県ヲ廃シ、更ニ左之県々被置候事、

但廃県従前管轄ノ地所当未年より物成郷村等、新置県々江可引渡事、

今般廃県ノ官員追て　御沙汰迄、新置県令并参事ノ差図ヲ請ケ、従前ノ庁ニ於テ事務可取扱事、

美々津県

日向国

那珂郡ノ内

宮崎郡ノ内

諸縣郡ノ内

兒湯郡

臼杵郡

都城県〔朱〕「（旧領主邸ニ置）」

日向国

那珂郡ノ内

宮崎郡ノ内

諸縣郡ノ内

張紙ニ

本文ニ付都城県・美々津県堺ハ去川筋中央ニ候事、

大隅国

始羅郡　肝属郡

贈唹郡　大隅

菱刈郡　桑原郡

張紙ニ

本文ニ付櫻嶋之儀、鹿兒嶋県管轄相成候様伺出之賦候、

大隅国　　鹿児嶋県　　高千石余　　元鹿児嶋県
熊毛郡　　駅謨郡
薩摩国一円外琉球国共外諸島(マ)（十五島(マ)）　　外琉球国
右之通諸県被置候ニ付、従前管轄之県々より地所物成・郷村等、当未年より可請取事、　　〃　　日向国之内
但高反別一村限村高等取調、大蔵省江可差出事、　　大隅国　　都城県
辛未十一月　　太政官　　高合四拾三万石余
別紙　　日向国那珂郡之内　　高七万石余
薩摩国一円　　鹿児嶋県　　同国宮崎郡之内　　飫肥県
大隅国ノ内熊毛郡・駅謨郡　　高八千石余
一高三拾二万石余　　高壱万四千石余　　飫肥県
内薩摩国一円拾三郡
高三拾一万五千石余　　元鹿児嶋県　　日向国諸縣郡之内　　延岡県
大隅国熊毛郡　　高拾万石余
元鹿児嶋県(朱)「旧城ニ置」
高五千石余　　大隅国ノ内六郡　　鹿児嶋県
大隅国駅謨郡　　高二拾四万石余

鹿兒嶋県

別紙之通県治之儀、先月十四日被仰出候段申来候条、一統可奉承知候、左候て委細之儀は、追て　御沙汰可有之候間、其内分県之諸郡ニ至迄、地頭初役々其外諸事是迄之通相心得、各職業猶又致尽力候様向々江申渡、琉球館聞役へも可申渡候、

辛未十二月　　鹿兒嶋県庁

二七一　県庁大山綱良県参事叙任ノ命ヲ達ス

明治四年十二月二日、県庁大山綱良県参事叙任ノ命ヲ達セリ、

大山綱良

任鹿兒嶋県参事、

右

宣下候事、

辛未十一月十四日　　太政官

右之通

宣下有之、今日奉命候条向々江申渡、琉球館聞役江も可申渡候、

辛未十二月二日　　鹿兒嶋県庁

（記）

十一月十四日、西海道諸県ヲ置カレ、同日任命アリシカ、此日奉命アリシナリ、

二七二　華族以下ノ家禄四時ニ分給ス

明治四年十二月四日、華族以下ノ家禄四時ニ分給セラル、

第百十七　十二月四日

各県貫属士族禄高ノ儀、旧藩適宜ヲ以テ宛行置候高ヲ押へ、以来一ケ年分四度ニ割リ、一季分宛四季ノ中月ニ渡方可取計事、

但旧知事家禄ノ儀モ同様可相心得事、〔法令全書にて補正〕

二七三　島津忠義国事諮詢ノ辞免ヲ許サレサル旨ヲ伝フ

明治四年十二月七日、忠義公国事諮詢ノ辞免ヲ許サレサ

ル旨ヲ伝ラル、

十二月七日　雪

今日御用召　御所労ニ付、家扶ノ場ニテ和田助作罷出候処、式部寮御座末ニオヒテ御口達書御渡相成候事、

但御席詰有之候事、

口達覚

国事御諮詢之儀ハ、以

思食被　仰付候ニ付、願之趣不被及

御沙汰候事、

但二之日参仕之儀ハ、前日御廃止相成候事、

二七四　県庁官民開墾事業ヲ勧ム

明治四年十二月十二日、県庁官民開墾事業ニ着手ヲ勧メ其手続ヲ達セリ、

一当県内士庶共追々人員相殖、殊ニ此節官商相解候処、行々市中江は産業を取失ひ、徒手之者も可有之候付、尓来近在を初近遠郷之無差別、山沢曠原差支無之場所は、貴賤共田畠開墾可差許候付、望之者は可願出候、左候ヘハ開拓取付後弐拾ケ年無税ニて、当所之課役等差免候、自然地面相受十二ケ月不取付者は、可取揚候、此旨向々江申渡、当県中江も可申渡候、

但都城県管轄郷内江も望之者有之候ハヽ、被差免候儀も可有之候、

辛未十二月十二日　　鹿児嶋県庁

(記)

十一月従前藩庁直管ノ事業、例ヘハ製茶・製藍・紡績等ノ役衙ヲ廃シ、普通商社ノ組織ニ倣ヒ経営スベキモノトナセシヨリ、自然役職ヲ解カレ生業ニ離レタル者ヲ生スルニ至レリ、是ニ於テ専ラ開墾土着ノ業ニ就カシムルカ為メ、此達ヲ発シタルナリ、

二七五　県庁鎮台分営設置・城下兵解隊、台場兵及諸郷兵県庁管轄ヲ達ス

明治四年十二月二十日、県庁鎮台分営設置・城下兵解隊、台場兵及諸郷兵県庁管轄ニ属スルコトヲ達セリ、

一此節当県江鎮台分営被召立、兵隊編制付左之通、

一御城下兵士都て被免候、俸禄之儀は是迄之通被下置、已来小学校・郷校之間ニ出席可致候、尤各校江分配等

之儀は、何篇本学校江委任申付候、

一台場兵隊并諸郷々兵隊は当分通ニて、已来県庁管轄申付候条、砲場勤之面々は兼て請持之場所江致出勤、諸事是迄之通可相勤候、

一諸郷番兵并報知役之儀、御暇被下候条、勝手ニ可引取候、右之通被相定候条、向々江早々可申渡候、

辛未十二月廿七日　　鹿児嶋県庁

(記)

八月十八日、東京・大坂ニ鎮台ヲ置キ、四鎮台ノ所管ヲ定メラレ、本県ハ鎮西鎮台第二分営ニ属シ、常備歩兵四小隊ヲ置キ、薩摩・日向・大隅ヲ管セシメラル、是ニ於テ旧城内ニ設置スルコトヽナリタリ、今回篠原冬一郎(国幹)・樺山覺之進(資紀)兵員ヲ率ヒ来到シ、本日城引渡シヲ了ヘタリ、然ルニ常備兵ハ旧藩常備兵ヲ以テ編制スルノ命ナリシニ、城下各兵ハ兵式変更ニ伴ヒ、当務者ト所志合一セス、七月前後ヨリ漸次離隊帰県スル者半ニ及ヒ、到底統御スベカラサルヲ以テ、城下諸兵ハ皆之ニ解隊ヲ命シ、台場諸兵及ヒ郷兵ヲ以テ、更ニ編制スルコトヽナリシナリ、

【参照一】

寺師宗道日記四年十二月

同廿八日　雨天

夜半ヨリ雨降、昨日兵隊解隊相成候由、左候て廿五才ヨリ三拾才迄四小隊壮健之人数迄残り撰択之由、砲台は是迄之通りと相聞得候、殆ト瓦解之時機ニ至りて、人々歎息也、篠原冬一郎下之由、医者之薬代山木方四拾弐貫文相及候、県政之発令於吾国は却て開化之跡戻り、先老公ヨリ追々盛大も此ニ至て一変革なり、且ツ世人脱刀して自ら世勢開化之域と誇候も抱腹ニ不堪、密ニ慨歎候事、

八千戈の国の名むなし今よりや
　あたし国辺の手ふりならすは
よをおもふこゝろももとは大方の
　やミにし人の心まよひぬ

【参照二】

一辛未十二月廿七日城請取有之由チラト承候、先日篠原冬一郎・樺山覺之進罷下鎮台列下候由、定テ宮様トカ親王家ノ族ナラントヲモヒ候処、濃州大垣飯田六郎(朱)(譲)トヤライフモノ由ニ承候、未慥ニハ不相聞候、左モアラハ言語同断、段々慷慨ノ輩モ有之候由、

但肥後・肥前ノ大河長トモイフ、追テ記スヘク事、

【参照三】

一未十二月廿七八日方モ候ヤ、二丸公桂・大山ヲ被召出、此節分宮等之儀ニ付、細々被召達候様ノ事ヲ以日、国中確定致スヘキヤ殆ト危キ事トヲモフ、殊ニ当帝廿余リノ御年君ヲ欺妄シ奉リ、何事モ勅書々々トイフテ、ヲノレ共カ心ノ侭ニ事ヲ執行フ事、是惣テ偽勅ナリ、一ツトシテ心ニ不叶、我等カカラタハ粉ニナルトモ不苦候得共、是テ日本カ治ルモノカ、汝両人共速ニ東京シテ、予カ心ヲ深ク可談候様、血眼ニナリテ被相達候処、両人共ニ頭ヲ上ル事不相成、慥ニ承候ヨシチラト承候事、

但無事不説カ、其後桂・大山カ所業ヲ以可相知事、

二七六　県庁庁吏三等以下諸官役目申供スヘキコトヲ達ス

明治四年十二月二十二日、県庁庁吏三等以下諸官役目申供スベキコトヲ達セリ、

御用見合相成候間、諸官三等官初筆者・局掌等ニ至迄、助并寄役迄も向々ニおゐて、役名姓名相調一冊ニ書載、来廿七日限差出候様可申渡事、

但在京・在坂其外旅行等之者は、其訳書載可申候、

軍務局并学校・二丸之儀は其訳ニ不及候、

未十二月　　鹿兒嶋県庁

二七七　県庁蚕織方廃止ノコトヲ達ス

明治四年十二月二十二日、県庁蚕織方廃止ノコトヲ達セリ、

蚕織方

右被廃候、左候て右之局在職之面々は、以来養蚕会社方江可致出勤旨、会計局江申渡、向々江も可申渡候、

辛未十二月廿二日　　鹿兒嶋県庁

二七八　県庁養蚕販売ノ制限ヲ解キ其取扱手続ヲ達ス

明治四年十二月二十八日、県庁養蚕販売ノ制限ヲ解キ、

更ニ其取扱手続ヲ達セリ、

一養蚕之儀、先年来分て御手被召付、近年生糸出産も相嵩、就ては於養蚕会社別段御金被差分、右之利潤被相渡、盛大御手相付、是迄官計を以御買上被仰付来候得共、来春より諸人勝手売買可被仰付哉、左候て会社方利銭之儀は、是迄郷々応出産高被相渡来候得共、右通勝手売買ニ付ては、以来出産高ニ応し、三朱利付を以御貸渡被仰付、返上方ニ付ては、白糸又は現銭上納勝手被仰付度、種子紙之儀は養蚕会社計を以是迄之通手当之上、軽キ代銀上納申請可被仰付哉、右通趣法被相替候ても、於郷々尚一涯手入行届候様、尚又地頭江被仰渡、第一出産相増候ハ、郷々潤助可相成候付、百姓末々迄も心得違無之様分て可被仰渡哉、右通勝手売買被仰付候ても、右品之儀は第一異人取組商法利潤之品ニ付、他国積出ニ付ては、国産会社江相付願出、横濱・神戸・長崎等之儀は、荷為替取組を以積出可被仰付候付、自然無免之品積出候欤又は抜荷見当り候節ハ、都て取揚之上、見当候者江も都て御賞美被成下、勿論積出先ニおゐて同様被仰付候旨、分て被仰渡置度致吟味候、以上、

十二月　　会計局

右之通申付候条、可承向江可申渡候、

辛未十二月廿八日　　鹿児嶋県庁

二七九　県庁蚕業勧励教示巡回ニ及フヘキヲ達ス

明治四年十二月二十八日、県庁蚕業勧励教示巡回ニ及ブヘキコトヲ達セリ、

一御県内出産白糸之儀、来春より諸人勝手売買被仰付候ニ付てハ、依郷ニ蚕業迚も勝手ニ心得、飼方取捨候様成立候儀も難計、養蚕之儀は御手被召付、此節も朝廷より生産之儀分て被仰渡置候付、衆庶一同御趣意致貫徹、尚一涯蚕業致勉強候様被仰付候付、地頭より分て郷々江可申渡、右ニ付是迄養蚕方より時々廻勤之上、教示旁差引被仰付候付、此以後共是迄会社掛之内より差入同様取扱被仰付、於郷々蚕業不心得之向は、夫々質問之上得差図可取計候、左候て春夏郷々出来之斤高、養蚕会社江郷々小隊長等より取しらへ届申出候様被仰渡候事、

但唐湊并小林・福山蚕室所之儀は、是迄之通被仰付候、

十二月　　会計局

右之通申付候条可承向江可申渡候、

辛未十二月　　鹿児嶋県庁

二八〇　県庁年初賀詞ノ順序ヲ達ス

明治四年十二月二十八日、県庁年初賀詞ノ順序ヲ達セリ、

二八〇ノ一　新従三位様へ御祝儀御在京之事ニ付、一統ヨリ両人惣代ヲ以テ御祝儀申上候、

一従三位様へ　申年頭御規式之次第

正月朔日　　参事諸局総裁

右御祝儀申上候、

鹿児島士族

右家令へ相付御祝儀申上候、

(按)新従三位トハ忠義公ヲ云フ、九月十日久光公従二位忠義公従三位ニ叙セラル、然ルニ久光公尚固辞シテ拝叙ヲ受ケラレス、依然従三位ヲ以テ称セラルニ由リ、之ヲ区別スルカ為メナリ、

二八〇ノ二　申年頭拝賀之次第

正月朔日

一朝廷へ拝賀之次第島津珍彦殿一列并任職之面々鹿児島士族

右県庁へ相付拝賀申上候、

右任職之面々朔日ヨリ三日迄改服、

但四日平服、

未十二月　　鹿児島県庁

二八一　県庁米良邑民旧領主追恩問音ノタメ、須木山路通行ノ特許ヲ達ス

明治四年十二月晦日、米良邑民旧領主追恩問音ノ為、須木山路通行ヲ特許スルコトヲ達セリ、

一菊地次郎事、先達て当県貫属被仰付候処、旧領米良邑士民共恩義追謝之為、以来邑内村所より使節差立度候付、須木山路通行被差免度旨願出趣有之、辺路之事ニは候得共、願意無余儀候付、願之通差免候条、米良より使節往来之節は、彼方印鑑見届可差通、其他通行之

者は諸事是迄之通相心得、厳重可致取締候、此旨地頭江申渡、可承向江も可申渡候、

辛未十二月晦日

鹿児嶋県庁

（記）

菊地次郎ハ肥後国（児島）郡米良邑主ナリシカ、前年来細川家ト争競ヲ開キ、遂ニ旧藩ヲ頼リテ託スル所アリ、後遂ニ邑土ヲ去リ、家族ヲ挈テ鹿児島ニ住ス、是ニ於テ鹿児島藩士トナシ、城下附近原良村ノ内尾畔（旧時藩主ノ別墅ニシテ禽獣飼養ノ所ナリ、）ノ別墅ヲ与ヘ、禄四拾石ヲ給シタリ、今旧邑民追恩ノ為メ年初使ヲ遣スニ由リ、須木山路通行ヲ許サレンコトヲ請ヒタルナリ、

二八二　舊邦秘録

一拾万石ノ賞典ハ御軍功ニヨリテ之由、昨年返献相成候処、賞典ハ返サヌトノヨシ、故ニ此節拾万石ノ代銭到来イタシ、二丸ヨリハ市中ヘ壱割利付ニテ、四ケ月ヲトリニテ貸付相成候ヨシ、此賞典ハ夫々諸人軍功モアリ、又戦死等モアリシ、右君公壱人ノ賞典ニテハ無之、諸人ヘ御配当有之コソ、賞典トイフヘキモノナラントイフ人アリ、尤成事也、

二八三　県庁上・下荘内ヲ都城・荘内ト改称スルコトヲ達ス

明治四年十二月、県庁上・下荘内ヲ改称シテ、都城・荘内ト唱フコトヲ達セリ、

下荘内之事

一都城

上荘内之事

一荘内

右は此節新県被召建候付、以来右之通唱被相替候条地頭江申渡、向々江も可申渡候、

辛未十二月

鹿児嶋県庁

二八四　寺師宗道日記

十二月卅日

同卅日　曇

在宅、今朝ニ至余程快方也、四郎来る、復々東京之事情彼是咄承候、開化無度、人情紛乱聞ニ不堪事のミ、且ツ近日議事院江邪宗教免許、外国ト婚姻、外人と雑居之三ケ条之御下問ニ相成候迄、如何決議相成候哉不分、又官人四拾余人洋航せし由〔下略カ〕

二八五　西郷隆盛ヨリ椎原國幹へ書翰

尚々寒中御伺之印迄、反物一端　御祖母様江進献仕候間、御笑留可被成下候、

一筆啓上仕候、甚寒之砌、御祖母様奉初御一同様、先以御機嫌能被遊御座、恐悦之御義奉存候、随て私事無異義消光仕居候間、乍恐御降意可被成下候、陳ハ勇けさ・寅太郎之両児熱病ニて、暫之間ハ至極難義之段細々申越、相驚き候仕合ニ御座候、就てハ始終御配慮被成下、難有次第奉拝謝候、看病方行届、夫故危難を免かれ候事と遙察仕居申候、幾重ニも御礼申上候、扨当地之形勢、追々御聞取被為在候半、色々御変革相成候内、可喜可貴義ハ

主上之御身辺之御事ニ御座候、是迄ハ華族之人ならてハ

御前江罷出候義も不相調、適宮内省之官員迚も、士族等ハ不罷出候処、都て右等之弊習被相改、侍従たり共士族より被召入、公卿・武家・華族并士族同様官員ハ被召仕、殊ニ士族より被召出候侍従ハ

御寵愛ニて、実に壮なる御事ニ御座候、後宮江被為在候義至て御嫌ひニて、朝より晩迄始終御表ニ　出御被為在、和漢洋之御学問、次ニ侍従中ニて御会読も被為　在、御寸暇不被　在、修行而已ニ被為　在候次第ニて、中々是迄之大名抔よりハ、一段御軽装之御事ニて、中人よりも御修業之御勉励ハ格別ニ御座候、然処昔日之

主上ニてハ今日ハ不被為　在、余程御振替被遊候段、三條・岩倉之両卿さへ申し居せられ候仕合ニ御座候、一体英邁之御質ニて、至極御壮健、近来ハケ様之御壮健之

主上ハ不被為　在と、公卿方被申居候次第ニ御座候、御馬ハ天気さへ能候得は、毎日御乗ひ被遊候て、両三日中より御親兵を一小隊ツ、被召呼、調練被遊候御賦

ニ御座候、是よりハ隔日之御調練と申御極りニ御座候、是非大隊を御自親ニ御卒ひ被遊、大元帥ハ自ら被遊との　御沙汰ニ相成、何共恐入候次第、難有御事ニ御座候、追々政府江も　出御被為　在、諸省も臨行被為在候て、毎々私共ニも
御前江被召出、同台ニて食事を賜り候義も有之、是よりハ一ケ月ニ三度も御前ニて政府ハ勿論、諸省之長官被召出候て、御政事之得失等討論し、且研究も可被為遊段御内定ニ相成申候、大略右等之御次第ニて、変革中之一大好事ハ、此
御身辺之御事ニ御座候、全尊大之風習ハ更ニ散し、君臣水魚之交りニ立至り可申事と奉存候、此旨寒中御伺旁奉得尊意候、恐惶謹言、

十二月十一日　　西郷吉之助

椎原與三次様

〔大西郷全集写真版にて補正〕

明治四年辛未十二月廿六日落手
岩下方平君便ヨリ

二八六　舊邦秘録

二八六ノ一

封建ヲ解テ郡県分営ノ令アリ、時ニ薩隅日三ツニ別レ、県主立ツノ説頻リニアリ、或人問テ曰、此節
朝廷郡県ノ制度三州ヲ以テ分営トシ、薩隅日三ツニ割リ分営所召建玉ハヽ、兵勢振ヒ立、万古不易ノ基礎相立モノナランカ、答テ曰、雑誌ニ郡県兵制抔ノ説アリ、之ヲ討論スルト云トモ、今汝カ為ニ云ン、
朝廷封建ヲ解テ郡県トシ玉フノ大本ヲ不知ニヨリ、其是非ヲ分ツコト不能、予井蛙管見ノ心ヲ以テ大空ヲ窺フハ、殆ト狂人蒙昧ノ至リナラント思ヘトモ、潜ニ我愚見ヲ直シ、恐ナカラ薩隅日ハ頼朝公天下ヲ平ケ、日本万古不易ノ治ヲ量リ、我カ愛子ノ忠久公ヲ西国ノハテニ下シ玉フハ、実ニ難キ所、人情ニ取リテモ不忍所ナレトモ、是日本ノ乱レサランカ為鎮撫ノタメニ任シ玉フナラン、然ラサレハ東山・北陸又ハ鎌倉近キ辺リニ、豊饒ノ地アルヘキニ、夫ヲ宛行ヒ玉フヘキ事ナルニ、我ガ私ヲ捨テ日本無異ノ為ニナシ玉フハ、武将ノ器タルヘシ、然レハ今七百年来ノ封国ヲ解テ、忠久公ノ社稷ヲ
朝廷ニ引揚玉フ時ハ、君臣共ニ不忍所ナレハ、第一島津家ヲ取立玉ヒテ、後ニ郡県分営ヲ建玉ハヽ名聞正シク人心定リ、日本ノ危キ外国ノ患ヒモナカルマシ、問

テ曰ク、今賞典拾万石ヲ賜フ、実ニ
朝廷ノ恩賜ニテ島津家ノ取建玉フニ非スヤ、答テ云、今其賞典拾万石、旧邦七拾万石ノ内ヨリ賜フカ、将タ別ニ拾万石ヲ与ヘ玉フカ、七拾万石ヲ奪フテ拾万石ヲ賜フハ、賞典トハ云フヘカラス、故ニ郡県ノ御所置ハ愚蒙ノ我等ハ解シカタキ所ナリ、又六拾余州ノ諸侯牧伯、大中小国ノ広狭ニヨリ夫々賞典恩賜アラハ、過分ノ賞典タラン、入ルヲ量リテ出ス事ヲ後ニナシ玉ハスンハ、不慮ノ災ヒアルヘシ、勿論基ヨリノ五摂家・親王家・花族ノ輩、殊ニ
朝廷差続ノ大臣余多ヲハシマセハ、夫ヲ軽蔑スル道理モアルヘカラス、兎角賞典正シク名義明ラカニナシ玉ハスンハ、
天子ノ御威光モ立ヘカラス、
天子ノ御威光立スンハ、日本ノ人心紛紜ノ心ヲ生スヘシ、問テ曰、縦令ハ今薩隅日三ツニ割シ、其分営ニ居ル人アリテ軍律ヲ備ヘハ、兵勢ヒノ振ヒ会計ノ程如何アラン、答テ云、其陣営ニ居ル者人才徳行万人ニ勝レシ者ナラハ、人気モ相立ヘキモノナランカ、然レトモ小人不徳、城下諸士ノ内ヨリイハレサル衆人ノ吹挙ニヨリ、其任ニ居ルトモ自然ト沸騰ノ心ヲ生シ、未ツヽキ事ハアルマシ、其居ル者ノ心モ安心ナルマシ、イカヾトナレハ七百年来ノ御鴻恩モアリ、又旧君ノ連枝門様ノ高貴ノ人モアレハ、夫ヨリ上ニ立ツヘキコト不敬不遜ト云ヘシ、タトヘハ賊ヲ討スルニ兵ヲ出シ玉フ時、タトヒ門閥連枝ノ君達トイヘトモ、武将ノ器ナキ人ハ、其器ヲ撰ンテ兵権ヲ援ル事ハ、和漢共ニ先蹤ナキニ非ス、今平和ノ時ニ臨ンテ治乱ノ道ヲ建ルハ、第一人心一致スルノ任ヲ撰フコト、是治乱補弼ノ高論タルベシ、是非共ニ陣営ヲ不建シテ不叶時宜モアラハ、門閥ノ内人才ヲ撰ヒ、外三営トシテ内一営ノ規則ヲ立ハ、内乱ノ気モ不生、人心モ一致スヘシ、然レトモ会計ノ程イカヽアラン、今薩州城下ノ士族常備隊ハ勿論、理役并御救助ノ石数過分ナラン、城下ノ士族両営ニ分隊セ、土着ノ士承伏スヘカラス、土着ノ士ヲ用ヒハ米穀不足シテ、俄ニ両営軍備器械ヲ備ヘハ其雑費莫大ナラン、然レハ予テ国民疲弊シ、タマ〳〵
朝廷ノ制度立カタカラン、家ヲ作ルカ如ク、地形ヨリ能組立テ、末代迄ノ法ヲ設ケテ後ニ分営ヲ建玉ハヽ、其規則確定スヘシ、

未十二月初旬草稿

二八六ノ二
蒙古人叛逆以来、支那ト魯西亜トノ貿易衰エタリト雖モ、近比ハ魯西亜ノ商人隊ヲ結ヒテ、支那ノ国境ニ入テ貿ナスコト甚盛ナリ、

二八六ノ三
明治四未十二月
天皇陛下横須賀　行幸ノ節、社中ニテ
陛下及ヒ扈従ノ人々不意ニ写真シケルニ、神奈川県令ヨリ売捌ノコトヲ止トアリ、

二八六ノ四
明治四未十二月
西京堺町御門九條廷中、壬申春ヨリ三本木大岩ト云者、七年ノ間貸渡ニナリ、庶人ノ遊観ヲ許サレタリ、泉水六拾間ニ余リ、池辺ニ茶店ヲ設ルコト四五拾計、樹林好風景ナ（ママ）、芸妓携テ大平ヲ歌フ者夥シ、

二八六ノ五
京都
鹿児島邸ノコト
京錦小路東洞院旧鹿児島県邸ヲ新開シ、新誓願寺ト号、観物場多ク出来賑ルヨシ、

二八六ノ六
帝睦仁天皇御諱ニテ、恵統御名睦ノ三字、自今欠画ニ不及旨御布令アリ、

二八六ノ七
東京・西京・大坂人力車追々流行ス、東京ノ人力車、未十二月ノ調高九千八百六十輌増加セリ、

二八六ノ八
従二位蜂須賀茂韶　妻斐子（アヤ）　従女貞

二八六ノ九
萬里小路通房　三條公恭　外十五人
右英国行
米国（アメリカ）行　七人
獨逸行　二人
秋月従四位　欧州（ヨロツパ）行
従四位長岡氏各国経歴
岩倉・東久世外五人　欧米行
右外東京士卒・平民ノ洋行スル者八拾四余人ノ由、

二八六ノ一〇
支那粤（カントン）東ノ人、姓ハ羅、名ハ清、雪谷ト号、其人高雅博学多識ニシテ、詩ヲ能ス、又書画ヲ以テ娯トス、善ク指頭書画ヲナス、真ニ妙ヲ得タリ、又音律ニ精シク、

常ニ琵琶・月琴及七絃琴ヲ弾ス、

二八六ノ一一
千八百七十一年ニハ、日本国至極静謐ニシテ、外国交際モ至テ親睦ナリタレハ、自今モ是迄ヨリハ愈懇篤ナラント思ハレタリ、天皇陛下及ヒ其政府ニ於テ、外国ヲ待遇スルコト最厚ケレハ、旧来外国人ヲ忌ミ嫌ヒタルヲ咎ムニ道ナシ、然トモ当時廟堂ニ在ル者ハ、元来外国人ノ来ルヲ最モ憎悪シタル人々ナリ、

天皇政府ニ於テ鎖港ヲ主張シ、万国ノ人民一切此国ニ入ルヲ拒マントセシハ、僅ニ四ケ年以前ノ事ナリ、然ルニ暫時ニシテ今日ノ形勢ニ至ル者ハ、実ニ奇異ト謂ツヘシ、当時ニ於テハ我輩屢々論スルカ如ク、礼義ヲ厚クス、

〔稿本表紙〕

明治五年
正月
忠義公史料稿本（初稿）一

〔稿本にて補正〕

二八七　年頭儀式之次第並朝廷へ対シ拝賀奉呈ノ次第

正月朔日

年頭儀式之次第、並ニ朝廷へ対シ拝賀奉呈ノ次第

明治五壬申年中仰渡、左ニ相記、

二八七ノ一　新従三位様

申年頭御規式之次第

一新従三位様江御祝之儀、

御在京之事故、一統より両人惣代を以御祝儀申上候、

正月朔日

一五社并長田神社・鶴嶺神社・照國神社江、

新従三位様献幣使家令、

但二丸より兼務、

一御庭内諸神社江献幣使家令、

但同断、

郡山

一華尾神社

一一之宮神社

右献幣使島津珍彦一列之内江、勤方二丸家令より相達、

但麻袴、

三日

新従三位様

従三位様江

一練蕉布　五端

一焼酎　一壷

在番

親方

一練蕉布　三端

但相中より

琉球館

蔵役

書役

在番親方

与力

右二丸家令江相付、御祝儀申上之、

但進上物不及備、

二八七ノ二

従三位様

申年頭御規式之次第

正月朔日

一五社并長田神社・鶴嶺神社江

従三位様献幣使家令、

一二丸諸神社江献幣使家令、

郡山

一華尾神社

一一之宮神社江

右献幣使嶋津珍彦殿一列之内江、勤方家令より相達、

但麻袴、

参事

諸局総裁

右御祝儀申上之、

鹿兒嶋士族

右家令江相付御祝儀申上之、

二日

嶋津珍彦殿一列

同部屋栖方

右御祝儀申上之、

三日

琉球人

右家令江相付御祝儀申上之、

諸郷士族惣代

分隊長以上一郷壱人ツ、

附士

附属長

右同断御帳ニ相付申上之、

但隊長無之郷々、旧嘆・与頭之内より同断、

以上

二八七ノ三　申年頭拝賀之次第

正月朔日

朝廷江拝賀之次第

嶋津珍彦殿一列并任職之面々

鹿児嶋士族迄

右県庁江相付拝賀申上之、

三日

琉球人

右同断申上之、

諸郷士族惣代

分隊長以上一郷壱人ツ、

附士

附属長

右同断申上之、

但隊長無之郷々は、旧嘜・組頭より同断、

一任職之面々、朔日より三日迄改服、

但四日より平服、

以上

二八八　岩倉具視全権大使ノ一行米国鹽湖府ニ新年ヲ迎フ

正月朔日

岩倉全権大使ノ一行、米国鹽湖府ニ新年ヲ迎フ、

具視鹽湖府迎歳ノ事

明治五年壬申正月元旦、具視鹽湖府ニ在リ、各自ニ正ヲ賀ス、夜八字具視米国公使デロング並ニ夫人、及本府官吏ヲ饗シテ、我カ新年ヲ祝ス、且一行ノ諸員宴席ニ列セサル者ニ、サンパン酒ヲ与ヘテ祝意ヲ表ス、是日具視試筆ノ歌アリ、其辞ニ曰ク、

異国もなへて和らく色見えて

わか大御代の春は来にけり

白妙に雪ふり積るあめりかの

みやまをかけて越る年かな

二八九　朝廷ニ於テハ始テ元始祭ヲ行フ

正月三日

朝廷ニ於テハ、始テ元始祭ヲ行フ（後恒典ト為ス）

壬申正月三日

元始祭

賢所　皇霊　御親祭次第

第八字、神祇省・式部寮・宮内省着座、

次、太政官、諸省勅任官以上着座、

次、便殿　出御、太政大臣・参議・議長・諸省卿、便殿南簀子ニ候ス、

次、太政大臣　神殿ニ昇リ、外陣ノ東南ニ着ク、神祇輔同東北ノ簀子ニ着ク、

次、開扉、

神楽歌ヲ奏ス、

次、神饌及御幣物ヲ供ス（御手代奉仕、大掌典以下伝供）

神楽歌ヲ奏ス、

次、内陣　着御、参議・議長・諸省卿進テ　神殿ニ昇ル、

次、太政大臣祝詞ヲ奏ス、

祝詞

掛巻母恐支、賢所乃大前尓、太政大臣従一位三條實美、恐美恐母白佐久、高天原尓神留座須、皇親神漏伎神漏美乃命乃随尓豊葦原乃水穂国乎、安国止平久気知食須賀故尓、今日乃正月三日乃日、年始乃御祭乎、大御親斎支祭良世給比、年毎乃例乃随尓、御剣奉出志給比弖、御酒波甕上高知、甕腹満並弖、大海原尓住物波、鰭広物・鰭狭物、奥津藻菜・辺津藻菜、山野乃物波甘菜・辛菜・和稲・荒稲尓、百取乃机代乃物止置足波志弖、神寿支豊寿保伎給比、祭良世給布事乎、甘良尓聞食世止宣留、如此聞食弖婆、天皇乃大朝廷乎始弖仕奉礼留百官人等、天下乃公民等尓至留麻弖尓、伊加志夜具波衣乃如久、栄志米給比、安御代乃足御代止、鎮給比守給倍止、恐美恐母白須事乎、聞食世止白須、

皇霊ヘノ祝詞ハ、賢所乃大前尓ノ六字ヲ、御代御代乃天皇乃大霊乃大前尓トノ十四字ニ改ム、其他同文、

次、　御拝　御玉串ヲ奉玉フ、

次、　皇霊　御拝　御玉串同上（御拝畢ラントスル間、列侍ノ諸長官先本座ニ復ス）

次、便殿　還御、

次、大臣以下於外陣拝礼、

次、御幣物及神饌ヲ撤ス、

神楽歌ヲ奏ス、

次、閉扉、

神楽歌ヲ奏ス、

次、　入御、

次、神祇省・式部寮・宮内省奏任以下拝礼、
次、各退出、

第十二字、　行幸始

神殿　御拝次第

第十一字、　神殿御装束奉仕、
次、神祇省・式部寮・宮内省着座、
次、太政官、諸省勅任以上着座、
次、開扉、
神楽歌ヲ奏ス、
次、祝詞神祇大輔之ヲ奏ス
次、神饌ヲ供ス、
神楽歌ヲ奏ス、
次、　出御、
次、御幣物ヲ供ス、
次、　御拝先八神殿、次天神地祇、御玉串二捧、
次、　入御、
次、勅任官拝礼、
次、神饌ヲ撤ス、
神楽歌ヲ奏ス、
次、閉扉、
神楽歌ヲ奏ス、
次、神祇省・式部寮奏任以下拝礼、
次、各退出、

次、講義始ノ事、

二九〇　県庁島津圖書久治死亡ニ付、其家令ニ弔詞ヲナスヘキヲ令ス

正月五日

島津圖書久治四日死亡ニ付、其家令ニ弔詞ヲナスヘク、本県ヨリ之ヲ一般ニ令ス、

一嶋津圖書殿死去ニ付、兼て
御機嫌伺被申上候面々は勿論、任職之面々、今日
御双方家令江相付、伺
御機嫌申上候様、向々江早々可申渡候、

壬申正月五日　鹿児嶋県庁

島津圖書久治及先世事歴

○上略 翌二年二月、藩制ノ改革アリテ家老ヲ廃職トス、久治仍テ其ノ職ヲ罷ム、尓来専ラ力ヲ藩内子弟ノ教育ニ尽シ、且ツ其ノ家臣ヲ以テ隊伍ヲ編成シ、自ラ之ヲ監督指揮シテ訓練太ダ力ム、尋デ明治三年藩内ノ軍政ヲ改革シテ、軍務局ヲ置キ、新ニ陸海軍ヲ組織シテ、英・佛ノ新式ニ則リ、其兵術ヲ修練スルニ至ルヤ、同年八月久治奮然トシテ、祖先伝来ノ邸宅一町余歩ヲ藩庁ニ献シ、以テ練兵場ノ一部ニ充ツ、即チ鹿児島市山下町元第一中学校ノ所在地ニシテ、今県立図書館ノ在ル所ナリ、此年勅シ版籍ノ奉還ヲ聴許アラセラル、是ニ於テ久治其ノ采地壱万五千七百五十五石余ヲ奉還ス、而シテ朝廷更ニ賜フニ、家禄千五百石ヲ以テセラル、之ヨリ先キ久治記録奉行トシテ藩庁ノ文籍ヲ管宰シ、新年ノ招宴ニハ必ズ先ヅ記録掛ノ諸員ヲ自邸ニ引キ、次ニ其他ニ及ブヲ例トス、蓋シ重キヲ文事ニ置ケルニ依ルナリ、由来宮之城家ハ、累世文武ニ通達シ、就中第二代忠長ハ、和歌禅学ノ造詣深ク、第四代久通ハ、力ヲ修史ニ注キテ其著書頗ル多ク、第五代久竹ハ、詩文ニ長シテ宗家ノ系図管掌ノ任ニ当リ、第九代久亮ハ、徂徠ノ学流ヲ汲ム、而シテ久治又文武ヲ兼ネテ藩政ニ与リ、出デ、ハ諸軍ヲ督シテ戦ヒ、入テハ記録奉行タリ、乃チ重キヲ武事ニ置クト共ニ、更ニ学事ヲ奨励スルコト深キ所以ノモノ、実ニ之レガ為メナリ、既ニシテ藩内教育制度ノ革新アリ、即チ鹿児島城下ノ聖堂ヲ襲用シテ、中学程度ノ学科ヲ授ケ、国語・漢学・洋算ニ加フルニ、英・佛両国語ヲ以テシ、蘭人スケツプルヲ聘シテ英語ヲ、佛人クープスヲ聘シテ佛語ヲ授ケシメ、生徒ヲシテ英佛語ノ中其ノ一ヲ選ビ学バシム、之ヲ本学校ト称シ、其ノ生徒ヲ中業生ト曰フ、又タ変則小学校四餐ヲ鹿児島城下ニ設ク、其ノ教課ノ程度ハ現今ノ高等小学校ニ彷彿タリ、更ニ郷校ヲ設ケ、鹿児島城下ニ十七校ヲ置キ、城外ノ諸郷ニ数十校ヲ配置ス、猶ホ現今ノ尋常小学校ノ如シ、而シテ久治ノ旧領宮之城ニハ、其ノ第十八郷校ヲ置キ、旧学館タル盈進館ヲ以テ之ニ充テ、別ニ厳翼館ヲ練武場ト為シ、版籍奉還ノ際家臣ニ与ヘタル賑恤金ヲ割キテ、此等ノ教育費ニ充ツ、且ツ第十二郷校ヲ鹿児島郡吉野村ニ建ツルノ議アルヤ、久治同村ニ於ケル所有山林ノ杉木ヲ寄附シテ、其ノ建築用材ニ充テシム、是実ニ明治四年ナリ、既ニシテ翌五年正月四日、久治俄ニ病ヲ以テ起タズ、年三

十二、之ヲ吉野村ニ葬ル、遠近訃ヲ伝ヘテ悼惜セザルハナシ、殊ニ第十二郷校既ニ成ヲ告ゲテ、而シテ未ダ其恩ヲ謝スルニ遑アラス、此ニ於テ二月中澣同郷校校員等久治ノ墓前ニ石燈ヲ寄進シ、別ニ一碑ヲ建テテ由来ヲ刻シ、以テ其恩ヲ追報ス、

献燈　第十二郷校

吉野之為子弟立郷校也、其父兄胥議、請材於官、官允之、然其材皆悪木不中用、乃再訴於官、官乃令採材於吉田、吉田距吉野頗遠矣、労費不貲計、且無所出、吉野有故宮城公子諱久治之荘園、其地多良材、乃具其状、告於公子請材、公子素賢好学、即許其請、且曰、吾祖先置荘園、養材木者豈為殖産、将以有所用之也、今伐以供学校之用、茲亦幸矣、宜度其所用伐之、至於価則固非所須也、衆大感悦、即就其地採材、凡三百余章、郷校既告成、則方謀所以為謝者、不幸公子卒矣、衆悼惜之、乃立石燈於其墓側、以追報其恩、而求余文、以記其由、夫公子之賢不愛財者、特其末節耳、未足為公子道也、然吉野父兄之挙、則出於情誼之厚、此不可以不記也、乃書其事、以遺之俾之刻于石、

明治五年壬申春二月中浣

今藤　宏撰

高島昭徳書
（吉野町天神山の碑文にて校訂）

二九一　町田久成ニ澳地利国博覧会御用掛ヲ命ス

正月五日

町田久成三郎ニ、澳地利国博覧会御用掛ヲ命ス、

鹿児島県士族

町田久成　三郎
天保九戊戌年正月生

○中略

同明治五年壬申正月五日

一澳地利国博覧会御用掛被仰付候事、

○以下略ス

二九二　県庁福山清蔵美々津県参事奉命ヲ令ス

正月八日

先ニ福山清蔵健偉ヲ以テ、美々津県参事ト為シタルニヨリ、

今日奉命ヲ本県ヨリ令ス、

一　福山清蔵

任美々津県参事、

右之通

宣下有之、今日奉　命候条、可承向江可申渡候、

壬申正月八日　鹿兒嶋県庁

○顕要職務補任録上巻ニハ、任命ヲ四年十二月十八日ニ載ス、

二九三　島津久光ノ位階拝受方猶予ヲ出願シ聴許セラル

正月十日

久光公病気ノ為メ、忠義公代ツテ位階拝受方ノ猶予ヲ出願シ、即チ之ヲ聴許セラル、

略○上

明治五年壬申正月十日、従三位公、公ノ為ニ位階拝授ヲ猶予セラレンコトヲ上請ス、聴サル、去歳再ヒ公ニ授クルニ従二位ヲ以テス、公病牀ニ在テ命ヲ拝スルヲ憚リ、将ニ其愈ユルヲ待チ闕下ニ趨カントス、時ニ従三位公東京ニ在リ、故ニ代リテ之ヲ請フ、聴サル、其文ニ曰ク、

実父久光位階御猶予願

先般実父久光従二位宣下再三謹テ固辞仕候処、被聞食、今般更ニ思食ヲ以テ、従二位宣下被仰出、不肖之身恐入、于今病痾未得全快、臥床中其侭御請仕候儀、恐懼之仕合ニ御座候間、精々療養勉強仕、快気次第速ニ闕下拝趨御請等可仕旨申越候付、夫迄之間御猶予被下候得ハ、不遜之罪モ免カレ、於情義ニモ安堵可仕候付、何卒御洞察被成下、御許容被仰付候様、伏テ奉歎訴候、此段宜御執奏奉願候、恐惶頓首、

壬申正月十日　従三位島津忠義

史官御中

願之通

二九四　三島通庸ヲ従六位ニ叙ス

正月十三日

三島通庸ヲ従六位ニ叙ス、

鹿児島県士族

三島通庸

〔千木〕

天保六年乙未六月生

○中略

同明治五年壬申正月十三日

一叙従六位、

○以下略ス

二九五　県庁県下検地ニ付キ達ス

正月十四日

上・下庄内及県下近在ノ検地ヲ停メ、一般制度ノ頒布ヲ待シム、猶岩川・今和泉・重富ハ、其ノ検地ヲ続行セシム、

一昨年来、上・下庄内より引続県下近在迄も検地治定央、廃藩置県之制ニ被召替候付ては、追々皇国一般之御制度可被為建筈ニ付、検地之儀は令廃止候、左候て当分取付居候岩川・今和泉・重富之儀は、兼て申渡置候通聊無緩疎検地いたし、士民其所ヲ得安着之道立行候様可取計候、此旨民事局江申渡、向々江も可申渡候、

壬申正月十四日　　鹿児嶋県庁

二九六　田畑常秋ヲ以テ鹿児島県典事ト為ス

正月十五日

田畑常秋ヲ以テ鹿児島県典事ト為ス、

鹿児島県士族

田畑常秋

文政十一年丙子閏八月生

明治五年壬申正月十五日　　鹿児島県

一任典事、

○以下略ス

二九七　中議官西岡逾明・少議官小室信夫等ヲ派遣シ、海外各国ヲ巡視セシム

正月廿日

中議官西岡逾明（局頒・佐賀県士）、少議官小室信夫・高崎豊麿（鹿児島県士）

中議生鈴木貫一（滋賀県士）等ヲ派遣シ、海外各国ヲ巡視セシム、

壬申正月廿日

御沙汰書写

少議官高崎豊麿

為理事官欧米各国へ被差遣候旨被　仰付候処、被免候事、

中議官西岡逾明
少議官小室信夫
少議官高崎豊麿
中議生鈴木貫一

各国視察被　仰付候事、

二九八　旧藩々辛未年貢米上納方ヲ申ネテ令ス

正月廿日

旧藩々辛未貢米上納方ヲ申ネテ令セラル、

○第四号（正月二十日）

故藩々去未年貢米ノ儀ハ、悉皆上納諸入費、更ニ切手ヲ以テ下ケ渡方ノ儀ハ、兼テ相達置候通ニ有之、就テハ残米納方ノ儀、是迄追々相達候儀モ有之候得共、負債藩札等於政府御所置相成候ニ付テハ、右残米金ノ分早々上納可致、尤従前ノ仕成ヲ以テ大阪へ廻米取計候分、同所出張租税寮へ申立、東京其外積廻シ候分ハ、総テ当省へ申立差図ヲ受可申、手限ヲ以売却候儀ハ難相成、且又地元ニ於テ払下ケノ分ハ、時相場吟味ノ上入札等ノ方法ヲ以テ処分致シ、代金早々上納可致、此段相達候也、

但大阪納ノ場所金納ノ分、同所御用為替方三井組切手ヲ以相納候儀不苦、尤正金金札等ノ現品類訳書一書相添上納可致事、

二九九　岩倉全権大使ノ一行米国大統領ニ謁見ス

正月廿一日

岩倉全権大使ノ一行等、米国大統領ニ謁見ス、

具視米国大統領ニ謁見ノ事

正月二十一日、具視副使及一行ノ諸員、華盛頓府ニ抵ル、弁務使森有禮米国政府接待掛ゼ子ラルマヤル汽車駅場ニ出迎フ、ウエルモント街ノアーリングトンホテルヲ以テ館ト為ス、大統領グランド(Ulysses Simpson Grant)氏ノ夫人ヨリ生花一束ヲ具視ニ贈リ、之ヲ祝ス、二十五日具視・木戸孝允・大久保利通・伊藤博文・山口尚芳皆衣冠帯剣、書

記官皆直垂帯剣、大統領ノ公邸白殿ニ抵リ、車寄ヨリ登階ス、階ノ左右ニ巡捕吏数十人臚列ス、具視以下青堂ニ入ル、大統領グランド・副統領コルフアツクス東堂ノ中央ニ座ヲ占メ、諸官員其左ニ臚列ス、国務卿フキシユ森有禮ト共ニ青堂ニ入リ、具視以下ニ面接シ、具視ノ手ヲ把テ東堂ニ誘引ス、孝允以下之ニ跟随シテ進ミ、順序ヲ以テ大統領ノ右ニ臚列ス、フキシユハ具視ヲ大統領ニ引接ス、相互ニ一揖ス、次ニ臚列ノ文武諸官ニ対接ス、訖テ具視斜ニ大統領ニ向テ口状ヲ演フ、曰ク、

我カ天皇陛下大業ヲ中興シ、国政ヲ修整セシヨリ文明各国ノ成績ヲ知リ、且外国交際ノ友誼ヲ一層親密ナラシメント欲シ、今般我等ヲ特命全権使節トシ、結盟ノ各国ニ派出セラル、我等乃チ首トシテ貴邦ニ来リ、今日大統領ニ拝謁シ、我カ天皇陛下ノ国書ヲ進呈スルコト、我等ニ於テハ実ニ無限ノ光栄ナリ、

此時、書記官進テ国書ヲ具視ニ捧ク、具視之ヲ大統領ニ呈ス、大統領之ヲ受ケテ、直ニフキシユニ授ク、具視乃チ口状ヲ続キ之ヲ述フ、曰ク、

奉命ノ主旨ハ、粗ホ載セテ国書ニ在ルカ如ク、両国ノ間ニ存在スル所ノ交際貿易ヲ、益々盛ンナラシメンコトヲ、貴国政府ニ商議シ、以テ我カ国ノ進歩ヲ扶助センコトヲ謀ルニ在リ、大統領幸ニ此一言ヲ信聴シ、我カ国ノ公利ヲ垂念シ、我等カ使命ヲ遂ケシメラレンコトヲ希望ス、我等又此期ヲ以テ、大統領ノ安寧ヲ祝シ、又我国民ニ代リテ貴国億兆ノ幸福ヲ祈ル、

大統領答詞アリ、其訳語ニ曰ク、

和親貿易ノ交誼ヲ結フコトニ於テ、我カ連邦ヲ以テ嚆矢トシタル貴国ヨリ使節ヲ派出シ、之ヲ接受スルニ於テ、復タ其嚆矢ト為ルノ光栄ハ、之ヲ竹帛ニ垂レテ、以テ我カ国我カ在職間ノ美事ト為スヘシ、

聞ク、今般使節ヲ派出シタル目的ハ、全ク貴国皇帝ノ聡明叡智ニ出テ、而テ之ヲ奉行センカ為メ、特ニ閣下ヲ選任シタルハ、実ニ感佩スルニ堪タリ、夫レ国ノ繁栄幸福ハ、彼我ノ進益ヲ比較シ、互ニ其長ヲ資リテ、以テ其政治ノ法ヲ改正シ、其人権ヲ尊重シ、全国ノ富強ヲ謀ルハ、学術ヲ採用スルニ在ルモノナレハ、其国ヲ鎖シ外交ヲ為サス、座シテ繁栄幸福ヲ受用セント欲セシ時世ハ、已ニ過去リテ再ヒ帰ラサ

ルナリト思想スヘシ、
日本ハ其国ヲ為スコト最久遠ニシテ、我カ連邦ハ一個ノ新国タリ、然レトモ我輩ニ於テハ、故国旧民ノ制度ヲ改正シテ、以テ政治ヲ施行シ、頗ル其要ヲ得タリ、
抑人民ノ富強幸福ヲ享クル所以ハ、外国ト交際シ貿易ヲ鼓舞シ、人ノ功労ヲ尊重シ、実学ヲ用キテ、以テ工作技芸ヲ励マシ、国内ノ運輸ヲ便利ニシテ、以テ来往ノ交通ヲ迅速数多ナラシメ、人民ノ移住スル者ハ之ヲ愛撫シテ、以テ他国ノ政俗才芸ヲ網羅シ、印書ノ禁ヲ設ケス、人ノ信心良能ヲ束縛セス、法教ヲ寛恕シテ、我カ国民ハ勿論、此邦ニ居住スル所ノ外国人ト雖、一切之カ制限ヲ立テタルコト無キニ依レリ、是レ従来ノ経験ニ於テ、決シテ疑フ可カラサル所ナリ、
閣下奉命スル所ノ公法ノ案件ヲ、商量スルコトハ、我輩ノ甚タ欣喜スル所ニシテ、而テ両国ノ間ニ存在スル所ノ貿易ノ交通ヲ修正スルモ、又甚タ緊要ニシテ且希望スル所ナレハ、今一層其交リヲ厚クスルハ、決シテ之ヲ怠ルマシク、真実ニ此美事ヲ賛成スヘシ、閣下親ク予カ安寧ヲ祝ス、予モ又之ニ答祝ス、敢テ祈ル、此邦ノ駐劄能ク閣下ノ楽趣ニ適シ、而テ両国人民ノ和親交際ノ愈密ナルコトニ帰センコトヲ、
而シテ大統領自ラ其諸官員ヲ具視以下ニ引接ス、具視モ亦孝允以下ヲ彼ニ引接シテ、互ニ答礼ヲ為ス、礼訖テ大統領ハ、具視以下ヲ誘導シテ別室ニ入リ、大統領ノ夫人並ニ国務卿等ノ夫人ニ引接ス、礼訖テ具視以下旅館ニ帰ル、

三〇〇　岩倉全権大使ノ一行米国議事院ニ抵ル

正月廿七日
岩倉全権大使・大久保副使等ノ一行米国議事院ニ抵ル、
具視米国議事院ニ到ル事
正月二十七日、具視、木戸孝允・大久保利通・伊藤博文・山口尚芳等ト議事院ニ抵ル、満堂ノ議員座ヲ起チ敬礼ス、具視以下下院ノ議長プレインノ案前ニ至ル、上院ノ議員ゼ子ラルバンクス、具視以下ヲプレインニ引接ス、プレイン座ヲ起チ演説ス、其訳語ニ曰ク、
日本帝国ノ使節諸君、余ハ今マ下院ノ名代トナリテ、

茲ニ諸君ヲ此議事堂ニ引接ス、下院ノ議員等今此ノ如キ協一丁寧ナル待遇ヲ諸君ニ施スハ、即日本ト合衆国トノ交際愈速ニ盛大ニ至ルノ功績ヲ、我カ国民ノ歓喜セル確証ナリ、惟ミルニ数百年来人種ノ移殖スル、常ニ東方ヨリ西方ニ波及シ、其功ヲ奏スル、或ハ征伐ニ出テ或ハ掠奪ニ出ツ、而テ其移殖スル我カ大陸ノ境界ニ至ルニ、却テ貴国ヨリ東方ニ向テ、此気運ヲ反流スルヲ見タリ、其状タルヤ、平和ヲ以テ遙ニ武功ニ勝ルノ利ヲ得、此両国人民ノ転移シテ、合衆国海岸ニ於テ互ニ相会シ、相交ラシムルニ至ル、故ニ我カ国民ノ名代人等ヲ、親ク諸君ニ引合スルコト、余ニ於テハ実ニ大慶ナリ、又諸君此都府ニ逗留ノ間ハ、常ニ此議事堂ニ座スルノ特例、丁寧ナル待遇ヲ受クヘキ事ヲ、議員一同並ニ余之ヲ諸君ニ保証ス、

具視座ヲ起チ答演ス、其口状ニ曰ク、

米国連邦議事院下局ノ長官及議員ノ諸君、我レ今マ日本ノ使節一同ニ代リ、併セテ我カ皇帝及我カ国民ノ名代ト為リ、諸君ニ対シテ信実ノ謝詞ヲ述ヘ、丹誠ノ交誼ヲ結ヒ、且威権隆盛ナル大邦ノ大政堂ニ於テ、親ク諸君ニ対面スルハ、実ニ非常ノ光栄ニシテ極メテ感激スル所ナリ、

夫レ億兆ノ心地ニ基キテ築タル文明ノ政府ハ、確乎不抜ニシテ動揺ノ憂ナシ、我曹ノ来聘スルモ即チ此文明ヲ求ムルニ在リ、而テ此国ニ於テ之ヲ得ルハ、豈ニ喜ヘキニ非スヤ、惟ミルニ我曹前キニ旭日ノ国ヲ発シテ以来、常ニ東方ニ進ミ、旭日ノ出ツル所ニ溯テ、未タ曾テ見サル所ノ旭日ヲ観ルコトヲ得、事物ヲ知覚スルコト日々ニ新ニシテ、其際涯ヲ知ラス、我曹使命ヲ全フスルノ日ニ至ラハ、地球ノ全面ヲ周行シテ之ヲ観察シ、此無価ノ珍宝ヲ満載シテ帰リ、而テ行々文明ノ源ヲ探リ、歩ヲ追フニ従テ、一層ノ知覚ヲ拡メンコトヲ怠ラサルヘシ、我カ日本ノ政府ハ既ニ内外ノ政治ニ於テ、文明ノ善美ヲ貴重スルニヨリ、我曹復命ノ日ニ至ラハ、此国民ノ我カ一行ニ表スル友誼ノ隆渥ナルト、今日諸君ノ顕ハサレタル所ヲ以テ、普ク我億兆ノ人民ニ知ラシメンコトヲ、我曹共ニ之ヲ諸君ニ保証スルナリ、将来我カ全国千万ノ利益タル貿易ヲ開張スヘキ事ハ、譬ヘハ涓々ノ水無数ノ河ヲ出テ、此両国ノ公有タル大洋ニ朝宗ス

ルカ如クナルヘシ、然リ而テ両国ノ友誼其洽和スル事、猶彼ノ河流ノ太平洋ニ混合セルカ如ク、万々之ヲ分離スヘカラサルニ在ランコトヲ希望ス、

バンクス其国語ヲ以テ之ヲ訳述ス、満堂ノ人皆手ヲ拍チ歓ヲ唱フ、

三〇一　朝廷御諱名欠画ノ制ヲ廃ス

正月廿七日

朝廷ニ於テハ御諱名欠画ノ制ヲ廃ス、

壬申正月廿七日

御布告書写

御名睦字自今闕画ニ不及候事、

但恵・統二字可為同様事、

三〇二　貴島國彦ニ東北鎮台大弐ノ心得ニテ勤務スヘキヲ命ス

正月廿八日

貴島國彦清ヲ以テ、東北鎮台大弐ノ心得ニテ勤務スヘキヲ命ス、

鹿児島県士族

貴島國彦

清

○中略

同明治五年壬申正月廿八日

一東北鎮台大弐ノ心得ヲ以テ、相勤可申事、　陸軍省

○以下略ス

三〇三　千田貞暁ヲ以テ東京府典事ト為ス

正月廿八日

千田貞暁伝一郎ヲ以テ、東京府典事ト為ス、

鹿児島県士族

千田貞暁

伝一郎

天保七年丙申七月生

明治五年壬申正月廿八日　東京府

一任典事、

○以下略ス

三〇四　中井弘ヲ以テ中議生ト為ス

正月廿八日

中井弘ヲ以テ中議生ト為ス、

壬申正月廿八日

御布告書写

任中議生、　　権少外史中井　弘

内閣

○中略

権少外史

四年十二月兵部大録ヨリ任　中井　弘鹿児島士　五年正月廿八日中議生ニ任

三〇五　県庁鎮台分営ヨリ交付ノ営内出入概則ヲ令ス

正月廿八日

鎮台分営ヨリ営内出入概則ヲ交付ニ付、本県更ニ之ヲ一般ニ令ス、

営内出入概則

一被定置候人員之外、表門出入曽て不許候事、

一諸人鑑札を以て通融之ものハ、矢来門より出入たるへし、誰人たり共無鑑札ハ通融不相成候、若出入為致候ハヽ、令官之可為越事、〔度脱カ〕

一矢来門通融朝六字より夕六字迄之事、

一営内之人江用事有之差越ものハ、番兵より周番所江届出、其上免許を受護送之事、

其他略ス、

兵隊入営後ハ、規則別紙通大略相究候間、為御心得及御掛合置候也、

申正月廿八日　　鎮台分営

県庁

別紙之通鎮台分営より相達候間、向々江不洩様可申渡候、

壬申正月　　鹿児嶋県庁

三〇六　朝廷旧藩蔵屋敷及出張所ノ京坂ニ在ル者ヲ収ム

正月廿九日

朝廷ニ於テハ、旧藩廨舎(所謂蔵屋敷)及ヒ行館(出張所)ノ京阪等ニ在ル者ヲ収ム、

三〇六ノ一
壬申正月廿九日

諸県へ御達書

旧藩々ニ於テ、京摂其外ニ出張所等有之候分、早々引纏候様相達置候処、県々区々之取計有之候テハ不都合ニ付、右出張所・蔵屋敷等悉皆有形之侭上邸可致候、就テハ差向キ京阪ハ京都・大阪両府へ引渡、其外ハ取調可伺出候事、

三〇六ノ二
壬申正月廿九日

御沙汰書写

各通　京都府
　　大坂府

其府下ニ有之候旧藩々出張所・蔵屋敷等、悉皆有形之侭上邸可致旨相達候間、地所・建物共早々其府へ受取、調書并絵図面相添処置振可伺出、尤出張租税・出納両寮ヨリ受取方之儀申出候ハヽ、早々可相渡事、

三〇七　五節・天長節ヲ除クノ外朝賀ヲ廃ス

正月廿九日

五節(元旦、上巳、端午、七夕、重陽)天長節ヲ除クノ外朝賀ヲ廃ス、

壬申正月廿九日

御布告書写

自今　元旦　上巳　端午　七夕　重陽
天長節之外参　賀被廃候事、

三〇八　卒ノ世襲スル者ヲ以テ士族ト為ス

正月廿九日

卒ノ世襲スル者ヲ以テ士族ト為ス（家禄ハ旧ニ仍ル）

壬申正月廿九日

御布告書写

各府県貫属・卒之内、従前番代之節抱替等之称ヲ以テ、其倅等ヘ禄高ヲ給与シ、自然世襲之姿ニ相成居候分ハ、自今士族ニ可被　仰付候条、調書ヲ以テ大蔵省ヘ可伺出、尤家禄之儀ハ、従前之通可相心得事、

但新規一代限抱之輩ハ、平民ニ復籍セシメ、給禄ハ是迄之通可遣事、

三〇九　吉原重俊ヲ以テ三等書記官ト為ス

是月（正月）

吉原重俊弥次郎ヲ以テ、三等書記官ト為ス、

鹿児島県士族

吉原重俊

弥次郎

弘化二年乙巳四月生

明治五年壬申正月

一任三等書記官、　特命全権大使

○以下略ス

三一〇　軍務局ヲ廃シ兵学寮ヲ県庁内ニ置ク

是月（正月）

本県令シテ、軍務局ヲ廃シ、兵学寮ヲ県庁ニ預ケシム、

一軍務局令廃止、兵学寮之儀は以来県庁預申付候事、

但入寮等之人員は、都て当分之通、

申正月　鹿児嶋県庁

三一一　県庁豊民館ヲ豊民会社ト改称ス

是月（正月）

本県令シテ、豊民館ヲ豊民会社ト改称セシム、

豊民館之事

一豊民会社

右之通相唱候様申付候事、

壬申正月　鹿児嶋県庁

三一二　県庁皇軍神社ノ神事済了マテ軍馬方下通ノ通行ヲ停止セシム

是月（正月）

本県令シテ、皇軍神社ノ神事済了マテ、軍馬方下通ノ通行ヲ停ム、

一来月六日

皇軍神社御神事ニ付、前日七ツ時より御神事相済迄之間、軍馬方下通通融差留候条、向々江可申渡候、

壬申正月　鹿児嶋県庁